DEUS
rouge
HOMO
blanc
TORA
bleu

大いなる神秘の鍵

序文

隠された知の絶対の鍵

「宗教は『信じなさい。そうすれば、理解するであろう』と話す。

学問も来て『理解しなさい。そうすれば、信じるであろう』と話す。

その時、学問全体が面（おもて）を変えるであろう。

非常に長い間、王座から追われていた忘れられていた、精神が古代の地位を取り戻すであろう。

古代の口伝が全くの真理である、と実証されるであろう。

カトリック以前の宗教は全て、真理からの堕落を組織した物、真理への見当違いを組織した物に過ぎない、と実証されるであろう。

全き真理の光線の輝きと共にカトリック以前の宗教を見るには、カトリック以前の宗教を洗浄して真理に戻せば十分である、と言える。

要するに、全ての概念が変わるであろう。

全方面で、神に選ばれた人の群れが『来てください！　主よ！　来てください！』と一致して叫んでいる。

大いなる未来に打ち込んでいる人々、大いなる未来を予見した事を誇りに思っている人々を、どうして非難できようか？」

　(ジョゼフド メーストル著「Soirees de St. Petersbourg.(サンクトペテルブルクの夜会)」)

神秘の一歩手前で、人の精神は、めまいに襲われる。

神秘は、神秘の深さへの畏敬によって、人の落ち着かない好奇心を絶え間無く引き寄せる、底無しの淵である。

無限の者である神の無上の大いなる神秘とは、神の存在である。

なぜなら、全てのものである神にとってのみ全てのものは神秘ではない。

基本的に理解不能である無限を理解している神は、無限の永遠の理解不能の神秘である。

言い換えると、基本的に理解不能である無限を理解している神は、どう見ても、テルトゥリアヌスが信じていた無上の不条理である者である。

神は、必然的に、不条理である者である。

なぜなら、人の理性は、神に到達する計画を永遠にあきらめる必要が有る。

必然的に、神は存在する、と信頼できる。

なぜなら、知と論理は、神の不在を実証できない。

必然という戦車は、神の存在を信じる様に、知と論理を引きずり込む。

必然という戦車は、目を閉じて、神を見ないで、神を敬礼する様に、知と論理を引きずり込む。

なぜか？

なぜなら、神という不条理は、論理の無限の源泉である。

神という永遠の闇から、光は永遠に湧き出る。

知は、人の精神のバベルの塔である。

知は、螺旋状に、身をよじらせて、とぐろを巻いて、望んだ通りに常に上昇していく。

しかし、人の知は、地を震わせるかもしれないが、天空には到達できない。

神は、人が、より良く知るために永遠に学ぶ事に成る者である。

結果として、神は、人が完全には知る事ができない者である。

神秘という王国は、知が獲得できるように開かれている戦場である。

知は、大胆に思い通りに、神秘へ進行できるが、神秘の無限の広がりを小さくする事はできない。

知は、知の限界を変える事しかできない。

全てを知る事は、不可能な夢である。

しかし、全てを学ぼうと望まない人には災いが有る!

人は何を知るにしても永遠に学ぶ必要が有る、と知らない人には災いが有る!

人は良く学ぶためには何度か忘れる必要が有る、と言われている。

人は良く学ぶために何度か忘れてきた。

古代人は、現代人が未解決である全てのものを解決していた。

有史以前に、象徴で記された、古代人の解決法を、もはや既に現代人は理解できない。

独りの人エリファス レヴィは、古代人の鍵を再発見した。

エリファス レヴィは、古代の知の墓所を開けた。

エリファス レヴィは、忘れられていた原理の一大世界、自然の様に簡潔な無上な統合の一大世界を、19 世紀にもたらす。

統合、統一は、常に光を放っている。

統合、統一は、数の様に、既知のものから未知のものを実証して明かす事ができるほど正確に、つり合って、自身を増殖している。

神の知を理解する事は、神を見る事である。

本書の著者エリファス レヴィは、著作を終える時には、「神の知を理解する事は、神を見る事である」と実証できているであろう、と思っている。

人が神を見た時に、秘儀祭司は「振り返りなさい!」と人に話すであろう。

すると、知的存在である神という太陽を前にして人が背後に投じる影の中に、悪魔が人の前に現れるであろう。

人が神を注視していない時に、人が自分の影響を天空に満たせると思う時に、人は悪魔という黒い霊、黒い幻を見てしまう。

なぜなら、地の蒸気は、高く成るほど、ますます、大きく見える。

宗教において、知と啓示を一致させる事。

宗教において、論理と信心を一致させる事。

哲学において、全ての対立しているものを一致させる、絶対の原理を実証する事。

自然の 2 つの力の普遍のつり合いを明かす事。

論理と信心を一致させる事、絶対の原理を実証する事、自然の 2 つの力のつり合いを明かす事は、本書の三重の目的である。

結果として、本書は 3 部に分かれている。

エリファス レヴィは、信じようと信じまいと誰もが認めざるをえない、真の宗教を見せるつもりである。

エリファス レヴィは、宗教における、絶対の物と成るであろう、真の宗教を見せるつもりである。

エリファス レヴィは、哲学において、真の宗教という真理の不変性を確証するつもりである。

真理は、自然科学においては、現実である。

真理は、判断においては、論理である。

真理は、倫理道徳においては、正義である。

エリファス レヴィは、自然の法を教えるつもりである。

自然のつり合いは不変である。

エリファス レヴィは、運動と命による豊かな現実の前では、いかに人の妄想が空虚であるか見せるつもりである。

エリファス レヴィは、未来の大いなる詩人達が、人の妄想によってではなく、神の数学によって、神曲を再び作る様に誘うつもりである。

他の諸世界の神秘。

隠された2つの力。

不思議な啓示。

謎の病気。

超常的な能力。

霊。

霊の出現。

魔術的な逆説。

ヘルメスの錬金術の秘密。

エリファス レヴィは、全てを話して説明するつもりである。

何者が全てを話して説明する力をエリファス レヴィに与えたのか？

エリファス レヴィは、「何者が全てを話して説明する力をエリファス レヴィに与えたのか？」読者に明かす事を恐れない。

隠された神のアルファベットであるタロットが存在する。

古代ヘブライ人は、文字の創造者はエノクである、としている。

古代エジプト人は、文字の創造者はトートまたはヘルメス トリスメギストスである、としている。

(ヘルメス、メルクリウス、トートはエノクである。)

古代ギリシャ人は、文字の創造者はカドモスやパラメデスである、としている。

(カドモス、パラメデスはエノクである。)

ピタゴラスの弟子達は、神のアルファベットであるタロットを知っていた。

象徴と数を伴う絶対の概念がタロットを形成している。

組み合わせによって、タロットは、思考の数学、概念の数学を実現する。

ソロモンは、神のアルファベットであるタロットを、36 のタリスマンに記した 72 の名前によって表した。

未だに、東の秘伝伝授者は、タロットを「ソロモンの小鍵」と呼んでいる。

口伝では 21 祖アブラハムの教えを起源とする「形成の書」と呼ばれている本は、鍵タロットを説明し、タロットの使用方法を説明している。

「形成の書」の助けによって、人は「光輝の書」の隠された意味を見通す事ができる。

「光輝の書」は、ヘブライ人のカバラの大いなる教えについての文書である。

やがて、ソロモンの小鍵タロットは忘れられてしまった。

ソロモンの小鍵タロットは失われたと思われた。

エリファス レヴィは、ソロモンの小鍵タロットを再発見した。

難無く、エリファス レヴィは、古代の聖所の全ての門を開けた。

古代の聖所で、絶対の真理は、おとぎ話の姫の様に、常に若いまま、常に美しいまま、眠っているように思われる。

おとぎ話の姫は、百年の眠りの中で、姫を目覚めさせる運命の花婿を待っていた。

本書の後も、神秘は未だに存在し続けるであろう。

しかし、神秘の無限の深さは、より高く、より遠くに、成っているであろう。

本書の公表は光と成る。そうでなければ、本書の公表は愚行である。

本書は記念碑である。そうでなければ、本書は迷惑と成る。

本書の公表は光と成るか愚行であるか、本書は記念碑であるか迷惑と成るか、読み、熟考し、判断しなさい。

第1部 宗教の神秘

解決するべき問題

(1)確実な絶対な方法で、神の存在を証明する事と、神を全ての人の精神に確信させられる、神の概念をもたらす事

(2)議論の余地が無い様に、真の宗教の存在を確証する事

(3)唯一の真の普遍の宗教の全ての神秘の意味と「存在理由」を表す事

(4)哲学の反対を真の宗教に役立つ論拠へ変える事

(5)宗教と迷信の間に境界線を引く事と、奇跡と驚異現象の論理をもたらす事

第１部 予備考察

論理の大いなる熱烈な愛好者ジョゼフド メーストル伯爵が絶望して「世界には宗教が無い」と話した時、「神は存在しない」と軽率に話す大衆にジョゼフド メーストル伯爵は似ていた。

大半の不信心者が妄想している様な神は存在しない様に、実に、ジョゼフド メーストル伯爵が話している様な宗教は世界には無い。

宗教は唯一の不変の普遍の真実に基づく概念である。

人は信心深い者である。

「宗教」という言葉には必然な絶対な意味が有る。

自然は自ら「宗教」という言葉が表す概念を認める。

自然は自ら「宗教」という言葉が表す概念を原理にまで高める。

信じる必然性は愛する必然性と密接に繋がっている。

そのため、人の魂は同一の希望と同一の愛の共有を必要とする。

孤立した信心は不信だけである。

共通の確信による結束は、宗教を形成して、宗教を構成している。

政治的な一致によって宗教が創造されるのではない。

政治的な一致によって宗教が強制されるのではない。

政治的な一致によって宗教が定着するのではない。

命の様に、一種の必然によって宗教はあらわれる。

全ての人の予見にもかかわらず、同一の力が、自然の現象を定め、宗教の超自然的な領域の境界を定めている。

人が宗教の啓示を想像して創造するのではない。

人は宗教の啓示を経験して信じるのである。

むなしくも人の精神は宗教の教義の不明さに対して抗議している。

しかし、他ならぬ、宗教の教義の不明さへの好奇心で人の精神は支配されている。

また、大抵、最も強情な理論家でも「不信心者」という称号を受けるのを恥じるであろう。

無宗教で過ごしている人々、というか、無宗教で過ごしていると虚偽の主張をしている人々が思い込もうとしているよりも、宗教は人生の現実の中で大いなる地位を占めている。

精神的な正しい愛、献身的な愛、貞淑や畏敬といった、人を動物的人間より高める全ての概念は、本質的に宗教的な神聖な感情である。

祖国と家族への敬礼。

誓いと死後の名声への忠実。

祖国と家族への敬礼、誓いと死後の名声への忠実を放棄する人の名声は必ず完全に地に堕ちるであろう。

祖国と家族への敬礼、誓いと死後の名声への忠実は、浮き沈みする愚かな惨めな死に至る滅びる「この世」よりも、大いなる何ものかを信じる事によって生じる。

仮に、祖国と家族への敬礼、誓いと死後の名声への忠実といった、人が永遠であるべきと感じる、崇高なものへの人の向上の結果が全て、人の魂の消滅に成ってしまうのであれば、目先の現在だけを楽しみ、過去を完全に忘れ、未来を軽視する事だけが人の本分に成ってしまうであろう。

また、かつて有名な似非学者ルソーが誤って話していた「(社会、文明、学問によって)思考する人は堕落した人である」という誤りが正確に正しいと言える様に成ってしまうであろう。

したがって、人の全ての情熱の中で、宗教的な情熱は最も強い。

肯定しようが否定しようが、宗教的な情熱は、相当する熱狂の、宗教的な情熱を引き起こす。

　ある者は想像で創造した神を頑固に肯定する。また、(「無限の者である神」という)神の大いなる呼称に相応しい無限の世界の全てを一考しただけで理解でき破壊できたかの様に、ある者は神を軽率に否定する。

　哲学者は、人における宗教という生理学的な事実を十分に考察しなかった。

　そのため、実に、全ての教義についての考察とは別に、宗教は存在する。

　知力や愛と全く同じで、宗教は人の魂の能力の１つである。

　人が存在する限り、宗教は存在するであろう。

　前記の見方で考えると、宗教は無限の理想のものへの欲求に他ならない。

　宗教という無限の理想のものへの欲求は、全ての向上心を正しい物とする。

　宗教という無限の理想のものへの欲求は、全ての信心を抱かせる。

　宗教という無限の理想のものへの欲求だけが、強い者である賢者のために成る様に、弱い者である愚者の虚栄心を利用して、徳と名声が空虚な口先だけに成る事を防ぐ。

　人は「自然宗教」という名前を宗教という無限の理想のものへの欲求、信心が元から持っている欲求に正に与えたのかもしれない。

　信心の活動を制限する傾向が有る全てのものは、宗教の段階においては、自然に反する。

　宗教の目標の実体は神秘である。

　宗教の目標の実体は謎である。

　なぜなら、信心は、既知を知の探究に任せて、未知によって始まる。

　不信は信心にとって不倶戴天の敵である。

有限と無限を隔てている底無しの淵を埋めるために、神という存在の介入が必要であると信心は感じる。

また、有限と無限を隔てている底無しの淵を埋めるための、神という存在の介入を信心は全ての心の暖かさによって、全ての知の柔和さによって認める。

もし、有限と無限を隔てている底無しの淵を埋めるための、神という存在の介入を認める信心の作用から離れてしまうと、宗教への欲求は、満足を感じられなく成り、宗教への不信や失望へ変わってしまう。

そのため、信心の作用が狂愚の作用に成ってしまわないために、理性は信心が導かれ統治される事を望む。

何によって、信心が導かれ統治される事を望むべきか？

知によって、信心が導かれ統治される事を望むべきか？　いいえ！

すでに話した様に、宗教の領域においては知は何もできない。

国家の権威によって、信心が導かれ統治される事を望むべきか？　いいえ！

国家の権威によって、信心が導かれ統治される事を望むのは馬鹿げている。

警察官によって、信心深い人達の祈りは指図されるべきか？　いいえ！

そうすると、残っているのは、倫理道徳的な権威によって、信心が導かれ統治される事を望む事である。

倫理道徳的な権威だけが、国家の権威と協力して、国家の権威の指図に従わずに、教義と宗教の戒律を設立できる。

要するに、信心は、完全な永遠の疑う余地の無い、現実の満足を宗教的な欲求に与える必要が有る。

信心が現実の満足を得るには、公認の位階制が保存している教義への絶対不変の確認を保持している必要が有る。

信心が現実の満足を得るには、絶対の信心によって、信心の象徴の有効な実現をもたらす、有効な宗教を保持している必要が有る。

信心の象徴の実現をもたらすと理解された宗教は、宗教への自然な欲求を満足させる事ができる唯一の宗教であり、必然的に、唯一の現実の自然宗教である。

他人の助けを借りずに、エリファス レヴィは「信心の象徴の実現をもたらすと理解された宗教は、宗教への自然な欲求を満足させる事ができる唯一の宗教であり、唯一の現実の自然宗教である」という二重の定義に到達した。

本物の「自然宗教」は「啓示宗教」である。

本物の「啓示宗教」は、教会の「信仰、希望、愛」における交流によって人の考察を超越して絶対的に自認する、位階制の正統な宗教である。

人が悪徳と過誤に従ってしまうのと同じくらい、倫理道徳的な権威を表して、倫理道徳的な権威である祭司の効力によって倫理道徳的な権威を実現して、祭司とは神的であり誤りが無い。

祭司とは祭司としては常に神の代行者である。

(邪悪な聖職者の、)人としての誤りや悪事ですら取るに足りない。

史上最悪の法王アレクサンデル 6 世が司教達を任命した時に、アレクサンデル 6 世は毒殺者としてではなく法王として両手を司教達の頭の上に置いた。

史上最悪の法王アレクサンデル 6 世は、法王アレクサンデル 6 世を罪に定める教義を破損しなかったし改悪しなかった。

また、史上最悪の法王アレクサンデル 6 世が手ずから施した洗礼といった秘跡は、人を救ったが、法王アレクサンデル 6 世を正当化しなかった。

全ての時代で、全ての場所で、嘘つきと犯罪者は存在してきた。

しかし、神の力で公認された位階制のカトリック教会に、法王としての悪人や祭司としての悪人は存在した事がなかったし、未来永劫、存在しない。

「悪」という言葉と「祭司」という言葉の意味は矛盾している。

「邪悪な祭司」という表現は意味が矛盾している表現に成る。

(「邪悪な祭司」と言うよりも「祭司のふりをした悪人」と言うべきである。)

エリファス レヴィは史上最悪の法王アレクサンデル 6 世について話した。

史上最悪の法王アレクサンデル 6 世について、すでに話した前科と同じくらい非難されるに相応しい他の記録を話さなくても、「法王アレクサンデル 6 世」という名前を話しただけで十分であろうとエリファス レヴィは考えている。

邪悪な聖職者という重犯罪者は、任命されていた祭司という神性に反するので、自身を二重に辱める事に成る。

しかし、邪悪な聖職者という重犯罪者には、任命されていた祭司という神性を辱める力は無い。

堕落した人を超越して、祭司という神性は常に光を放ち輝いているまま存在している。

すでに話した様に、神秘の無い宗教は存在しない。

言い足すと、象徴の無い神秘は存在しない。

神秘の象徴は、神秘の手段、または、神秘の表現である。

神秘の象徴だけが、既知の形から借りた逆説的な形によって、神秘の未知の深みを表す。

神秘の象徴の形は、象徴の対象のために、神秘が科学の理を超越している事を表す必要が有って、必然的に、神秘を科学の理の外に表す必要が有る。

教会の教父テルトゥリアヌスの高名な完全に正確な言葉、「不条理だから私は信じる」。

仮に、科学が科学には未知のものを断言して話したら、科学は自壊してしまうであろう。

(仮に、科学が科学の対象外のものを断言して話したら、科学は自壊してしまうであろう。)

科学の問題において信心は決定できない、のと同様に、科学には信心の務めを果たす事ができないであろう。

科学による全く軽率な干渉での信心のものへの断言は信心にとって馬鹿げた断言にしか成り得ない。

科学的な断言が信仰箇条としてもたらされたら宗教にとって馬鹿げた断言である、のと正に同様に。

「知っている」事と「信じる」事を決して混同してはいけない。

しかし、同様に、「知っている」事と「信じる」事は同時に相対するのは不可能であろう。

事実、知っている事とは正反対の事を信じるのは、知っている事をただちに止める事に成る。

また、同様に、信じていた事とは正反対の事を知ったら、信じる事をただちに止める事に成る。

科学の名前によって宗教上の決定を否定したり異議を唱える人は自分が科学も宗教も理解していない事を証明してしまう。

結局、神の三位一体の神秘は数学の問題ではない。

人に成った神の言葉イエスの処女懐胎は産科学上の現象ではない。

イエスによる身代わりによる救いという仕組みは、歴史家の批評とは隔絶していて、揺るぎない。

神の教えを信じるべきか信じないべきかについて人が正しいか誤っているか決定する力が科学には絶対的に無い。

科学は宗教の結果を観察できるだけである。

また、もし、明らかに、宗教が人を向上させたら、
さらに、もし、宗教を生理学的な事実と見なす事ができて、明らかに、宗教自体が絶対に必要な物の１つであり、宗教自体が１つの力であるならば、
科学は宗教を認める必要が絶対に有るであろうし、
科学は常に宗教を考慮に入れる賢明な役割を果たす必要が絶対に有る。

　さて、大胆に断言しよう。

　双方共に重要な、宗教と学問による、「思いやり」という、計り知れない真実が存在する。

　(ある意味で、)「思いやり」という宗教と学問による真実は、地上で神を目に見える者にする。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、議論の余地が無い真実である。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、普遍な真実である。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、この世で人に成った神である。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、キリスト教の啓示が行われた時代に始まった。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、古代人には未知だった精神の真実である。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、明らかに神の精神の真実である。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、功績として、科学よりも、現実的な真実である。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、大志として、最高の詩よりも、雄大な理想である。

　「思いやり」という宗教と学問による真実は、「チャリティー」という新しい名前、古代の聖所で全く前代未聞の名前を創造する必要が有った精神である。

「思いやり」などを意味する「チャリティー」という新しい名前が創造された。

宗教にとって、また、宗教と同じくらい学問にとって、「思いやり」などを意味する「チャリティー」という新しい名前、「思いやり」という言葉は、絶対である神が表れたものである、とエリファス レヴィは実証したい。

絶対である神が表れたものである「思いやり」などを意味する言葉は「チャリティー」である。

エリファス レヴィが話している精神とは、「『思いやり』の精神」である。

思いやりの前に、宗教は平伏し、圧倒された学問はひざまずく。

明らかに、思いやりには、人性よりも、大いなる何ものかが存在する。

思いやりは、慈善行為によって、思いやりが夢想ではない事を証明する。

思いやりは、全ての肉欲よりも、強いものである。

思いやりは、苦難と死に勝利する。

思いやりは、神を全ての心に理解させてくれる。

すでに、開始されている正統な希望の実現によって、思いやりは、(魂の)永遠を満たしている、様に思われる。

実践中の生きている思いやりの前では、神を大胆に冒涜した無政府主義者プルードンが何ほどの者であろうか？　思いやりの前では、無政府主義者プルードンは無価値である！

思いやりの前では、神を大胆に笑いものにしたヴォルテールが何ほどの者であろうか？　思いやりの前では、ヴォルテールは無価値である！

無神論者ディドロのこじつけ、シュトラウスの粗探し、ヴォルネイの「残骸」、叫びが血と侮辱の黙殺で掻き消されたフランス革命での神への冒涜を積み上げてみなさい。

さらに、未来に我々を待ち受けている全ての奇形なものと空虚な妄想を積み上げなさい。

ところで、「残骸」という名前は非常に正当である。なぜなら、ヴォルネイには「残骸」を作る事しかできなかった。

しかし、そこに、全ての思いやりの姉妹達の無上の謙虚と純粋が来ると、思いやりという崇高な現実の前にひざまずくために、世界は全ての狂愚、全ての罪、全ての妄想を離れるであろう。

思いやり!

「思いやり」は、神の言葉である!

「思いやり」は、神を理解させてくれる唯一の言葉である!

「思いやり」は、普遍の啓示を含んでいる言葉である!

「思いやり」と「精神」という2つの言葉の結合は、完全な解決であり、完全な約束である!

結局、どの問題へも思いやりの精神は解決策を見つけるのではないか? はい! どの問題へも思いやりの精神は解決策を見つける!

もし神が思いやりの精神でなければ、人にとって、神とは何者であろうか?

正統な教えとは何か?

正統な教えとは、純粋な人々の確信と普遍の交流の平和を乱さない様に、信心についての論争を拒絶する、思いやりの精神ではないか? はい! 正統な教えとは、純粋な人々の確信と普遍の交流の平和を乱さない様に、信心についての論争を拒絶する、思いやりの精神である!

普遍の教会とは、思いやりの精神による交流の他にあるか? いいえ! 普遍の教会とは、思いやりの精神による交流である!

思いやりの精神によって、教会は絶対である。

思いやりの精神によって、教会は誤りが無い。

教会とは思いやりの精神である。

思いやりの精神は、祭司の、神の様な徳である。

思いやりの精神は、人の義務である。

思いやりの精神は、人の権利の保証である。

思いやりの精神は、正しい人の魂の不死の証拠である。

思いやりの精神は、地上で正しい人のために開始されている、幸せの永遠性である。

思いやりの精神は、人という存在に与えられた、栄光の目標である。

思いやりの精神は、人の全ての戦いの経路であり、目標である。

思いやりの精神は、個人としての倫理道徳性の完成形、国民としての倫理道徳性の完成形、人の宗教的な倫理道徳性の完成形である。

思いやりの精神は、全てを理解させてくれる。

思いやりの精神は、全てを望む事を可能にさせてくれる。

思いやりの精神は、全てに取り組ませてくれる。

思いやりの精神は、全てを成就させてくれる。

ヨハネによる福音 19 章 26 節で、思いやりの精神によって、十字架の上で死ぬ時に、イエスは使徒ヨハネを聖母マリアに息子として与えた。

ルカによる福音 23 章 46 節で、イエスは「父である神よ、あなた、父である神の手の中に、私イエスの霊を委ねます」と、肉体からの解放と魂の救いを叫んで、思いやりの精神によって、イエスは無上に恐ろしい十字架刑という拷問の苦しみに勝利した。

キリスト教の達道者である、12 使徒は、思いやりによって、世界を圧倒した。

12 使徒は、命よりも、真理であるイエスを愛した。

(ヨハネによる福音14章6節「私イエスは真理である」)

12使徒は、信者を伴わずに独りで、真理であるイエスについて大衆と権力者の所へ話しに行った。

拷問によって試されて、12使徒は、真理であるイエスに忠実であると知られた。

12使徒は、死に様(ざま)によって、生きている魂の不死性を大衆に見せた。

12使徒は、血によって、大地を潤した。

12使徒が流した血の熱は絶えなかった。

なぜなら、思いやりからの熱意によって、12使徒の心は燃えていた。

思いやりによって、12使徒は、キリスト教を築き上げた。

キリスト教徒は、「共に信じる事は、分裂して疑うよりも、価値がある」と話した。

キリスト教徒は、従順という基礎の上に位階制を建てた。

役に立つ事が統治する事に成るくらい、思いやりの精神は、従順を気高い物、大いなる物にした。

キリスト教徒は、全ての信心と希望を形にした。

キリスト教徒は、キリスト教という力を全ての思いやりの保持に注ぎ込んだ。

神の言葉イエスの遺産である、キリスト教の言葉を一言だけでも私物化する利己主義者には、災いが有る!

キリスト教の言葉を一言でも私物化する利己主義者は、神殺しである。

なぜなら、キリスト教の言葉を一言でも私物化する利己主義者は、主である神イエスの体の分裂を望む者である。

キリスト教は、思いやりの、契約の箱である。

キリスト教という契約の箱に触れた人は誰でも永遠の死に打ち倒される事に成る。

なぜなら、思いやりは、思いやりの禁忌に触れた人から差し伸べていた手を引き上げる。

思いやりは、子孫への神的な遺産である!

思いやりは、祖先の血の価値である!

ローマ皇帝どものローマ帝国の牢獄の中で、思いやりによって、殉教者は慰めを得た。

思いやりによって、殉教者は牢獄の看守や死刑執行人すら説得してキリスト教を信じさせた。

思いやりという名前によって、トゥールの聖人マルティヌスは、プリシラリアン派の異端者への拷問に対して抗議した。

思いやりという名前によって、トゥールの聖人マルティヌスは、(暴力である)剣によって宗教を強制したい暴君の様な似非信者の宗派と絶縁した。

宗教の名前をかたって犯された罪のつぐないとして、聖所に潜り込んだ大衆による醜聞のつぐないとして、多数の聖人達が、思いやりによって、世界に宗教を認めさせた。

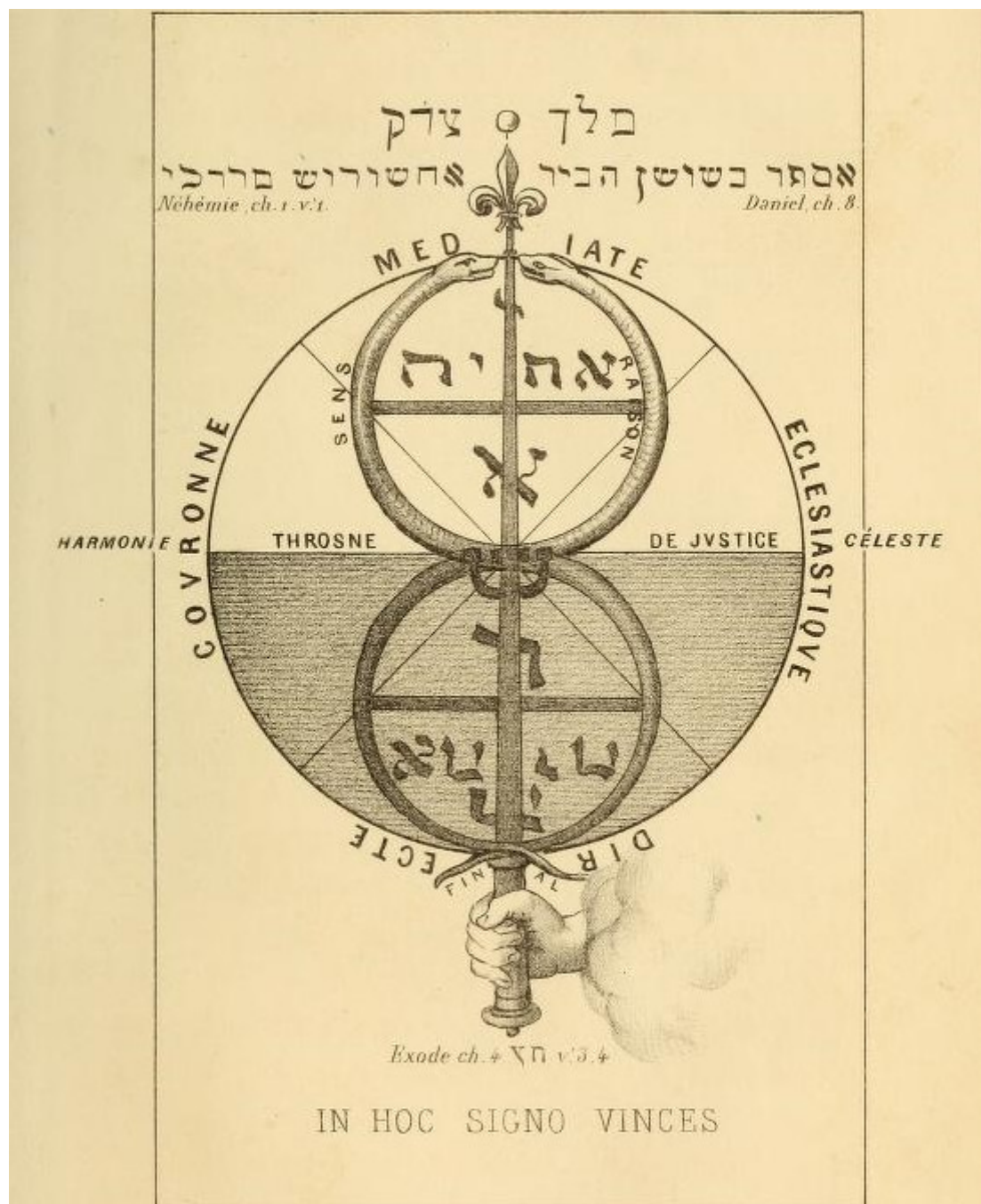
不信心な世紀ですら、思いやりによって、ヴァンサンド ポールとフランソワ フェヌロンは、たたえられた。

思いやりによって、徳の気高さで、ヴァンサンド ポールとフランソワ フェヌロンは、ヴォルテールの弟子の笑い声を事前に黙らせた。

思いやりによって、十字架の愚かさは、諸国民の知に成った。

(コリント人への第 1 の手紙 1 章 18 節から 24 節「滅びる人には十字架の伝道は愚かさである。神は伝道の愚かさによって信じる人を救う事を望んだ」)

なぜなら、気高い心の持ち主は、利己主義者や快楽の奴隷と共に疑うよりも、思いやる人や献身的な人と共に信じるのは偉大である、と理解した。

מלך צדק
Néhémie ch.1 v.1
Daniel ch.8
MED IATE
SENS
RAISON
COVRONNE
ECLESIASTIQVE
HARMONIE
THROSNE
DE JVSTICE
CÉLESTE
DIR ECTE
FIN AL
Exode ch.4 v.3.4
IN HOC SIGNO VINCES

大いなる神秘の象徴

第１部 第１条

第１の問題の解決

確実な絶対な方法で、神の存在を証明する事と、神を全ての人の精神に確信させられる、神の概念をもたらす事

真の神

神の教えだけが神を定義できる。

科学は神の存在を肯定も否定もできない。

神は人の信心の絶対の目標である。

神にとっては、神は秩序の無上の創造する知である。

世界にとっては、神は思いやりの精神である。

普遍の存在である神は、知性を持つ人を永遠に運任せに摩耗させる必然の機械では？　いいえ！

または、神は、人の精神を改善するために２つの力を傾ける神意を持つ知的存在であるか？　はい！

「神は、人を運任せに摩耗させる必然の機械では？」という仮説は、理性に反する。

「神は、人を運任せに摩耗させる必然の機械では？」という仮説は、悲観的であり、不道徳である。

知と論理は「神は、人の精神を改善するために２つの力を傾ける神意を持つ知的存在である」という仮定を当然、選ぶべきである。

イエス。

神を冒涜した無政府主義者プルードンよ。

神は仮定である。

しかし、神無しでは全ての原理が不条理に成ってしまうか疑わしく成ってしまうくらい、神は絶対に必要な仮定である。

カバラの秘伝伝授者にとっては、神は、数を創造し、命を数に与えている、絶対の統一性である。

人の知性の統一性は、神の統一性を実証する。

数の鍵は諸宗教の鍵である。

なぜなら、宗教の象徴は、数がもたらしている調和による類推可能な形である。

数学は、(存在しない)盲目的な不可避の運命を決して証明できない。

なぜなら、数は、無上の理性の性質である正確さの、表れである。

統一性は正反対のものの類推可能性を実証する。

統一性は、数の基礎、数のつり合い、数の目的である。

信心の作用は、統一性からもたらされ、統一性へ戻る。

さて、エリファス レヴィは数の助けを借りて聖書の説明を大まかに話すつもりである。

なぜなら、聖書は神の象徴の書である。

エリファス レヴィは、永遠の神の教えの論理を知らせる様に、数へ求めるつもりである。

統一性という統合において、数の再統一によって、常に、数は答えてくれるであろう。

後記は、数についてのカバラによる推測の簡潔な概要である。

後記は、宗教の教義とは別の物である。

後記を、エリファス レヴィは探究への好奇心として示すに留める。

　後記により、宗教の教義で変革を行う事はエリファス レヴィの務めではない。

　エリファス レヴィは、秘伝伝授者としての資格による主張を、キリスト教徒としての性質による帰順先(であるカトリック教会の判断)に完全に従わせるつもりである。

数による預言の神学の概要

第1部 第1条 数1

単一性

単一性は、原理である、数の統合体である。

単一性は、神の概念であり、人の概念である。

単一性は、論理と信心の一致である。

信心が論理に反するのは不可能である。

愛が信仰を必然にする。

信仰は希望と一致する。

(コリント人への第1の手紙 13 章 13 節「信仰、希望、愛」)

愛する事は、信じる事であり、望む事である。

魂から3つ1組で爆発的に出て来る、信仰、希望、愛は(対神)徳と呼ばれている。

なぜなら、徳行を行うには、勇気の力が必要である。

(virtue は徳、徳行、力を意味する。)

ところで、仮に、疑う能力が無ければ、徳行において、どんな勇気を望むであろうか？　いいえ！　仮に、疑う能力が無ければ、徳行において、勇気は不要と成ってしまう!

さて、疑う事が可能であるという事は疑っているという事である。

疑う力は、信じる力と、つり合う力である。

疑った事は、信じる様に成った事に完全に役立つ様に成る。

自然は自ら、人が信じる様に誘導する。

　しかし、信仰の諸形態は、当時の信仰の傾向の社会的な表現である。

　「信仰の諸形態は、当時の信仰の傾向の社会的な表現である」事は、明らかに、事実として、カトリック教会は誤りが無い事を証明する物である。

　必然的に、神は、全ての存在の中で最も未知の者である。

　なぜなら、人を拒絶する経験によってのみ、神は、定義される。

　神は、人には無いもの全てである。

　神は、仮定によると、有限とは正反対の、無限である。

　信仰、または、信仰、希望、愛は、人が決して他人に強制できないくらい、人が自身にすら強制しないくらい、自由なものである。

　キリスト教は、「信仰、希望、愛は、神の思いやりである」と話している。

　さて、神の思いやりは、人からの要求や強要に従うべきである、と考えられるか？　いいえ！　神の思いやりは、人からの要求や強要に従うべきではない、と考えられる！

　言い換えると、天から自由に報いを求めずに来るものである、神の思いやりへ無理に押し入る事を要求できる人は誰か？　神の思いやりへ無理に押し入る事を要求できる人は存在しない！

　人は、自分や他人のために、神の思いやりを望むだけに留めなさい。

　科学の論理で信心について論理的に考える事は、非論理的に考える事に成ってしまう。

　なぜなら、信心の目標である神は、科学の論理の領域の外に存在する。

　もし人がエリファス レヴィに「神は存在するのか？」と尋ねたら、エリファス レヴィは「エリファス レヴィは神が存在すると信じている」と答える。

「しかし、エリファス レヴィは神が存在すると確信しているのか？」

「仮に、エリファス レヴィが神は存在すると確信していたら、エリファス レヴィは神が存在すると信じているのではなく知っているであろう」

　信心の公式化は、神という共通の仮定の諸条件を決定する事である。

　学問の力が絶えた所で信心は生じる。

　学問の領域を拡大する事は、宗教の領域を減少する事に誤って見えてしまう。

　しかし、実際は、学問の領域を拡大する事は、同じ割合で、宗教の領域を拡大する事に成る。

　なぜなら、学問の領域を拡大する事は、宗教の基礎を拡大する事に成る。

　人は、既知のものと未知のものの仮定されている関係や仮定できる関係によってのみ、未知のものを定義できる。

　類推可能性は古代の祭司マギの唯一の考えであった。

　実際には、多分、祭司マギの考えである「類推可能性」は「仲介するもの」と言える。

　なぜなら、「仲介するもの」と言える、祭司マギの考えである「類推可能性」は、半分は知であり、半分は仮定である。

　「仲介するもの」と言える、祭司マギの考えである「類推可能性」は、半分は論理であり、半分は詩である。

　「仲介するもの」と言える、祭司マギの考えである「類推可能性」は、他の全てのものの父であったし、常に、他の全てのものの父であろう。

　人に成った神イエスとは何者なのか？

　人に成った神イエスは、最も人的な一生によって、最も神的な理想を実現した。

信心は、自然と論理の指針に導かれた知による予見であり、自然と論理の指針に導かれた思いやりによる予見である。

科学にとって近づき難い事、哲学にとって疑わしい事、確信にとって不明である事は、信心のものの本質である。

信心は、希望の最終目標の仮定的な実現であり、希望の最終目標への慣行的な決意である。

信心は、人の目には見えないものについての、目に見える象徴への支持である。

「信心は、希望しているものの実体であり、目には見えないものの証拠である」

神の存在、または、神の不在を、狂わずに断言するには、論理的に、または、非論理的に、神の定義から始める必要が有る。

神の定義が論理的であるには、神の定義は、仮定的で、類推可能的で、有限の既知のものの否定である必要が有る。

有限の劣った神(という妄想)を否定する事は可能である。

しかし、無限の絶対の神の存在の証明は不可能である、のと同じく、無限の絶対の神の否定は不可能である。

無限の絶対の神は、人が信じる、論理的な仮定である。

マタイによる福音 5 章 8 節で、主イエスは「心の清い人達は幸いである。心の清い人達は神を見るから」と話している。

「心の清さで神を見る」というのは、「心の清さで神を信じる」事である。

もし、心の清さによる神への信心が本物の善を愛せば、個人的な無知から生じる冒険的な帰納法に従って本物の善をあまりにも定義し過ぎようとしない限り、心の清さによる神への信心に誤った印象を与える事は決してできない。

心の清さによる神への信心によって、他人を裁く裁きは自身にも適用されて、他人を裁く裁きで自分も裁かれる。

　(マタイによる福音 7 章 1 節から 2 節「他人を裁くなかれ。自分が裁かれないためにである。他人を裁く裁きで自分も裁かれるであろう」)

　人が信じた方法で人は裁かれるであろう。

　言い換えると、人は自身を自分の理想の形に創造する。

　詩編 115 章 8 節で、詩編の作者は「神の偶像をねつ造した者と、ねつ造した神の偶像を信じる者は、全て、ねつ造した神の偶像に似た者に成ってしまう」と話している。

　古代の世界の神的な理想は文明を創造した。

　古代の世界の神的な理想が創造した文明は終わった。

　無学な祖先の神が、より啓蒙されていく子孫の悪魔と成ってしまうのを見て、絶望するなかれ。

　人は捨てた神々によって諸々の悪魔をねつ造する。

　そのため、サタンは形が、とても支離滅裂である。

　なぜなら、サタンは、古代の神統系譜学の残骸の全てで、ねつ造されている。

　サタンは、神秘を失くしたスフィンクスである。

　サタンは、答えを失くした謎である。

　サタンは、真理を失くした神秘である。

　サタンは、真実と光を失くした絶対者である神である。

　人は、神の子である。

　なぜなら、マタイによる福音 9 章 6 節などで、地上に表れた神イエス、地上で実現した神イエス、地上で人に成った神イエスは、自身を「人の子」と呼んでいた。

人は、神の知性と神の思いやりを想像して神を創造した後で、「光あれ!」と言う崇高な神の言葉を理解した。

人は、神的な思考の形に成る。

神は、人の思考の理想の統合体である。

前記の様にして、神の言葉イエスは、人を啓示する。

人に成った神の言葉イエスは、神を啓示する。

人は、この世の神である。

神は、天の人である。

「神が望んでいる」と話す前に、すでに、人が望んでいた。

全能の神を理解し、たたえるために最重要なのは人は自由である必要が有る事である。

仮に、人が、神の言葉に従って、恐れから善悪の知の木の果実をあきらめていたら、人は、子羊の様に無知であったであろうし、光をもたらす天使ルシフェルの様に疑い深く反抗的であったであろう。

人は、「無知」という「へその緒」を自らの手で断ち切って、自由意思で地に堕ち、神(についての想像)を堕天に引きずり込んだ。

そのため、人は、有罪にされてしまったゴルゴタの丘の大いなるイエスと共に、崇高な堕天から再び栄光に満ちて復活し、神の王国に入る。

なぜなら、神の王国は、知と思いやりによる物である。

知と思いやりは、共に、自由の子である。

神は、美しい女性の形によって、自由を人である男性に表して見せた。

神は、人である男性の勇気を試すために、人である男性と自由である女性の間に、死の幻を生じさせた。

人である男性は、自由である女性を愛し、自身が神に成ったと感じた。

人である男性は、神から与えられたばかりのものである、永遠の希望を自由である女性に譲り渡した。

　人である男性は、死の幻を超越して、花嫁である自由である女性へ向かった。

　人である男性は、自由である女性を自分の物にした。

　人である男性は、命である自由である女性を抱いた。

　栄光の罪をつぐないなさい！　おおっ！　プロメテウスよ！

　絶え間無くワシに食い物にされているプロメテウスの心は死ぬ事ができない。

　しかし、死ぬのはワシである。

　死ぬのは主である神ユピテルである。

　主である神ユピテルは、いつか死ぬであろう！

　いつか、最後には、人は、苦しい一生という、苦しい夢から目覚めるであろう。

　人への試練は終わるであろう。

　人は、不死に成れるくらい十分に労苦に対して強く成るであろう。

　人は、より豊富な命で、神の中で生きるであろう。

　人は、神の思考の光と共に、神の作品の中に降臨するであろう。

　神の思いやりのささやきが、人を無限の者である神の中に、さらうであろう。

　疑い無く、人は、新しい民族の兄、後世の天使に成るであろう。

　天使である人は、無限の中を散策するであろう。

　星々は、天使である人の輝く船と成るであろう。

　天使である人は、涙を流して泣いている人の目を静めるために、甘美な姿に変身するであろう。

　天使である人は、未知の草原で、光を放つ白百合を集めるであろう。

　天使である人は、光を放つ白百合の露を地上に撒き散らすであろう。

天使である人は、眠っている幼子のまぶたに触れて、最愛の子の美の光景で、母の心を喜ばせるであろう!

第１部 第１条 数２

２つ１組

特に、２つ１組は、妻であり社会の母である、女性の数である。

男性は、知による思いやりである。

女性は、思いやりによる知である。

女性は、自身に満足した創造主である神の微笑である。

神の例え話である創世記には、神が女性を創造した後に安息した、と記されている。

女性は、母であるため、男性より優先される。

女性は、労苦して産むので、事前に、全ての事が許されている。

女性は、男性より先に、死を通じて、不死に入門した。

そのため、男性は、男性より先に死を通じて不死に入門した女性が美しく思いやり深いと理解したので、女性より長生きする事を望まず、自分の命よりも、自分が永遠に幸せであるよりも、女性を愛した。

男性アダムは、幸せな国外追放者である！

なぜなら、神は、男性の国外追放中に、男性の対として女性エヴァを男性アダムに与えた！

しかし、カインの子孫は、アベルの母エヴァである女性に反抗した。

カインの子孫は、母エヴァである女性を奴隷にした。

女性の美は、女性を愛する力が無い男性の食い物にされた。

そのため、女心が秘密の聖所であるかの様に、女性は女心を閉ざした。

女性は「処女は母に成る事を望む。処女の息子イエスは、あなたたち男性に女性を愛する事を教えるであろう」と、女性に相応しくない男性へ話した。

おおっ！　女性エヴァ！

女性エヴァの誘惑への敗北が敬礼されます様に！

おおっ！　処女懐胎した聖母マリア！

処女懐胎した聖母マリアの労苦と栄光が祝福されて敬礼されます様に！

後に、十字架にはりつけにされた、聖母マリアは、息子イエスを埋葬するために、人に成った神イエスの死後、生き残っていた。

聖母マリアが、人にとって、神の啓示の究極の言葉に成ります様に！

モーセは、神を主と呼んだ。

イエスは、神を父と呼んだ。

エリファス レヴィは、神について思考して、「神意は人の母と言えるかもしれない」と思考する。

女性エヴァの子孫である、人よ、誘惑に負けた女性を許そう！

女性エヴァの子孫である、人よ、改心した女性を畏敬しよう！

女性エヴァの子孫であり、母の胸で眠った事が有る、母の腕に抱かれた事が有る、母に撫でられて慰められた事が有る、人よ、女性を愛そう！　母を愛そう！

そして、人よ、互いに愛し合いなさい！

(ヨハネによる福音 15 章 12 節から 17 節イエス「互いに愛し合いなさい！」)

第1部 第1条 数3

3つ1組

数3は、創造の数である。

神は、永遠に、自身を創造する。

神が神の作品で満たす無限は、絶え間無い無限の創造である。

(神が無限を神の作品で満たすので、無限の中では神の絶え間無い無限の創造が行われていく。)

無上の思いやりは、美を見本として自身について熟考する。

無上の思いやりは、諸形態を装飾品として試す。

なぜなら、無上の思いやりは、命の愛好者である。

同様に、人は、自身を確認して、自身を創造する。

人は、自分が勝ち取った戦利品で自身を飾る。

人は、自分自身の考えによって、自身を教える。

マタイによる福音22章の例え話の様に、人は、自分の行為を「結婚式用の礼服」として身につける。

(マタイによる福音22章の例え話の「結婚式用の礼服」は「人の生前の正しい行い」を意味する例えである。)

人の知性は、自然の諸形態を見抜いて、創世記の、創造の大いなる7日間を模倣した。

日々は、新しい啓示をもたらした。

この世の新興の王は、全て、一日間限定の、人に成った神の様な存在であった!

(

ローマの信徒への手紙13章「神が立たせているのではない権力者は存在しない。神が現在の権力者を立たせている」

出エジプト記9章16節とローマの信徒への手紙9章17節「神がファラオといった権力者を王の地位に昇らせたのは、人である王に代行させて神の力を発揮するためである」

)

前記は、インドの神秘を説明して、全ての象徴を正しい物とする、崇高な夢である!

人に成った神についての気高い概念は、人アダムの創造と対応している。

地上の楽園における人アダムの最初の日々の様に、キリスト教は、結婚相手だけを望み求める未亡人である。

(創世記2章の例え話で、神は人アダムが独りであるのは良くないとし、男性アダムに相応しい「助け手」、「helper」が見つからないので、女性エヴァを創造した。)

人は、花嫁や母として敬礼できるキリスト教を待ち望んでいる。

人は、神との新しい約束による結婚を望んでいる。

ルカによる福音14章の例え話の様に、神は、古代の世界の貧者、盲人、不法入国の難民の様な者を神の宴に招いて、(報いとして人の生前の行いに対応する)「結婚式用の礼服」を与えるであろう。

神に招かれて、神に選ばれた人達は、貧者、盲人、不法入国の難民の様に長い間この世で苦しめられて涙を流して悲しんでいたので、言い表せないくらい大いなる思いやりと、言い表せないくらい大いなる微笑と共に、見つめ合うであろう。

(マタイによる福音5章4節「悲しんでいる人達は幸いである。神が慰めてくれるから」)

第 1 部 第 1 条 数 4

4 つ 1 組

数 4 は、(四大元素という)自然の力の数である。

数 4 は、数 3 がもたらしたものが数 3 を補足したものである。

数 4 は、従順ではない単一性が、王である神の三位一体を認めた、統一性である。

生の最初の激情によって、人は、母を忘れ、もはや神を理解していなくて、神が柔軟性の無い嫉妬深い父であると誤解している。

悲観的な神サトゥルヌスは、親殺しの鎌で武装して、我が子を食らう気に成ってしまった。

主神ユピテルは、眉(まゆ)をひそめただけで、オリュンポス山を揺るがす。

父である神ヤハウェは、シナイ半島の遠く離れた場所まで轟いて他の音をかき消す雷を行使した。

それにもかかわらず、人の父である神は、創世記 9 章 21 節の酩酊して裸をさらしたノアの様に酔って、世界中の人が命の神秘を理解するのを許す時が有る。

プシュケは、労苦して自身を神化して、愛の神エロスの花嫁に成った。

アドニスは、死から復活して、オリュンポス山で女神アフロディーテと再会した。

ヨブ記 42 章 10 節で、ヨブは、悪に勝利して、失った分よりも多くの富を取り戻した。

勇気を試す事が、(神の)法である。

死の脅威を恐れるよりも、命を愛する事は、命に値する行いである。

神に選ばれた人は、大胆な人、勇気が有る人である。

臆病者には災いが有る！

そのため、良心を迫害する暴君や(迫害などの)恐怖の下僕に成る(悪法といった)法律の奴隷、人が求める必要が有る(生活費といった)物を出し惜しむ人、ユダヤ教の似非信者、キリスト教の似非信者を父である神は非難し呪う。

神の教えを改悪したユダヤ教徒が、イエス キリストを破門し、十字架にはりつけて殺したのではないか？　はい！　神の教えを改悪したユダヤ教徒が、イエス キリストを破門し、十字架にはりつけて殺した！

史上最悪の法王アレクサンデル 6 世の命令で、サヴォナローラは、拷問され、絞首刑にされ、死体が火刑で燃やされたのではないか？　はい！

正しくない人の教えを守るように強制する、見せかけだけの、現代の似非信者は、正に、マタイによる福音 26 章 57 節から 68 節でイエスを死罪に定めた大祭司カイアファの時代のファリサイ派ではないか？　はい！

知性と思いやりの名前において、知性と思いやりによる権威によって、もし誰かが似非信者に話したら、似非信者は聞く耳を持つであろうか？　いいえ！

出エジプト記で、悪いファラオどもの迫害から、ガラテヤの信徒への手紙 4 章の「自由民の子孫」であるヘブライ人を救って、父である神の統治権により、モーセはヘブライ人を統括した。

モーセの律法におけるファリサイ派による我慢できない束縛を破壊して、イエスは、全ての人を神の独り子イエスとの兄弟愛に招いた。

最後の妄想が地に堕ちた時、良心に対する最後の物質的な束縛が打ち倒された時、預言者を殺した最後の人と、神の言葉イエスのキリスト教を迫害した最後の人が負けた時、神の聖霊が世界を統治するであろう。

(コリント人への第 1 の手紙 15 章 24 節「時の終わりが来た時、イエスは王国を父である神に手渡す」)

出エジプト記でファラオの軍団を紅海で溺死させた、父である神に栄光あれ!

マタイによる福音 27 章 51 節で、神殿のヴェールを 2 つに裂いた、神の子イエスに栄光あれ!

イエスの十字架は、ローマ皇帝の王冠、ローマ帝国の王位よりも価値の重さで超越し、額(ひたい)を地に押しつけてローマ皇帝を平伏せさせた!

神の子達の宴のための場所を作るために、畏敬するべき息で、盗人と死刑執行人を全て地から一掃する、神の聖霊に栄光あれ!

天と地の統治を、知性に光をもたらす自由の天使ルシフェルに約束した、神の聖霊に栄光あれ!

自由の天使ルシフェルは、創世記の天地創造の第 1 日の夜明け前に生まれた。

知性に光をもたらす自由の天使ルシフェルは、人アダムが知性に目覚める前に生まれた。

イザヤ書 14 章 12 節で、神は天使ルシフェルを明けの明星と呼んだ。

おおっ!　天使ルシフェルよ!

自発的に、自信に満ちて、天使ルシフェルは堕天した!

天で、天の太陽は、夜という未開の領域を光で耕すために、天使ルシフェルを輝きに溺れさせた!

天使ルシフェルは、日没すると輝く!

天使ルシフェルの輝く視線は、夜明けを先導する!

天使ルシフェルは、昇天するために、堕天した。

天使ルシフェルは、命をより良く理解するために、死を経験する。

古代の世界の栄光にとっては、天使ルシフェルは、宵の明星である。

復活した真理(である、イエス)にとっては、天使ルシフェルは、美しい明けの明星である。

(ヨハネによる福音14章6節「私イエスは真理である」)

自由とは、自由奔放ではない。

なぜなら、自由奔放は、横暴である。

自由は、義務の守護者である。

なぜなら、自由は、権利を改心させる。

天使ルシフェルよ、暗黒時代の無知な大衆は、知性に光をもたらす天使ルシフェルを悪魔にしてしまった。

天使ルシフェルは、「天使ルシフェルは悪魔である」という誤った汚名の代わりに自由を勝ち取っていて、実に、元の、知性に光をもたらす天使に成るであろう。

天使ルシフェルは、自発的な従順という栄光の初祖であり、永遠の秩序に従うために自由を用いるであろう。

権利は、義務の基礎に過ぎない。

与えるために、所有する必要が有る。

後記は、堕天使達の堕天を説明する、とても気高い深い詩である。

神は、神が創造した霊である天使達に、光と命を与えた。

そして、神は、「愛しなさい!」と天使達に話した。

霊である天使達は、「愛するとは、どうする事ですか?」と神に応じた。

神は、「愛するとは、自身を他者にささげる事である」、「愛する者は苦しむであろうが、愛される様に成るであろう」と天使達に答えた。

臆病で、愛する事をためらって嫌がった、サタンといった堕天使達は、「私達、(堕)天使には、ささげない権利が有る。それに、私達、(堕)天使は苦しみたくない」と神に話した。

神は、「サタンといった堕天使達よ、ささげない権利とやらで立ち止まっていなさい！　そして、愛する神と天使達は、愛せないサタンといった堕天使達と隔絶しよう！　私、神と、神の者である天使達は、愛のために苦しむ事と愛のために死ぬ事すら望む。愛のために苦しむ事と愛のために死ぬ事を望むのが、神と天使達の義務である！」とサタンといった堕天使達に答えた。

したがって、サタンといった堕天使は、「最初」から、愛する事を拒んだ者である。

悪の精神の体現者サタンは愛せず、愛せない事が大きな苦しみに成る。

悪の精神の体現者サタンは与えられず、与えられない事が心の貧しさに成る。

悪の精神の体現者サタンは労苦せず、労苦しない事が虚無感と成る。

悪の精神の体現者サタンは死ねず、死ねない事が神の王国からの国外追放と、さまよう事の原因に成る。

堕天使とは、「(知性に)光をもたらすもの」を意味するルシフェルの事ではない。

堕天使は、愛を中傷した、悪の精神の体現者サタンである。

「富む」という事は、「与えられる」という事である。

「何も与えられない」という事は、「心が貧しい」という事である。

「生きている」という事は、「愛している」という事である。

「何も愛せない」という事は、「心が死んでいる」という事である。

「幸せを感じる」事は、「自身をささげている」事である。

自分のためにだけ存在する事は、自分を孤立させて他者に見捨てさせる事、神の王国から追放されて孤立して地獄をさまよう事である。

天は、思いやりのある思考の調和である。

地獄は、臆病による、人の先天的な物である肉欲による、利害の対立による争いである。

権利だけを主張する人は、嫉妬からアベルを殺した、カインである。

誇りを持って義務を果たす人は、愛のために死んだ、カインのために死んだ、アベルである。

愛のために苦しむ事と、愛のために死ぬ事が、思いやりによる、「大いなるアベル」と言えるイエス キリストの務めであった。

権利のためではなく、義務のために、人は、全て大胆に行うべきである。

義務とは、自由の拡大であり、自由を楽しむ事である。

自分のためだけに、孤立して権利を主張する人は、奴隷の父として、自身を肉欲などの奴隷にしてしまう。

義務とは、献身である。

権利とは、利己心である。

義務とは、自身をささげる事である。

権利とは、盗みであり、強奪である。

義務とは、愛である。

権利とは、嫌がる事である。

義務は、無限の命に成る。

権利は、永遠の死に成る。

権利を勝ち取るために戦う必要が有る場合とは、義務を行う権利を勝ち取る場合だけである。

神から人への愛に報いるため、神を愛して身をささげる権利以外の、どの権利を人は自由のために所有しているというのか？

悪法といった法律を破る必要が有る場合とは、悪法が愛を恐怖によって制限する場合である。

マタイによる福音 16 章 25 節には、「自分の命を救おうとする人は自分の命を失い、イエスのためにイエスに従って自分の命を失う人は(魂の永遠の)命を得る」と記されている。

義務とは、愛である。

愛を妨げる者は全て滅びなさい！

愛する事を嫌がって偽の啓示をする者は黙りなさい！

利己心と臆病によって、ねつ造された偽の神々に滅びを！

肉欲の奴隷よ、愛を出し惜しむ人よ、恥を知りなさい！

神は、愛を惜しまない神の子達を愛する！　神は、ルカによる福音 15 章 11 節から 32 節の様に、労苦した「放蕩息子」達を愛する！

第1部 第1条 数5

5つ1組

数5は、宗教の数である。

なぜなら、数5は、(三位一体である)神の数3を、女性(である教会)の数2に結びつけた数である。

信心は、無知による臆病による狂愚な軽信ではない。

信心は、愛である神の存在の確信と認識である。

信心は、未知なものでも、非論理的なものには否定を貫く、理性の叫びである。

呼吸が命には必要である、のと正に同様に、信心は魂に必要な感情である。

信心は、勇気による気高さである。

信心は、神がかりの本質である。

信心は、あれこれの信条の肯定から成り立っておらず、諸象徴がヴェールに隠している真理への絶え間無い真の向上である。

もし、ある人が、神に相応しくない妄想を否定し、神への誤った妄想を打ち破り、憎むべき誤った偶像崇拝者どもに対し嫌悪を感じて反対したら、無知な大衆によって不信心者と呼ばれるであろう!

堕落したローマで初期キリスト教徒を迫害した人々は、初期キリスト教徒を(ローマ皇帝を神として崇拝しない、主神ユピテルといったローマの多神教の神々を崇拝しない、)不信心者と呼んだ。

なぜなら、初期キリスト教徒は、ローマ皇帝カリギュラやローマ皇帝ネロを神格化した偶像を敬礼しなかった。

良心が拒絶する教義に固執せず、一宗教を否定する事や、全宗教を誤って否定する事すら、信心による勇気ある崇高な行いである。

自分の確信のために苦しむ人は、全て、信心の殉教者である。

信心の殉教者は、自身について下手な説明をしてしまうかもしれないが、何よりも正義と真理を好む。

信心の殉教者を理解せずに非難するなかれ。

「無上の真理を信じる」という事は、無上の真理を定義する事ではない。

無上の真理を信じていると話す事は、無上の真理は知る事ができない対象であると認める事である。

ヘブライ人への手紙 11 章 6 節で、使徒パウロ(という説が有る「ヘブライ人への手紙」の著者)は、「神の存在を信じる事と、神は神を求める人に報いてくれると信じる事」が、全ての信心を含んでいる(、信心の総合である)と話している。

全宗教よりも、信心は大いなる物である。

なぜなら、宗教よりも正確さは欠くが、信心は、全ての信仰箇条(に相当する物)を話す事ができる。

各宗派独自の、どの教義も、一宗派のみへの信仰を定め、一宗派独自の物である。

信心は、全ての人に共通する感情である。

人は、より正確さを獲得する目的で、話し合いを増やすと、自分の信心を減らしてしまう。

新興宗派の教義は、全て、一宗派が私物化している、一宗派のみへの信仰である。

そのため、新興宗派の教義は、全て、ある程度、普遍の共通の信心を盗んでいる事に成る。

宗派心の強い人が盗作したり改悪したりして宗派独自の教義をねつ造するのを放って置きなさい。

迷信家が迷信を並べ立てたり、ねつ造するのを放って置きなさい。

マタイによる福音8章22節で、主イエスが「死んだ者の埋葬は死んだ者に任せなさい！」と話している様に。

言葉では言い表せない真理を信じよう。

人の理性が理解する事はできないが、人の理性が認識した絶対である神を信じよう。

人が知る事はできないが、人の心の琴線に触れるものを信じよう！

無上の論理である神を信じよう！

無限の愛である神を信じよう！

スコラ哲学による愚行と、偽の宗教による残忍な行いを残念に思おう！

人よ！　あなたが望むものを明らかにしなさい。

そうすれば、あなたに相応しい事を教えよう。

祈りなさい、断食しなさい、徹夜しなさい。

そう、あなただけが、または、ほぼ、あなただけが、良い意味で嫉妬深い神が滅ぼす悪人に対する甚大な破滅から免れられるとでも信じているのか？

あなたは、不信心であり、見せかけだけの偽善者である、ではないか。

あなたは、生活を乱れた物に変えて、人事不省に陥って人生を無為に過ごしたいのか？

乱れた生活をし、人事不省に陥り、人生を無為に過ごす人は、病気であり、狂愚である。

(正しい)他人のために苦しむ覚悟が有るか？

全ての(正しい)人が救われる事を望むか？

正しい他人のために苦しむ覚悟が有り、全ての正しい人が救われる事を望む人は、賢者であり、義人である。

望む事は、恐れない事である。

神を誤って恐れるとは、何という神への冒涜か！

希望による行為は、祈りである。

祈る事は、永遠の知と思いやりによって、魂を開花させる事に成る。

祈りは、真理を向いて向上する精神による凝視である。

祈りは、無上の美に対して恋い焦がれる、心からの溜め息である。

祈りは、母に対する幼子の微笑である。

祈りは、恋人である彼女と接吻するための、恋人である彼氏からのささやきである。

祈りは、愛している魂の、愛の大海に広がる様な、穏やかな喜びである。

祈りは、花嫁による花婿の不在への悲しみである。

祈りは、祖国を想う旅人の溜め息である。

祈りは、妻と子を養うために働く貧者の思いやりである。

沈黙して祈ろう。

確信と愛の心の目で、未知の、人の父である神を見よう。

信じ、あきらめて、人生という労苦において神が各人に割り当てた務めを引き受けよう！

そうすれば、胸の鼓動は、祈りの言葉と成るであろう！

(人生における心胸の動きは、祈りに変換されるであろう！)

人が神に求めるものについて、人は神に知らせる必要があったか？　いいえ！マタイによる福音６章８節でイエスは「神は人が求める前から人に必要なものを知っている」と話している！

神は人に必要なものを知らないであろうか？　いいえ！　マタイによる福音 6 章 8 節でイエスは「神は人が求める前から人に必要なものを知っている」と話している！

涙を流して悲しんでいる時は、涙を神にささげよう。

喜んでいる時は、神に笑顔を向けよう。

神に打たれている時は、頭を下げて謙虚に成ろう。

神が優しくしてくれている時は、神の腕の中で眠ろう！

誰の事を祈っているのか知らずに祈っている時、人の祈りは完全に成るであろう。

祈りとは、耳につく騒音ではない。

祈りとは、心を貫く沈黙、心に浸透する沈黙である。

気持ちの良い涙が瞳を潤す。

溜め息が香の煙の様に口から漏れる。

美、真理、正義である全てのものへの愛によって、心で、人は自身に触れる。

人は、新しい命、魂の永遠の命に感動して、もう(肉体が)死ぬ事を恐れない。

なぜなら、祈る事が、知性と思いやりによる永遠の生き方である。

祈る事が、地上での神(と言える正しい人)の生き方である。

ヨハネによる福音 15 章 12 節から 17 節の「互いに愛し合いなさい！」というイエスの言葉は、法である。

預言者よ！　「互いに愛し合いなさい！」というイエスの言葉を熟考し理解しなさい。

「互いに愛し合いなさい！」というイエスの言葉を理解したら、最早、読み取って学ぶだけに留まっているなかれ！

探しに隣人から離れて行くなかれ！

存在を疑わずに信じなさい！

愛しなさい！

最早、慎重過ぎるなかれ！

習うだけに留まっているなかれ！

愛しなさい！

「互いに愛し合いなさい！」というイエスの言葉は、真の宗教の教義の全てである。

宗教とは、思いやりである。

神とは、愛でしかない。

「大いなる神秘の鍵 第１部 第１条 数 4」で、すでに話した様に、愛するとは、(自身を他者に)ささげる事である。

不信心者とは、他人から吸い取って搾取する人である。

信心深い者とは、思いやる事に専念する人である。

神は命を熱意によって人の心に与えるが、もし人が熱意を自身のためにだけ専念させてしまったら、人の心は、全てのものを滅ぼして灰だけに満たされた地獄に成ってしまう。

神は命を熱意によって人の心に与える。

もし人が熱意を自分以外の他者へ広げたら、熱意は、思いやりという穏やかな太陽に成る。

人は、家族から慈愛による恩恵を受けている。

家族は、祖国から慈愛による恩恵を受けている。

祖国は、国民一人一人から慈愛による恩恵を受けている。

人の利己主義は、孤立と失望に値する。

家族の利己主義は、自壊と国外追放に値する。

祖国の利己主義は、敵との争いと、敵からの内政への侵害に値する。

「私は神の役に立っていると思う」と言って、全ての隣人を思いやる事から離れて怠惰に孤立している人は、自分をだましている事に成ってしまう。

なぜなら、ヨハネの第1の手紙4章20節で、使徒ヨハネは「目に見える隣人(、神の子の兄弟、正しい人)を愛せない人が、なぜ目に見えない神を愛せると言えるのか？　いいえ！　目に見える隣人(、神の子の兄弟、正しい人)を愛せない人は、目に見えない神を愛せない！」と話している。

人は、神の物は神に返す必要が有る。

ただし、人は、カエサルの物はカエサルに与える事を拒むなかれ。

(マタイによる福音22章21節「カエサルの物はカエサルに、神の物は神に」)

神は、(永遠の魂の)命を与える者である。

カエサルといった、人が動物的人間として与える事ができるのは(心の)死だけである。

人は、神を愛する必要が有る。

人は、カエサルといった、権力者を恐れるなかれ。

なぜなら、マタイによる福音26章52節に「(手段として暴力である)剣を取る人は剣によって滅びる」と記されている。

善良な思いやり深い人に成りたいと望むのか？

善良な思いやり深い人に成りたいのなら、正しくありなさい。

正しくありたいと望むのか？

正しくありたいなら、(神の知によって肉欲などから)自由でありなさい。

人を動物的人間にしてしまう悪徳は、自由の第一の敵である。

酩酊者を見てみなさい！

酩酊者の様な汚らわしい動物的人間が(肉欲などから)自由であると言えるかどうか言ってみなさい！　酩酊者の様な汚らわしい動物的人間が肉欲などから自由であるとは言えない！

死(体)を求める飢えたカラスの様に、金銭などに貪欲な人は、父が死ぬ様に呪う。

野心家の行き着く先は、破滅である。

野心家の行き着く先は、嫉妬による精神錯乱である！

放蕩者は、母の心胸に唾を吐き、死の内臓を中絶で満たす。

愛せない心は、憎悪という最も残酷な苦しみによって、こらしめられる。

なぜなら、(「こらしめられ方、罰され方は、罪に対応している」、)「罪のつぐなわされ方は、罪に潜在している」。

心に受け止めておきなさい！

悪事を行う人は、出来の悪い「陶器の器」、出来の悪い「土の器」に例えられる。

(

詩編 2 章 9 節とヨハネの黙示録 2 章 27 節「陶器の器」、「土の器」

人は「土」や「器」に例えられる。

)

悪事を行う人は、自滅させられる。

(ヨハネの黙示録 2 章 23 節「私イエスは行いに応じて報いる」)

運命は、悪事を行う人の自滅を望む。

不可避の必然は、悪事を行う人の自滅を望む。

諸天体の破片で、神は(新しい)星々を作っている。

魂の破片で、神は神の聖霊である天使を作っている。

第１部 第１条 数６

６つ１組

数６は、試練による入門の数である。

数６は、つり合いの数である。

数６の形である、六芒星は、善悪の知の象徴である。

悪の起源を探求する人は、存在しない物の起源を探求する事に成る。

(

この世以外で仮想敵として以外で悪は存在しない。

この世で、神は、存在しない悪が存在するかの様にさせている。

)

悪とは、元は善い物であった欲望が混乱している物である。

悪とは、未熟な意思による実りの無い試みである。

人は、全て、自分の行為の結果を身につける事に成る。

貧しさだけが、人を労苦へと駆り立てる。

人という羊の群れにとって、(良心の呵責による心の痛みや、不節制による肉体の不調による痛みといった、)痛みは牧羊犬に似ている。

(良心の呵責による心の痛みや、不節制による肉体の不調による痛みといった、)痛みという牧羊犬は、人という羊を正しい道へ戻すために、人という羊の羊毛に噛みつく。

影のおかげで、人は光を見る事ができる。

冷たさのおかげで、人は暖かさを感じる事ができる。

痛みのおかげで、人は好ましい事が分かる。

そのため、(本当は、)悪とは、人にとって、善への機会であり、善へのきっかけである。

しかし、人の不完全な知性による夢想によって、人は、神意を理解できず、「人を正しい道へ戻すために、良心の呵責による心の痛みや、不節制による肉体の不調による痛みを人に与える」という神意の作法を非難する。

人は、他者が人の絵の断片として頭部の絵から描き始めると、「何で人の絵に頭部だけで体が無いの!?」と言って決めつけて判断してしまう愚者に似ている。

しかし、自然は静かに自分の務めを果たす。

土を耕す鋤(すき)は、土の胸中を引き裂く時、残酷ではない。

そのため、世界の大変革は、神による、人という土の耕作である。

(

創世記2章7節「神は人を土の塵から創造した」

エリファス レヴィの「魔術の歴史」「ヘブライ語でアダムは赤い土を意味する」

アダムは人の代表。

)

全てのものには、定位置が存在する。

未開の民族には、未開の主が。

家畜の様な人には、屠殺人が。

人には、裁判官と保護者が。

仮に、時間が羊をライオンに変える事ができたら、羊はライオンに変わって屠殺人や羊飼いを食ってしまうであろう。

動物の羊は、ライオンなどに変わる事は決して無い。

なぜなら、動物の羊は、自分を教育しない。

しかし、人は、自分を教育する。

大衆という羊の群れの、羊飼いや屠殺人である権力者が、大衆という羊の群れに話しかける人を敵と見なすのは当然である(、と言えるかもしれない)。

大衆という羊の群れは、過去の権力者という羊飼いの事を未だ覚えている。

また、大衆という羊の群れは、羊飼いと屠殺人の取引、権力者同士の取引を知らないままでいたい。

各人の権利について大衆へ話して、大衆に恥をかかせたり、大衆の心をかき乱したりする人を大衆が石を投げて殺すのは無理も無い(、かもしれない)。

おおっ！　イエス キリストよ！

権力者は、イエス キリストを迫害した。

弟子は、イエス キリストを否定してしまった事が有った。

ユダヤ教徒の大衆は、イエス キリストを呪い、イエス キリストの殺害を要求した。

聖母マリアだけが、イエス キリストのために、涙を流して悲しんだ。

神さえ、(一時的に、予定通り、イエス キリストに知らせていた通り、)イエス キリストを敵に引き渡した！

詩編 22 章 1 節とマタイによる福音 27 章 46 節「エリ！　エリ！　レマ、サバクタニ！」、「神よ！　神よ！　どうして私を見捨てたのですか？！」

第1部 第1条 数7

7つ1組

数7は、聖書にあらわれる大いなる数である。

数7は、創世記といったモーセの書において、創世の鍵に成っている。

数7は、全ての宗教の象徴である。

モーセは、「モーセ五書」を書き残した。

「旧約聖書」と「新約聖書」という2種類の「聖書」によって、「モーセ五書」、「律法」、「トーラー」は完成している。

(「モーセ五書」の数5と「旧約聖書」と「新約聖書」という2種類の「聖書」の数2を足すと、数7である。)

聖書は、歴史書ではない。

聖書は、詩を集めた物である。

聖書は、諸々の例え話と象徴の書である。

創世記の、アダムとエヴァは、人性の原型に過ぎない。

創世記の、誘惑する蛇は、人を試す、「時」である。

創世記の、善悪の知の木は、「権利」である。

創世記3章の、労苦による罪のつぐないは、「義務」である。

創世記の、カインとアベルは、肉と霊、力と知、破壊と調和を表す。

創世記6章の巨人は、(肉欲によって、)地を暴力で奪い合う古代の権力者どもを表す。

創世記7章の、大洪水は、大変革を表す。

モーセの、契約の箱は、ヘブライ人が保存している口伝である。

　前記の時代、(後にキリスト教として表れる真の神の教えである)宗教は、ヘブライ人所有の神秘、ヘブライ人の所有物に成る。

　ハムはヘブライ人所有の宗教をヘブライ人以外に口外したため、創世記 9 章 25 節でノアはハムの子カナンを呪った。

　創世記 10 章のニムロデと創世記 11 章のバベルの塔は、人の夢想に常に満ちあふれている、独裁と世界帝国という 2 つの原初の象徴である。

　アッシリア人、メディア人、ペルシャ人、アレクサンダー、ローマ帝国、ナポレオン、初代ロシア皇帝ピョートル 1 世の後継者であるロシア皇帝たちは、次々と、独裁と世界帝国という夢想の実現を求め、常に、利害による分裂によって実現できなかった。

　創世記 11 章の「言葉の混乱」は、利害による分裂の例えである。

　(人は利害が衝突する相手の言葉には聞く耳を持たない。)

　知と思いやり無しでは、暴力では、世界帝国を実現できなかった。

　創世記 10 章のニムロデは、未開の、「権利」を象徴する人である。

　ニムロデとは正反対で、創世記のアブラハムは、義務を象徴する人である。

　創世記 12 章で、アブラハムは、自由意思で、自由を求め、カルデアの都市国家ウルを出て旅をし、未知の地カナンで戦った。

　アブラハムは、アブラハムの「知」の力によって、「神」の力によって、未知の地カナンを所有した。

　アブラハムの不妊の妻サラは、アブラハムの考え、知を表す。

　アブラハムの多産の奴隷ハガルは、アブラハムの力を表す。

　ただし、力が結果をもたらすと、考え、知は多産に成る。

　ハガルが子イシュマエルをもたらすと、サラは多産に成った。

　知である息子によって、力の子は追放される事に成る。

イサクによって、イシュマエルは追放される事に成る。

知の人は、荒っぽい試練を甘んじて受ける。

知の人アブラハムは、荒っぽい試練を甘んじて受ける。

知の人は、自己犠牲によって、克己を確認する必要が有る。

知の人アブラハムは、自己犠牲、独り子イサクを神にささげる事によって、克己を確認する必要が有る。

神は、知の子(、知の結果である行い)を神にささげる様に知へ命令する。

創世記22章で、神は、アブラハムの息子イサクを神にささげる様にアブラハムへ命令する。

言い換えると、疑心は、考え、知を試す必要が有る。

神は、アブラハムの考え、知を試す必要が有った。

知の人は全てのものを無上の論理である神の祭壇の上にささげる覚悟が有るべきである。

知の人アブラハムは全てのものを無上の論理である神の祭壇の上にささげる覚悟が有るべきである。

アブラハムがイサクを誤って生贄にしようとすると、神は、干渉して生贄を止める。

普遍の論理は、労苦の結果を許して、普遍の論理を知に知らせる。

普遍の論理である神は、アブラハムの労苦の結果を許して、普遍の論理を知の象徴であるアブラハムに知らせる。

考え、知の物質的な面だけが、ささげられる。

創世記22章13節で、アブラハムによって、「やぶに角が引っかかっている羊」が、ささげられた。

創世記22章13節の「やぶに角が引っかかっている羊」、「面をやぶに向けている羊」は、「知の物質的な面」を意味する。

そのため、創世記のアブラハムの話は、古代の作法による、例え話である。

創世記のアブラハムの話は、人の魂の運命の高尚な啓示を含んでいる。

文字通りに受け取ると、創世記のアブラハムの話は、非論理的で反感を抱かせる話である、と誤解されてしまう。

アウグスティヌスは、アプレイウスの「黄金のロバ」という話を文字通りに受け取らなかったか？

あわれな偉人達！　あわれな学者達！

イサクの話は、もう一つの口伝である。

イサクの妻リベカは、オリエントの女性の典型であり、勤労的であり、親切にもてなし、子のうち弟ヤコブをひいきし、子ヤコブのために夫イサクをだます策を考える抜け目の無さが有った。

ヤコブはアベルを象徴する。

ヤコブの兄エサウはカインを象徴する。

ただし、ヤコブはアベルとして、カインであるエサウに報復して、父イサクからの祝福を横取りした。

自由に成った知は、機知によって勝利する。

ヤコブは、機知によってエサウに勝利する。

ヤコブの気質に、ヘブライ人の精神の全てが存在する。

忍耐強く勤労的な「押しのけた者」、「取って代わった者」、「ヤコブ」は、エサウの怒りに自ら従おうとして、富者に成り、兄エサウからの許しを手に入れた。

「古代人は、哲学的に考える時は常に、例え話を作る」事を忘れるなかれ。

ヨセフの史実、または、ヨセフの伝説は、福音の精神の全てを芽生えとして含んでいる。

イエス キリストは、兄弟に誤解された時は度々(たびたび)、創世記45章の「エジプトの統治者であるヨセフは、『私はヨセフだ!』と大声で叫んで正体を明かしてから、ベニヤミンの首にすがりついた」という話を読み返して涙を流して悲しんでいたに違いない。

イスラエルは、神の民族に成った。

言い換えると、イスラエルは、知という財産の管理人に成った。

イスラエルは、神の言葉の保管者に成った。

イスラエルの知とは、労苦による、人の自立のための知であり、王者のための知である。

イスラエルは、貴重な種の様に、イスラエルの知を用心して隠した。

イスラエルの秘伝伝授者は、難しい忘れられない象徴を記憶に焼きつけた。

イスラエルでは、真理の、全ての偶像が禁じられた。

イスラエルであるヤコブの子孫は、聖所がまとまっている周囲を剣を手に監視した。

創世記34章で、ハモルとシェケムは、神聖な家族であるヘブライ人の中に力ずくで不法に入り込もうとして、ヤコブの子達に割礼という心にも無い入門の儀式を受けさせられた後で滅ぼされた。

大衆を統治するには、聖所を自己犠牲と恐怖で囲む必要が十分に有る。

イスラエルであるヤコブの子孫が奴隷にされる事は、イスラエルへの救いを用意する事に成る。

なぜなら、イスラエルには、唯一の神、唯一の知が有る。

そして、人は、神(という概念)を束縛できないし、知(という概念)を束縛できない。

イスラエルには、唯一の神の教えが有る。

そして、人は、宗教(という概念)を侵害できない。

結局、イスラエルは、唯一の民族である。

そのため、人は、民族の実質性を束縛できない。

迫害は、イスラエルの復讐者を目覚めさせる事に成る。

神、知は、人に成った。

神の知は、イエスという人に成った。

モーセが現れて、悪いファラオは失墜した。

出エジプト記 13 章 20 節から 22 節で、(昼は)雲の柱が、(夜は)火の柱が、解放された民族ヘブライ人の前に先立って、荒れ野へ雄大に進んだ。

イエス キリストは、知と思いやりによる、(大)祭司であり、王である。

イエスは、霊、信心、徳の油による「油を注がれた者」、「キリスト」である。

霊、信心、徳の油とは、力である。

イエスは、聖職者が退廃した時に、もはや古代の象徴に力が無く成った時に、知による光明が消えた時に、降臨した。

イエスは、イスラエルを命に呼び戻して復活させるために、降臨した。

もしファリサイ派が命を奪ったイスラエルを刺激して復活させる事ができなくても、イエスは、死んでいる偶像崇拝にふけっている世界中の人々を復活させるつもりであった。

イエス キリストは、(他)人の義務を果たす権利である。

人には、イエスへの義務を果たす権利以外の権利は無い。

おおっ！　人よ！

人には、完全に死に至るまで、自分の義務を果たす事を妨げる全ての者に対して抵抗する権利が有る。

母よ！

子が溺れている時、母が、子を助けるのを妨(さまた)げる人をなぐり、子を助けに走ったとして、誰が母をあえて非難するであろうか？　母は子を助けるのを妨(さまた)げる人をなぐって善い！

イエス キリストは、義務を果たす権利を、権利を主張する義務に対立させた。

「権利」は、ヘブライ人にとって、ファリサイ派の教えであった。

実に、ファリサイ派は、教えとして主張する特権を得ていた様に思われる。

ファリサイ派は、ユダヤ教の正統な継承者ではないか？

ファリサイ派には、救い主イエスを迫害する権力が有った。

救い主イエスは、人に成った神イエスの義務がファリサイ派に反対する事であると知っていた。

イエス キリストとは、抗議の精神である。

イエスの抗議の精神とは、何に対する抗議なのか？

知に対する肉欲の抗議か？　いいえ！

義務に対する権利の抗議か？　いいえ！

倫理道徳に対する科学の抗議か？　いいえ！

精神に対する肉体の抗議か？　いいえ！

普遍の論理に対する妄想の抗議か？　いいえ！

知に対する狂愚の抗議か？　いいえ！

千回でも何回でも、いいえ！　さらに、いいえ！

イエス キリストは、妄想に対する永遠の抗議である現実であり、権利に対する永遠の抗議である義務である。

イエスは、肉欲による奴隷状態を打ち破る、精神の解放である。

イエスは、利己主義に抗議する、献身である。

イエスは、マタイによる福音４章の様に「私は、お前に従うつもりは無い！」と傲慢の精神に対して答える、気高い謙遜である。

イエス キリストは、未婚の独身であった。

イエス キリストは、孤独であった。

イエス キリストは、悲しんだ。

なぜなのか？

なぜなら、人の女性は、金銭で性的に身体を売っている。

社会は、(搾取によって、)盗む罪を犯している。

自分のためだけに自分だけが喜ぶ事は、不信心である。

イエス キリストは裁かれて死罪に定められ、迫害され、十字架刑で処刑されて殺害されたが、大衆はイエスを敬礼している！

この世でイエスが身代わりに成って苦しみ無実の罪で殺害された事件が起きたのは、恐らく、個々の人自身と同じくらい、重要である。

人が生きている、この世の裁判官たちよ、気をつけなさい！

人の裁きを裁くつもりである人に成った神イエスについて考えなさい！

(

マタイによる福音 7 章 1 節から 2 節「他人を裁くなかれ。自分が裁かれないためにである。他人を裁く裁きで自分も裁かれるであろう」
ヨハネによる福音 5 章 30 節「私イエスは聞いた通りに裁くだけである。私イエスの裁きは正しい」

)

救い主イエスは、死ぬ前に、救いの手段である不死の象徴である聖体のパンと赤ワインをイエスの子孫であるキリスト教徒達に残した。

聖体！　全員一致の統一体！　この世の救い主イエスの究極の言葉！

要約すると、ヨハネによる福音 6 章で、イエスは「(思いやりから)全員で分かち合った、パンと赤ワインは、私イエスの血肉である(思いやりの象徴である)」と話している。

イエスは、肉を死刑執行人に与え、血を地に吸わせた。

なぜなのか？

全ての人が、知という聖体のパンと、思いやりという聖体の赤ワインをいただく事ができる様にするためである。

おおっ！　人の統一体の象徴であるイエスよ！

おおっ！　普遍の騎士団の円卓であるイエスよ！

おおっ！　兄弟愛と平等の宴であるイエスよ！　友愛と平等の宴であるイエスよ！

イエスが、より良く理解されるのは、いつであろうか？

思いやりによる殉教者達よ。

全ての人が、(知という魂の)糧と成る聖体のパンと、(思いやりという心を)強める聖体の赤ワインを保持できる様にするため、命をささげた全ての殉教者達よ。

全ての殉教者達は、普遍の聖体のパンと赤ワインという象徴に手を置いて、「聖体のパンと赤ワインは、私、殉教者の血肉である」と話していなかったか？　全ての殉教者達は、普遍の聖体のパンと赤ワインという象徴に手を置いて、「聖体のパンと赤ワインは、私、殉教者の血肉である」と話していた！

主イエスが兄弟、同胞と呼んだ、全世界の人々よ。

「普遍のパン、兄弟愛からのパン、友愛からのパン、聖体のパンは、神である」と心に感じないか？

十字架にはりつけにされて殺害された人に成った神イエスによって金銭を稼ぐ商売人と成ってしまっている邪悪な聖職者どもよ！

血肉と命を(他)人にささげる覚悟が無い邪悪な聖職者どもは、全て、神の子イエスの聖体のパンと赤ワインを受ける価値が無い！

(邪悪な聖職者どもは、魂の永遠の命を受け取れずに、魂まで滅びなさい！)

邪悪な聖職者どもは、イエスの血を自分に注ぐなかれ！

なぜなら、イエスの血は、罪人の焼き印を邪悪な聖職者どもの額(ひたい)に押すであろう！

邪悪な聖職者どもは、唇を神の胸に近づけるなかれ!

神は、邪悪な聖職者どもの心や言葉の棘(とげ)を感じ取る事ができる!

邪悪な聖職者どもは、(思いやりという)イエス キリストの血の象徴である赤ワインを飲むなかれ。

イエスの血の象徴である赤ワインは、邪悪な聖職者どもの内臓、心の内奥を焼くであろう。

邪悪な聖職者どものために無駄にイエスの血が流されるのは、もう十分である!

第1部 第1条 数8

数8

数8は、反作用の数である。

数8は、つり合わせる正義の数である。

全ての作用は、反作用をもたらす。

作用が反作用をもたらすのは、世界の普遍の法である。

キリスト教は、反キリスト教を必ず引き起こす。

反キリストとは、イエス キリストの影、引き立て役、証明である。

使徒の時代に、教会に、反キリストは、すでに生じていた。

テサロニケの信徒への第2の手紙2章6節から8節で、使徒パウロは、「なぜなら、不法の秘密の力は、すでに働いている。ただし、今、(不法の秘密の力を)阻止している者が取り除かれるまでで、取り除かれると、不法の者が現れる。……」と話している。

プロテスタントは、「反キリストとは、カトリックの法王である」と話した。

法王は、「異端者は、全て、反キリストである」と応(こた)えた。

反キリストとは法王ではない、のと同じくらい、反キリストとはプロテスタントのルターではない。

反キリストとは、キリストの精神とは正反対の精神である。

反キリストの精神とは、自分の権利のための、他人の権利の侵害である。

反キリストの精神とは、優勢による傲慢である。

反キリストの精神とは、思考への圧政である。

反キリストの精神とは、悪いカトリック教徒の軽信な傲慢な愚かさである、だけではなく、プロテスタントの利己心であり、プロテスタントが自認している教えである。

反キリストとは、人々を結びつける代わりに、人々を分裂させるものである。

反キリストの精神とは、言い争いの精神である。

反キリストの精神とは、神学者や党派心の強い人の頑固さである。

反キリストの精神とは、他人を真理から排斥して真理を私物化する不信心な欲望であり、世界の全ての人を人による裁きによる心が狭い圧政に力ずくで従わせようとする不信心な欲望である。

反キリストとは、祝福する代わりに、呪う聖職者である。

反キリストとは、心を引き寄せる代わりに、心を遠ざけさせる聖職者である。

反キリストとは、教訓的である代わりに、嫌悪させる聖職者である。

反キリストとは、救う代わりに、地獄へ落とす聖職者である。

反キリストの精神とは、善意を失わせる、憎むべき狂信である。

反キリストの精神とは、死、悲しみ、醜さの尊重や賛美である。

多数の愚かな親が「どの仕事を息子のために選ぼうか？」と話している。

「息子は、精神的にも肉体的にも弱いし、少しも勇気が無い。

息子を聖職者にして『祭壇で生計を立てる』事ができる様にさせよう」

多数の愚かな親は、「祭壇は、怠惰な動物的人間のための飼葉桶ではない」という事を理解していない。

祭壇の偽の下僕である、祭司に相応しくない聖職者どもを見てみなさい！

過度に肥満の、または、死んだ人の様に青白い痩せた、祭司に相応しくない聖職者どもは、澄んでいない輝きの無い目で、歪んだ口で、または、呆然と大口を開けて、あなたの心に何を訴えかけると言うのか？

祭司に相応しくない聖職者どもが、話すのが聞こえる。

祭司に相応しくない聖職者どもの、不快な単調な雑音が、何をあなたに教える所が有ると言うのか？

祭司に相応しくない聖職者どもは、眠る様に、祈る(ふりをする)。

祭司に相応しくない聖職者どもは、むさぼる様に、供え物をささげる。

祭司に相応しくない聖職者どもは、パン、肉、赤ワイン、無意味な言葉に満ちた、機械的に対応するだけの人間である。

人は、考えも思いやりも無く太陽の中の真珠貝の様に派手に着飾っている祭司に相応しくない聖職者どもには、魂の平和が有ると言う！　祭司に相応しくない聖職者どもに、魂の平和が有る訳が無い！

祭司に相応しくない聖職者どもには、動物的人間の平和が有るのである。

人にとっては、動物的人間の平和よりも、墓の中の平和の方がより良いであろう。

祭司に相応しくない聖職者どもは、愚かさに従う聖職者である。

祭司に相応しくない聖職者どもは、反キリストに従う聖職者である。

イエス キリストの真の祭司は、魂が生きている人、労苦を忍耐する人、思いやる人、正義のために戦う人である。

真の祭司は、言い争いをしない。

真の祭司は、迫害しない。

真の祭司からは、許し、知、思いやりが出て来る。

真のキリスト教徒は、党派心を知らない人である。

真のキリスト教徒は、全ての人のために、全てのものに成る。

真のキリスト教徒は、全ての人を、全ての人を救うつもりである唯一の共通の父である神の子の様に見る。

真のキリスト教徒にとって、キリスト教の全部が、甘美な思いやり深い意味だけを持っている。

真のキリスト教徒は、(厳しい)正義の神秘を神に任せて、思いやりだけを理解する。

真のキリスト教徒は、悪人を、同情と治療が必要な病人と見なす。

真のキリスト教徒にとって、過誤と悪徳に満ちた世界は神の病院であり、真のキリスト教徒は、世界という神の病院で神の役に立つ事を望む。

真のキリスト教徒は、「自分は、他者より優れている」と思考したりしない。

真のキリスト教徒は、「健康状態が良好である限り、私が他者の役に立てます様に。また、私が倒れて死ななければいけない時は、よろしければ、他人が私の代わりに成ってくれて役に立ってくれます様に」と話すだけである。

第1部 第1条 数9

数9

数9のタロットには、隠者が描かれている。

数9は、秘伝伝授者と予言者に関係する数である。

予言者は、孤独である。

なぜなら、大衆が予言者の言葉に常に耳を傾けないのは、予言者の宿命である。

予言者は、他人とは違ったものの見方をする。

予言者は、不運を予知する。

そのため、大衆は、予言者を、伝染病患者であるかの様に、投獄し、殺すか笑いものにし、追放し、餓死するまで放置する。

そして、予言が実現すると、大衆は、「不運をもたらしたのは、予言者である」と言いがかりをつける。

さて、いつもの事だが、大いなる災いの直前には、通りは予言者で満ちあふれる。

エリファス レヴィは、牢獄の中で何人かの予言者に出会った事が有る。

また、エリファス レヴィは、屋根裏部屋で大衆から忘れ去られて死んでいる予言者達を見た事も有る。

大都市の全ての大衆が、ぼろぼろの衣で体を覆い贅と富を尽くした宮殿で絶え間無く回転する沈黙の予言者を見た事が有る。

マタイによる福音17章2節で太陽の様に輝いたイエス キリストの顔の様に、顔が太陽の様に輝く予言者をエリファス レヴィは見た事が有る。

顔が太陽の様に輝く予言者は、手の皮膚に「たこ」が有り、仕事着を着ていた。

顔が太陽の様に輝く予言者は、泥をこねて大作を作った。

　顔が太陽の様に輝く予言者は、権利の剣と義務の王笏を絡(から)み合わせた物を作った。

　顔が太陽の様に輝く予言者は、思いやりの創造的な象徴を、黄金と鉄を絡(から)み合わせた柱、権利の剣と義務の王笏を絡(から)み合わせた柱の上に置いた。

　ある日、人気の有る大いなる集会で、顔が太陽の様に輝く予言者は、道を下りながら、「神のパンよ、全ての人のためのパンに成りなさい！」と話して、手でパンを裂いて一欠片ずつ分けた。

　エリファス レヴィが知っている予言者は、「私は最早、悪魔の神を敬礼するつもりは無い！　私は私の神のために絞首刑執行人を持ちたくない！」と叫んだ。

　エリファス レヴィが知っている予言者は、神を冒涜していると大衆に思われていた。

　しかし、エリファス レヴィが知っている予言者は、神を冒涜していなかった。

　エリファス レヴィが知っている予言者は、ただ、信心の強さが、不正確な無思慮な言葉で、あふれ出ていただけであった。

　後記の様に、さらに、エリファス レヴィが知っている予言者は、思いやりが傷つけられて狂って、話していた。

「全ての人の責任の罪は共通であり、相互の徳をたたえ合う様に、相互の責任の罪をつぐない合う。

罪への罰は死である。

さらに、罪自体が、最も大いなる罰である１つの罰である。

大罪は、大いなる不運にしか成らない。

最悪の人とは、他の悪人よりも、自分が優れていると思い込んでいる人である。

人が肉欲に夢中に成ってしまうのには、原因が有る。

肉欲に夢中に成ってしまう人は、肉欲に無抵抗なのである。

肉欲は、苦しみと成る。

悲しみながら肉欲による罪をつぐなう羽目に成る。

人が自由と呼んでいる物は、神聖な衝動の全能性でしかない。

殉教者達は、『人に従うよりも神に従う方が良い』と話している」

「信心による最良の行為よりも、思いやりによる最も不完全な行為は価値が大きい」

「裁くなかれ。

ほとんど話すなかれ。

思いやりなさい。

そして、行いなさい」

　別の予言者が来て「善行によって悪しき教えに抗議しなさい。ただし、離れるなかれ」と話した。また、後記の様に、話した。

「全ての祭壇を建て直しなさい。

全ての神殿を清めなさい。

神の聖霊の訪れに備えて自分の気持ちを抑えなさい。

各人の祈り方で祈らせなさい。

深く内省しなさい。

ただし、他者を非難するなかれ。

宗教的行為の実践を軽蔑するなかれ。

なぜなら、宗教的行為の実践は、大いなる神聖な思考の表れである。

『共に祈る』とは、同じ信仰、希望、愛で、理解し合い通じ合う事である。

象徴は、単独では大した物ではない。

信心が、象徴を神聖な物にする。

宗教は、最も神聖な最も強い、人と人の結びつきである。

宗教的行為の実践とは、思いやりからの行為の実践である」

　ついに、人々が、知らないものについて言い争ってはいけない、と理解する時、

人々が、多くのものに影響を及ぼす事よりも、多くのものを支配する事よりも、ささやかな思いやりは価値が大きい、と心に感じる時、

創造主である神さえも被造物の中で敬愛する2つの物である、従順の自発性と義務の自由を、全世界の人々が敬愛する時、

世界には、唯一の宗教(である仏教を含むキリスト教)、思いやり深い普遍のキリスト教、真のカトリックしか存在しなく成るであろう。

　最早、環境的な制約や人的な制約によって、真のカトリックは自制しない。

　「サマリアの女」に、救い主イエスは、ヨハネによる福音4章21節で「真に私イエスは、あなた、『サマリアの女』に次の様に話す(ので、信じなさい)。最早エルサレムによってではなく、ゲリジム山によってではなく、(霊と真理によって、)人が神を敬礼する時が来る」と、ヨハネによる福音4章24節で「なぜなら、神は霊である。そのため、神を敬礼する人は、霊と真理によって神を敬礼する必要が有る」と話している。

第 1 部 第 1 条 数 10

カバラの絶対の数

数 10 は、セフィロトの鍵である。

(高等魔術の教理 10 章と、高等魔術の祭儀 10 章を、参照してください。)

第1部 第1条 数11

数11

数11は、(勇気といった)心の力の数である。

数11は、戦いの数である。

数11は、殉教の数である。

理想のために死んだ人は、全て、殉教者である。

なぜなら、理想のために死んだ人の心中では、精神の向上が、動物的人間としての恐怖に勝利していた。

戦いの中で倒れて死んだ人は、全て、殉教者である。

なぜなら、(他者のための)戦いの中で死んだ人は、他者のために死んだのである。

餓死した人は、全て、殉教者である。

なぜなら、餓死した人は、生きるという戦いの中で、打ち倒されて死んだ戦士の様な者である。

(生きるとは、戦いである。)

権利を守るために死んだ人は、義務の犠牲者と同じくらい、献身によって、神聖である。

権力に対する大いなる戦いや革命では、双方で等しく、殉教者達が倒れて死んでいる。

権利は、義務の基礎である。

人の義務とは、人の権利を守る事である。

何が罪と成るのか？

権利の誇張は罪に成る。

殺しと盗みは、社会への否定と成る。

殺しと盗みは、王位を奪って自分勝手に戦う個人による孤立した独裁である。

疑い無く、罪は抑制されるべきである。

社会は自己防衛する必要が有る。

しかし、他者を処罰する権利が有ると過分に主張できるほど、正しい大いなる清らかな人は存在するか？　いいえ！

それゆえ、戦いの中で倒れて死んだ全ての人に、安らかな眠りを！

不法な争いの中で死んだ全ての人にさえ、安らかな眠りを！

なぜなら、戦いや争いの中で死んだ全ての人は、自分の首、自分の命を賭けて亡くなったのである。

戦いや争いの中で死んだ全ての人は既に自分の命を支払っている。

だから、戦いや争いの中で死んだ全ての人に、これ以上、何を求める事ができようか？　いいえ！　できない！

勇気を奮って忠義を尽くして戦った全ての人に、敬意を！

裏切者と臆病者は本当に恥を知りなさい！

ルカによる福音 23 章とマタイによる福音 27 章で、イエス キリストは 2 人の盗人の間で死んで、悔い改めていた方(ほう)の盗人をイエス自身と共に天に連れて行った。

マタイによる福音 11 章 12 節で、イエスは「天の王国は激しい力を受容する。激しい力が天の王国を勝ち取るであろう」と話している。

神は、神の全能の力を、思いやりに与えてくれる。

神は、憎悪に勝利する事を好む。

ただし、ヨハネの黙示録3章16節で、神、人に成った神イエスは、生ぬるい人を口から吐き出す(様に、神の心で出来ている神の王国に受け入れない)、と話している。

人の義務とは、仮に、ほんの一瞬の間だけでも、正しく人生を生きる事である!

一日間だけでも、一時間だけでも、王位に在る事、正しく人生を生きる事は、優れている!

たとえ、仮に、「ダモクレスの剣」の下でも、アッシリアの最後の王サルダナパールの燃やされた宮殿の上でも、正しく人生を生きる事は、優れている!

しかし、正しく人生を生きる事よりも、「私は、マタイによる福音5章3節の『心において貧しい人達』の王である事を望む。私の王座は、イエスが十字架にはりつけにされて人の身代わりに成って人を救ったゴルゴタの丘である事を望む」と話して、俗世の全ての頂点の権力をイエスの足下にも及ばないと見る事は優れている。

他者を救うために死んだ人は、他者を殺す人よりも、強い者である。

孤立した罪も、孤立した罪のつぐないも、存在しない。

(

全てのものは芋づる式に繋がっている。

存在は全てである。

)

(自分の中だけで完結する)個人だけの徳も、無駄に成る献身も、存在しない。

欠点が有る全ての人は、全ての悪の共犯者と成る。

(

欠点が無い人は存在しない。

マタイによる福音19章17節「完全に善い者は神だけである」

)

完全に邪悪ではない人は、全ての善い事に参加できる。

そのため、常に、苦しみは、人道的な、人としての正しい道にかなった、罪のつぐないと成る。

断頭台の上で切り落とされた全ての頭を、殉教者の頭として、たたえても良い。

また、そのため、最も気高く最も神聖な殉教者は、自分自身の良心に問いかけ、受けようとしている罰に相応しい罪を自身に見つけ、自分を討つ用意が出来ている剣を敬って、「正義が行われます様に！」と言う事ができた。

ローマの地下墓所カタコンベの清らかな犠牲者であるキリスト教徒よ！

キリスト教徒に相応しくない似非信者が虐殺したヘブライ人とプロテスタントよ！

ラベイとレ カルムの祭司達よ！

フランス革命時のジャコバン派の「恐怖政治」の犠牲者達よ！

殺されたフランスの王党派達よ！

犠牲に成る順番が来てしまった革命家達よ！

自分の骨をこの世に散らした、大いなる軍の戦士達よ！

処刑された全ての人達よ！

労働者達よ！

闘士達よ！

各種の勇者達よ！

主神ゼウスの雷もワシも恐れなかったプロメテウスの勇気ある子孫達よ！

散った、あなたたちの遺灰に、あらゆる栄光を！

あなたたちの思い出に、安らかな眠りと敬意を！

あなたたちは、(人の)進歩における英雄である！

あなたたちは、人性の殉教者である！

第1部 第1条 数12

数12

数12は、周期の数である。

数12は、循環の数である。

数12は、普遍の信条の数である。

後記は、自由な、魔術的な、カトリックの信条の解釈の、アレクサンドランという形式の詩である。

私は、人の全能の父である神を信じる。

唯一の男性神が、男性神の計画で、万物を創造した。

私は、神の息子イエス、人の頭(かしら)イエスを信じる。

(コリント人への第1の手紙11章3節「全ての男性の頭、かしらはイエス キリストである。女性の頭、かしらは男性である」)

イエスは、神の言葉、無上の存在である神の表れである。

であります。

イエスは、愛である神の、永遠の「神の力」の中の、生きている「(神の)知」である。

神は、光の行為として、(イエスとして、)肉体を纏(まと)って現れた。

(

コリント人への第1の手紙1章24節「キリストは神の力であり神の知である」

ルカによる福音 24 章 5 節「なぜ、あなたは死んだ者の中に生きている者であるイエスを探すのか？」

　)

　イエスという神の降臨は、全ての場所で、全ての時代で、望まれていた。

　イエスは分裂した神ではない。

　(

　イエスは神が神を客観的に把握した神である。

ヨハネによる福音 1 章 神の言葉イエスは神である。

　)

　地の人を(魂の)滅びから解放するために、人の中に、イエスは降臨した。

　イエスは、聖母マリアの中で、女性を清めて神聖な者にした。

　イエスは、甘美な「神の知」が飾った人である。

　人が労苦してから死ぬ様に、労苦してから死ぬためにイエスは生じた。

　無知な人はイエスを迫害し、嫉妬した競合した聖職者はイエスを無実の罪で訴えた。

　イエスは、命を人に与える事ができる様に、十字架にはりつけにされて死んだ。

　導き支えるイエスによる救いを信じる全ての人は、イエスの実例によって、イエスの様に、神の元へ到達できる。

イエスは、揺れる「時」の最初から最後まで常に(地を、人を)統治するために、死から復活して見せた。

イエスは、無知という雲を徐々に無くす、太陽である。

まもなく、より良く知られる様に成り、より強く成る予定である、神イエス キリストの教えは、生きている人と死んだ人を永遠に裁くであろう。

私は、神の究極の「神の聖霊」と、「神の聖霊」の火を信じる。

聖人と預言者の心と精神は、「神の聖霊」の火という霊感を吸い込む。

イエスは、命の息であり、豊かな才能の息である。

イエスは、神と人性から生じた。

(

神が才能を人に与えている。

イエスは、父である神の神性と聖母マリアの人性から生じた。

)

私は、唯一の究極の、神の兄弟愛、友愛、同胞愛を信じる。

私は、善という神の命令を畏敬する正しい人々による、兄弟愛、友愛、同胞愛を信じる。

私は、唯一の務め、唯一の法王、唯一の正義を信じる。

唯一に集中させる結びつきによる、唯一の(男性)神の唯一の徴イエス。

(ルカによる福音 2 章 34 節「幼子イエスは徴に成る」)

私は、「死が、人を変化させて、人を生まれ変わらせる」と信じる。

私は、「神の様に、人において、命は不死のしずくを発散する」と信じる。

第1部 第1条 数13

数13

数13は、死と誕生の数である。

数13は、所有と相続の数(、所有と貸与の数)である。

数13は、社会と家庭の数である。

数13は、戦いと約束の数である。

社会の基礎は、権利と義務と善意の交流である。

権利とは、所有である。

交流は、不可避の必然である。

善意とは、義務である。

(慈愛や物や金銭などを、)与えるよりも多くもらおうとする人や、与えずにもらおうとする人は、盗人である。

所有とは、公共の福祉の自分の分け前を譲渡する権利である。

所有とは、公共の福祉を損失させる権利ではないし、公共の福祉を押収する権利ではない。

公共の福祉の損失や、公共の福祉の押収は、所有ではない。

(悪い権力者による税金の無駄遣い等による、)公共の福祉の損失や、公共の福祉の押収は、盗みである。

エリファス レヴィは、「公共の福祉」という言葉を使用した。

なぜなら、全ての物の真の所有者は神である。

そして、神は、全ての人が全ての物を所有して分かち合う事を望んでいる。

人が何をしても、死んだら、この世の物を何も持って行く事はできない。

あなたから、いつか必ず奪われる物は、実は、あなたの所有物ではない。

あなたから、いつか必ず奪われる物は、神が、あなたに貸している物に過ぎない。

使用権に関して言えば、使用権は、労働の結果として(周囲の人から認められて)生じる物である。

使用権は、耕作の結果として(周囲の人から認められて)生じる物である。

しかし、労働すら、所有を確実に保証する物ではない。

耕作すら、所有を確実に保証する物ではない。

破壊と火を招く、戦争が起きて、所有先を移してしまうかもしれない。

滅びる物を善用しなさい!

おおっ!　滅びる物が全て滅びるより先に、あなたは滅びるであろう!

「利己主義は、利己主義を引き起こす」という事を熟考しなさい。

「(神によって、)不道徳な金持ちは、貧者が(貧しさから)犯罪を犯してしまう責任を取る羽目に成るであろう」という事を熟考しなさい。

貧者が正しい人であれば、正しい人である貧者は何を望むか?

正しい人である貧者は、仕事を望む。

権利を使用しなさい。

ただし、義務も果たしなさい。

金持ちの義務は、富を分け与える事である。

循環しない富は、死と成る。

死を蓄えるなかれ!

死蔵するなかれ!

循環しない様な形で富を蓄えるなかれ!

似非学者プルードンは「所有とは盗みである」と話した。

疑い無く、プルードンは、「所有とは盗みである」と話した時に、吸い取られ搾取された所有物、自由な交流から引き上げられた所有物、公共の共用から引き上げられた所有物について話したかった。

仮に、「金持ちが富を循環させないで蓄えるのを非難する」のがプルードンの思いであったならば、プルードンは、更に考えを進めて、「金持ちが富を循環させないで蓄えた事による、公共の生活の抑圧は、実際の殺人である」と話したかもしれない。

金持ちが富を循環させないで蓄えた事による、貧者の餓死や犯罪は、金持ちによる富の独占による犯罪である。

常に、直感的に、大衆は、金持ちによる富の独占を人類全体に対する裏切り行為と見なしてきた。

家庭は、結婚がもたらす、自然な社会の１つである。

結婚とは、生まれて来るかもしれない子のために相互に愛を約束した、愛によって一緒に成った、2 人の連合国家である。

子持ちなのに離婚した人は、不信心者である。

子持ちなのに離婚した人は、列王紀上３章の「子を真っ二つに切断しなさい」という反応を探って見るための「ソロモンの裁き」における嘘を嘘だとは思わずに実行する事を望むのではないか？

永遠の愛を誓うのは、稚拙である。

性欲的な愛は、疑い無く神聖な感情ではあるが、突発的な、思いがけない、瞬発的な物である。

しかし、相互の愛の約束は、結婚の本質であり、家庭の基本原理である。

相互の愛の約束の批准と保証は、絶対の信頼と成るはずである。

嫉妬は、全て、疑心である。

疑心は、全て、怒りに成る。

(疑心は、全て、心を苛立たせる。)

実質の、不倫は、結婚という相互の愛の約束による信頼に対する違反である。

夫への不満を夫以外の男性に話す女性と、心中の希望や失望を妻以外の女性に話す男性は、実質、結婚による信頼を裏切っている。

多かれ少なかれ、快楽のささやきに身を任せてしまった事による、一時の感情である、人の心に突然現れた不意打ちだけでも、結婚による信頼に対する背信である。

さらに、快楽のささやきに身を任せてしまう原因は、恥じる必要が有る、隠す必要が有る、事前に機会を排除して避ける必要が有る、決して不意打ちされない様に実に努める必要が有る、下品な淫らさである。

倫理道徳は、不倫という醜聞を禁じている。

貞淑は、不倫という醜聞を禁じている。

不倫という醜聞は、全て、劣悪である。

人は、慎み深い人が名前を言わない器官を所有しているからといって、淫らではない。

人は、性器を所有しているからといって、淫らではない。

人は、恥部を所有しているからといって、淫らではない。

しかし、人は、性器を誇示すると、淫らに成る。

人は、恥部を誇示すると、淫らに成る。

夫よ、家庭の恥を隠しなさい。

笑いものにする大衆の前で、妻を裸にするなかれ。

妻よ、夫婦間の性行為における不愉快事を公に広く知らせるなかれ。

家庭にとっての恥を赤裸々にする事や、夫婦間の性行為における不愉快事を公に広く知らせる事は、「自分は金銭などで自分の性的な物を売る」と世論に公言する様な物である。

結婚による信頼を保持するには、気高いほどの勇気が必要である。

結婚による約束は、大いなる人だけが全体を理解できる勇気による約束である。

破綻する結婚は、結婚ではない。

破綻する結婚は、良くある、性行為である。

夫を捨てた女性は、何者に成るか、わかるか?

夫を捨てた女性は、もはや妻ではないし、未亡人でもない。

それでは、夫を捨てた女性は、何者に成るのか?

夫を捨てた女性は、(神の王国や国家の)名誉国民から、淫らな放蕩者であっても仕方が無い人、背信者、裏切者に成り下がってしまう。

なぜなら、夫を捨てた女性は、処女でもないし、神の法的には結婚可能な女性でもない。

妻を捨てた男性は、元妻を性的に売る様な者である。

妻を捨てた男性は、名誉を汚して殺された女性の不倫相手の男性に適用する様な、悪評を受けるのが相応しい。

真の結婚が存在するとすれば、真の結婚とは、神聖であり、解消できない物である。

しかし、気高い知性と心を持つ夫婦でなければ、真の結婚は、あり得ない。

(人とは異なり、)動物は結婚しない。

動物的人間として生きている人は、動物的人間の本質による、不可避の不運を経験する羽目に成る。

当然ながら、絶え間無く、動物的人間は、不運をもたらす未遂罪を犯す羽目に成る。

動物的人間の約束は、約束違反の多数の未遂罪と成って、偽物の約束と成る。

動物的人間の結婚は、不倫の多数の未遂罪と成って、偽物の結婚と成る。

動物的人間の愛着は、愛を違える多数の未遂罪と成って、愛の偽物と成る。

動物的人間は、常に要求して待つだけで、望んで行動する事は決して無い。

動物的人間は、常に約束するが、決して実現しない。

動物的人間には、法の抑圧的な面だけが当てはまる。

動物的人間は、子は持てるかもしれないが、家庭は決して持てない。

(動物的人間は、子を作れるが、正しい家庭を作れない。)

結婚と家庭は、知性と自由意思を持つ人、(肉欲から)自由な人、完全な人が持つ事のできる権利である。

また、裁判記録を尋ね、親殺しの記録を読みなさい。

親殺しの切り落とされた首から、黒いヴェールを外しなさい。

結婚と家庭が何であると考えていたか、死んだ親殺しに尋ねてみなさい。

どんな乳を飲んでいたか、死んだ親殺しに尋ねてみなさい。

どんな愛撫を名誉として授けられていたか、死んだ親殺しに尋ねてみなさい……。

そして、知性と思いやりのパンを子に与えない全ての親よ、良い見本と成る善行によって父親らしい権威を批准しない全ての親よ、震えなさい!

悲惨な境遇の子は、精神的に心的に孤児であり、悲惨な境遇の生まれの復讐を親にする。

家庭が持っている、威厳と神聖さの性質を帯びる物の全てにおいて、今まで以上に、大衆が家庭の価値を認めていない 19 世紀に人は生きている。

(目先の)物質的な利益が、知性と思いやりを殺している。

大衆は、経験による教訓を軽蔑している。

(大衆は、失敗する事を軽蔑している。)

通りの辺りで、邪悪な聖職者は、神の物を金銭で売り歩いている。

肉体が精神を侮辱している。

大衆は、忠義面した顔に、偽物の笑顔を浮かべている。

最早、理想主義は無いし、正義は無い。

(中絶や育児放棄などによって、)父と母は人の命である子を殺している。

勇気を持ちなさい!

忍耐しなさい!

重犯罪者が行くべき場所まで、19 世紀の大衆は行き着くであろう。

19 世紀の大衆が犯す重犯罪を見てみなさい!

何て悲惨であろう!

厭戦が、19 世紀の大衆の顔を覆っている黒いヴェールであろう……。

フランス革命の死刑囚移送車が走っていて、王冠をかぶった権力者が震えながら後を追う……。

まもなく歴史が更なる世紀である 19 世紀を裁いて、大衆は残骸で出来た大きな墓の上に「ここ(19 世紀)に、親殺しの世紀、神とイエス キリストを殺した世紀が終わった!」と記すであろう。

戦いにおいて、人には、死なないために、他人を殺す権利が有る。

しかし、人生という戦いにおいて、無上の権利は、他人を殺さないために、死ぬ権利である。

知と思いやりは、死ぬまで抑圧に抵抗するべきであるが、殺すにまで至るべきではない。

勇気が有る人よ、あなたを傷つけた敵の命は、あなたの手中にある。

なぜなら、勇気が有る人よ、あなたは、あなたに対して思いやりが無い他人である、敵の命の主人である……。

勇気が有る人よ!　敵を許しなさい!　敵を許すという偉大さで、敵を圧倒しなさい!

「しかし、人を脅かす虎を殺すのは禁じられているのか？
もし人面虎、虎の様に他人を食い物にする人であれば、人に食い物にされる方(ほう)が良い(のかもしれない)。
けれども、人を食い物にする人を殺して良いか等について、倫理道徳は何も言っていない。
しかし、もし人面虎、虎の様に他人を食い物にする人が私の子を脅かしたら、他人を食い物にする人を殺すのは禁じられているのか？」

「あなたに、自然が自ら応(こた)える事を許しなさい！」

　古代ギリシャには、敵を殺したハルモディオスとアリストゲイトンの祭と像が有った。
　外典のユディト記には敵を殺したヘブライ人の女性ユディトが、士師記 3 章には敵を殺したエフドが神聖な人として記されている。
　士師記 16 章 30 節には、無上の象徴の 1 つとして、両目をえぐられて盲目にされて鎖で拘束されたサムソンが「ペリシテ人と共に死のう！」と叫んでペリシテ人がねつ造した偽の神ダゴンの神殿の 2 つの柱を引き倒し(て敵を殺し)た、と記されている。
　けれども、考えてください。
　仮に、イエスが死ぬ前にローマへ行き短剣を当時のローマ皇帝ティベリウスの胸に突き立てたら、死刑執行人と当時のローマ皇帝ティベリウスでさえも許して実際に死んだ様に、イエスは世界の人々を救えたであろうか？　いいえ！
　ブルータスは、カエサルを殺して、ローマ人の自由を守れたか？　いいえ！
　カエレアは、ローマ皇帝カリギュラを殺したが、ローマ皇帝クラウディウスとローマ皇帝ネロに場所を作っただけに終わった。

暴力によって暴力に対して抗議すると、暴力を正当化して、暴力の増殖をもたらしてしまう。

　実に、善による悪への勝利、自制による利己心への勝利、許しによる思いやりの無さへの勝利は、キリスト教の秘訣であり、永遠の勝利の秘訣である。

「私は、地がアベルの殺害から未だに血を流していた場所を見た事が有る」

　そして、地がアベルの殺害から未だに血を流していた場所には、涙の細い小川が流れていた。

　何世紀もの導きの下で、涙の細い小川の中に涙を落として、無数の人が進歩して行った。

　永遠の真理は、悲しげに身をかがめて、無数の人が落とした涙を見つめた。

　永遠の真理は、無数の人が落とした涙を１つずつ数えた。

　無数の人が落とした涙は、１つの血の染みを洗い清めるのに決して十分ではなかった。

　しかし、古代と現代という２つの時代の間に、古代人と現代人という２つの時代の大衆の間に、血の気は無いが、光を放つ象徴である、イエス キリストが降臨した。

　血と涙の地に、イエスは、兄弟愛、同胞愛、友愛という、つる植物ぶどうの木を植えた。

　イエスが地に植えた、兄弟愛、同胞愛、友愛という、つる植物ぶどうの木、神の木は、根で血と涙を吸い上げて、未来の(神の)子達を思いやりに夢中にさせる様に運命づける美味しい赤ワインに変えた。

第1部 第1条 数14

数14

数14は、融合の数である。

数14は、共同の数である。

数14は、普遍の統一の数である。

大いなる神秘の鍵 第1部 第1条 数14では、タロットの14ページ目に描かれている天使、神の聖霊の名前において、最も古い最も神聖な民族ヘブライ人から最初に訴えかけて行って、エリファス レヴィは諸民族や諸国民に訴えかけて行くつもりである。

ヘブライ人よ、イスラエルの子孫よ、なぜ、諸民族や諸国民が運動している最中、不動で、祖先の墓守に留まっているのか?

ヘブライ人の祖先は、ここにはいない。

ヘブライ人の祖先は墓にはいない。

ヘブライ人の祖先は復活している。

(マタイによる福音28章6節「天使は『イエスは、ここにはいない。イエスは、墓にはいない。イエスは、復活している』と話した」)

なぜなら、マタイによる福音22章32節「アブラハム、イサク、ヤコブの神は、死んだ人の神ではない(。肉体の死後も、魂が、精神が、生きている人の神である)」。

なぜ、いつまでも、ヘブライ人は、「割礼」という血の印を子に短剣で刻むのか?

もう神はヘブライ人が他の人々から離れている事を望まない。

ヘブライ人よ、キリスト教徒の兄と成りなさい。

ヘブライ人よ、キリスト教徒と共に、決して血が汚さない祭壇の上の、平和という、イエスの聖体のパンを食べなさい。

モーセの律法は成就されている。

(マタイによる福音5章17節「私イエスは律法を成就するために降臨した」)

ヘブライ人よ、諸々の聖書を読み、全てのヘブライ人の預言者がヘブライ人に正に話していた様に、「ヘブライ人は盲目で頑固な民族であった」と理解しなさい。

ただし、ヘブライ人は、勇気が有る民族、戦いを耐えてきた民族である。

ヘブライ人よ、イスラエルの子孫よ、神の子に成りなさい。

ヘブライ人よ、理解して、思いやりなさい!

神は、殺人の罪というカインの烙印をヘブライ人の額(ひたい)から消し去った。

もう、キリスト教徒は、ヘブライ人が、そばを通るのを見て、「ヘブライ人が通るぞ!」と(馬鹿にして)言わないであろう。

キリスト教徒は、「キリスト教徒の同胞であり、信心におけるキリスト教徒の兄である、ヘブライ人のために場所を空けなさい!」と叫ぶであろう。

毎年、新しいエルサレムで、キリスト教徒は、ヘブライ人と共に、過越祭としてイエスの聖体のパンを食べるであろう。

キリスト教徒は、ヘブライ人の、(唯一の男性神との一体化という、)つる植物ぶどうの木と、(自身の創造という)無花果の木の下で一休みするであろう。

なぜなら、旅人アブラハムとアブラハムの所を旅人に変身して訪れた天使達、外典のトビト記のトビアスと共に旅した天使ラファエルを忘れないために、再び、ヘブライ人は、旅人を受け入れ、迎え入れる、旅人の友に成るであろう。

また、マタイによる福音18章5節で「私イエスの小さい者達のうち最も小さい者を1人でも受け入れ、迎え入れた人は、私イエスを受け入れ、迎え入れた事に成る」

と話しているイエスを忘れないために、ヘブライ人は、旅人を受け入れ、迎え入れる、旅人の友に成るであろう。

そのため、もう、ヘブライ人は、家の中で、心の中で、ヘブライ人が異教徒に売ってしまった弟ヨセフに例えられるイエスの保護を拒まないであろう。

なぜなら、飢饉の時にヘブライ人がパンを探したエジプトで、弟ヨセフに例えられるイエスは、強い者に成った。

(マタイによる福音 2 章で天使は幼子イエスをエジプトに避難させた。)

弟ヨセフは、父ヤコブと弟ベニヤミンを覚えていた。

弟ヨセフに例えられるイエスは、ヘブライ人である兄、ヘブライ人である兄の嫉妬を許した。

弟ヨセフに例えられるイエスは、涙を流しながら、ヘブライ人である兄を抱きしめた。

イスラム教徒よ、熱狂的な信者の子孫よ、イスラム教徒と共にキリスト教徒は「神の他に神は無し！　ムハンマドは神の預言者である(と言える)！」と「シャハーダ」というイスラム教の信仰告白を歌うであろう。

ヘブライ人よ、イスラエルの子孫よ、「神の他に神は無し！　モーセは神の預言者である！」と話しなさい。

キリスト教徒よ、「神の他に神は無し！　(人に成った神)イエス キリストは神の預言者である(と言える)！」と話しなさい。

ムハンマドはモーセの影である。

モーセはイエスの先駆者、前触れである。

預言者とは、何者なのか？

預言者とは、神を探求する人の代表である。

(神についての人の考えが誤っていても、)神の概念は神の概念である。

人は、他人に神を信じさせた時、神の預言者と成る(と言える)。

ユダヤ教の旧約聖書、イスラム教の聖書クルアーン、キリスト教の福音書は、同一の聖書の３つの異なる解釈である(と言えるかもしれない)。

法は唯一である、のと同じく、(創造主である男性)神は唯一である。

おおっ！　イスラム教の理想の女性である、永遠に処女に戻る天女フーリーよ！

おおっ！　神に選ばれた人への報いである、永遠に処女に戻る天女フーリーよ！

永遠に処女に戻る天女フーリーは、聖母マリアよりも美しいのか？

おおっ！　聖母マリアよ！　東の娘よ！　清らかな愛の様な純潔、貞淑よ！　母性による願いの様に大いなる者よ！　降臨して、楽園の神秘と美の秘密を、イスラム教徒の子孫に教えてください！

聖母マリアよ！　イスラム教徒の子孫を、新しい縁組みの祭に招いてください！

新しい縁組みの祭では、宝石で輝いている３つの王座の上に、３人の預言者が座るであろう。

イスラム教がかたる「トゥーバの木」は、反らせた湾曲させた枝で、天のテーブルとして、上段を作るであろう。

(

アラビア語で「トゥーバ」は「神の至福」を意味する。

「Tuba-Tree」、「トゥーバの木」はイスラム教がかたる天国の木である。

)

花嫁(である教会)は、月の様に白く、朝の微笑の様に赤い。

全ての民族や国民は、花嫁(である教会)を見るために、押し進むであろう。

もう、全ての民族や国民は、イスラム教がかたるカミソリの刃の様な狭い天国への架け橋である「シラートの橋」を渡る事を恐れないであろう。

なぜなら、イスラム教がかたるカミソリの刃の様な狭い天国への架け橋である「シラートの橋」の上で、救い主イエスは、橋の上をよろけて進む人々のために十字架を広げ、橋の上をよろけて進む人々へ手を伸ばすために、降臨するであろう。

　花嫁(である教会)は、橋から落ちてしまった人々のために香るヴェールを広げ、橋から落ちてしまった人々を引き寄せるであろう。

　おおっ！　人よ！　拍手して、愛の最終的な勝利をたたえなさい！

　死だけが死んだままに成るであろう！

　地獄だけが滅ぼされるであろう！

　おおっ！　ヨーロッパの国々よ！　東はヨーロッパの国々に手を差し伸べている！一致協力して、北の熊を押し戻しなさい！

　(高等魔術の祭儀 17 章「ガファレルは『古代人が悪の前兆の象徴の全てを天空の北の領域に配置したのには意味が有る』と話している。全ての時代の、不運は、北から来て、南に侵入して、地上に広まる」、「熊、蛇といった動物は、暴虐、強奪、全ての迫害の象徴である」)

　最後の戦いは、知と思いやりの勝利をもたらす！

　商業、貿易といった交流は、世界の人々の腕を組ませ合う！

　新しい文明が、武装した福音から湧き起る！

　イエスという同じ唯一の羊飼いの杖の下で、地の全キリスト教徒は、一致協力しなさい！

　前記が、進歩が獲得するものであろう。

　前記が、世界の人々の運動全体が人々を押し進めて行く先の目標である。

　進歩は運動である。

　運動は命である。

(「生きる」とは、「進歩する」、「向上する」という事である。)

進歩の否定は、死の肯定であり、死の神格化である。

(「進歩しない」、「向上しない」とは「死んでいる」という事である。)

「悪の存在」がもたらす嫌悪に、論理がもたらす事ができる唯一の応(こた)えが、進歩である。

(「悪の存在」という疑問への答えの鍵は「進歩」である。)

全てのものが良いわけではない。

しかし、いつか、全てのものは良く成るであろう。

神は、業を始め、いつか業を終える。

進歩無しでは、悪は、神の様に不変に成ってしまうであろう。

進歩は、(逆方向の進歩である、)堕落が存在している理由を説明する。

進歩は、「哀歌」で地上のエルサレムの破壊を悲しんだ預言者エレミヤを慰める。

諸国は、人々の様に、互いの跡を受け継いで行く。

(神以外に、)不変なものは存在しない。

なぜなら、(神以外の、)全てのものは、完成へ向けて進んで行く。

大いなる人は、死ぬが、死ぬまでの行為の結果を祖国に残す。

大いなる国は、地上から消え去って、歴史の謎を教える星に変わる。

行為によって記された物は、(神の)永遠の書に記されて存在し続ける。

行為によって記された物は、1 ページとして、人類の聖書に加えられる。

(ルソーの様に)「文明は悪である」と言うなかれ。

なぜなら、文明は、収穫を実らせる湿った熱気に似ている。

文明は、命の原理と死の原理を速やかに実現させる。

文明は、殺したり、命を与えたりする。

文明は、正しい人と悪人を選び分ける審判の天使に似ている。

文明は、正しい人を光の天使に変える。

文明は、利己的な悪人を動物的人間以下に堕落させる。

文明は、肉体を堕落させるが、(善の知によって、正しい人の)精神を解放する。

創世記 6 章の巨人に例えられる肉欲の奴隷である不信心な世界の人々の文明は、(反面教師として、)創世記 5 章のエノクの魂を天に至るまで高めた。

古代ギリシャの酒神バッカスを信じる人々の文明は、(反面教師として、)超越させる形で、オルフェウスの調和した精神を高めた。

ソクラテスとピタゴラス、プラトンとアリストテレスは、古代の世界の全ての向上と全ての栄光を弁明して要約している。

ホメロスの例え話は、歴史よりも正しいまま存在し続ける。

ローマの偉大さを現代まで伝えている物は、アウグストゥスの紀元前 1 世紀がもたらしたウェルギリウスの不滅の作品しか無い。

そのため、多分、ウェルギリウスをもたらすためにだけ、ローマは世界を戦いで揺るがした。

キリスト教は、東の全ての賢者の熟考の結果である。

東の全ての賢者は、イエス キリストの中で(魂が)再び生きている。

東の全ての賢者の考えは、イエス キリストのキリスト教の中で(精神が)再び生きている。

世界の太陽が昇っている場所に、精神の光は昇っている。

イエス キリストは西を圧倒した。

東の小アジアの太陽の優しい光線は、北の氷柱(つらら)を照らした。

キリスト教という未知の熱に目覚めさせられて、蟻の群れの様な、新しい人々は、ぼろぼろであった世界に広がった。

死んだ人々の魂は、若返った人々を照らして、若返った人々の中の、命の精神を増やした。

世界には、「率直」を意味する「frankness」と「自由」を意味する「freedom」を自称する一国の国民が存在する。

なぜなら、「率直」を意味する「frankness」と「自由」を意味する「freedom」という2つの言葉は、「France」、「フランス」という名前、言葉と意味が同じである。

常に、フランスは、ある意味、法王よりもカトリックであり、ルターよりもプロテスタントであった。

十字軍のフランス、恋や騎士道物語を歌った11世紀のトルバドゥールや12世紀のトルヴェールといった吟遊詩人のフランス、カール大帝などを歌った武勲詩のフランス、ラブレーのフランスやヴォルテールのフランス、神学者ボシュエのフランスや哲学者パスカルのフランス、フランスという国家は、全ての人々の統合体である。

フランスは、論理と信心の結合を神聖化している国家である。

フランスは、革命と権力の結合を神聖化している国家である。

フランスは、最も気高い、人の気高さと、最も思いやり深い信心の結合を神聖化している国家である。

フランスが、どのように進むか、どのように揺れて変わるか、どのように戦うか、どのように大いなる国家へと成長するか、見なさい！

時に騙され傷つけられても、決して落胆せずに、勝利に夢中に成って、逆境でも勇気を持って行動して、フランスは、笑い、歌い、死んで、(精神の)不死を信じる事を世界の人々に教える。

ナポレオンの親衛隊は降伏せず死にもしない！

ナポレオンの親衛隊が降伏せず死にもしない証拠は、いつの日かナポレオンの親衛隊に成るつもりであるフランスの子孫の熱狂である！

もう、ナポレオンは、人ではない。

ナポレオンは、正に、フランスの精神である。

ナポレオンという、フランスの精神は、世界の人々の第２の救い主である。

フランスの精神であるナポレオンは、象徴として、十字の聖ルイ勲章を要約している五芒星のレジオンドヌール勲章を使徒である騎士に与えた。

ナポレオンが死んだセントヘレナ島と、イエスが死んだゴルゴタの丘は、新しい文明の２つの灯台である。

ナポレオンが死んだセントヘレナ島と、イエスが死んだゴルゴタの丘は、最後の大洪水の虹が作って、古代と現代という２つの世界の間に架ける、巨大な橋の２つの基礎の杭(くい)である。

栄光の無い過去が大いなる未来をとらえて飲み込んでしまうと信じられてしまうのか？

いつの日か、タタール人による刺激が、フランスの栄光の約束、神と人の自由の約束を引き裂くと信じられてしまうのか？

前記を信じてしまうくらいなら、「再び、幼子に成って母の胎内に入りたい！」と言っている方が、まだましであろうに！

神の言葉は、「進み続けなさい！　進み続けなさい！」と「さまよえるユダヤ人」に言った。

世界の運命を操る神は、「進みなさい！　進みなさい！」とフランスに叫んでいる。

人は、どこへ進むのか？

多分、人は、未知という底無しの淵へ進む。

(人は、未知という底無しの淵へ進んでも、)構わない！

しかし、人は、過去へは、忘却という墓地へは、ぼろぼろに幼子の時に自ら裂いた産着へは、最初の時代の愚かさへは……、決して、決して、進まない！

第1部 第1条 数15

数15

数15は、対立の数である。

数15は、普遍性の数である。

現在、キリスト教は、2つの教会に分けられている。

文明的なカトリック教会と、(質素過ぎる粗野な建物である教会に、冷淡な事務員の様な粗野な服装の聖職者といった、)粗野なプロテスタント。

進歩的なカトリック教会と、停滞的なプロテスタント。

自発的なカトリック教会と、受容的なプロテスタント。

カトリック教会は、諸国を、統治したし、常に統治している。

なぜなら、権力者は、カトリック教会を畏敬している。

プロテスタントは、全ての独裁に従った。

プロテスタントは、(過去のイギリスなどでの独裁が、)キリスト教を奴隷にするための手段でしかない。

自発的なカトリック教会は、人にとっての神、人のための神を理解している。

カトリック教会だけが、(思いやりといった、)神の神性の解説者としての、人に成った神の言葉イエスの神性を信じている。

結局、法王の絶対性とは、信心による普遍の決議が認めた、知による独裁、以外の何物であろうか？　法王の絶対性とは、信心による普遍の決議が認めた、知による独裁である!

法王の絶対性について、人は、「当代随一の天才が法王に成るべきである」と言うかもしれない。

どうして、天才が法王に成るべきであろうか？　いいえ！　法王が天才である必要は無い！

実は、「標準的な人が法王に成るべきである」。

実は、「標準的な人が法王に成る」方（ほう）が、より相応しい。

「標準的な人が法王に成る」事で、法王の無上性は、より神聖に成るばかりである。

なぜなら、「標準的な人が法王に成る」事で、法王の無上性は、ある意味、より人的に成る。

「標準的な人が法王に成るべきである」事を、敵意や不信心な無知よりも、諸々の出来事が大きな声で物語ってはいないか？　はい！　「標準的な人が法王に成るべきである」事を、敵意や不信心な無知よりも、諸々の出来事が大きな声で物語っている！

カトリック教国のフランスが、よろめく歴代の法王を一方の手で支え、他方の手で進歩という軍団の先頭に立って戦うための剣を持っているのが見えないのか？

カトリック、ユダヤ教徒、トルコのイスラム教徒、プロテスタントは、すでに同じ旗印（はたじるし）の下で戦った。

ヨーロッパをモデルにした改革後の 1844 年から 1923 年までのオスマントルコの新月旗は、カトリックやプロテスタントなどのラテン十字の元に集まった事が有る。

カトリック、ユダヤ教徒、トルコのイスラム教徒、プロテスタントは、共に、ロシアといった、外国の侵略と外国の動物的に成ってしまった正統な教えの侵略に対して戦った。

カトリック、ユダヤ教徒、トルコのイスラム教徒、プロテスタントが共に戦った事は、永遠の既成事実である。

使徒ペトロの椅子に座る法王は、粛々と、新しい考えを認めて、カトリックは進歩的である、と公言した事が有る。

カトリックのキリスト教の祖国は、知の祖国であり、美術や芸術の祖国である。

福音の永遠の神の言葉イエス、目に見える証拠によって、生きている、人に成った神イエスは、未だに、世界の人々の光である。

新しいユダヤ教の似非信者よ、黙りなさい！

諸学派の憎むべき口伝よ、黙りなさい！

プロテスタントの一派である長老派教会の傲慢よ、黙りなさい！

ジャンセニスムの非論理よ、黙りなさい！

ヴォルテールの酷い知識が正に多大な汚名を着せた、キリスト教の永遠の教えについての、恥ずべき迷信的な全ての誤った解釈よ、黙りなさい！

ヴォルテールとナポレオンは、カトリックとして死んだ。

未来のカトリックの教えが、どうあるべきか知っているか？

未来のカトリックの教えは、ヴォルテールの批判の酸で試された黄金の様な、キリスト教徒のナポレオンの精神が世界という(神の)王国で実現した、福音の教えに成るであろう。

諸々の出来事は、進む意思が無い人を、引きずって行くか、踏みにじるであろう。

再び、無数の不運が世界を覆うかもしれない。

多分、いつの日か、ヨハネの黙示録の軍団が、4 人のこらしめるもの、ヨハネの黙示録 9 章 14 節の 4 人の神の使者を解放するかもしれない。

聖所は清められるであろう。

厳しい神聖な清貧が、よろめく人を支えるために、打ち倒されたものを建て直すために、神聖な油オリーブオイルを全ての傷に塗油して癒すために、使徒を派遣するであろう。

独裁と無政府主義という 2 つの血に飢えた奇形は、少しの間だけ互いに取っ組み合って支え合った後で、互いをぼろぼろに裂き合って滅ぼし合うであろう。

未来の政府は、自然において家庭が人に見せる理想の政府、宗教界において法王という羊飼いの位階制が見せる理想の政府に成るであろう。

ヨハネの黙示録 20 章といった使徒の口伝には、神に選ばれた人が千年間イエス キリストと共に統治する、と記されている。

言い換えると、一連の何世紀もの間、神に選ばれた人は、知と思いやりを権力という重荷にささげて、普遍の家族である世界の人々の利益と富を統治するであろう。

神に選ばれた人が千年間イエス キリストと共に統治する時、ヨハネによる福音 10 章 16 節の約束によると、唯一の羊の群れ(キリスト教会)と唯一の羊飼い(イエス)だけに成るであろう。

第1部 第1条 数16

数16

数16は、神殿の数である。

どんな未来の神殿が存在するのか、話そう!

知と思いやりの精神があらわれたら、神の三位一体の、全て、真理、栄光があらわれるであろう。

思いやりは、女王と成る。

思いやりは、言ってみれば、死んだものから復活する。

思いやりには、詩的霊感において幼い時の神の思いやり、論理において若い時の力強さ、行為において円熟時の知が有るであろう。

神の概念が次々と纏(まと)った全ての形が、不滅の完全な形で再生するであろう。

代々の国々のわざが描いた全ての特徴が、統一されて、神の完全な像を形成するであろう。

エルサレムは、エゼキエル書で預言者エゼキエルが預言した理想の姿に従って、ヤハウェの神殿を建て直すであろう。

ヒマラヤ杉と糸杉の屋根の下で、新しい永遠のソロモンの神の知イエス キリストは、イエスと教会を花婿と花嫁に例えていると言われている「雅歌」の中の神の花嫁である、教会である、神の自由とイエスの結婚の祝婚歌を歌うであろう。

(

古代インドでヒマラヤ杉は神木である。

糸杉は腐敗し難いので棺などに用いられたので死の象徴に成った。

糸杉は一度切ったら二度と生えないので死の象徴に成った。

イエスの十字架は糸杉の十字架であるという伝説が有る。

古代エジプトや古代ローマで糸杉は神木であった。

)

父である神ヤハウェは、花婿イエスと花嫁である教会である神の自由を諸手を挙げて祝福するために、雷を脇に置くであろう。

父である神は、微笑みながら、花婿イエスと花嫁である教会である神の自由の間にあらわれて、父と呼ばれる事を喜ぶであろう。

しかし、それでもなお、東の詩では、魔術的な思い出によって、父である神ヤハウェを、神ブラフマーや、主神ユピテルと呼ぶであろう。

インドは、維持者・救い主ヴィシュヌの不思議な例え話を、現代の思想の流れに教えるであろう。

キリスト教徒は、創造神ブラフマー、破壊神シヴァ、維持者・救い主ヴィシュヌというインドの神秘の三神一体の真珠の三重の王冠を、最愛のイエス キリストの未だに血を流している額(ひたい)の上に置くであろう。

キリスト教徒がインドの三神一体の真珠の三重の王冠をイエスの額(ひたい)の上に置いた時、聖母マリアのヴェールの下で清められた愛の女神ウェヌスは、イノシシに殺されたアドニスのために、もう涙を流して悲しまないであろう。

なぜなら、花婿アドニス、花婿イエスは、もう死なない様に、復活している。

(死という)地獄のイノシシは、一時的な勝利の後に、死んだ。

再び、そびえ立ちなさい！　おおっ！　光の神アポロンのデルポイ神殿よ！　月の女神ディアナのエフェソスの神殿よ！

光の神アポロン、芸術の神アポロンは、世界の人々の神と成る！

神の言葉イエスは、光の神アポロン、芸術の神アポロンと呼ばれても全く構わない！

　もう、月の女神ディアナは、夜という孤独な領域で、未亡人を統治しないであろう。

　月の女神ディアナの銀の三日月は、花嫁の足下にある。

　(ヨハネの黙示録 12 章の女性の足下には月がある。)

　ただし、愛の女神ウェヌスが、月の処女神ディアナを圧倒したのではない。

　永遠に老いさせないために眠らされていたエンディミオンは目覚めて、月の処女神ディアナという、処女性は、母性を喜ぼうとしている！

　墓を離れなさい、おおっ、古代ギリシャの彫刻家フェイディアスよ、最高傑作のゼウス像が破壊された事を喜びなさい。

　なぜなら、古代ギリシャの彫刻家フェイディアスよ、神の像を建て直すのは今だ！

　おおっ、ローマよ、バシリカ建物様式の教会と共存させて、ローマの神殿を建て直しなさい。

　ローマよ、再び、世界の女王と諸国のパンテオンに成りなさい。

　ローマの中心である最高の丘であるカピトリヌス丘の上で、使徒ペトロの手によって、ウェルギリウスに王冠をかぶらせなさい。

　画家ラファエロの描画によって、オリュンポス山のギリシャの神々とカルメル山の神ヤハウェを統一させなさい！

　祖先による古代のカテドラルよ、神々しい物へと変身しなさい。

　彫刻された、生きている、矢の様なカテドラルの屋根で雲を射抜きなさい！

　命を与えた形によって、石板の記録を、イスラム教の聖書クルアーンの不思議な黄金の例え話によって照らされた、北の闇の口伝にしなさい！

　イスラム教のモスクで、東にイエス キリストを敬礼させなさい！

(1935 年から博物館に成った)「神の知」を意味するトルコの新しいモスク(であった)「アヤ ソフィア」の塔ミナレットの上で、イスラム教の象徴でもある三日月の中央に、十字架を昇らせなさい！

長い間、イスラム教徒が夢見ているイスラム教の永遠に処女に戻る天女フーリーを真の信者にもたらすために、ムハンマドに女性を解放させなさい！

救い主イエスのための殉教者に、ムハンマドの美しい天使であるイスラム教の永遠に処女に戻る天女フーリーへ、貞淑な愛撫を教えさせなさい！

地のために全てのわざで飾られた、豊富な装飾を再び身につけた、地の全ては、1 つの壮大な神殿に成るであろう。

(正しい)人は、地という神殿の永遠の祭司に成るであろう。

正しかった全てのもの、美しかった全てのもの、過去の世紀で甘美であった全てのものは、神々しく変身した世界による変化によって、再び美しく成って、生きるであろう。

美しい形は、真の概念と不可分のままであろう。

いつの日か、人の魂が、魂自身の(真の)力に至って、(魂の体という)魂の形によって星の体を自ら創造すると、星の体が、人の魂から切り離し難く成る、様に。

(正しい人の)星の体は、地上の、神の王国に成る。

(正しい人の星の体は、霊の冥界で、天の一部に成る。)

(正しい人の)肉体は、魂の神殿に成るであろう。

復活した世界が、神の体に成る、様に。

魂と肉体、概念と形、世界の全てが、神の光と成り、神の言葉と成り、永遠の目に見える神の啓示と成るであろう。

であります様に。

そう成ります様に。

第 1 部 第 1 条 数 17

数 17

数 17 は、星の数である。

数 17 は、知と思いやりの数である。

戦士であり大胆である知よ、神の様なプロメテウスの共犯者である知よ、光をもたらす天使ルシフェルの長女である知よ、知による大胆さをたたえる！

知は、所有するために、知る事を望んで、全ての雷と全ての底無しの淵に勇気を持って立ち向かった！

(

知る事は存在を所有する事である。

知る事は存在させる事である、と言える。

)

知よ！　おおっ！　(学徒である)私達、貧しい罪人は、狂おしいほどに、醜聞をねつ造されるほどに、迫害されるほどに、知を愛している！

人の神聖な権利である知、自由の精髄である知をたたえる！

なぜなら、知のために、(学徒である)彼らは、想像できる中で最も価値の有る夢、心の中で最も愛用している幻を足下に踏みにじって、知を追い求めた！

知のために、(学徒である)彼らは、迫害された。

知のために、(学徒である)彼らは、投獄され、服を奪われて裸にされ、飢えさせられ、喉の渇きを覚えさせられ、親しかった人達に捨てられ、絶望の闇に惑わされた！

知る事は、(学徒である)彼らの権利であった！

(学徒である)彼らは、知を勝ち取った!

知を勝ち取った今、(学徒である)彼らは、(人に成った神イエスについて、)涙を流して嘆き悲しむ事も、信じる事もできる。

知を勝ち取った今、(学徒である)彼らは、(人に成った神イエスに、)従順に成る事も、祈る事もできる。

悔い改めたカインは、アベルよりも、大いなる者と成るであろう。

悔い改めたカインは、恥をかく権利が有る、満足した、法に従う、傲慢である。

私は、(人に成った神イエスを)信じる。

なぜなら、私は、人が、なぜ、どうして、(人に成った神イエスを)信じる必要が有るか知っている。

私は、(人に成った神イエスを)信じる。

なぜなら、私は、(人に成った神イエスを)愛し、(死といった神ではないものを)もう恐れない。

思いやりよ!　思いやりよ!　思いやりは無上の身代わりによる罪のつぐないによる救い主である!　思いやりは無上の復活させるものである!

知、思いやりは、多数の苦しみによって、多数の幸せを作る。

知、思いやりは、血と涙をささげる。

知自体、思いやり自体が、力、徳、善行である。

知、思いやりは、力、徳、善行による(神からの)報いである。

あきらめにおける力、従順における確信、悲しみにおける喜び、死の中の命である、知、思いやりをたたえる!

敬礼と栄光を知、思いやりに!

もし人、人の知性がランプであるならば、知、思いやりはランプの火である。

もし人の知性が権利であるならば、知、思いやりは義務である。

もし人の知性が気高さであるならば、知、思いやりは幸福である。

思いやりよ。

思いやりの神秘には、自信と謙虚が満ちている。

神聖な思いやりよ、隠された思いやりよ、思いやりは神の様に(人には理解不能な)不条理であり無上である。

思いやりである「思慮」である、ティターン神族のクロノス、「時」は、諸手でウラノス、天をとらえ、ウラノス、天をガイア、地に押しつけた。

思いやりは、キリスト教の未亡人の、言い表せない最終的な秘密である。

思いやりは、永遠の物である。

思いやりは、無限の物である。

思いやりは、諸世界を創造するに足りる概念である。

思いやりよ！　思いやりよ！　祝福と栄光を思いやりに！

栄光を知に！

知は、真理を視る力が弱い人の目障りに成らない様に、知自身をヴェールで覆う！

栄光を、権利自身の全てを義務に変える権利、献身に成る権利に！

栄光を、思いやられなくても思いやりに燃え上がる未亡人の様な人に！

栄光を、苦しむが他者を苦しめない人に！

栄光を、感謝を未だ知らない人を許す人に！

栄光を、(正しい人であれば、)敵でも愛する人に！

清貧を自ら進んで選び取った人、この世の滓(かす)の様な扱いを受ける貧者に施すために己を空しくする人は、永遠に、何者よりも、幸いである！

永遠に自分の平和を作る人は、幸いである！

他人よりも自分を優れているとは決して思考しない純粋な心の人は、幸いである！

思いやりは、私の母である!

思いやりは、神の娘であり、聖母マリアである!

罪無く処女懐胎した思いやりは、普遍の教会であり、聖母マリアである!

思いやりを知って理解するために大胆に全てを賭けた人は、幸いである!

思いやりを愛するために、思いやりの役に立つために、更なる全ての苦しみを覚悟した人は、幸いである!

第1部 第1条 数18

数18

数18は、宗教の教義の数である。

宗教の教義は、全ての詩であり、全ての神秘である。

マタイによる福音27章51節には、救い主イエス(の肉体)が死んだ時に、神殿のヴェールが裂かれた、と記されている。

なぜなら、救い主イエス(の肉体)の死は、献身の勝利、思いやりによる奇跡的な行動、人の中の「神の力」、神の人性、人の神性、無上の秘密、全ての秘伝伝授の最終的な言葉を表す。

ただし、救い主イエスは、人が最初はイエスの言葉を理解できない、と知っていた。

そのため、ヨハネによる福音16章12節で、イエスは、「あなた達(、使徒)は今は、それ(、私、人に成った神イエスの教えの全ての光)に耐える事ができない。しかし、真理の霊が(あらわれて、)来る時、真理の霊が全ての真理をあなた達(、使徒)に教える(。真理の霊は私イエスの言葉の意味をあなた達、使徒に理解させる)」と話している。

ヨハネによる福音16章12節の「真理の霊」とは、「知の精神」、「『神の知』の神の聖霊」、「『神の力』の神の聖霊」、「助言の神の聖霊」である。

(

コリント人への第1の手紙1章24節「キリストは神の力であり神の知である」

マタイによる福音10章19節から20節「何をどう言うか心配するなかれ。言うべき時に、言うべき事は神の聖霊によって与えられる。言うべき事は、あなたが言っているのではなく、父である神の聖霊が言っているのである」

)

1845年12月12日に、ローマのカトリック教会で、ヨハネによる福音16章12節の「真理の霊」は、4つの信条を人に布告させて、「真理の霊」自身である「知の精神」を粛々(しゅくしゅく)と表した。

(1)

信心が人の理性より優れている場合は、人の理性は信心からの霊感を認めるべきである。

(2)

信心と知には各々独立した別の領域が有る。

そのため、信心と知で、一方が他方の役割を侵害するべきではない。

(3)

人の理性を弱めるのではなく、逆に、人の理性を強めて成長させる事は、信心と神の思いやりにとって、適正である。

(4)

信心による決定を調べるのではなく、信心による決定の根拠のうち、自然な論理的な根拠を調べる、人の理性の、信心への合流は、信心を損なわず、信心を害さず、信心を助ける役に立つ事ばかりである。

言い換えると、信心の原理において完全に論理的な信心は、信心による決定の根拠のうち、自然な論理的な根拠を、人が論理的に真剣に調べる事を、恐れるべきではなく、逆に、望むべきである。

前記の様に、1845年12月12日に、ローマのカトリック教会は、4つの信条の布告をして、完全な宗教改革を成就した。

前記の様に、1845 年 12 月 12 日に、ローマのカトリック教会は、4 つの信条の布告をして、地上における神の聖霊の統治を開始させた。

第1部 第1条 数19

数19

数19は、光の数である。

数19は、神についての真正な概念が証明した、神の存在である。

人は、「神、存在とは、永遠に死んだ形や永遠に死体の様な形を機械的な運動によって動かす、万物の墓である」と誤って必ず話すか、「存在である神とは、知と思いやりの絶対の原理である」と必ず認める。

神、普遍の光は、死んでいるのか？　いいえ!

普遍の光である神は、生きているのか？　普遍の光である神は、生きている!

存在、神は、運命として、滅びる作品として、人をささげると誓っているのか？　いいえ!

存在である神は、神意によって、人を不死の(正しい心の)誕生に導いているのか？　存在である神は、神意によって、人を不死の(正しい心の)誕生に導いている!

もし神が存在しないのであれば、知的存在である人は虚偽に過ぎない事に成ってしまう。

なぜなら、もし神が存在しないのであれば、「知的存在である人は絶対者である神に成れない」事に成るし、「知的存在である人は絶対な者に成れない」事に成るし、「知的存在は絶対的な者ではない」事に成るし、「知的存在である人の究極の理想である神は虚偽である」事に成ってしまう。

「神無しでは、存在とは、(絶対性が無いため、)無価値である事を認めた無価値である」事に成ってしまう。

「神無しでは、命とは、変装した死である」事に成ってしまう。

「神無しでは、光とは、永遠に、夢幻によって、だまされている夜である」事に成ってしまう。

第一に、絶対に信じる必要が有る事とは、「存在は存在する」事、「神は存在する」事である。

「存在は存在する」

「神は存在する」

「神は存在の中の存在である」

「神は本物の存在である」

「神は幻ではない存在である」

「神は存在の実体である」

存在である神は、知的に生きている。

絶対の存在の生きている知が、神である。

神である光は、現実に存在して、命を与えている。

全ての光の現実の実在の実体が神である。

全ての光の命が神である。

全ての光による命が神である。

普遍の論理による言葉は、神の存在の肯定と成り、神の存在の否定には成らない。

物理的な光は思考の道具でしかない、と見ない人は何と盲目であろう！

物理的な電磁気は思考の道具でしかない、と見ない人は何と盲目であろう！

思考だけが、光を実現して、思考する者の目的のために、思考を利用して、思考を創造する。

無神論の誤った肯定は、永遠の夜の考えと成る。

神の肯定は、光の教えと成る！

神のアルファベットであるヘブライ文字には 22 文字あるが、数 19 までで、エリファス レヴィは数の意味の説明を止める。

数 1 から数 19 までの数の意味は、隠された神学の鍵と成る。

数 20 から数 21 までの数の意味は、自然の鍵と成る。

「大いなる神秘の鍵 第 3 部」で、エリファス レヴィは、自然の鍵についての話に、話を戻すつもりである。

第 1 部 第 1 条 要約

　ヘブライ人の典礼の見事な聖歌「Kether-Malkuth(王冠)」を引用して、神についての話を要約しよう。

　後記は、11 世紀のスペインの神秘のアラビア語の詩人アヴィケブロン、ソロモン ベン イェフダー イブン ガビーロールによるカバラの詩「Kether-Malkuth(王冠)」の 1 ページである。

「神は、数 1 である(、と言える)。

数 1 は、全ての数の根源である。

数 1 の、存在性は、全ての建物の基礎である。

神は、数 1 である(、と言える)。

数 1 の、存在性の単一性の神秘において、人の中で最高の、賢者達ですら途方にくれる。

なぜなら、賢者達ですら、数 1 の、存在性の単一性の神秘を(完全には)知らない。

神は、数 1 である(、と言える)。

数 1 の、存在性の単一性は、(月の外見の様には)満ち欠けしない。

(

真の存在性は、神以外はさわれないし、減衰できない。

真の存在性は、月の様に遠くにある。

)

数１の、存在性の単一性は、いかなる変化も受けつけない。

(真の存在性は、不変である。)

神は、数１である(、と言える)。

けれども、数１の存在性は、数学の数値１ではない。

(数１の存在性は、数学の数値１とは異なり、無く成ったりしない。)

なぜなら、数１の、存在性の単一性は、増加、変化、形成を受けつけない。

(真の存在性は、神以外はさわれない。)

神は、数１である(、と言える)。

人である私の想像力では、数１の存在性を特定できないし、数１の存在性を定義できない。

そのため、私は、間違った事を話す罪を犯さない様に、神、数１、存在性、単一性についての話し方に注意するつもりである。

実に、神は、数１である(、と言える)。

神の超越性、真の存在性の超越性は、堕落が不可能なほど気高く、落下が不可能なほど高く、存在するのをやめる事が可能な『この世』のものとは全く類似点が無い。

神は、存在する者である。

それにもかかわらず、人の理解力や知見は、神の存在性に(完全には)到達できず、どこに神は存在するのか、どのように神は存在するのか、なぜ神は存在するのか、突き止める事は不可能である。

神は、存在する者である。

神は、神の中にしか、存在しない。

なぜなら、神の外で、存在できるものは無い。

神は、存在する者である。

神は、この世の『時』の前から存在している。

(神が、この世の『時』を創造した。)

神は、この世の空間を超越して存在している。

(この世の空間の全てを科学で探索しても神は見つからない。)

実に、神は、存在する者である。

人が神の存在を発見するのは不可能なほど、人が神の存在の神秘を見通すのは不可能なほど、神の存在は隠されているし、神の存在性は深い。

神は、生きている者である。

しかし、神は、一定時間しか生きられない者ではないし、既知の『この世』の『時』によって生きている者ではない。

神は、生きている者である。

しかし、神は、人の精神によって生きている者ではないし、人によって生きている者ではない。

(神は神だけで生きている。)

なぜなら、神は、全ての人に命を与えている者である。

神は、生きている者である。

しかし、神の生は、人生と類似点が無い。

人生は、一息の様な儚い物である。

人生、人の命、人の肉体は、蛆(や蛆に例えられる星の光)の糧と成って、終わってしまう。

神は、生きている者である。

神の神秘に到達できた人は、永遠の喜びを楽しみ、永遠に(魂が)生きられる。

神は偉大である。

神の偉大さの前では、他の全ての偉大さは頭を下げ、最優秀な全てのものは不完全と成る。

全ての想像を超越して、神は偉大である。

神は、天の全ての位階を超越している。

全ての偉大さを超越して、神は偉大である。

神は、全ての称賛を超越している。

神は、強い。

被造物で神の行為を行える者はいないし、被造物の力は神の力に及ばない。

神は、強い。

不変の減衰しない無敵の強さは、神の物である。

神は、強い。

神は、思いやり深さによって、燃える様に最も激しく怒っている時でも、許す。

神は、罪人に我慢強く接する姿勢を見せた。

神は、強い。

神の思いやりは、『最初』から全ての時代に存在していて、全ての被造物の上に降り注いでいる。

神は、永遠の、光である。

清らかな人は、神を見る。

罪という雲は、神という光を罪人の目から隠す。

神は、光である。

神という光は、この世では隠されているが、他の諸世界では目に見える。

他の諸世界では、神は、主である神の栄光を表している。

神は、王である。

神を見る事を望む理解力という目は、視力が、神の一部にしか到達できず、神の全体に到達できないので、全く、驚かされる。

神は、神の中の神、本物の神、幻ではない神である。

全ての被造物は、神が幻ではない事の証拠である。

神という大いなる名前を畏敬して、全ての被造物は全ての畏敬を神の概念に感じる。

神は、神である。

全ての被造物は、神の下僕であり、神の信者である。

人は、他の神々、人がねつ造した偽の神々を敬礼してしまう。けれども、真の神の栄光は、曇らない。

なぜなら、偽の神々を敬礼してしまっている人の思いは、真の神の概念に向かっている。

偽の神々を敬礼してしまっている人は、正道を辿ろうと望むが、道を外れてしまう、盲人に似ている。

ある盲人は穴に堕ち、他の盲人は溝(みぞ)に堕ちる。

盲人の様な人は、全て、自分の望みの場所に来たと思い込んでしまう。

けれども、盲人の様な人は、無駄に疲れただけに過ぎない。

しかし、神の下僕は、正道を進む、先見の明がある人に似ている。

神の下僕は、(神の王国の)王宮の法廷に入るまで、右手にも左手にも正道を外れない。

神は、神である。

神は、神性によって、全ての被造物を支えている。

神は、単一性によって、全ての被造物を悟らせる。

神は、神である。

神性、神の単一性、神の永遠性、神性である存在性の間に相違は無い。

なぜなら、神性、神の単一性、神の永遠性、神性である存在性は、全て１つであり、同一の神秘である。

神性、神の単一性、神の永遠性、神性である存在性は、名称は異なるが、全て、同一の真理に帰す。

神性、神の単一性、神の永遠性、神性である存在性は、名称は異なるが、全て、同一の真理が源である。

神は、知者である。

神が、命の源である知をもたらす。

神の知と比べると、人である賢者は全て愚者と成る。

神は、知者である。

神は、古い者の中の古い者、最も古い者である。

常に、神は、知という魂の糧を与えている。

神は、知者である。

神は、神の知を、神以外の何ものからも学ばなかった。

神は、知者である。

約束の日に、職人や建設者の様に、神は、無から存在を引き出すために、無から人を引き出すために、神の知から神意を取り出す。

神の目から降り注ぐ光が、道具無しで、光の中心から引き出される、様に。

神意は、えぐり、設計し、清め、形成した。

神意は、無に明らかに表れる様に命令した。

神意は、存在に沈黙する様に命令した。

神意は、人に沈黙する様に命令した。

神意は、この世に広がる様に命令した。

神意は、諸々の天を覆った。

神意は、神意の力によって、諸々の、天球という幕屋を集めた。

神意は、神意の力による束縛によって、この世の諸々の被造物の障壁を抑制した。

神意は、神意の力によって被造物の障壁の縁に干渉して、上のものを過去の下のものに結びつけた」

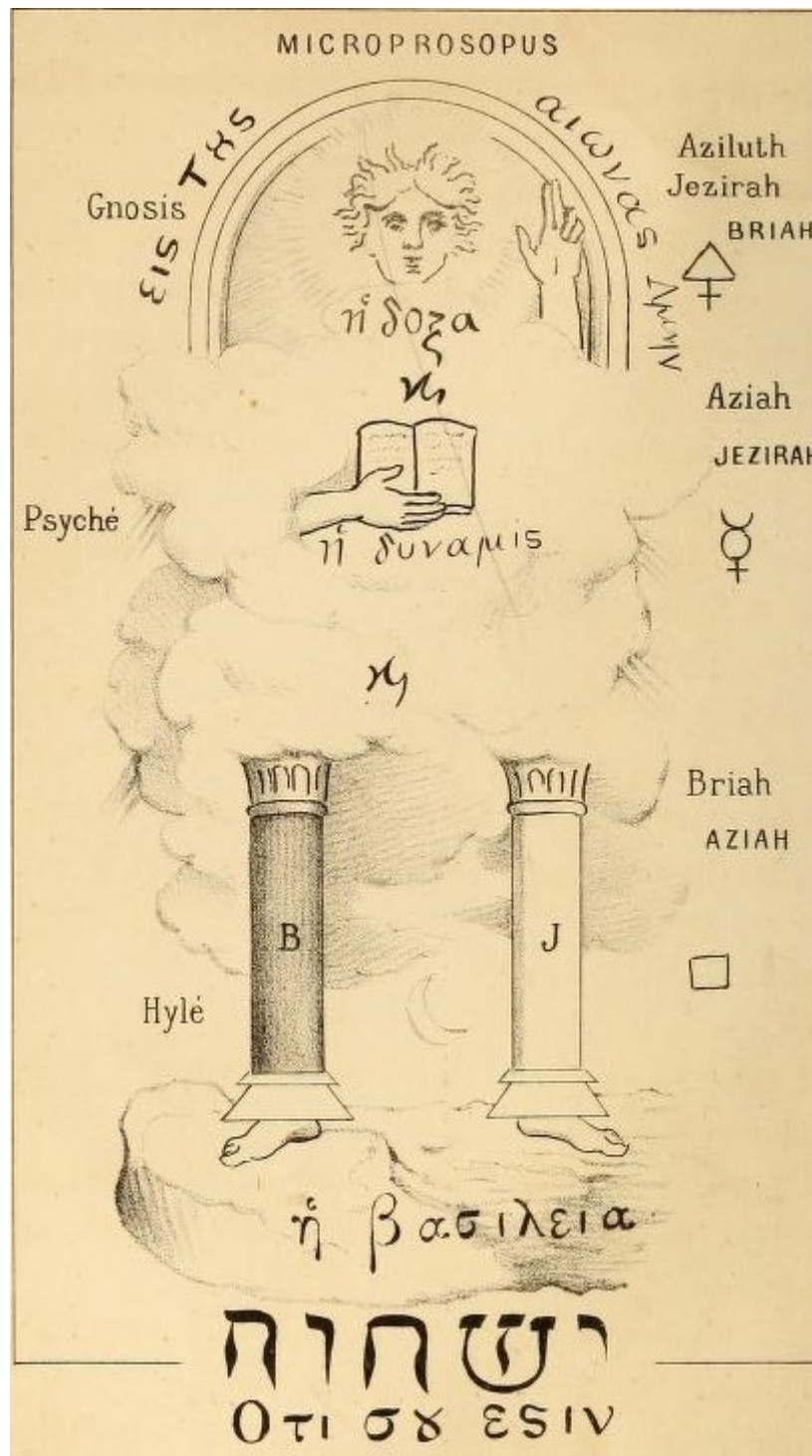
(「ヨム キプルの日の祈り」)

つり合う唯一の詩歌という形、または、心への霊感を形にした物を、「Kether-Malkuth(王冠)」の中の、大胆なカバラ的な考察にもたらした。

(カトリックの真の)信者には、聖書の諸象徴の新しい解説である「Kether-Malkuth(王冠)」に含まれている、論理的な仮説は不要であろう。

しかし、18 世紀の聖書への批判による不信に苦しんでいる真剣な人は、「Kether-Malkuth(王冠)」を読んで、「信心が無い人の理性でさえ、『つまずきの石』以外の何ものかを聖書に見つける事ができる」と理解するであろう。

たとえ、聖書を覆い隠しているヴェールが大きな影を投じても、聖書を覆い隠しているヴェールが投じる影は、光の相互作用によって、不思議なくらい設計されているので、神の概念の唯一の理解可能な象徴と成る。

神の概念は、無限としては理解不可能であり、神秘の実体としては絶対に必要である!

ヨハネの黙示録によって描いた大いなるpantacle

第 1 部 第 2 条

第 2 の問題の解決

議論の余地が無い様に、真の宗教の存在を確証する事

真の宗教

思いやりの様に、宗教は、人性の中に存在する。

思いやりの様に、宗教は、唯一である。

思いやりの様に、宗教は、正しい人の魂には存在し、悪人の魂には存在しない。

しかし、人が、宗教を受け入れようと、宗教を拒絶しようと、宗教は、人性の中に存在する。

そのため、宗教は、命の中に存在する。

宗教は、自然の中に存在する。

宗教は、議論の余地が無い、科学的事実である。

宗教は、議論の余地が無い、論理的事実ですらある。

真の宗教は、過去、常に存在していた物、現在、存在している物、未来永劫、存在する物である。

誰かが、「宗教とは、あれこれである」と言うかもしれないが、宗教とは、存在する通りの物である。

存在する通りの物が、真の宗教である!

偽の宗教は、真の宗教を模倣した迷信、真の宗教から盗用した迷信、真の宗教の虚偽の影である!

真の美術について言える事が、真の宗教についても言える。

描画や彫刻での厳しい試みは、無知から真理へ到達するための試みである。

美術は、自身だけで自分の力を示し、自身の輝きで輝き、美の様に唯一であり永遠である。

真の宗教は美しい。

美という神性によって、真の宗教は、知と学問が真の宗教を畏敬する事を課し、論理と人の理性による真の宗教への承認を獲得できる。

知は、真の宗教にとっては真理である教えの仮定をあえて肯定も否定もしない。

ただし、知は、間違え様の無い性質によって、真の宗教を必ず認める。

言い換えると、知は、真の宗教が人の魂の大いなる普遍の向上と一致する性質を全て統一しているので、真の宗教だけが「宗教」という名前に値する事を必ず認める。

全ての者にとって最も明らかに神聖な唯一の物が、世界にあらわれている。

世界にあらわれている、全ての者にとって最も明らかに神聖な唯一の物とは、思いやりである。

真の宗教の務めとは、思いやりの精神を引き起こし、保護し、他へ広げる事であるべきである。

思いやりの精神を引き起こし、保護し、他へ広げるという目的を達成するには、真の宗教は自ら、思いやりの全ての特徴を所有する必要が有る。

真の宗教が思いやりを体現すれば、人は、「組織的な思いやり」、「思いやりの組織」、「思いやりによる相互扶助組織」という名前を真の宗教に与えて、真の宗教を満足に定義できる。

さて、思いやりの特徴とは何であろうか?

コリント人への第１の手紙13章４節から７節で、使徒パウロが、思いやりの特徴を人に教えてくれるであろう。

「思いやりは忍耐強い」

「慈愛は忍耐強い」

「愛は忍耐強い」

神の様に、思いやりは、忍耐強い。

なぜなら、神が永遠である様に、思いやりは永遠である。

思いやりが有る者は、迫害を忍耐し、他者を迫害しない。

思いやりが有る者は、親切であり、愛情を表し、幼子といった「小さい者」を呼び寄せ、大いなる者を追い払わない。

思いやりが有る者は、嫉妬しない。

誰に、何について、思いやりが有る者が嫉妬するというのか？　いいえ！　思いやりが有る者は、嫉妬しない！

他のものが持っているよりも、思いやりには、奪われる事が無い、より良い(神からの)分け前が無いか？　はい！　他のものが持っているよりも、思いやりには、奪われる事が無い、より良い(神からの)分け前が有る！

思いやりが有る者は、言い争いを好まず、陰謀を企まない。

思いやりが有る者には、傲慢、野心、利己心、怒りが無い。

思いやりは、悪い事を考えず、不正に勝利しない。

実に、全ての者は、思いやりによる喜びに理解を示す。

思いやりは、常に悪は許さないが、全てのものを忍耐する。

思いやりは、全ての者を信じる。

思いやりによる真の宗教は、簡潔であり、従順であり、位階制であり、普遍である。

思いやりは、全てのものを支え、思いやりが先に負わない重荷を他者に負わせない。

大いなる思索家と殉教者による真の宗教は、忍耐強い。

イエス キリストと 12 使徒の様に、ヴァンサンド ポールの様に、フランソワ フェヌロンの様に、真の宗教は、思いやり深い。

真の宗教とは、カトリックである。

真の宗教の信者は、地の位階や物に嫉妬しない。

真の宗教は、「荒野の教父」の宗教、アッシジのフランチェスコの宗教、ケルンのブルーノの宗教、ヴァンサンド ポールの「愛徳姉妹会」の宗教、「聖ヨハネ病院修道会」の宗教である。

真の宗教の信者は、言い争いを好まず、陰謀を企まない。

真の宗教の信者は、祈り、善行をし、待機する。

真の宗教の信者は、謙虚である。

真の宗教の信者は、感じの良い者である。

真の宗教は、献身と自己犠牲だけを鼓舞する。

要約すると、真の宗教には、思いやりの全ての特徴が有る。

なぜなら、真の宗教とは、思いやり、その物である。

逆に、人は、忍耐が無くて怒り易く、迫害者であり、嫉妬深く、残酷であり、野心に燃え、不公正である。

人は、中傷に成功した真の宗教の名前、命をもたらす気が無い真の宗教の名前においてすら、自身が忍耐が無くて怒り易く、迫害者であり、嫉妬深く、残酷であり、野心に燃え、不公正であると示す。

人は滅ぶが、真理は永遠である。

思いやりは思いやりの娘として真の宗教をもたらし、真の宗教は思いやりの更なる創造主として思いやりを更にもたらす。

本質的に、真の宗教は、実現する者である。

真の宗教は、真の宗教による、思いやりといった奇跡を信じる。

(他の奇跡よりも、他人を思いやれる事は奇跡的である。)

なぜなら、毎日、真の宗教は自ら、慈善行為を実践して、思いやりといった奇跡を成就している。

慈善行為を実践する宗教は、慈善行為を実践する宗教が神の思いやりの全ての夢を実現できると自惚(うぬぼ)れても良い。

さらに、位階制の教会の宗教であるカトリックは、秘跡の効力によって、神秘主義を現実主義に性質改善できる。

これ以上、神の思いやりによる力が無い象徴、約束した物を実際にはもたらさない象徴は、いらない!

真の宗教は、命を全てのものにもたらす。

ある程度、真の宗教は、全てのものを、目に見え、手で触れられるものにする。

イエス キリストの例え話ですら、体と魂と成る。

イエス キリストの例え話は、血肉と成る。

エルサレムで、人は、ルカによる福音 16 章 19 節から 31 節の例え話の悪い金持ちの家を実際に見る事ができる!!

科学が打ち倒して信心という命を奪ってしまった、精神を失くした形骸化した古代の宗教の象徴は、エゼキエル書 37 章で預言者エゼキエルが幻視で見た、色を失った骨が散って覆っている平野に似ている。

エゼキエル書 37 章 9 節で、救い主イエスの精神、真の宗教の精神、思いやりの精神が、色を失った骨の様に形骸化した象徴という塵に息を吹き込んだ。

イエスの精神、真の宗教の精神、思いやりの精神が形骸化した象徴に息を吹き込むと、死んだ全てのものは、命を再び取り戻して、復活した。

　イエスの精神、真の宗教の精神、思いやりの精神によって復活した、現在、生きているものは、過去、死体であったと、もう人が思い出せないほど現実的に命に満ちあふれている。

　イエスの精神、真の宗教の精神、思いやりの精神によって世界が復活したのに、使徒行伝 19 章 19 節で使徒パウロはエフェソスの大衆が秘儀祭司の書物を燃やすのを止めなかったのに、なぜ、象徴が形骸化していたと人は思い出せるであろうか？いいえ！　イエスの精神、真の宗教の精神、思いやりの精神によって世界が復活したので、使徒行伝 19 章 19 節で使徒パウロはエフェソスの大衆が秘儀祭司の書物を燃やすのを止めなかったので、象徴が形骸化していたと人は思い出せない！

　使徒行伝 19 章 19 節でエフェソスの大衆が魔術の書物を燃やすのを止めなかった使徒パウロは、粗野であったか？

　知に対して罪を犯したのか？

　いいえ。

　ただ、使徒行伝 19 章 19 節で使徒パウロは、復活した魔術の、過去の遺物という屍衣だけをエフェソスの大衆が燃やすのを止めなかったに過ぎない。

　使徒行伝 19 章 19 節のエフェソスの大衆は、復活した魔術の、過去の死を忘れていた。

　それでは、なぜ、現代、エリファス レヴィは真の宗教の教えのカバラ的な起源を思い出させせようとしているのか？

　なぜ、エリファス レヴィは聖書の象徴とヘルメスの象徴のつながりを再確認させようとしているのか？

使徒行伝 19 章 19 節でエフェソスの大衆が魔術の書物を燃やすのを止めなかった使徒パウロを非難するためか？　いいえ！　真の宗教であるカトリックの信者に不信を抱かせるためか？　いいえ！

なぜなら、実は、真の宗教の信者には、エリファス レヴィの本は不要である。

真の宗教の信者は、エリファス レヴィの本を読まないであろう。

真の宗教の信者は、エリファス レヴィの本の内容の理解を望まないであろう。

エリファス レヴィは、宗教に不信を抱く無数の大衆に、真の宗教が全ての時代の論理、全ての賢者の知と結びついている事を示したいのである。

真の宗教という神聖な権威が人の自由意思と人の理性を再び迫害できない様にするため、エリファス レヴィは、人の自由意思に真の宗教という神聖な権威を畏敬させたいし、人の理性に真の宗教の根拠を認めさせたいのである。

第１部 第３条

　第３の問題の解決

　唯一の真の普遍の宗教の全ての神秘の意味と「存在理由」を表す事

　神秘の論理的根拠

　宗教とは、未知のものへの向上である。

　未知のものへの向上である宗教の、目標とは、絶対的に、必然的に、神秘という唯一のものに成る。

　宗教という未知のものへの向上を形にするために、宗教は、既知のものの向上心と形を借りる必要が有る。

　未知のものを形にするために、宗教は、既知の形には通常あり得ない通例とは異なる配置方法で既知の形を適切に配置して、未知のものと既知の形を１対１対応させて利用する。

　未知のものを形にするために、既知の形には通常あり得ない通例とは異なる配置方法で既知の形を適切に配置する事が、一見、象徴は不条理に見える、深い理由である。

　例を示そう。

もし宗教が「神は、人格ではない」と教えたら、人は「神は、法則の様な心を持たない言葉の様な物に過ぎないか、良くて、目に見えない機械の様な自由意思の無い物に過ぎない」と決めつけるであろう。

もし宗教が「神は、一個の人格である」と教えたら、人は「神は、必然的に、個人の有限の形の、無限の知的存在である」と決めつけるであろう。

そのため、真の宗教であるカトリックは、人が「神は単一である、と共に、神は多数である」と考える様に表現するために、「神は三位一体の人格である」と教える。

宗教が象徴をこの世の既知のものから借りている限り、神秘の象徴は、象徴として借りている既知のものの知識を必然的に思考時に排除する。

なぜなら、もし人が思考時に象徴として借りている既知のものを理解したままでいたら、象徴は既知のものを表してしまい、未知のものを表さなく成ってしまうであろう。

もし人が思考時に象徴として借りている既知のものを理解したままでいて、象徴が既知のものを表してしまい、未知のものを表さないと、象徴は知っているものと成ってしまい、宗教のもの、信じるものではなく成ってしまうであろう。

信じる対象とは、代数 x が代数学では処理できない数学の問題である(、と言える)。

絶対の数学は、必然的に、結果的に、有限の数に置換できない代数 x で表現した、未知のものの存在を証明するに過ぎない。

現在、いたずらに、科学は、進歩している。

科学の進歩は、無制限ではなく、常に、相対的に制限されている。

科学は、有限のものによる言葉による、神秘といった無限のものの完全な表現を見つけられない。

神秘とは、無限である。

信仰告白における言葉を既知のものの論理に持ち込む事は、信仰告白における言葉を宗教から引き離してしまう事に成る。

確信の根拠として、信心には不条理な部分が存在する。

言い換えると、確信の根拠として、信心には未知のものを論理的には表現できない部分が存在する。

ユダヤ教徒にとって、神は、人とは隔絶している。

神は、被造物の中には宿らない。

神は無限の自我主義者である。

イスラム教徒にとって、人は、ムハンマドという権威に従って、神という言葉の前に平伏す。

キリスト教徒にとって、神は、人に成った神イエスなどの様に、神自身を人の中に啓示してきた。

神は、思いやりによって、神自身を証明している。

神は、位階を形成している秩序の徳、位階を形成している秩序の力によって、統治している。

位階制は、神の教えの守護者である。

位階制への畏敬を求めるのと同じ様に、位階制は、神の教えの霊と文字、神の教えの精神と象徴、神の教えの概念と形への畏敬を求める。

異端者は、異端者自身の理性を名目に、と言うよりは、異端者個人の狂気により、神の教えに手をつけてしまい、神の教えに手をつけてしまうという行為によって思いやりの精神を失ってしまい、異端者自身を破門してしまう。

カトリック教会の教えは、世界の全ての宗教的な向上を唯一に統一するので、「カトリック」という大いなる名前に相応しい。

普遍の神の教えは、世界の全ての宗教的な向上を唯一に統一するので、「普遍」という大いなる名前に相応しい。

モーセとムハンマドと共に、普遍の教会カトリックは、神の唯一性を認める。

ゾロアスター、ヘルメス、プラトンと共に、普遍の教会カトリックは、神自身の中における、神自身を再生する事による、無限の三位一体を認める。

普遍の教会カトリックは、ピタゴラスの生きている数を、使徒ヨハネの唯一の神の言葉イエスと一致させる。

それほど、知や学問と、人の理性は一致する。

そのため、知自身の目や学問自身の目には、人の理性自身の目には、宗教の最も完全な教えは、この世に常にもたらされている、様に見える。

それほど、知や学問と、人の理性が、普遍の教会カトリックを認めます様に。

エリファス レヴィは、普遍の教会カトリックを認める事、以上を、知や学問と、人の理性に求めない。

モーセは、「神は存在する。唯一の神だけが存在する。神は悪事を行う人をこらしめる」と話している。

イエスは、「神は遍在する。人の中にも神は存在する。人に成った神イエスのために、人が善行をする事は、神のために行った事に成る」と話している。

「神を畏敬しなさい」と言うのが、人モーセの考えの結論である。

「神を愛しなさい」と言うのが、人に成った神イエスの教えの結論である。

人の中の神という命の理想は、人に成った神である。

人に成った神は、身代わりによる罪のつぐないによる救いを必然的に伴う。

連帯による可逆性という名前において、人に成った神は、身代わりによる罪のつぐないによる救いを行う。

言い換えると、思いやりの精神という良い意味で独善的な原理による、普遍の交流という名前において、人に成った神は、身代わりによる罪のつぐないによる救いを行う。

人は、プロテスタントや民主主義の結果、法による公正な独裁の代わりに、人による裁きを利用してしまう。

言い換えると、人は、プロテスタントや民主主義の結果、暴君を権力者の地位に置いてしまう。

(真の自由ではない、)人が自由と呼んでいる物は、不法な権力者を認める事に成ってしまう。

と言うよりは、(真の自由ではない、)人が自由と呼んでいる物は、権威が認めない権力による虚構を認める事に成ってしまう。

ジャン カルヴァンは、ミシェル セルヴェを私刑で火刑で焼き殺す権利を獲得するために、ローマによる火刑に対して抗議した。

チャールズ 1 世から解放されたイギリスなどの大衆はクロムウェルの独裁を経験する羽目に成った。

ルイ 16 世から解放されたフランスの大衆はロベスピエールの「恐怖政治」を経験する羽目に成った。

プロテスタントや民主主義には、多かれ少なかれ、正統な法王に対する抗議という対立教皇の様な狂愚が存在する。

カトリック教会には、イエス キリストの神性だけが存在する。

イエスは、位階制によって、人に成った神イエスの命と「神の力」をカトリック教会に伝え残した。

カトリック教会という交流による徳、カトリック教会という交流による力によって、イエスの神性は、王者と祭司だけの物である。

カトリック教会という交流の外での(カトリック教会から分裂しての)イエス キリストの神性への肯定は、(イエスの精神、思いやりの精神を伴わない、)偶像崇拝に成ってしまう。

なぜなら、イエス キリストは分裂した神ではない。

カトリックの真理にとって、プロテスタントの人数は重要ではない。

仮に、全ての人が盲目でも、太陽の存在を否定する理由に成るであろうか？　いいえ！　全ての人が盲目でも、太陽の存在を否定する理由に成らない！

人の理性は、神の教えに抗議する事によって、「人の理性が神の教えを発明したわけではない」事を十分に証明している。

人の理性は、神の教えがもたらした倫理道徳を敬礼せざるを得ない。

もし、倫理道徳が光であるならば、神の教えは太陽である。

影は光をもたらさない。

多神論と非論理的な無知な一神論という 2 つの底無しの淵の間の中庸には、最も神聖な、神の三位一体の神秘だけが唯一、存在可能である。

推測による有神論と神人同形論という 2 つの底無しの淵の間の中庸には、人に成った神イエスの神秘だけが唯一、存在可能である。

不道徳な必然性と、全ての人の滅び、全ての人の地獄堕ちを定めるであろう厳しい責任という 2 つの底無しの淵の間の中庸には、イエスによる身代わりによる罪のつぐないによる救いの神秘だけが唯一、存在可能である。

「神の三位一体、人に成った神イエス、イエスなどによる身代わりによる罪のつぐないによる救い」は「信仰、希望、愛」である。

神の三位一体は、信仰である。

人に成った神イエスは、希望である。

イエスなどによる身代わりによる罪のつぐないによる救いは、愛である。

神の三位一体は、9 位階の位階制と成る。

人に成った神イエスは、カトリック教会の神聖な権威と成る。

身代わりによる罪のつぐないによる救いは、唯一絶対の誤りが無いカトリックの普遍の祭司の務めと成る。

カトリック教会だけが、不変の神の教えを所有している。

カトリック教会だけが、カトリック教会の性質によって、倫理道徳性を堕落させる事ができない。

なぜなら、カトリック教会は、変革しないで、説明する。

そのため、例えば、無原罪 処女懐胎の教えは、新しくない。

無原罪 処女懐胎の教えは、エフェソスの公会議の「(聖母)マリアは聖母である」と定めた教えの中に含まれている。

「(聖母)マリアは聖母である」という教えは、人に成った神イエスについてのカトリック教会の教えが厳正にもたらした結果である。

同様に、カトリック教会は、破門を宣言するが、破門を実行しない。

カトリック教会だけが、破門を宣言できる。

なぜなら、カトリック教会だけが、単一性の守護者である。

使徒ペトロのカトリック教会という船の外には、底無しの淵しかない。

プロテスタントは、船酔いを避けるために水中に身を投じた人に似ている。

ヴォルテールは「もし神が存在しないのであれば、神を創造する必要が有るであろう」と神について非常に大胆に話したと言われているが、存在しないのであれば創造する必要が有るものは、ローマのカトリック教会が定めているカトリック教義である。

ただし、もし人が思いやりの精神を創造できたのであれば、思いやりの精神の体現者である人は神を創造した事に成る。

思いやりが、思いやりを発明したわけではない。

思いやりは、思いやりによる慈善行為で、思いやりを表す。

この世の救い主イエスと共に、慈善行為で思いやりを表した人は、マタイによる福音５章８節の「心の清い人達は幸いである！　心の清い人達は神を見るから！」という言葉を叫ぶ事ができる！

思いやりの精神を理解する事は、全ての神秘を理解する事である。

第１部 第４条

第４の問題の解決

哲学の反対を真の宗教に役立つ論拠へ変える事

宗教に対する反論によって(逆に)証明された宗教

科学か、人の理性か、他の宗教の名前において、人は、真の宗教であるカトリックに対して反論する。

しかし、科学は、宗教が存在する事実、宗教が確立されている事実、宗教が歴史の出来事に影響を与えた事実を否定できない。

科学が神の教えに手を出すのは禁じられている。

神の教えは宗教だけの物である。

通常、科学は、宗教に対して、一連の事実で理論武装する。

事実を評価するのは、科学の義務である。

事実、科学は事実を徹底的に評価する。

しかし、宗教は、科学よりも更に精力的に、事実を非難する。

宗教による事実への非難によって、科学は、宗教の正しさと、科学の誤りを認める事に成る。

科学には、道理、倫理が欠けている。

科学は、激情を人の精神にもたらしてしまう不具合を明らかにしてしまった。

科学は、思いやりの精神が科学を絶え間無く矯正して導く必要を認める事に成る。

人の理性は、神の教えを調べて、「宗教は不条理である」と知る。

しかし、仮に、宗教が不条理でなければ、人の理性は宗教を理解するであろう。

そして、仮に、人の理性が宗教を理解すると、もう宗教は未知のものの象徴ではなく成ってしまうであろう。

そして、宗教は、無限についての数学的な実証に成ってしまうであろう。

そして、宗教は、有限の無限、既知の未知、計測された計り知れない物、言い表せる言い様の無い物に成ってしまうであろう。

言い換えると、神の教えは、人の理性から見ると不条理である事をやめて、人の中の信心、知、理性、良識から見ると最も奇形で在り得ない不条理と成るだけであろう。

他の宗教による異議によるカトリック、キリスト教への反論が残っている。

ユダヤ教は、宗教的に、キリスト教の前身である。

ユダヤ教は、(神とイエスと神の聖霊による、神の三位一体によって、)キリスト教が神の単一性を損ねたと非難する。

ユダヤ教は、不変の永遠の法、律法を変えたと非難する。

ユダヤ教は、創造主である神の代わりに、被造物の人(に成った神)イエスを敬礼していると非難する。

ユダヤ教からのキリスト教への激しい非難は、キリスト教に対するユダヤ教による完全に虚偽の自説に基づいている。

キリスト教の神は、モーセの神であり、唯一の非物質的な無限の神であり、宗教の唯一の対象であり、常に同一の神である。

ユダヤ教徒の様に、キリスト教徒は、「神は遍在している」と信じている。

ただし、ユダヤ教徒が信じるべきである様に、キリスト教徒は、人の中でも、生きている、思考する、思いやる神を信じている。

人といった神の作品によって、キリスト教徒は、神を敬礼している。

また、キリスト教徒は、神の法、律法を変えなかった。

なぜなら、ヘブライ人への十戒は、キリスト教徒の法でもある。

神の法は不変である。

律法は不変である。

なぜなら、神の法、律法は、神の作品である自然の中の、神の傾向である永遠の原理に基づいている。

ただし、変化する人の欲求が、宗教を必要としているのである。

そのため、宗教は、宗教自身を変えて、人自身による変化に対応する事に成る。

「人の変化に対応するため宗教が変化する」とは、「言葉が変化する様に、宗教の意味は不変であるが、宗教の形は変化する事に成る」事を意味する。

宗教とは、神の教えの形である。

宗教とは、言葉である。

(ヨハネによる福音１章イエスは神の言葉、神のロゴス)

もはや諸国民が言葉、宗教を理解しない時に、人は言葉、宗教を翻訳する必要が有る。

キリスト教徒は、モーセや預言者の宗教を翻訳したが、破壊しなかった。

人といった被造物によって神を敬礼している時に、キリスト教徒は、人といった被造物自体を神として敬礼してはいない。

人に成った神イエス キリストによって父である神を敬礼している時に、キリスト教徒は神だけを敬礼している。

ただし、人に成った神イエスという道を通じて、神は、人性、思いやりと結びついている。

人性を神聖化して、キリスト教徒は、人の神性を啓示している。

ユダヤ教徒の神の概念は非人間的である。

なぜなら、ユダヤ教徒は、人といった神の作品を通じて、神を理解する気が無い。

そのため、キリスト教徒は、肉だけのヘブライ人よりも、霊的にヘブライ人(が象徴している、正しい人)である。

キリスト教徒は、ユダヤ教徒と共に、ユダヤ教徒が信じている神を、ユダヤ教徒が信じているよりも、より善く信じている。

ユダヤ教徒は、キリスト教徒がユダヤ教徒から分裂したと誤って非難している。

しかし、正反対に、ユダヤ教徒が、キリスト教徒から分裂したい、キリスト教徒と区別されたい、と望んでいるのである。

キリスト教徒は、心を広く開いて、腕を大きく開いて、ユダヤ教徒が「イエスが人に成った神である」と信じる事を待ち望んでいる。

ユダヤ教徒と同じく、キリスト教徒は、預言者モーセの弟子である。

キリスト教徒は、ヘブライ人の様にエジプトの奴隷と成る事を嫌って出エジプトした。

ただし、キリスト教徒は、神の王国という約束の地に入門した。

しかし、ユダヤ教徒は、頑なに荒野に留まって、(思いやりが、心が、)死んでいる。

イスラム教徒は、イスラエルの未婚の子達である、と言うよりは、ヤコブの兄エサウの様に、イスラエルの遺産を相続していない人達である。

イスラム教徒が信じている事は、非論理的で支離滅裂である。

なぜなら、イスラム教徒は、「イエスは、大いなる預言者である(と言える)」と認めるが、キリスト教徒を不信心者ども、異教徒ども、反イスラム主義者ども、として扱う。

イスラム教徒は、「モーセは、神から霊感を与えられた」と認める。

けれども、イスラム教徒は、(「モーセは、神から霊感を与えられた」と認める)ユダヤ教徒を同胞と見なさない。

イスラム教徒は、盲目の預言者ムハンマド、運命論者ムハンマド、進歩と自由への反対者ムハンマドを盲目的に信じている。

それでも、キリスト教徒は、偶像崇拝者であったアラブ人の中で神の単一性を主張した栄光をムハンマドから奪うなかれ。

イスラム教の聖書クルアーンには、「神の他に神は無し」という清らかな崇高な言葉が存在する。

「神の他に神は無し」という言葉を読めば、人は、イシュマエルの子孫であるアラブ人と共に、「神の他に神は無し。ムハンマドは神の預言者である(と言える)」と言えるかもしれない。

天には、神の国の国民への、3 人の預言者のための、3 つの王座が存在する。

ただし、時の終わりに、預言者であると言えるかもしれないムハンマドから預言者エリヤへ交代するであろう。

イスラム教徒は、キリスト教徒を非難するなかれ。

イスラム教徒は、キリスト教徒を侮辱している。

イスラム教徒は、キリスト教徒を「犬」が語源である「giaours」、「不信心者ども」、「異教徒ども」、「反イスラム主義者ども」と呼んで侮辱している。

キリスト教徒は、イスラム教徒からの侮辱に対して何も応(こた)えない。

人は、トルコ人やアラブ人といったイスラム教徒の誤りを証明するなかれ。

人は、イスラム教徒を教育して文明化する必要が有る。

反カトリックのキリスト教徒が残っている。

言い換えると、反カトリックのキリスト教徒は、神の単一性という結びつきを破壊して、カトリック教会の思いやりから外れた者という正体を現してしまっている人達である。

ローマのカトリック教会の双子の兄弟である、ギリシャ正教は、カトリック教会から分裂してから成長していない。

ギリシャ正教は、もはや宗教に値しない。

フォティオス１世以降、ギリシャ正教は、雄弁の霊感を与えられなかった。

ギリシャ正教は、完全に俗化してしまった。

ギリシャ正教の聖職者は、ロシア皇帝が政策によって管理する機能でしかなく成ってしまっている。

ギリシャ正教は、もはやギリシャ正教の法王が理解していない伝説と儀式で飾られた、初期キリスト教の興味深いミイラである。

ギリシャ正教は、生きている教会の影である。

ただし、生きている教会が動いている時に、ギリシャ正教は、立ち止まっているべきであると主張してしまっている。

ギリシャ正教は、生きている教会の、肥大化したが指導者のいない愚かな影絵でしかない。

プロテスタントは、無政府主義の永遠の調整者である。

プロテスタントは、神の教えを叩き壊した。

ダナイデス姉妹のうち、意に反して結婚させられた夫を殺した 49 人の姉妹が冥界で穴の開いた容器で水を汲む天罰を受けた様に、プロテスタントは、推測で虚無を満たそうと常に試みている。

プロテスタントは、宗教的な妄想を編み出した。

プロテスタントの改悪は、実りが無い。

プロテスタントは、プロテスタントの役に立つ様に、既知よりも良く知られている未知と呼んで、未知をごまかした。

プロテスタントは、より良く説明された神秘と呼んで、神秘をごまかした。

プロテスタントは、より多く定義された無限、より多く制御された無限と呼んで、無限をごまかした。

プロテスタントは、より多く疑える信心と呼んで、信心をごまかした。

前記の様にして、プロテスタントは、不条理を曖昧にした。

プロテスタントは、プロテスタントの無政府主義の行動が、完全に在り得ないが、位階制の原理であると誤解して、思いやりを分裂させて、思いやりを裂いた。

プロテスタントは、(善行せずに、)信じるだけで救われようと望む人である。

なぜなら、思いやりを分裂させたプロテスタントから思いやりは逃げ去ってしまい、もうプロテスタントは地上ですら思いやりを実現できない。

なぜなら、プロテスタントの偽の秘跡は、もはや形骸化したミイラでしかない。

プロテスタントは、神の思いやりをもう与えられない。

プロテスタントは、神をもう見えるようにしたり手で触れられるようにしたりできない。

要約すると、プロテスタントは、もう信心の全能の力の象徴ではなく、不信の永遠の不能に圧倒された証拠と成ってしまっている。

そのため、プロテスタントによる「宗教改革」は、宗教自体に対する抗議であった!

プロテスタントは、罪悪感の強制を望む思いやりの無い迫害する熱狂に対して抗議のみする権利であった。

プロテスタントは、宗教に不信を抱く権利、他人よりも少ない信心を抱く権利や、全く信心を持たない権利すら主張した。

プロテスタントは、少ない信心を抱く権利という情けない特権のために、血を流した。

プロテスタントは、少ない信心を抱く権利を勝ち取って所有している。

しかし、プロテスタントは、カトリック教徒がプロテスタントに同情して思いやる権利を奪わないであろう。

プロテスタントの心を信じたい欲求が占めた時、
プロテスタントの心が、プロテスタントという無力な宗教へ曖昧に従う放心状態に飽きて、プロテスタントの根拠の無い教義による放心状態に飽きて、プロテスタントの虚偽の論理による横暴に反感を抱いた時、
プロテスタントの交流に現実の存在感が無く成り、プロテスタントの教会に神性が無く成り、ついに、神の思いやりを与えられていないプロテスタントの倫理道徳がプロテスタントを脅かした時、
プロテスタントが神を信じる事のなつかしさで心を病んだ時、
プロテスタントは、ルカによる福音15章11節から32節の「放蕩息子」の様に悔い改めて復活して、「父である神よ、神に対して、神の目の前で、プロテスタントは、神への不信を抱くという罪を犯してきました。プロテスタントは、もう『神の子』と呼ばれるに値しません。けれども、神よ、どうかプロテスタントを『神の最も卑しい下僕』として数えてください」と話して、使徒ペトロの後継者であるカトリックの法王の足元に身を投げ出しに来ないか？　はい！

カトリック教徒は、ヴォルテールの批判の詳細について話すつもりは無い。

ヴォルテールという偉人は、真理と正義への熱烈な愛に支配されていた。

ただし、ヴォルテールは、心の正しい判断力に欠けていた。

神を信じる知は、心の正しい判断力を与える。

ヴォルテールは、宗教を認める事ができなかった。

なぜなら、ヴォルテールは、思いやる方法を知らなかった。

(キリスト教の教えとは、思いやる方法である、と言える。)

思いやりの精神は、思いやりが無いヴォルテールの魂に、思いやりを啓示しなかった。

ヴォルテールは、ヴォルテールが心の暖かさを感じられなかった家庭の団欒と、ヴォルテールの心の目が光明を見い出せなかったランプであるキリスト教を、激しく批判してしまった。

仮に、宗教がヴォルテールが誤解した様な代物であれば、ヴォルテールは宗教を口撃する権利を千倍持っていたであろうし、宗教を口撃するヴォルテールの勇気ある英雄的行為の前に人はひざまずく事を余儀なくされたであろう。

仮に、宗教がヴォルテールが誤解した様な代物であれば、ヴォルテールは良識への救い主、狂信の破壊者ヘラクレスに成ったであろう……。

しかし、ヴォルテールは、マタイによる福音５章４節で「悲しんでいる人は幸いである」と話している人に成った神イエスを理解するには、イエスを笑いものにし過ぎてしまった。

ヴォルテールというキリスト教を笑いものにした哲学者は、涙についての宗教であるキリスト教と共通点を持つ気が無かった。

ヴォルテールは、聖書の言葉、キリスト教の教えの言葉、信心による言葉を改悪し、笑いものにして侮辱してしまった。

ヴォルテールの改悪した聖書などの言葉によってキリスト教を誤認した人だけが、キリスト教に対して怒れるのである。

ヴォルテール派は、イソップ寓話の、神ユピテルへ王を与える様に求めたカエルの群れと似ている。

イソップ寓話のカエルは、神ユピテルが王として与えた丸太が大人しいと知ると、王である丸太の上に飛び乗って笑いものにした。

ヴォルテール派が、キリスト教という大人しい丸太が笑いものにしてよい王であると誤解するのは自由である。

ヴォルテール派が、かつてテルトゥリアヌスが笑いものにした、ロバの頭を持つ人の姿をした偽の神がキリスト教の神として誤って描かれているローマの風刺画を再生するのは自由である。

キリスト教徒は、ヴォルテール派の非行を見て肩をすくめ、キリスト教徒を辱める事ができたと誤って思い込んでいる気の毒な愚者のために神に祈る。

ジョゼフ ド メーストル伯爵は、雄弁な逆説の１つで絞首刑執行人を地上における神の正義の永遠の化身という神聖な存在として表現して、フランスのフェルネヴォルテールで「フェルネの家長」と呼ばれているフェルネを発展させた恩人である老人ヴォルテールのために、絞首刑執行人が絞首刑を執行している姿の像を建てる様に人へ提案した。

ジョゼフ ド メーストル伯爵の考えは深い。

実際に、ヴォルテールも、この世で、神が与えた畏敬するべき働きを果たすために、神が無感覚なほどの冷酷さを与えた、神意的な存在であった、と共に、死をもたらす存在であった。

ヴォルテールは、知の領域、哲学の領域において、神の正義で武装した、絞首刑執行人、(悪人を自滅させる)害虫駆除業者であった。

神は、神学者ボシュエの精神とナポレオンの精神という 2 つの精神を分裂させるものを滅ぼして、神学者ボシュエの精神とナポレオンの精神という 2 つの精神を唯一に統一するために、神学者ボシュエの 17 世紀とナポレオンの 19 世紀の間の 18 世紀にヴォルテールをこの世に派遣した。

ヴォルテールは、神殿の 2 つの柱を揺さぶる覚悟が常にある、精神におけるサムソンであった。

ヴォルテールが知らずに、ヴォルテールがキリスト教の進歩のための石臼に変わる様に、神意は、ヴォルテールの心を盲目にした。

第1部 第5条

　最後の問題の解決

　宗教と迷信の間に境界線を引く事と、奇跡と驚異現象の論理をもたらす事

　宗教と、迷信と狂信の区別

　「迷信」を意味するsuperstitionの語源はラテン語で「上に立つもの」、「生き残ったもの」を意味するsuperstitioである。
　意味の死後も残存している形骸化した迷信とは、意味である概念の死後も残存している形骸化した象徴である。
　迷信とは、概念よりも好まれた形骸化した形である。
　迷信とは、論理無しの形骸化した儀式である。
　分裂して孤立している信仰は、無感覚に成り、結果として、迷信という死体に成り果ててしまう。
　迷信は、分裂して孤立して無感覚に成って死んだ、信仰の死体である。
　迷信とは、命の死である。
　迷信とは、霊感の劣悪な代替としての、麻痺状態である。
　狂信とは、熱狂している迷信である。
　「狂信」を意味するfanaticismの語源はラテン語で「神殿」を意味するfanumである。

狂信とは、神の劣悪な代替としての、神殿という形骸化した物質への偶像崇拝である。

狂信とは、祭司の務めの栄光の劣悪な代替としての、聖職者への人間的な俗な好奇心である。

人は、劣悪な熱狂において、信者としての信心を悪用する。

寓話でラ フォンテーヌは、「敬礼される聖遺物を背負ったロバは、『ロバ自身が敬礼されている』と誤って思い込んだ」と話しているが、寓話でラ フォンテーヌは、「実際に、何人かは、『迷信家は、聖遺物よりも、聖遺物を背負ったロバ自体を偶像崇拝している』と考えた」とは思い至らず、話せなかった。

仮に、人が、迷信家の狂愚を笑いものにしたら、迷信家である狂信者によって殺される事も正にあり得るであろう。

なぜなら、迷信から狂信までは、たった一歩の近さである。

迷信とは、愚者である狂人が曲解した信仰である。

狂信とは、怒る口実として悪用されている信仰である。

意図して悪意を持って宗教を迷信や狂信と混同する人は、盲目的な先入観を狂愚から盗用している。

また、多分、同様に、意図して悪意を持って宗教を迷信や狂信と混同する人は、不公正と怒りを狂信から盗用しているのである。

宗教裁判官どもにしろ、「フランス革命」の「九月虐殺」の虐殺者どもにしろ、名前は問題ではない！

イエス キリストのキリスト教は、殺人を常に非難してきたし非難する。

第１部の要約

対話形式で

信心、人知、人の理性の対話

人知「信心は神の存在を人知に信じさせる事ができないであろう」

信心「人知には信じるという特権は無いが、人知は神の不在を信心に証明できない」

人知「神の不在を信心に証明するためには、神とは、どのような存在であるか、という定義を先に知る必要が有る」

信心
「人知は、神とは、どのような存在であるか、知る事は無いであろう。
もし人知が、神とは、どのような存在であるか、知っていたら、人知は、神とは、どのような存在であるか、信心に教える事ができたはずである。
信心が、神とは、どのような存在であるか、知ったら、もう信心は、神を信じる必要が無い」

人知「信心は、信じているものを知らないで、信じているのですか？」

信心

「おおっ！　言葉遊びをするなかれ！

人知こそ、信心が信じているものを知らない。

人知は神を知る事ができないので、正に、信心は神を信じているのである。

人知は無限であるふりをするのですか？

人知は有限であるのに？

神秘によって、人知は全ての歩みを止めないのですか？

もし信心が燃えている向上心で神秘を明かさないと、もし人知が『神を知る事ができない』と話した時に信心が『人知には神を知る事ができないので、信心は神を信じ始める』と叫ばないと、神秘は、人知の有限の知を何も減衰させない、人知にとっては無限の未知のままである」

人知「信心の向上心と、信じる対象は、仮定でしかない(。人知にとっては、信心の向上心と、信じる対象は、仮定でしかあり得ない)」

信心

「疑い無く、信心にとっては、信心の向上心と、信じる対象は、確実なものである。

なぜなら、信心の向上心と、信じる対象という仮定が無いと、人知において確実なものについてすら信心には疑わしく成ってしまう」

人知

「もし人知があきらめる所から信心が始めるのであれば、信心は常に早々に余りにも軽率に始める事に成る。

人知の進歩は証拠をもたらす。

人知は、人知の進歩がもたらす証拠を常に向上させて行く」

信心「信心が常に人知の前を進んで行くのであれば、人知の進歩は信心とは無関係では？」

人知

「信心が、進む？!

信心は、永遠の夢想家である。

信心は地を軽視し過ぎである。

信心の足は麻痺している」

信心「信者は信心を伴って進んで行く」

人知

「信者は、盲人であり、盲人を導いている。

せいぜい危険な断崖絶壁には注意しなさい！」

信心

「いいえ。

信者は、盲人には成り得ない。

逆に、信者は、人知と信心という2通りの観点を楽しむ。

人知による観点によって、信者は、人知が地上で見せる事ができるものを見る。

信心による観点によって、信者は、信心が天で見せるものを観じて熟考する」

人知「人の理性は、どう思う？」

人の理性

「人知と信心という畏敬するべき教師達よ、人の理性は、(信心による)心に触れる盲人の例え話や足が麻痺していた中風患者の例え話を、人知が実例で明らかにしてくれる、と思っている。

人知は、『信心は、地上の歩き方を知らない』と非難する。

信心は、『天における、信心による向上と、永遠については、人知の目には見えていない』と話している。

人知と信心は、言い争う代わりに、一致協力するべきである。

人知は、信心、倫理を伴って進みましょう。

信心は、希望と思いやりを人知に教えて、人知を慰めましょう」

人知

「人知と信心の一致協力は、良い理想ではあるが、非現実的である。

信心は、人知に不条理を教えるであろう。

人知は、信心無しで進む事を選ぶ」

信心「人知が不条理と呼ぶものは何ですか？」

人知

「人知の実例に反する信心の考えを、人知は不条理と呼んでいる。

例えば、『神の三位一体として、数３は数１である』事、『イエスとして、神が人に成った』事、といった様な事である。

言い換えると、『無限の者である神が有限を形成している』事、『無限の者である永遠の者である神が(まとっていた肉体が)死んだ』事、『父である神が、無罪である神の息子イエスを、有罪である人の罪の身代わりとして、十字架刑という苦しい目に遭わせた』事などである……」

信心

「もう人知は神秘について語らないでください。

すでに語られた様に、実際、神秘の事柄は、不条理である。

神について知らない人知は、神の数とは何か知っているのか？

人知は、未知のものからの作用について論理的に判断できるのか？

人知は、思いやりの神秘を理解できるのか？

常に、信心は、人知にとっては不条理である。

なぜなら、もし人知で神秘を理解できたら、人知による原理は、信心による断言を飲み込んでしまう。

もし人知で神秘を理解できたら、人知と信心の差異が無く成る、と言うよりは、もっと良く言えば、信心が存在できなく成ってしまう。

人の理性は、無限の者である神の前では迷ってしまうであろうし、人知による、空間と同じくらい無限な疑問によって永遠に盲目に成ってしまうであろう」

人知

「少なくとも、信心は人知の権限を侵害するべきではない。

また、信心は人知の分野では人知が虚偽であると非難するべきではない」

信心「信心は、人知を侵害した事は無いし、人知を侵害できない」

人知

「それでは！　例えば、『物質の物理的な自然な現実の秩序の中で、自然の法にもかかわらず、処女マリアは処女のまま聖母に成った』と信心は信じた事が無いのですね。

『一欠片の聖体のパンは、人に成った神イエスだけではなく、骨、血管、器官、血を伴った現実の人イエスの肉体でもある』と信心は断言しないのですね。

要約すると、『聖体のパンを食べた信者をある種の人食い人種にする』様な事を信心は断言しないのですね」

信心

「人知がかたった事に、反感を覚えないキリスト教徒はいない。

人知がかたった事は、人知が信心の教えの実際の大まかな意味を理解していない事を十分に証明している。

信心が断言する超自然的な物事は、自然を超越しているので、結果、自然に反しない。

信心だけが、信心による言葉を理解できる。

人知は、信心による言葉を、真意を誤解して、くり返すだけに違いない。

信心は、他に無いので、人知の既知の言葉を用いている。

しかし、人知は、『信心による言葉は不条理である』と感じるのであれば、『信心は、人知がとらえられない意味を人知の既知の言葉に与えている』と判断するべきである。

ヨハネによる福音 6 章 63 節で、救い主イエスは、現実の存在についての教えを啓示する時に、『(肉は例えである。霊感にとって実際の)肉は何の役にも立たない。私イエスの、言葉が霊であり命である』と言わなかったか？　言った！

信心は、人に成った神イエスの神秘を、解剖学的な現象としては人知に知らせていない。

信心は、聖体のパンと赤ワインがイエスの血肉、イエスの精神に『化体』している神秘を、化学的な操作としては人知に知らせていない。

人知は、何の権利で、『神秘は不条理である！』と叫ぶのか？　人知には『神秘は不条理である！』と判断する権利は無い！

信心は、人知の既知の全ての物事について判断しない。

人知は、何の権利で、『信心は非論理的に話す』とかたるのか？」

人知

「人知は、信心について理解し始めた、と言うよりは、信心について理解できないと

理解した。

人知は信心について理解できないので、人知と信心は離れたままでいよう。

人知は、信心を必要としない」

信心

「信心は傲慢ではないので、信心は、多分、人知が信心の役に立つと認めている。

多分、信心無しでは、人知は非常に悲しみ絶望するであろう。

論理である神が許可しない限り、信心は、人知から離れるつもりは無い」

人の理性

「信心か人知の一方だけに成らない様に良く注意してください！

人の理性には、信心と人知の双方が必要である。

人の理性は、信心と人知無しで何ができるでしょうか？

正しく成るために、人の理性には、知る事と信じる事が必要である。

ただし、人の理性は、知っている事と信じている事を混同してはいけない。

知っている事は、もう信じる対象には成れない。

信じる事ができる対象は、今はまだ知らない事である。

人知の対象と成るのは、既知のものである。

信心は、既知のものに従事せず、既知のものを全て人知に任せる。

信心の対象と成るのは、未知のものである。

人知は、未知のものを探求するかもしれないが、定義できない。

少なくとも一時的に、人知は、人知には批判すら不可能である、信心による定義を受け入れる事を余儀なくされる。

しかし、もし人知が信心を放棄するのであれば、人知は希望と思いやりも放棄する羽目に成ってしまう。

思いやりの存在性と必要性は、信心にとって明らかである、のと同じくらい、人知にとって明らかである。

心理学的な事実として、信心は、人知の分野と関係している。

人の知性の中における神の光の表れとして、人知は、信心の分野と関係している。

そのため、人知と信心は、常に一方が他方を侵害せずに、相互に、認め合い、畏敬し合い、支え合い、必要な場合には助けを与え合う必要が有る。

人知と信心を一致協力させる方法とは、人知と信心を混同しない事である。

人知と信心の間には、矛盾は存在できません。

なぜなら、人知と信心が同一の言葉を用いても、人知と信心は同一の意味を話していない」

信心「おおっ、では、姉妹である人知よ、人知と信心の一致協力について、どう思いますか？」

人知
「『人知と信心は、悲しむべき誤解によって分裂しているが、今後は共に進める』と人知は思っている。
しかし、信心は、様々な宗教のうち、どの宗教に人知を結びつけたいと望んでいるのか？
人知は、ユダヤ教徒に成るのか、カトリック教徒に成るのか、イスラム教徒に成るのか、プロテスタントに成るのか？」

信心「人知は、知のままで、普遍に成る」

人知

「言い換えると、もし人知が信心を正しく理解できていれば、人知は普遍、カトリックに成るのですね。

しかし、人知は、様々な宗教について、どう思うべきなのですか?」

信心

「宗教(や人)は、行いによって判断しなさい。

真の思いやりを探しなさい。

(悪人は自分に都合の良い人に愛想良くしたり権力者に媚びへつらうが、悪人の思いやりは見せかけの偽物の思いやりである。)

真の思いやりを見つけたら、『真の思いやりが、どの宗教の物であるか?』真の思いやりに尋ねなさい」

人知「真の思いやりは、宗教裁判と『サン バルテルミの虐殺』の虐殺者の宗教であるカトリックであるキリスト教の物ではない事は確かですね」

信心「真の思いやりは、St. John the Almoner、フランシスコ サレジオ、ヴァンサンド ポール、フランソワ フェヌロン、その他多数の宗教であるキリスト教の物である」

人知「もし宗教が多数の善をもたらした事を認めるのであれば、宗教は多数の悪事を行った事も認めなさい」

信心

「出エジプト記 20 章 13 節で『殺すなかれ』と話している神の名前をかたって人が殺す時、

『(正しい人であれば、)敵を許しなさい』と命じている人に成った神イエスの名前をかたって人が迫害する時、

マタイによる福音 5 章 15 節で『升で光明を隠さない』様に教えているイエスの名前をかたって、人が闇を増殖させる時、

神の法が正に非難している犯罪を神の法のせいにするのは正しいであろうか?

もし正しくありたいと望むのであれば、『宗教が存在するにもかかわらず、地上で悪人は多数の悪事を行っている』と話しなさい。

しかし、また、宗教は多数の善行をもたらさなかったか?

宗教は、大衆が知らない、多数の献身、多数の自己犠牲をもたらした!

全ての悲しい務めの一翼を担うために、全ての快楽を放棄した男性と女性の双方の気高い心を考慮に入れたか?

労苦と祈りに身をささげた魂を考慮に入れたか?

善行をして、善行と共に道に散って行った人を考慮に入れたか?

孤児と老人のための保護施設、病人のための病院、悔い改めた人のための修道院を建てた人を考慮に入れたか?

孤児院といった、慎ましいが栄光に満ちた施設は、キリスト教会の歴史に満ちあふれている、現実の善行の業績である。

宗教戦争と異端者への迫害は、未開の時代の政治による物である。

さらに、異端者も、殺人者であった。

プロテスタントによる、ミシェル セルヴェへの私刑の火刑を忘れたのか？

宗教裁判と『サン バルテルミの虐殺』を憎んだプロテスタントの革命家による、依然として、人道と理性の名前において、くり返された、カトリックの祭司への虐殺を忘れたのか？

『常に、人は冷酷である』のは真実である。

しかし、『祝福』と『許し』が合言葉である宗教であるキリスト教の教えを人が忘れた時だけ、人は冷酷に成るのである」

人知

「おおっ！　信心よ！　それでは、もし人知が信心を信じる事ができなくても、人知を許してください。

しかし、今、人知は、なぜ信心が神や宗教を信じるのか知りました。

人知は、信心の希望を畏敬して、望みを信心と共有しています。

しかし、人知は、探求して、発見する必要が有る。

探求するために、人知は、疑う必要が有る」

人の理性

「それでは、行動しなさい！　探求しなさい！　おおっ！　人知よ！

ただし、信心からの神託を畏敬しなさい！

人知による疑いが普遍の光明の中に穴を残してしまう時は、信心が穴埋めする事を許しなさい！

人知と信心は、分かれて、進みなさい。

ただし、人知と信心は、互いに頼り合って、進みなさい。

そうすれば、人知と信心は、迷わないであろう」

第 2 部 哲学の神秘

第 2 部 予備考察

美は真理の輝きである、と言われている。

心の美とは、善である。

善であるのは美しい。

知的に善であるには、人は、正しく存在する必要が有る。

正しく存在するには、人は、論理的に行動する必要が有る。

論理的に行動するには、人は、現実について知る必要が有る。

現実について知るには、人は、真理を意識している必要が有る。

真理を意識するには、人は、存在についての正確な概念を所有する必要が有る。

存在、真理、論理、正義は、知の探究対象に共通する対象であり、信心の向上の対象に共通する対象である。

現実であろうと仮定であろうと、無上の力である神についての概念は、正義を神意に変える。

前記の観点から、神についての概念を知る事は、知自体に近づき易く成る事である。

知は、存在である神を、神の部分的な表れによって、学ぶ。

信心は、神を仮定する、と言うよりは、神を総合として「先験的」に認める。

知は、全てのものの中に、真理を探求する。

信心は、全てのものを、唯一普遍の絶対の真理に問い合わせる。

知は、現実を詳細に記録する。

信心は、現実の要約によって、現実を説明する。

知は、信心の現実の要約に、証拠を提供できない、しかし、知による現実の詳細の記録の存在は、知に、信心の現実の要約を認めざるを得なくさせている、様に思われる。

知は、人といった者の理性を、普遍の数学的な論理に従わせる。

信心は、数学自体として、また、数学を超越したものとして、知的な絶対の論理を探求する、と言うよりは、知的な絶対の論理を仮定する。

知は、正確さによって、正義を実証する。

信心は、正義を神意に従わせる事によって、絶対の正確さを正義にもたらす。

前記によって、人は、信心が知の力を借りている事と、知が信心の力を借りている事を全て理解する事に成る。

信心無しでは、知は、絶対的な疑いによって制限されてしまう。

信心無しでは、知は、推測的な疑いによる危険な経験主義の中に永遠に閉じ込められてしまう。

知無しでは、信心は、根拠無しに仮定を作ってしまう。

知無しでは、信心は、信心が知らない結果から、原因を盲目的に根拠無しに予断してしまう。

知と信心を区別してから統一する大いなる鎖は、類推可能性である。

知は、信心の仮定が、実証された真理と類推可能性が有るので、信心を畏敬する事を余儀なくされる。

信心は、全てのものを神に帰すため、知が自然の表れであるので、知を認める事を余儀なくされる。

自然の表れである、知は、永遠の論理の法の部分的な表れによって、つり合いの段階を、全ての向上心と、未知の領域へ踏み込む魂にもたらす。

　信心だけが、知の謎に答えをもたらす事ができる。

　知だけが、信心の神秘の必然性を実証する。

　知的存在の、知と信心という２つの生きている力を合流、結合しないと、知には疑いと絶望しかなく成ってしまい、信心には軽率さと狂信しかなく成ってしまう。

　もし信心が知を冒涜すると、信心は神を冒涜する事に成ってしまう。

　(知は神の双子の娘の妹であり、信心は神の双子の娘の姉である。)

　もし知が信心を誤解すると、知は王位を退く羽目に成ってしまう。

　(オイディプスの様に。)

　調和している知と信心の話を聞こう！

知「存在である神は、全ての場所に遍在する」

知

「存在である神は、神の諸形態においては、多様であり、可変である。

存在である神は、神の本質においては唯一であり、神の法においては不変である。

相対は、絶対の存在を実証している。

知性である神が存在の中に存在する。

知である神は、命を物質に与えて、物質を変えている」

信心「知である神は、全ての場所に遍在する」

信心

「命は、どの場所でも死に至らない。

命は、全ての場所で死に至らない。

なぜなら、全ての場所に遍在する、知である神が、命を統治、保持して導いている。

命の統治、命の保持と先導は、無上の知である神の表れである。

命の統治、命の保持と先導は、無上の知である神を表している。

知における絶対、知における絶対者、諸形態における無上の調整者、精神の生きている理想、霊の生きている理想が神である」

知「理想と一致している存在は真理である」

信心「理想と一致している真理は神である」

知「実証と一致している存在は現実である」

信心「信心の論理的な倫理的な向上心と一致している現実は神の教えであり神の考えである」

知「神の言葉(、イエス)と一致している存在は論理である」

信心「思いやりの精神と一致している無上の論理は神への従順と成る」

知「論理的な行動の動機と一致している存在は正義と成る」

信心「思いやりの原理と一致している正義は神意である」

全ての確信と、全ての希望の、無上の調和！

知における絶対と、思いやりにおける絶対の、無上の調和！

神の聖霊、思いやりの精神は、全てのものを調和させて、全てのものを神の光に変えるであろう。

神の聖霊、思いやりの精神は、知的存在の精神、知の精神、助言の精神、弁護者の精神、力の精神ではないか？　はい！　神の聖霊、思いやりの精神は、知的存在の精神、知の精神、助言の精神、弁護者の精神、力の精神である！

カトリックの祈りでは「イエスの精神、思いやりの精神は、必ず降臨して、言わば、新しい創世と成るであろう。イエスの精神、思いやりの精神は、地の面を一変させるであろう」と話している。

「パンセ」で哲学者パスカルは、信心を認めない疑い深い哲学にあてて、「哲学を馬鹿にする事こそ、真に、哲学する事である」、「哲学を笑いものにする事が、すでに哲学している」と話している。

しかし、もし知を足下に踏みにじる宗教が存在しても、知を足下に踏みにじる宗教を笑いものにする事が真に宗教的な行動に成るとは言わない。

なぜなら、全ての思いやりである、真の宗教は、何ものかを笑いものにする事を許さない。

ただし、人が、「妹である知を軽視する宗教は神の娘ではない！」と、知を踏みにじっている軽率な宗教に対して話して、知を踏みにじっている宗教が無知であると非難するのは正しい。

真理、現実、論理、正義、神意は、燃える五芒星の 5 つの光線である。

　真理、現実、論理、正義、神意という、燃える五芒星の中心に、知は、「存在(である神)」という言葉を書き記し、信心は、言い表せない神の名前を書き加える。

哲学の諸問題の解決

第2部 第1編

真理とは何か?

真理とは、存在と一致している概念である。

現実とは何か?

現実とは、存在と一致している知である。

論理とは何か?

論理とは、存在と一致している言葉である。

正義とは何か?

正義とは、存在と一致している行動の動機である。

絶対とは何か?

絶対とは、存在である。

存在より上のものである何ものかを人は考える事ができるか?

いいえ。

ただし、存在のうち、超越的な存在である何ものかを人は考える。

存在のうち、超越的な存在であるものとは、何ものか?

存在のうち、超越的な存在であるものとは、存在の無上の論理である。

存在の無上の論理を知っているか？

また、存在の無上の論理を定義できるのか？

宗教だけが、存在の無上の論理を認知して、存在の無上の論理を神と呼んでいる。

真理を超越する何ものかは存在するか？

既知の真理を超越するものである、未知の真理が存在する。

どうしたら、未知の真理について、論理的な仮定を人は構築する事ができるか？

類推可能性と、つり合いによって、未知の真理について、論理的な仮定を人は構築する事ができる。

どうしたら、未知の真理を人は定義できるか？

宗教の象徴によって、未知の真理を人は定義できる。

真理について人が言える事と同じ事が、現実について人は言えるか？

確実に、真理について人が言える事と同じ事が、現実について人は言える。

論理を超越する何ものかは存在するか？

有限の論理を超越するものである、無限の論理が存在する。

無限の論理とは何か？

無限の論理とは、存在の無上の論理である。

宗教は、存在の無上の論理を神と呼んでいる。

正義を超越する何ものかは存在するか？

はい。

宗教によると、正義を超越する、神による、神意が存在する。

また、宗教によると、正義を超越する、人による、自己犠牲が存在する。

自己犠牲とは何か？

自己犠牲とは、権利の自発的な放棄である。

権利の自発的な放棄という、自己犠牲は、理性的か？

いいえ。

権利の自発的な放棄という、自己犠牲は、人の理性よりも大いなる物であり、(愛の様に、)ある種の(神聖な)狂気である。

なぜなら、人の理性は、権利の自発的な放棄という、自己犠牲に感心せざるを得ない。

真理、現実、論理、正義に従って行動する人を、人は何と呼ぶか？

真理、現実、論理、正義に従って行動する人を、人は「倫理道徳的な人」、「高徳の人」と呼ぶ。

正義に関心を持って、正義に専念する高徳の人を、人は何と呼ぶか？

正義に関心を持って、正義に専念する高徳の人を、人は「名誉の人」、「栄光の人」と呼ぶ。

神意の雄大さと善良さを見習って、義務以上の善行をし、他者にとって善い事のために自分の権利を自己犠牲する高徳の人を、人は何と呼ぶか？

神意の雄大さと善良さを見習って、義務以上の善行をし、他者にとって善い事のために自分の権利を自己犠牲する高徳の人を、人は「英雄」(、「神の子」)と呼ぶ。

真の英雄的行為の原理とは、何か？

真の英雄的行為の原理とは、信仰である。

信仰の支えとは、何か？

信仰の支えとは、希望である。

信仰の法、信仰の命令、信仰の習慣、信仰のものさしとは、何か？

信仰の法、信仰の命令、信仰の習慣、信仰のものさしとは、愛、思いやりである。

善とは何か？

善とは、秩序である。

悪とは何か？

悪とは、無秩序である。

許される喜びとは何か？

許される喜びとは、秩序の喜びである。

禁じられている喜びとは何か？

禁じられている喜びとは、無秩序の喜びである。

秩序の結果とは何か？

無秩序の結果とは何か？

秩序の結果とは、精神の命である。

無秩序の結果とは、精神の死である。

地獄の恐怖の存在と、地獄の存在には、神の教えによる、正当な理由が存在するのか？

はい。

地獄の恐怖の存在と、地獄の存在の正当な理由とは、宗教的な、原因と結果である。

地獄の恐怖の存在と、地獄の存在の正当な理由である原因とは、何か？

地獄の恐怖の存在と、地獄の存在の正当な理由である原因とは、自由である。

自由とは何か？

自由とは、自分の義務を果たさない可能性を持ちながらも、自分の義務を果たす権利である。

「自分の義務を怠っている」とは、何か？

「自分の義務を怠っている」とは、自分の義務を果たす権利を喪失する様な物事に夢中に成る事である。

権利とは、永遠な物である。

自分の義務を果たす権利を喪失すると、永遠の損失に苦しむ事に成る。

人は、罪をつぐなう事ができるか？

はい。

罪をつぐなう事ができる。

罪のつぐないとは、何か？

罪のつぐないとは、超過して労苦する事である。

例えば、昨日、怠けたのであれば、今日は 2 倍、労苦する必要が有る。

自発的に苦しみを背負う人について、どう考えれば良いのか？

　快楽の魅力の激しさを圧倒するために、自発的に苦しみを背負う人は、賢明である。

　自発的に他者の代わりに苦しみを背負う人は、思いやりが有る。

　しかし、慎重さ無しに、考え無しに、判断基準が無いにもかかわらず、自発的に苦しみを背負う人(、無駄に苦行する狂信者)は、無思慮であり、軽率である。

　真の哲学から見て、宗教が定めている全ての物事で、宗教は賢明である、のか？

　真の哲学から見て、宗教が定めている全ての物事で、宗教は賢明である、と理解する事に成る。

　しかし、もしかしたら、結局、宗教による自分の永遠の希望に裏切られる、という事に成らないのか？

　宗教は、希望に裏切られるかもしれないという疑いの余地を許さない。

　ただ、「地上の全ての快楽も、知に生きた時間の一日分の価値にも及ばない」、「野心による全ての勝利や成功も、英雄的行為に生きた一瞬の価値や、思いやりに生きた一瞬の価値にも及ばない」と、哲学が自ら応(こた)えるべきである。

第 2 部 第 2 編

人とは何か？

人とは、神が、神と世界に似せて創造した、知性と肉体が有る存在である。

人は、本質は唯一であり、実質は三重である。

人とは、致死性と不死性が有る存在である。

「人には三重の実質が有る」とは、「2 つの魂か、2 つの肉体による三重である」という意味か？

いいえ。

人には、霊的な魂、物質の肉体、自由な形にできる仲介するものが存在する。

(体という形を持つ魂、魂の体と肉体を仲介する星の光による星の体、肉体。)

自由な形にできる仲介するものの本質とは何か？

自由な形にできる仲介するものの本質とは、気化し易い部分と、気化し難い部分が有る、(星の)光である。

(星の)光の気化し易い部分とは何か？

(星の)光の気化し易い部分とは、磁気的な流体である。

(星の)光の気化し難い部分とは何か？

(星の)光の気化し難い部分とは、流体の体、または、良い香りの体である(星の体である)。

(星の体、)流体の体の存在は実証されているのか？

はい。

最も興味深い最終的な経験によって、(星の体、)流体の体の存在は実証されている。

「大いなる神秘の鍵 第３部」で、(星の体、)流体の体の存在を実証している、最も興味深い最終的な経験について、話すつもりである。

(星の体、)流体の体の存在を実証している、最も興味深い最終的な経験とは、信条であるのか？

いいえ。

(星の体、)流体の体の存在を実証している、最も興味深い最終的な経験とは、自然学の物である。

しかし、自然学は、(星の体、)流体の体の存在を実証している、最も興味深い最終的な経験に夢中に成るであろうか？

既に、自然学は、(星の体、)流体の体の存在を実証している、最も興味深い最終的な経験に夢中に成っている。

なぜなら、エリファス レヴィが本書「大いなる神秘の鍵」を記し、今、読者が読んでいる。

自由な形にできる仲介するものについての考えをいくつか教えてください。

自由な形にできる仲介するものは、星の光、または、地の光によって形成されている。

自由な形にできる仲介するものは、星の光の二重の磁化を、人の肉体に伝える。

魂は、意思により、星の光の作用によって、星の光を分解したり凝固したりできる。

魂は、意思によって、星の光を放射したり引き寄せたりできる。

星の光は、想像と夢の鏡である。

魂は、星の光によって、神経系に感化を与えて、肉体の動きを引き起こす。

星の光は、星の光を無制限に拡張できて、かなり遠くのものの星の光に映っているものと交流できる。

星の光は、人の作用に従っている諸物体を磁化し、星の光を集中させて、諸物体を、作用に従わせている人の元へ引き戻す事ができる。

星の光は、思考が呼び起こした諸形態を形成する事ができ、星の光による光を放つ粒子による一時的な凝固によって、肉眼に見える様に表れる事ができ、接触に対して一種の抵抗を与える事すらできる。

ただし、自由な形にできる仲介するものが、物質的に表れたり、物質的に利用できるのは、(超常、)異常である。

光る精密機械である、自由な形にできる仲介するものは、不自然にしか、物質的に表れないし、物質的に利用できない。

そのため、自由な形にできる仲介するものを、物質的に表したり、物質的に利用するのは、習慣的な幻覚か、狂気をもたらす危険性が存在する。

動物磁気とは何か？

動物磁気とは、星の光の分解や凝固による、自由な形にできる仲介するものの一方から他方への作用である。

命の光である星の光の伸縮性の増大や、星の光の放射力の増大によって、人は、意思する限り遠くまで、星の光を放射して、完全に映像が乗っている星の光を引き寄せる事ができる。

ただし、映像が乗っている星の光を引き寄せる操作をするのは被催眠者の方が有利である。

催眠術師は、被催眠者の候補者の仲介するものの気化し難い部分を更に凝固させて、被催眠状態を被催眠者の候補者にもたらす事ができる。

催眠術は、倫理に反したり、宗教に反しないか？

催眠術は、濫用すると、倫理に反するし、宗教に反する。

催眠術の濫用に含まれる事とは何か？

催眠術を無秩序な形で用いるか、催眠術を無秩序な目的のために用いると、催眠術の濫用に含まれる。

無秩序な催眠術とは何か？

無秩序な催眠術とは、悪意によって行われる、不健全な流体(である星の光)の放射である。

例えば、無秩序な催眠術とは、他のものの秘密を知るために、または、催眠術師には相応しくない目的に到達するために、悪意によって行われる、不健全な流体の放射である。

無秩序な催眠術の結果とは何か？

無秩序な催眠術は、催眠術師と被催眠者の双方の、流体の精密機械である星の体を乱してしまう。

催眠術に夢中に成っている多数の人々が非難される原因と成っている不道徳な醜行や愚行は、無秩序な催眠術の結果である、星の体の乱れが原因である。

正しく催眠術をかけるために必ず必要な条件とは、何か？

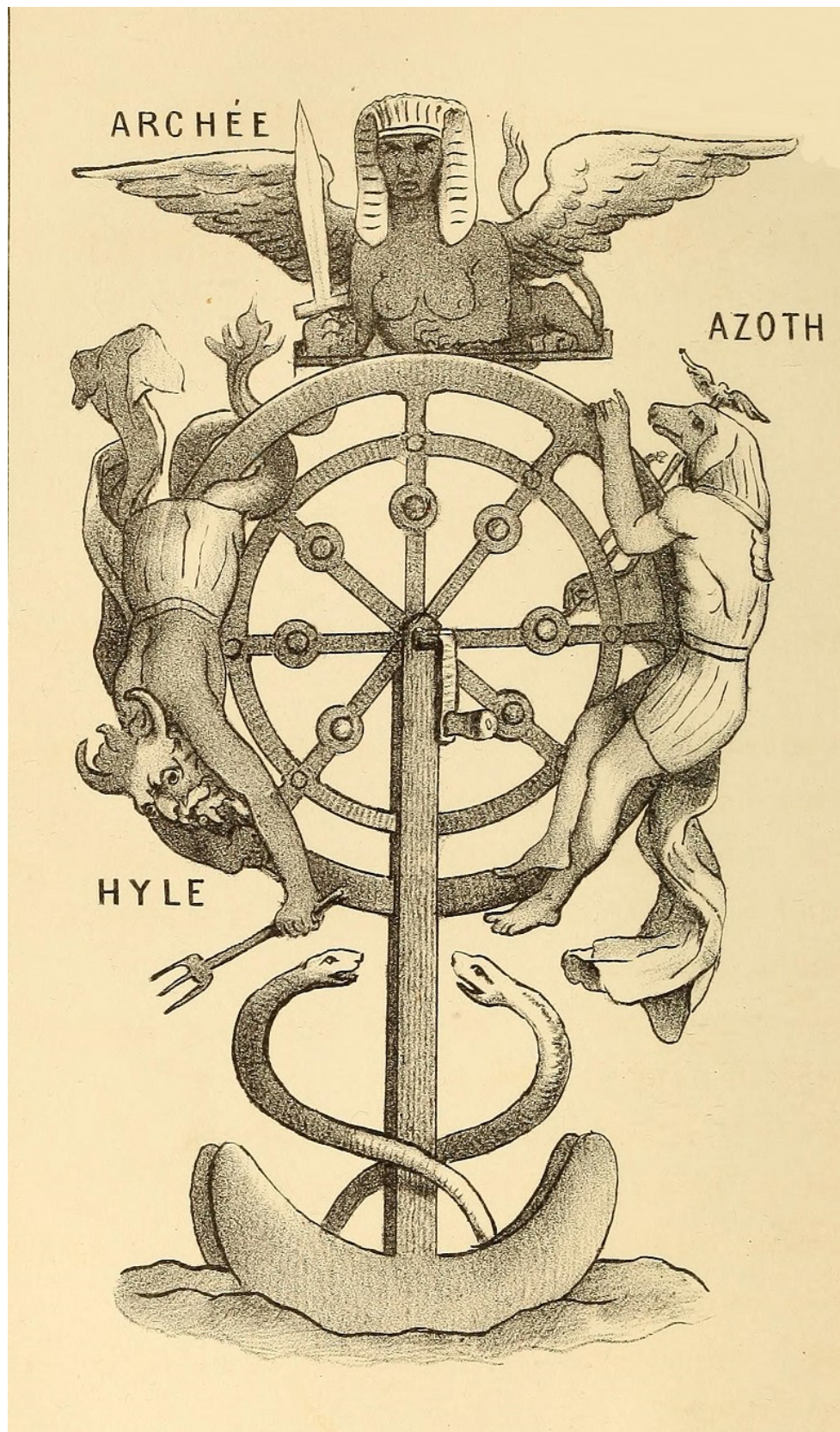
正しく催眠術をかけるために必ず必要な条件とは、心身の健全さである。

正しく催眠術をかけるために必ず必要な条件とは、正しい意図と、思慮の有る実践である。

思慮の有る催眠術によって、人が獲得できる有益な結果とは、何か？

思慮の有る催眠術によって、人が獲得できる有益な結果とは、神経の病気の治療、予感の解析、流体である星の体の調和の建て直し、自然のいくつかの秘密の再発見である。

神経の病気の治療、予感の解析、流体である星の体の調和の建て直し、自然のいくつかの秘密の再発見について、より完全な形で説明してください。

自然の神秘を専門に扱う「大いなる神秘の鍵 第３部」で、エリファス レヴィは、神経の病気の治療、予感の解析、流体である星の体の調和の建て直し、自然のいくつかの秘密の再発見について、より完全な形で説明するつもりである。

鍵タロットの大アルカナの10番目

第3部 大いなる魔術の代行者

エリファス レヴィは、無限の者である神の中に広がっている本質である神性(と、神性を劣化させたものである星の光)について話してきた。

神性(、または、神性を劣化させたものである星の光)は、天と地と成っている、唯一のものである。

言い換えると、神性(、または、神性を劣化させたものである星の光)は、両極間の位置に応じて、気化し易く薄く成っていたり、気化し難く成っていたりする。

「エメラルド板」でヘルメス トリスメギストスは神性(、または、神性を劣化させたものである星の光)を大いなるもの「Telesma」と呼んでいる。

「Telesma」が光をもたらす時、「Telesma」は星の光と呼ばれる。

創世記で神が、「光あれ」と話して、何ものよりも先に創造したものは、星の光である。

星の光は、本質や物体である、と共に、運動である。

星の光は、流体であり、永遠の振動である。

星の光に固有の力が振動している星の光は、「磁気」と呼ばれる。

無限の者である神の中で、神の世界で、神性という唯一の本質は、エーテル、または、エーテルの光である。

神性が磁化している、星の中で、神性は星の光と成る。

組織的な存在の中で、星の光は、光、または、磁気の流体と成る。

人の中で、星の光は、「星の体」、「自由な形にできる仲介するもの」を形成する。

知的存在の意思は、星の光に直接作用し、星の光という手段によって自然の全ての部分に作用して、自然を知による変化に従わせる。

星の光は、全概念と全形態の共通の鏡である。

星の光は、過去に存在した全てのものの映像、過去の諸世界の反映、類推可能性による未来の諸世界の原案を保存している。

星の光は、奇跡と予見の手段である。

星の光については、エリファス レヴィには、「大いなる神秘の鍵 第３部」と、最後の「大いなる神秘の鍵 第４部」で説明する事が残っている。

第 3 部 第 1 巻 磁気の神秘

第 3 部 第 1 巻 第 1 章 メスメルの治療メスメリズムの鍵

　メスメルは、自然の秘密の知を再発見した。

　メスメルが、自然の秘密の知を発明したわけではない。

　メスメルの格言集で、メスメルは、基礎の唯一の第一質料である星の光の存在を主張した。

　ヘルメスとピタゴラスは、星の光について知っていた。

　シュネシオスの聖歌 第 2 編で、シュネシオスは、星の光について歌っている。

　シュネシオスは、アレクサンドリア学派のプラトン主義者の文書で啓示されていた、星の光について知っていた。

「光の唯一の源泉、光の唯一の根源は、光を光の 3 つの枝へ飛び出させて広めている。
神が、地を一巡する様に息を吹きかけ、無数の形の中で、命を与えられているものの全ての部分に、命を与えている」

　(シュネシオスの聖歌 第 2 編)

　メスメルは、基礎の物質である星の光に、静止に対して、と同じく、運動に対して中性である性質を見た。

　星の光は、運動に従わせると、気化し易く成る。

　星の光は、静止状態に戻すと、気化し難く成る。

しかし、「運動は第一質料である星の光に固有の物である」事をメスメルは理解できなかった。

「運動と静止に対する中性ではなく、相互につり合っている運動と静止が重なっている性質が原因と成って、星の光は運動していると気化し易く成り、静止していると気化し難く成る結果をもたらす」事をメスメルは理解できなかった。

完全な静止は、普遍の生きている物質である星の光の中の、どこにも存在しない。

一方では、固定されている星の光は、気化している星の光を固定するために、気化している星の光を引き寄せる。

他方では、気化している星の光は、固定されている星の光を気化させるために、固定されている星の光を侵食する。

一見、固定されている状態に見える、仮定されていた、星の光という粒子の静止状態は、星の光という流体の 2 つの力が、相互に相殺し合って不動に成っている事による、運動しているよりも激しく取っ組み合っている状態でしかないし、運動しているよりも強い緊張状態でしかない。

そのため、「エメラルド板」でヘルメスは「上のものは下のものから類推可能である」と話している。

なぜなら、蒸気を膨張させる力が、氷柱（つらら）を収縮させて硬く固める。

全てのものは、命の法に従っている。

命の法は、「最初」から、先天的に、根源の第一質料である星の光に存在している。

常に調和しながら、根源の第一質料である星の光は、引き寄せたり斥けたりする。

常に調和しながら、星の光は、星の光を凝固させたり分解したりする。

星の光は二重である。

星の光は両性具有である。

星の光は、星の光を抱擁して受胎させる。

星の光は、戦い、圧倒し、破壊して更新する。

しかし、星の光は、慣性、惰性、無気力に身を委ねない。

なぜなら、星の光にとって、慣性、惰性、無気力は、死ぬ事である。

創世記１章３節の「神が『光あれ!』と話すと光が創造された」という、神の言葉が、光に存在する様にと話して、光を創造した話は、根源の第一質料である星の光についての創世記の祭司への話である。

創世記１章３節「神が『光あれ!』と話すと光が創造された」

古代ヘブライ人は、星の光を、「光」を意味する「アウル」または「オウル」と呼んでいる。

(אור、AWR、アウル、オウルは光を意味する。)

星の光は、錬金術の流体の生きている黄金である。

星の光の、自発的な原理は、錬金術の硫黄である。

星の光の、受容的な原理は、錬金術の水銀である。

星の光の、つり合っている自発的な原理と受容的な原理は、錬金術の塩である。

そのため、「第一質料は、運動や静止に対して、中性である」というメスメルの第６の格言という誤解の代わりに、人は、「普遍の質料である星の光は、星の光の二重の磁化によって運動せざるを得ない。また、必然的に、星の光は、つり合いを求める」という正しい原理を確立する必要が有る。

また、そのため、後記の様に、人は諸々の結果を導き出せる。

つり合いの様々な組み合わせが、運動の法則性と多様性をもたらす。

全面的に、つり合っている点は静止したままである。

そのため、つり合っている点は運動を与えられている事に成る。

常に、つり合っている２つの力の変化は、速く運動している第一質料である星の光が形成している流体を、かき混ぜたり、揺り動かしたりしている。

多かれ少なかれ、しっかりと、つり合っている２つの力は、第一質料である星の光が形成している固体を、遅く動かしたり、一見、静止させたりしている。

固体を構成している粒子群のつり合いが突然崩れない場合は、固体が、すぐに霧状に粉砕してしまう事は、あり得ない。

固体を構成している粒子群のつり合いが突然崩れた場合は、固体は、煙の様に薄れて目に見えなく成る時が存在する。

何者かが、流体を構成している粒子群をつり合わせると、流体は即座にダイアモンドよりも硬く成る場合が存在する。

そのため、磁気の２つの力を傾ける事は、諸形態を破壊するか、創造する事に成る。

星の光の２つの力を傾ける事は、諸物体を破壊するか、全ての表れをもたらす事に成る。

星の光の２つの力を傾ける事は、自然の全能の力を発揮する事である。

自由な形にできる仲介するものは、意思に迫られて、星の光を引き寄せたり斥けたりする磁石である。

星の光は、概念に対応する形を非常に容易に再現する、光る肉体である。

星の光は、想像力の鏡である。

星の体は、星の光によって養われている。

正に、有機体が地の産物によって養われている、様に。

睡眠中は、星の体は、星の光に沈められて浸透されて、星の光を吸収する。

目覚めている時は、星の体は、ある種の多少の呼吸で、星の光を吸収する。

夢遊病といった自然な催眠状態の時は、自由な形にできる仲介するものである星の体は、消化不良で、星の光を過充電されている。

夢遊病といった催眠状態の時は、催眠による麻痺が意思を束縛しているが、意思は、意思を催眠による麻痺から解放するために、仲介するものである星の光を肉体の諸器官へ先天的に斥ける。

意思が星の光を肉体へ斥けると、肉体が肉体を動かして仲介するものである星の光を発散させて一定量に保とうとするため、肉体による肉体の運動という機械的な自然な反作用が起きる。

そのため、夢遊病者といった被催眠者を突然、目覚めさせる事は危険である。

なぜなら、突然、被催眠者を目覚めさせると、意思が星の光を肉体へ斥けていて肉体に蓄積されていた仲介するものである星の光は、肉体が肉体を動かして肉体に蓄積されていた星の光を発散させる前に、突然、天体といった星の光の共通の貯蔵所へ発散する形で引き上げてしまい、蓄積される前の星の光と共に肉体の諸器官を捨て去ってしまい、肉体の諸器官と魂を仲介するものが去ってしまい、肉体が魂と分かれてしまい、結果、肉体が死ぬ事に成ってしまう。

自然であろうと人工であろうと、催眠状態は、極めて危険である。

なぜなら、催眠状態は、目覚めている状態の現象と、睡眠状態の現象を合わせ持っていて、ある種、2 つの世界にまたがっている(、霊の冥界に片足を突っ込んでいる)状態を形成する。

催眠状態では、魂は、普遍の命に浸りながら、特化している命の諸々の原動力を動かして、言い表せない幸福感を経験する。

催眠状態で、星の光の流れに圧倒されない様に魂を保持している神経系を、魂は自発的に手放そうとしてしまう。

全ての種類の忘我状態でも、催眠状態と、状況は同じである。

意思が、催眠状態といった忘我状態に熱烈に努めてのめり込んでしまったり、催眠状態といった忘我状態に完全に身を委ねさえしたりしてしまうと、被催眠者は、狂ってしまうか、しびれてしまうか、死にさえしてしまう。

　自由な形にできる仲介するものである星の体の負傷や局所的な麻痺が幻覚や幻視をもたらす。

　幻覚状態では、時には、星の体は、星の光の光線の放射をやめて、星の体の中で濃縮してしまった星の光による映像を、星の光が見せている現実に、何とかして、代えてしまう。

　幻覚状態では、時には、星の体は、星の光を強過ぎる力で放射してしまい、星の体の外で星の光を意図せずに無秩序に何点かの中心の周囲に濃縮してしまう。

　血が何個かの腫瘍の周囲に濃縮してしまう、様に。

　幻覚状態で、星の体が星の体の内部か外部に星の光を濃縮してしまうと、脳内の妄想が形と成り、魂を得てしまった様に見えてしまう。

　幻覚状態で、星の体が星の体の内部か外部に星の光を濃縮してしまうと、欲望の理想像に一致する光を放つ自身の星の体を自分に見せてしまうか、恐怖の典型像に一致する奇形の自身の星の体を自分に見せてしまう。

　幻覚は、目覚めている人の夢や妄想であり、常に、催眠状態に似た状態を伴う。

　しかし、逆に、ある意味で、催眠状態は、目覚めている状態の現象を取り入れた睡眠状態である。

　幻覚状態は、睡眠状態の時の、星の光に酩酊した状態に部分的に負けたまま目覚めている状態である。

　電気の法に似ている、星の光の法に従って、ある人の流体の体である星の体は、他人の星の体と、相互に引き寄せ合ったり、相互に斥け合ったりしている。

ある人の星の体と、他人の星の体の、相互の引き寄せ合いが先天的な共感を、相互の斥け合いが先天的な反感をもたらす。

前記の様に、ある人の星の体と、他人の星の体は、相互に、つり合っている。

そのため、幻覚は伝染する時が有る。

星の光の異常な放射は、星の光の流れを変える。

神経質で病んだ人が引き起こした星の光の混乱が、より神経質な人々を引きずり込んでしまう。

幻覚の輪が確立されると、大衆は一丸と成って容易に幻覚の輪に引きずり込まれてしまう。

幻覚の伝染が、不思議な霊の出現や、民間の口伝の驚異現象の、経歴である。

幻覚の伝染は、アメリカの霊媒師による驚異現象、テーブル ターニングによる病的興奮、回旋舞踊するイスラム教の神秘主義の苦行僧ダルヴィーシュの忘我状態が現代で再現する驚異現象を説明する。

ラップランドのシャーマン ドラムを持つシャーマンと、未開の民族の呪医も、幻覚という同じ成り行きで、幻覚の伝染という同じ結果に到達した。

偽の神々や存在しない諸々の悪魔は幻覚の伝染とは何の関係も無い。

健全な精神の人よりも、狂人や愚者は磁気、星の光に対して敏感である。

「健全な精神の人よりも、狂人や愚者は星の光に対して敏感である」理由は容易に理解できるであろう。

なぜなら、例えば、酩酊者の頭を一変するためには、非常に些細な物事しか必要ではない。

全器官が些細な物事からの影響を受け易く成っていて、些細な物事による不調を表し易く成っていると、より容易に、酩酊者は病気に成る。

流体、星の光による病気には、死に至る転機が有る。

神経器官の全ての異常な緊張は、つり合いの必然の法に従って、正反対の緊張に成ってしまう。

病的に肥大した愛着は、(些細なすれ違い等で、)憎悪に変わってしまう。

また、病的に肥大した憎悪は、愛着に非常に近づく。

火の様に、雷の激しさの様に、反作用は、突然、起きる。

反作用が起きると、無知な愚者は、反作用を悲しむか、反作用に対して抗議する。

反作用が起きると、知者は、反作用に身を委ねて、沈黙を保つ。

心の愛と、脳の愛着という2つの愛が存在する。

心の愛は、興奮しない。

心の愛は、心を奮い立たせて覚悟して、試練と自己犠牲の経路によって、ゆっくりと成長する。

単に神経質で肉欲的な脳の愛着は、熱狂のみに生き続ける。

脳の愛着は、全ての義務と衝突する。

脳の愛着は、愛着の対象を戦利品の様に扱う。

脳の愛着は、利己的であり、冷酷であり、不安であり、暴君的である。

脳の愛着は、愛着した後に、結末としての自殺か、薬としての姦淫を必然的に伴う。

脳の愛着が自殺か姦淫を必然的に伴うのは、自然の様に、運命の様に、不変である。

勇気に満ちた、将来が目の前に開かれている、若い女性芸術家には、知の探求者であり詩人である誠実な夫がいた。

夫の欠陥は、妻への愛着が過剰である事だけであった。

妻は、夫に怒って、夫と別れ、別れてから常に元夫を憎み続けた。

けれども、元妻も良識的な女性であった。

しかし、無慈悲な世間は元妻を裁いて非難した。

それでも、元妻は無罪であった。

もし人が元妻を非難できる余地が有るとしたら、元妻の過誤は、最初のうちは、元妻が元夫を熱狂的に愛着した事である。

人は「しかし、それでは、人の魂は自由ではないのか？」と話すであろう。

いいえ。

人の魂が、肉欲による、めまいに身を委ねると、もう自由ではない。

知だけが自由である。

乱れた肉欲は、狂愚の王国と成る。

(神の知は、神の王国と成る。)

狂愚は、死に至る。

愛について言える事は宗教についても言える。

畏敬を伴う信じる愛である宗教は、全ての愛のうち、最も強い愛であり、最も夢中にさせる愛である。

宗教的な愛には、過剰な宗教的な愛もあれば、必然の反作用もある。

人は、アッシジのフランチェスコの様に忘我状態と聖痕を得た後に、放蕩と不信心の底無しの淵に陥るかもしれない。

熱烈な性質の人は、高く充電された磁石である。

熱烈な性質の人は、激しく引き寄せたり、激しく斥けたりする。

2 つの方法で催眠をかける事が可能である。

第一の催眠方法は、催眠術師の意思によって、被催眠者の自由な形にできる仲介するものである星の体に働きかけて、被催眠者の意思と行為を結果的に催眠術師の働きかけに従わせる。

第二の催眠方法は、催眠術師の脅迫か説得によって、被催眠者の意思に働きかけて、催眠術師が影響を与えた被催眠者の意思が、催眠術師の思い通りに、被催眠者の星の体と行為を変える。

　人は、星の光の放射によって、接触によって、視線によって、言葉によって、被催眠者を磁化して、被催眠者に催眠をかける。

　声の振動は、星の光の運動を変える。

　また、声の振動は、磁気、星の光の強い仲介者である。

　熱い息は、陽極に磁化する。

　冷たい息は、陰極に磁化する。

　背骨の上の小脳の基底部に、熱い息を長く吹きかけると性的な現象を引き起こす事ができる。

　羊毛か絹のマントで完全に覆われた被催眠者の頭上に催眠術師の右手を置き、被催眠者の足裏に催眠術師の左手を置くと、磁気、星の光の雷が、被催眠者の全身を貫通して、神経の変革を被催眠者の有機体に引き起こす事ができる。

　催眠術をかける手さばきは、手さばきという行為によって意思を確証して、催眠術師の意思を導くのに役立つだけである。

　手さばきは、象徴でしかない。

　意思の作用は、手さばきといった象徴によって表されるが、実行されない。

　炭の粉は、星の光を吸収して保持する。

　「炭の粉が星の光を吸収して保持する」事は、デュ ポテ男爵の「魔法の鏡」の原理を説明する。

　炭で描かれた象徴は、催眠状態の被催眠者には、光って見える。

　炭で描かれた象徴は、催眠状態の被催眠者には、催眠術師の意思が指す方向性に従って、最も優美な形か、最も恐ろしい形に成って見える。

自由な形にできる仲介するものの命の光、星の光は、炭に吸収されると、完全に陰極に成る。

　そのため、例えば、猫といった、電気、星の光に苦しんでいる動物は、炭の上に寝転がる事を好む。

　いつの日か、医学は、炭の特性を利用して、神経質な人を星の光による苦しみから大いに解放するであろう。

第3部 第1巻 第2章 生と死。睡眠状態と目覚めている状態。

眠りは、不完全な死である。

死は、完全な眠りである。

自然は、人を死という概念に慣れさせるために、人を眠りに従わせている。

また、自然は、夢によって、(肉体とは)別の(魂の)命の永遠性を人に知らせている。

眠りは人を星の光に沈めて浸すので、星の光は大海に似ている。

星の光という大海の中には、(星の光に分解されている存在の残骸という)難破した諸存在という漂流物、過去の物事の幻や反映、成りかけている物事の予感といった、無数の映像が漂流している。

人の神経の傾向は、人の運動に対応している、人の労苦に対応している星の光の映像を人の所に引き寄せる。

正に、磁石が、様々な金属の粒子群の間で動かされると、鉄屑を特に選んで磁石の所に引き寄せる、様に。

夢は、健康か病気か、自由な形にできる仲介するものである星の体が落ち着いているか乱れているか、結果として神経組織が落ち着いているか乱れているか、人に啓示する。

夢は、象徴が持っている類推可能性によって、人の予感を形にする。

なぜなら、全ての概念は人の肉体の命と魂の命という二重の命に関係していて、全ての概念には人にとって二重の意味が有る。

眠りの言葉が存在する。

眠りの言葉は、目覚めている状態では、理解不能であり、秩序的に並べて整理する事すら不可能である。

眠りの言葉は、自然の言葉である。

自然の言葉、眠りの言葉は、文字が象徴であり、音が周期である。

眠りは、めまいであるか、透明で意識が有る。

狂気とは、めまいを起こさせる永遠の催眠状態である。

激しい混乱は、狂人を正気に目覚めさせるか、殺してしまう。

幻覚が幻覚患者の知性と一体化してしまうと、幻覚は狂気という一時的な発作と成ってしまう。

全ての精神的な疲れは、眠りをもたらす。

ただし、神経の苛立ち、神経の興奮に伴う精神的な疲れの場合は、眠りは不完全に成ってしまい、催眠状態の性質を帯びてしまう。

人は、現実に生きている最中に、目覚めているまま、知らないで眠り込んでしまう時が有る。

人が現実に生きている最中に目覚めているまま知らないで眠り込んでしまっている時、人は、考える代わりに、夢見ている。

なぜ、過去に起きなかった事を人は覚えているのか？

なぜなら、完全に目覚めながら、人は、夢で過去に起きなかった事を見たのである。

目覚めているまま意図しないで知らないで無自覚に眠り込んでしまう現象が、突然、現実に生きている時によぎる事は、過労、徹夜のし過ぎ、飲み過ぎ、過敏によって神経系が興奮し過ぎている人の身に起きる時が有る。

偏執狂者は、非論理的な行動をしている時は、目覚めているまま眠っている。

偏執狂者は、完全に目覚めると、もはや何も覚えていない。

19 世紀フランスのパパヴォワーヌ事件で、殺人犯のパパヴォワーヌは、警察に逮捕された時、「あなたたち警察は、殺人犯である他人を私パパヴォワーヌと間違えているのです」という注目するべき言葉を警察に穏やかに話した。

19 世紀フランスのパパヴォワーヌ事件の殺人犯のパパヴォワーヌは、夢遊病者であったのである。

エドガー アラン ポーは、かつて酔っていた不適切な天才である。

エドガー アラン ポーは、偏執狂者の夢遊病者を小説で恐ろしく描いた。

ある時は、偏執狂者の夢遊病者は、墓の壁を通過して、殺人の犠牲者の心臓の鼓動が聞こえると思い込んでいる、殺人の犠牲者の心臓の鼓動が他人にも全員に聞こえていると思い込んでいる、殺人者である。

ある時は、偏執狂者の夢遊病者は、「私は、警察に自首しない限り、安全である」と自身に話しかける事によって安心していたが、自首する夢を声を出して見る様に成ってしまい、実際に自首した、毒殺者である。

エドガー アラン ポーは、自分の変わった小説の殺人犯や犯行を自分で考案したわけではない。

エドガー アラン ポーは、自分の変わった小説の殺人犯や犯行を、目覚めているままで、夢で見たのである。

そのため、エドガー アラン ポーは、自分の変わった小説の殺人犯や犯行を、衝撃的な現実の特色で非常に巧く話せたのである。

幻覚についての注目するべき作品で、精神医 Briere de Boismont は、幻覚以外では完全に正気であるイギリス人の話を記している。

幻覚以外では完全に正気であるイギリス人は、「私は、見知らぬ人と出会って知人に成った。知人は、私の宿で私と昼食を食べた時に、私にセントポール大聖堂に

同伴して行く様に頼んできた。私は知人とセントポール大聖堂を訪れた。私が知人と共に塔の頂上に昇ると、知人は私を塔の頂上から投げ落とそうと試みてきた」という幻覚を見て事実だと思い込んでいた。

　幻覚以外では完全に正気であるイギリス人は、存在しない知人の幻覚を見た時から、自分にしか見えない存在しない知人の幻覚にとりつかれて、食事を食べ終わった後の独りの時は、常に、存在しない知人と幻覚の中で出会った。

　危険は引き寄せる。

　酩酊は酩酊を呼ぶ。

　狂気には狂気に対して無敵の魅力が有る。

　人が眠りに負ける時は、人を目覚めさせるかもしれない全てのものに恐怖を抱く。

　幻覚患者、動かない夢遊病者、狂人、てんかん患者、激情による精神錯乱者は、正気に目覚めさせるかもしれない全てのものに恐怖を抱く。

　狂人は、死に至る音楽を聞いて、死という踊りに加わる。

　(マタイによる福音 11 章 17 節「あなたのために笛を鳴らしたのに、あなたは踊ってくれない」)

　しかし、狂人は、めまいの渦に引きずり込まれている様に感じている。

　狂人に話しかけても、もはや狂人は聞く耳を持たない。

　狂人に注意しても、もはや狂人は注意を理解できず、注意は狂人にとってうるさくて狂人を苛立たせる。

　狂人は、死という眠りによって眠っている。

　死は、人をさらって行く流れである。

　死は、人を下へ引きずり込む渦である。

　しかし、死という渦の底から、人は、最低限の動きで、再び浮上できる。

反発力は、引き寄せる力に相当する。

正に死ぬ瞬間に、人は、再び激しく、肉体の命にとりついてしまう事が頻繁に有る。

人が肉体の命にとりつくのと同じ、つり合いの法によって、人は、眠りにとりつかれて従ってしまい、眠ったまま死んでしまう事が頻繁に有る。

湖の岸に、小舟が揺れている。

幼子は、小舟に乗って、進水してしまう。

水は、多数の反映で輝いて、幼子のまわりで踊り、幼子を呼ぶ。

小舟を留めていた鎖は、伸びきって、自壊する事を望んでいる様に見える。

湖の岸から、不思議な鳥が飛び出し、水面をかすめて飛び、喜んでいる波々の上で、歌っている。

幼子は、鳥の後を追おうと望み、鎖に手を置き、鎖の先の輪を外してしまう。

古代人は、死の引き寄せる力の神秘を、見抜いて、ヒュラスの例え話で表現した。

長い航海で疲れた、ヒュラスは、花で覆われた、エナメルの様な光沢で輝いている、島に辿り着いた。

ヒュラスは、水を汲むために泉へ近づく。

優美な幻がヒュラスに微笑む。

ヒュラスは、自分に手を差し伸べるニンフを見た。

ヒュラスは、ニンフにうろたえる。

そのため、ヒュラスは、重い水瓶を引き戻す事ができなかった。

泉からの鮮やかな香りは、ヒュラスを眠らせてしまう。

彼岸の香りは、ヒュラスを酔わせてしまう。

ヒュラスは、ナルキッソスの様に水の上に身をかがめた。

　幼子が遊びでナルキッソスの水仙の花の茎を手折った。

　水で満ちた水瓶が水底に落ち、ヒュラスも水瓶の後を追って水底に落ちる。

　ニンフに抱擁される夢を見ながら、ヒュラスは、死んだ。

　ヒュラスは、命の労苦に呼び戻すヘラクレスの声に対して、もう聞く耳を持たない。

　ヘラクレスは、「ヒュラス！　ヒュラス！」と叫んで、荒々しく全ての場所を走りまわる。

　中略

　「高等魔術の教理と祭儀」でエリファス レヴィは「物理的にも、死んだ人の復活は可能な現象である」と大胆に話した。

　エリファス レヴィは「物理的にも、死んだ人の復活は可能な現象である」と話した時に、不可避の死の法を否定しなかった。

　中止できる死は、昏睡状態と睡眠状態だけである。

　ただし、昏睡状態や睡眠状態によって、死は常に始まる。

　命の不安の後に続く、深い平和の状態という死は、楽に成った眠っている魂をさらって行ってしまう。

　死ぬと、人は、激しく感動させる愛情や望みによってではないと、魂を戻せず、魂は新しい命に沈んで浸る事を強いられる。

　世界の救い主イエスが地上にいた時代、地は、天よりも、美しく、望ましかった。

　それにもかかわらず、ルカによる福音 8 章 54 節で、ヤイロの娘を復活させるために、イエスは大きな声で叫んで衝撃を加える必要が有った。

　ヨハネによる福音 11 章 35 節で身を震わせて涙を流して泣く事によって、イエスは、イエスの友人ラザロを墓から復活させた。

人に成った神イエスですら叫んだりする必要が有ったくらい、素晴らしい眠りを眠っている疲れた魂に割り込む事は難しい！

同時に、死を受け入れる全ての魂にとって、同様に、死の様子は安らかである、というわけではない。

生きている事による目標を手に入れそこなった人や、激しい貪欲や癒されていない憎悪に夢中に成っている人といった、無知な人や罪人の魂に、永遠は恐ろしいくらいの悲しみの姿で現れるので、無知な人や罪人の魂は、肉体という死ぬ命に戻ろうと乱暴に試みる時が有る。

多数の魂が、地獄の悪夢に迫られて、氷の様に冷たい死体に避難したが、すでに死体は大理石の棺に閉じ込められている！

人は、ひっくり返った残骸である死体、身もだえしたと思われる死体、身をよじらせていた死体を見つけて、「これは、生きたまま埋葬された人の死体である」と話していた。

しかし、ひっくり返った死体、身もだえしたと思われる死体、身をよじらせていた死体は、生きたまま埋葬された人の死体ではない事が多い。

ひっくり返った死体、身もだえしたと思われる死体、身をよじらせていた死体は、常に、死からの漂着物、永遠への入口での苦しみに完全に身を委ねる前に、肉体による第２の人生を生きようと試み求めた、墓で復活した人の死体であるかもしれない。

秘密にしていた、魔術についての本で、高名な催眠術師デュ ポテ男爵は、「人は、魔術の電気によって殺害できる」と記している。

自然の類推可能性を良く知っている人にとって、「人は、魔術の電気によって殺害できる」というデュ ポテ男爵の啓示は、不思議ではない。

対象者の、自由な形にできる仲介するものである星の体を、過剰に薄めて、または、突然に凝固させて、魂との鎖から肉体を解き放ってしまう事が可能なのは確かである。

突然死させるのに、激怒させるだけで、または、恐怖で圧倒するだけで、十分な場合が有る。

催眠術の習慣的な利用は、普通、被催眠者が身を委ねてしまう形で、被催眠者を催眠術師の思い通りにさせてしまう。

交流が十分に確立されていて、催眠術師が眠り、麻痺や気絶、強硬症カタレプシーなどを思い通りに被催眠者にもたらす事ができると、死を被催眠者にもたらすには、更なる些細な努力が必要なだけである。

エリファス レヴィは、実際の事実であるとして、ある話を聞いた事が有る。

ただし、エリファス レヴィは、事実であるとして聞いた話の真偽を完全には保証できない。

エリファス レヴィは、事実であるとして聞いた話を記す。

なぜなら、エリファス レヴィが、事実であるとして聞いた話は、真実であるかもしれない。

迷信と狂信に期待する半信半疑の類(たぐい)の人である、宗教と催眠術を疑っていた何人かが、貧しい少女を金銭で説得して催眠術の実験に従わせた。

少女は、感受性が強く、神経質であり、更に(貧困による)不規則過ぎる生活による不節制で疲れていて、生きている事に既にうんざりしていた。

催眠術の実験者は、少女に催眠術をかけて眠らせた。

催眠術の実験者は、少女に「見る」様に命令した。

少女は、涙を流して、「見る」事に取り組んだ。

　催眠術の実験者は、少女に、神について何が「見える」か尋ねた。

　少女は、手足を全て震わせた。

　少女は、「駄目、駄目、神は私を脅して、見る事を断念させる。私は神を見れない」と話した。

「神を見なさい。催眠術師である私が望んでいるのだ」

　少女は、目を見開き、少女の瞳孔は開いたので、恐ろしく見えた。

「何が見えるのか？」

「どう言い表せば良いのか、わからない……。
おおっ！　お願いだから、私を目覚めさせてください！」

「駄目だ。
見なさい。
そして、何が見えるのか話しなさい」

「闇夜が見える。
闇夜の中に、2 つの大きな常に回転している目のまわりに、全色の輝きが回転しているのが見える。
2 つの大きな常に回転している目から光線が飛び出し、光線の螺旋の渦巻きは空間を満たす……。

おおっ！　痛い！

私を目覚めさせて！」

「駄目だ。

見なさい」

「それでは、どこを見る事を望んでいるのですか？」

「神の楽園の中を見なさい」

「駄目、私は神の楽園まで昇る事ができない。

大いなる闇が私を下へ押し返してしまう。

私は常に落下している」

「わかりました。

それでは、地獄の中を見なさい」

　ここで、被催眠者の少女は、けいれんして動揺した。

　少女は、「駄目！　駄目！　見れない。めまいがしそう。落下しそう！　おおっ！　私を引き留めて！　私を引き留めて！」と、すすり泣きながら叫んだ。

「駄目だ、降りなさい」

「どこに降りて欲しいのですか？」

「地獄の中へだ」

「だけど、地獄は恐い！
嫌！　嫌！　私は地獄に行きたくない！」

「地獄に行きなさい」

「ああっ！」

「地獄に行きなさい。
地獄に行く事が私の望みだ」

　被催眠者の少女の容貌は見るも恐ろしい物に成った。
　少女の髪は逆立った。
　少女は目を大きく見開き白目だけを見せた。
　少女の胸はグイッと持ち上がり、死ぬ時の様に喉をゴロゴロ鳴らした。

　催眠術師は「地獄に行きなさい。地獄に行く事が私の望みだ」と、くり返し命令した。

　不幸な少女は、「私は、地獄にいる！」と歯の間から漏らす様に話し、力を使い果たして、のけぞった。
　それから、もう少女は応（こた）えなくなった。

少女の頭は重く片方の肩にかかっていた。

少女の両腕は、かたわらに、ダラッと投げ落とされていた。

催眠術師は、少女に近づいた。

催眠術師は、少女に触れた。

催眠術師は、少女を目覚めさせようと試みたが、遅過ぎた。

犯罪が為されてしまっていた。

少女は死んでいた。

神を冒涜する催眠術の実験の実験者は、催眠術による事件への大衆の不信のおかげで、起訴を免れた。

警察関係当局は調査を行った。

そして、被催眠者の死は、動脈瘤の破裂のせいにされた。

被催眠者の死体には、どこにも暴行の跡が無かった。

被催眠者の死体は埋葬されて、事件は終わった。

後記は、旅の道連れから聞いた、別の逸話である。

2 人の友人が、同じ宿の同じ部屋に泊まっていた。

一方の人には、寝言を話す癖が有った。

寝言を話す人は、寝言を話している時に、友人が質問すると、質問に答えた。

ある夜、寝言を話す人が、突然、寝言で、抑えた叫びをあげた。

同室の友人は目覚めて、寝言を話している人に、どうしたのか尋ねた。

寝言を話している人は、「あなたは見えないのか？　あなたは巨大な岩が見えないのか……？　巨大な岩が山から崩れている……！　巨大な岩は私の上に落ちて来る！　巨大な岩に私は押しつぶされる！」と話した。

「おおっ！　では、道の脇に逃げなさい！」

「できない！　茨に両足をとられていて、茨はしまったままで両足について取れない。ああっ！　助けて！　助けて！　巨大な岩が私の真上に落ちて来る！」

同室の友人は、「ほら、これが巨大な岩だ！」と笑いながら話して、寝言を話している人を目覚めさせるために、枕を頭に投げつけた。

寝言を話している人は、突然、恐ろしい抑えた叫びをあげ、けいれんし、息を吐き、身動きしなく成った。

悪ふざけをした同室の友人は、起き上がって、寝言を話していた人の腕を引っ張って、呼びかけた。

同室の友人は、驚いて叫んだ。

人々が明かりを持って様子を見に来た……。

不幸な寝言を話していた人は死んでいた。

第3部 第1巻 第3章 幻覚と降霊術の神秘

幻覚は、星の光の運動の乱れがもたらす幻である。

すでに話した様に、幻覚は、眠っている時の現象と、目覚めている時の現象の、混合物である。

人の、自由な形にできる仲介するものである、星の体は、星の光、地の命の魂を呼吸する。

人の肉体が地の大気を呼吸する、様に。

正に、ある場所の空気が汚されて呼吸できない事が有る、のと同様に、ある異常な事情が星の光を不健全にして吸収が不可能に成る事が有る。

ある場所の空気が、ある人には刺激的過ぎて、他の人には完全に合う事が有る。

同様に、磁気の光、星の光が、ある人には刺激的過ぎて、他の人には完全に合う事が有る。

自由な形にできる仲介するものである、星の体は、常に溶解したままである金属の像に似ている。

星の体の鋳型が欠けていると、星の体は奇形に成ってしまう。

星の体の型が破られると、星の体を形成している星の光は漏れてしまう。

自由な形にできる仲介するものである、星の体の鋳型とは、両極化して、つり合っている、命の力である。

人の肉体は、神経系によって、星の体という、星の光の変化し易い形を引き寄せて保持している。

しかし、諸器官での局所的な疲れや部分的な過度の興奮は、流体の星の体の奇形を引き起こしてしまう。

疲れや過度の興奮による星の体の奇形部分は、想像による見本の部分的な改悪である。

星の体の奇形は、幻覚の習慣を、体を動かさない種類の幻視者にもたらす。

自由な形にできる仲介するものである、星の体は、想像と肉体に似せて創造されている。

星の体は、星の光で、肉体の全ての器官に相当する器官を形成する。

星の体には、(肉体の五感とは異なる、)星の体に相応しい、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五感が有る。

星の体が過度に興奮していると、星の体は、振動によって、肉体の五感とは異なる、星の体の五感を肉体の神経器官に伝える。

星の体が過度に興奮して、肉体の五感とは異なる、星の体の五感を肉体の神経に伝えると、幻覚は完成されてしまう。

幻覚が完成されると、妄想が自然を圧倒した様に見えてしまい、驚異現象が現実に起きる。

物質の肉体は、流体の星の光に飲み込まれて、流体の星の光の性質を帯びるかの様に見える。

集団幻覚を見ている人々の輪の中で、星の光に飲み込まれた肉体は、重力の法則の作用から免れる。

集団幻覚を見ている人々の輪の中で、星の光に飲み込まれた肉体は、少しの間だけ、傷つかなく成る。

集団幻覚を見ている人々の輪の中で、星の光に飲み込まれた肉体は、少しの間だけ、目に見えなく成る。

人に知られている様に、サン メダールのけいれん者は、肉を赤熱したペンチでもぎ取られたり、牛の様に倒されたり、皮膚の胼胝の様に磨り潰されたり、十字架にはりつけられても、痛みを感じなかった。

サン メダールのけいれん者は、空中浮揚して、頭を下にして歩いた。

サン メダールのけいれん者は、曲がった留め針を食べて消化した。

中略

パリの霊

中略

その日、B〇〇〇婦人は、アメリカの霊媒師ホームをいつもの様に非常に親切にもてなして、夕食を食べるためにB〇〇〇婦人の家に留まる様に霊媒師ホームに頼んだ。

神秘の人である霊媒師ホームが、B〇〇〇婦人の申し出を受け入れようとした時、ある人が「私達は、『高等魔術の教理と祭儀』という名前の本を出版して、隠された知の世界で良く知られているカバリストである、エリファス レヴィを待っている」と話した。

霊媒師ホームは、突然、表情を変え、困惑を見せ、「私ホームは、B〇〇〇婦人の家に留まれない」、「魔術師エリファス レヴィが近づくと、私ホームは、比較できないくらいの恐怖を感じる」と、どもりながら話した。

ある人が霊媒師ホームを安心させるために話した全ての言葉は、無駄に成った。

霊媒師ホームは「私ホームはエリファス レヴィという男性を推測では判断しない」と話した。

「私ホームは、エリファス レヴィが善人であるか、悪人であるか、断言しない。
私ホームには、エリファス レヴィが善人であるか、について何もわからない。
ただ、エリファス レヴィがまとっている空気は、私ホームを精神的に傷つける。
エリファス レヴィの近くでは、私ホームは、言わば、無力に、命すら無い様に、感じてしまう」

　前記の様に、説明した後で、霊媒師ホームは、急いで別れの挨拶をすると引き上げた。
　知の真の秘伝伝授者が存在すると、驚異現象を商売にしている人たちが恐怖するのは、隠された知の歴史において、新しい事実ではない。

　中略

　常に、俗人は、魔術について、誤った印象を受けてしまう。
　俗人は、達道者と誘惑者を混同する。
　真の魔術は、マギの口伝の知である、と言える。
　真の魔術は、誘惑術にとって致命的な反対物である。
　真の魔術は、光に敵対する偽物の奇跡を予防するか、止める。
　光に敵対する偽物の奇跡は、先入観が有るか、軽信し易い、少数の目撃者を誘惑してしまう。
　自然の法が、一見、混乱している様に見える驚異現象は、嘘の奇跡である。

自然の法が、一見、混乱している様に見える驚異現象は、真の奇跡ではない。

全ての人の目にとって輝いて見える、真の奇跡は、常に、原因と結果が不変に調和している。

真の奇跡は、永遠の秩序の輝きである!

エリファス レヴィは、仮に、スヴェーデンボルグがいる所で、カリオストロが奇跡を行えたかどうかについては言わない。

しかし、仮に、パラケルススやハインリッヒ クンラートといった大いなる人達が 18 世紀に存在していて、近くにいたら、カリオストロは、確実に恐怖したであろう。

しかし、エリファス レヴィは、アメリカの霊媒師ホームを、低級な悪人の霊の魔術師として非難しない。

言い換えると、エリファス レヴィは、霊媒師ホームを、詐欺師として非難しない。

有名なアメリカの霊媒師ホームは、幼子の様に、甘い、ありのままの人である。

霊媒師ホームは、不器用で無防備な、貧弱で過敏過ぎる人である。

霊媒師ホームは、ホームには未知の自然の畏敬するべき力に翻弄されている。

霊媒師ホームが、最初にだましてしまった人は、確実に、自分自身である。

霊媒師ホームという若い男性の近くで起きる不思議な現象の研究は、最重要である。

人は、18 世紀からの簡単に否定し過ぎる態度を真剣に考え直す必要が有る。

人は、説明方法が未だ知られていない全てのものを否定する俗な批判よりも、知と論理の前に幅広く視野を広げる必要が有る。

事実は変わらない。

事実は不変である。

真に誠実な人は、不思議な事実を調べる事を恐れるべきではない。

全ての口伝が頑なまでに認めている、うんざりするくらい公に関心を持たれて現代人の目の前で再現された、不思議な事実の説明は、事実自体の様に古く、数学の様に厳密であるが、もし十分な光と公の関心を獲得すれば、初めて、全ての時代の秘儀祭司が隠していた先の闇から引きずり出されて、自然科学的な大事件と成るであろう。

多分、エリファス レヴィは、不思議な事実の説明が自然科学的な事件と成る、用意をしようとしている。

なぜなら、エリファス レヴィが不思議な事実の説明を自然科学的な事件として実現する大胆な希望を、人は許さないであろう。

後記は、第一に、不思議な事実の特異性である。

後記の事実を、第一に、説明や注釈を全て控えて、エリファス レヴィは厳密な正確さで確証する。

霊媒師ホームの解釈によると、ホームは忘我状態に成り易く、忘我状態はホームを、ホームの母の魂と直接に交流させ、ホームの母を通じて霊の冥界全体と交流させる。

19 世紀のフランスの霊媒師 Cahagnet の様に、霊媒師ホームは、知らない人物の人物画を描けた。

人物画の人物を呼び出して見た人は、霊媒師ホームの知らない人物の人物画が、似ていたと認めた。

霊媒師ホームは、知らない人物の名前すら言う事ができ、知らない人物と質問者だけが理解可能な質問に、知らない人物に代わって、答える事ができた。

霊媒師ホームが室内にいると、不思議な騒音が聞こえた。

家具や壁で激しい打撃音が反響した。

時には、嵐に打たれて開いたかの様な音を立てて、ドアや窓が独りでに開いた。

人は、外出しても、そよ風も感じず、空には雲が無いにもかかわらず、風雨の音を聞きさえした。

誰も触れずに、家具が転倒して移動した。

鉛筆は、独りでに、霊媒師ホームの筆跡で、文字を記し、ホームと同じ様な誤字脱字をした。

霊媒師ホームと同じ室内にいる人は、目に見えない手によって、触れられたり掴まれたりした様に感じた。

霊媒師ホームの目に見えない手による接触は、女性を選んでいる様に思われ、不真面目であり、下品な時すら有った。

読者はエリファス レヴィの遠まわしな表現の意味を十分に理解できる、とエリファス レヴィは思う。

(読者は、「霊媒師ホームの目に見えない手が、女性を選んで、性的に触った」と理解できる、とエリファス レヴィは思う。)

目に見え手で触れられる複数の手が、テーブルから出現した、または、テーブルから出現した様に見えた。

ただし、目に見え手で触れられる複数の手がテーブルから出現する様に見える光景を見るためには、テーブルをヴェールといった物で覆う必要が有る。

前記の様に、目に見えない代行者である星の光は、特定の道具の用意を必要とする。

正に、手品師ジャン ウジェーヌ ロベール ウーダンの巧みな後継者である手品師達が、特定の道具の用意を必要とする、様に。

特に、闇の中で、霊媒師ホームによる不思議な手は、あらわれた。

霊媒師ホームによる不思議な手は、暖かくてリンの様な青白い光を放っているか、冷たくて黒色であった。

霊媒師ホームによる不思議な手は、愚かな文を書いたりピアノに触れたりした。

霊媒師ホームによる不思議な手がピアノに触れると、常にピアノの正確さを狂わせたので、ピアノの調律師を呼ぶ必要が有った。

イギリスの最重要人物の１人である小説家であり政治家である男爵エドワード ブルワー リットン卿も、霊媒師ホームによる不思議な手を見たり触れたりした。

エリファス レヴィは、霊媒師ホームによる不思議な手についての、エドワード ブルワー リットンの記録と署名入りの証明書を読んだ事が有る。

エドワード ブルワー リットンは、霊媒師ホームによる不思議な手が当然つながっている先の腕を謎の者から引き寄せるために、霊媒師ホームによる不思議な手をつかんで全力で引き寄せた、と記している。

しかし、目に見えない者はイギリスの小説家エドワード ブルワー リットンよりも力が強くて、霊媒師ホームによる不思議な手は、エドワード ブルワー リットンの手から逃れてしまった。

霊媒師ホームの後援者である、人格と誠実さが疑い様が無い、ロシアの伯爵A.B〇〇〇〇〇〇も、霊媒師ホームによる不思議な手を見て力強く掴んだ。

伯爵A.B〇〇〇〇〇〇は、「霊媒師ホームによる不思議な手は、完全に人の手の形をしていて、暖かく生きていた。ただし、唯一不思議に感じた事は、骨が無い事である」と話している。

逃れられない様に束縛して掴んでいると、霊媒師ホームによる不思議な手は、逃れようと抗わなく成り、縮小して、溶けてしまい、伯爵A.B〇〇〇〇〇〇の手の中には何も残らなかった。

霊媒師ホームによる不思議な手を見て触った、ある人は、「霊媒師ホームによる不思議な手の指は、膨らんでいて、こわばっていた」と話して、霊媒師ホームによる不思議な手の指を、リンの様な青白い光を放っている暖かい空気で膨れたゴム手袋に例えた。

　時には、不思議な手の代わりに、不思議な足が、あらわれたが、裸足ではなかった。

　十中八九、靴下が無い霊は、少なくとも特別に、女性の繊細さを畏敬して、テーブルにかかっている布越しでしか足を見せなかった。

　不思議な足の出現は、霊媒師ホームを非常に疲れさせて震えさせた。

　不思議な足が出現すると、霊媒師ホームは、健康な人に近づき、溺死した様に健康な人につかまった。

　霊媒師ホームにつかまれた人は、突然、不思議な疲れと衰弱を感じた。

　霊媒師ホームの降霊術の会の１つに出席した、あるポーランドの紳士は、鉛筆と紙を地面の両足の間に置いて、霊の存在の証として、紙に何かを書く様に霊に求めた。

　少しの間、鉛筆は微動だにしなかったが、突然、鉛筆が部屋の隅に投げられた。

　ポーランドの紳士は、かがんで、紙を取ってみると、誰も理解できなかった３つのカバラの象徴が紙に存在するのを見つけた。

　３つのカバラの象徴を見て、霊媒師ホームだけが、気を非常に動転させ、震えさえした。

　しかし、霊媒師ホームは、３つのカバラの象徴の性質や意味の説明を自ら拒んだ。

　そのため、研究者達は、３つのカバラの象徴を保存して、霊媒師ホームが近づく事を非常に恐れた高等魔術の師エリファス レヴィの所へ持ち込んだ。

　エリファス レヴィは、３つのカバラの象徴を見た。

そして、後記は、3つのカバラの象徴の詳細な記述である。

鉛筆が紙をほとんど切っているくらい、3つのカバラの象徴は、強引に描かれていた。

3つのカバラの象徴は、無秩序に、紙に殴り書きされていた。

第1のカバラの象徴は、エジプトの秘伝伝授者が通例ティフォンの手の中に置いたカバラの象徴である。

第1のカバラの象徴は、タウ(ת)とコンパスの形に開いた2つ1組の(地面に)垂直に立っている線である、上が輪であるアンク(、または、アンサタ十字)である。

輪の下は、2つ1組の(地面に)水平な短い線である。2つ1組の(地面に)水平な短い線の下では、コンパスの形に開いた2つ1組の斜めの線が逆さのV字形である∧字形に成っている。

第2のカバラの象徴は、(タロットの5ページ目に描かれている、)法王、大祭司イエス、秘儀祭司の、横木が三角形のピラミッド型の位階制を形成している、三重十字架である。

三重十字架は、遥か古代から存在している象徴である。

三重十字架は、未だに、法王の象徴である。

三重十字架は、法王という羊飼いの杖の上の先端を形成している。

しかし、悪人の霊が鉛筆で描いた第2のカバラの象徴である、三重十字架には、十字架の上への枝、十字架の先端が、二又に分岐している2つ1組で、第1のカバラの象徴に続いて再び、恐るべきティフォンのV字形を形成している、という特徴が有った。

V 字形は、対立と分裂の象徴である。

V 字形は、憎悪と永遠の戦いの象徴である。

第 3 のカバラの象徴は、フリーメーソンが「哲学の十字」と呼んでいる、枝と枝の間の直角の間に(、想像の中で正方形を描いた場合の隅に、)点が 1 つ存在する、4 つの均等な枝による十字である。

しかし、悪人の霊が描いた「哲学の十字」は、4 つの点の代わりに、2 つの点だけが、右側の 2 つの隅に配置されて存在している。

悪人の霊が描いた第 1 と第 2 のカバラの象徴に続いて更に、悪人の霊が描いた第 3 のカバラの象徴の、2 つの点は、戦い、分裂、否定の象徴である。

後記の様に、魔術師エリファス レヴィ、達道者エリファス レヴィは、B〇〇〇〇〇〇婦人の客間に集まった人々に、3 つのカバラの象徴の意味を学問的に説明した。

(エリファス レヴィが、自慢話の様な雰囲気で読者をうんざりさせないために、第 1 人称の語り手エリファス レヴィと、物語の中の第 3 人称的な名前の登場人物エリファス レヴィを区別する事を、読者は許してください。)

「カバラの 3 つの象徴は、無上の秘伝伝授者だけが知っている、一連の神聖な古代の象徴の物である。

第 1 のカバラの象徴は、ティフォンの象徴である。

第 1 のカバラの象徴は、悪人の霊が創造する原理の中で二元論をねつ造して神を冒涜している事を表す。

なぜなら、オシリスのアンサタ十字は、逆さの男性器である。

オシリスのアンサタ十字は、(水平の線の)受容的な自然を、受胎させる、(輪から伸びた垂直の線の)父の自発的な神の力を表す。
逆さのＶ字形である、∧字形を形成している、コンパスの形に開いた２つ１組の(地面に)垂直に立っている線は、自然の父が唯一ではなく２人いるという嘘を主張している。
ティフォンの象徴は、神聖な母性の代わりに、姦淫を推奨している。
ティフォンの象徴は、知の原理の代わりに、虚無にあらわれる永遠の衝突という結果に成る盲目の運命という嘘を主張している。
そのため、ティフォンの象徴は、最古の、改変が最小の、最も恐るべき、地獄の印である。
ティフォンの象徴は、無神論の神を意味する。
ティフォンの象徴は、悪魔のふりをした悪人の霊による『悪魔のサイン』である。
ティフォンの象徴は、古代エジプトの祭司の象徴であり、神だけの領域の隠された象徴群と関連が有る。
三重十字架は、哲学の象徴と関係が有る。
三重十字架は、概念の段階的な広がりと、形の進歩的な拡大を表す。
三重十字架は、逆さのタウの三重である。
三重十字架は、３つの世界の絶対を肯定する人の思考である。
悪人の霊が描いた縦木の上が二又に分岐している三重十字架は、３つの世界の絶対が、分岐で終わっている。
言い換えると、悪人の霊が描いた縦木の上が二又に分岐している三重十字架は、３つの世界の絶対が、分岐という疑いと対立の象徴で終わっている。

そのため、もしティフォンの象徴が『神は存在しない』という嘘を意味するのであれば、悪人の霊が描いた縦木の上が二又に分岐している三重十字架は、『位階的な真理は存在しない』という嘘を厳密には意味する。
『哲学の十字』は、全ての秘伝伝授者には自然の象徴、自然の四大元素の形である。
『哲学の十字』の 4 つの点は、隠されたテトラ グラマトンという言い表せない伝達不能な神の名前の 4 文字を表す。
テトラ グラマトンは、『G∴ A∴』、『Great Arcanum(大いなる秘密)』の永遠の言葉である。
『哲学の十字』の右の 2 つの点は、力を表す。
『哲学の十字』の左の 2 つの点は、思いやりを表す、様に。
『哲学の十字』の 4 つの点は、テトラ グラマトンを表し、右から左へ読むべきである。
『哲学の十字』の 4 つの点は、テトラ グラマトンを表し、X 字形の十字である『聖アンデレ十字』を形成する様に、右上の点から左下の点へ読んでから、右下の点から左上の点へ読む。
悪人の霊が描いた『哲学の十字』では左の 2 つの点が削除されている事は、十字架の否定、思いやりや愛の否定を表す。
悪人の霊が描いた『哲学の十字』では左の 2 つの点が削除されている事は、力による絶対的な支配の肯定、力による上位から下位へと下位から上位への永遠の対立を表す。
悪人の霊が描いた『哲学の十字』では左の 2 つの点が削除されている事は、力による上位から下位への圧政の美化と、力による下位から上位への反乱の美化を表す。
悪人の霊が描いた『哲学の十字』は、汚れた儀式の象徴である。
事の善悪はともかく、悪人の霊が描いた『哲学の十字』によって、神殿騎士団は非難された。

悪人の霊が描いた『哲学の十字』は、無秩序の象徴であり、永遠の絶望の象徴である」

前記は、超自然的な霊の出現についての、マギの隠された知の第1の啓示である。

それでは、同時代の、霊の出現による、不思議な象徴を比較させてください。

なぜなら、世論という裁判所に持ち込む前に、知は研究、探求するべきである。

そのため、人は、研究、探求、調査をいとうなかれ。

そのため、人は、きっかけを見過ごすなかれ。

中略

後記は、19 世紀の偽のグノーシス主義者ヴァントラスが聖体のパンへ悪人の霊に血で描かせた象徴である。

(1)

小宇宙の星である、魔術の五芒星。

隠されたメーソンの五芒星。

コルネリウス アグリッパは、五芒星の中に、上の頂点の内側に頭が、他の4つの頂点の内側に手足がある、人の形を描いた。

燃える星。

五芒星が、逆さに成ると、黒魔術のヤギの象徴に成ってしまう。

逆さの五芒星の中に、上の2つの頂点の内側に2つの角が、左右の頂点の内側に2つの耳が、下の頂点の内側に髭(ひげ)がある、ヤギの頭が描かれる。

中にヤギの頭が描かれた、逆さの五芒星は、対立と運命の象徴である。

中にヤギの頭が描かれた、逆さの五芒星は、諸々の天を角で襲うヤギである。

上位の秘伝伝授者は、サバトにおいてすら、中にヤギの頭が描かれた、逆さの五芒星を嫌った。

(2)

ヘルメスの杖ケーリュケイオンの 2 頭の蛇。

しかし、悪人の霊が描いたケーリュケイオンの 2 頭の蛇は、2 つの半円を描いた後に、頭と尾が一緒に成る代わりに、外を向いている。

また、悪人の霊が描いたケーリュケイオンは、2 頭の蛇の中間の線である杖が無いので、正しいケーリュケイオンを表していない。

2 頭の蛇の頭上には、地獄の象徴である、死に至る V 字形であるティフォンの二叉の分岐が描かれている。

悪人の霊が描いたケーリュケイオンは、受容性と副次的なものを表す水平線が、神聖な数 3 を右に、神聖な数 7 を左に委ねている様に描かれている。

後記は、悪人の霊が描いたケーリュケイオンの意味である。

対立は永遠である。

神とは、常に破壊によって創造する 2 つの死に至る力による争いである。

宗教のものは、受容的であり、儚い一時的なものである。

大胆さは、宗教のものを利用する。

争いも、宗教のものを利用する。

宗教のものによって、対立は永遠と成っている。

(3)

カバラの、ヤハウェの組み合わせ文字。

しかし、悪人の霊が描いたテトラ グラマトンの組み合わせ文字は、イョッドとヘーが逆さである。

隠された知の学者達によると、悪人の霊が描いたテトラ グラマトンの組み合わせ文字は、最も恐ろしい神への冒涜である。

後記を、悪人の霊が描いたテトラ グラマトンの組み合わせ文字は、どう読んでも、意味する。

「運命だけが存在する。

(悪人の霊の嘘では、)神と神の聖霊は存在しない。

物質が全てである。

精神とは、狂った物質による虚構に過ぎない。

形は概念以上の物である!

女性は男性以上の者である!

快楽は思考以上の物である!

悪徳は徳以上の物である!

大衆は頭(かしら)以上の者である!

幼子は父以上の者である!

狂愚は理性以上の物である!」

前記が、ヴァントラスが奇跡のふりをして聖体のパンの上へ悪人の霊に血で描かせた象徴である!

エリファス レヴィは、栄光に満ちて、「事実は、エリファス レヴィが意味を説明した通りである」と断言する。

また、エリファス レヴィは、「エリファス レヴィは、自ら、魔術の知とカバラの真の鍵によって、ヴァントラスが聖体のパンへ悪人の霊に血で描かせた象徴を見て、説明した」と断言する。

　中略

　失われた知の象徴を直感できる事こそ、本当に不思議な事ではないか？　はい！失われた知の象徴を直感できる事こそ、本当に不思議な事である！

　なぜなら、超越的な魔術は、全てのものをヘルメスとソロモンの２つの柱に基づかせて、哲学の領域を、自発的な諸概念を含む白い光の知の領域と、受容的な諸概念を含む黒い影の知の領域という、２つの知の領域に分けている。

　自発的な諸概念を含む白い光の知の領域の総合は、神という名前を与えられている。

　受容的な諸概念を含む黒い影の知の領域の総合は、悪魔またはサタンという名前を与えられている。

　男性器を額（ひたい）の上に持って行く合図は、インドの破壊神シヴァの信者の特徴的な合図である。

　なぜなら、男性器を額（ひたい）の上に持って行く合図は、創世の神秘に当てはまる大いなる魔術の秘密の合図である。

　男性器を額（ひたい）の上に持って行く合図は、恥知らずな考えの告白と成る。

　古代オリエント人は、「もはや世界の人々に慎みが無い時代には、世界の人々は不毛な放蕩に身を委ねるため、母がいなく成るので、世界の人々は、すぐに終わる。慎みとは、母性を受け入れる事である」と話している。

　親指と小指だけ伸ばした手は、３つ１組の否定を表す。

親指と小指だけ伸ばした手は、自然の力のみへの肯定を表す。

　現在、印刷中の手相についての見事な本で、エリファス レヴィの学の有る機知に富んだ友人の Desbarolles が説明しようとしている様に、古代の秘儀祭司は、人の手によって、魔術の知の完全な要約を得ていた。

　古代の秘儀祭司にとって、人差し指は、ユピテルか木星を表す。

　古代の秘儀祭司にとって、中指は、サトゥルヌスか土星を表す。

　古代の秘儀祭司にとって、薬指は、アポロンか太陽を表す。

　古代エジプト人にとって、中指はオプスであった。

　古代エジプト人にとって、人差し指はオシリスであった。

　古代エジプト人にとって、小指はホルスであった。

　親指は、創造する力を表す。

　小指は、機知を表す。

　親指と小指だけ伸ばして見せた手は、神聖な象徴では、肉欲と駆け引きだけを肯定する事と同義である。

　親指と小指だけ伸ばした手の合図の意味、肉欲と駆け引きだけの肯定は、「愛しなさい！　そして、望む事をしなさい！」というアウグスティヌスの大いなる言葉を物質的に誤解した物である。

　中略

　エリファス レヴィは「誰に会いたいのですか？」と尋ねた。

　偽の魔術書「ホノリウスの魔術書」の偽の儀式で悪人の霊と交流していた男性は「主である神(を騙る悪人の霊)に会いたいのです」と答えた。

「(真の)主である神とは、どのような存在であるか、あなたは知っていますか？」

「いいえ。しかし、また会いたいのです」

「(真の)主である神は、物質的な肉眼の目には見えない」

「主である神(を騙る悪人の霊)を(物質的な肉眼の)目で見ました」

「(真の)主である神には、物質的な姿が無い」

「主である神(を騙る悪人の霊)を(物質的な肉の)手で触れました」

「(真の)主である神は、無限である」

「主である神(を騙る悪人の霊)の背は私の背にとても近い」

「預言者達は、(真の)主である神について、『(真の)主である神の外衣は、東から西へ広がり、明けの明星達を一掃する』と話している」

「主である神(を騙る悪人の霊)は、非常に清潔な(、中世に騎士が鎧の上に着ていた、)袖無しの外衣や、非常に白いリネン(、亜麻布)の服を着ていました」

「出エジプト記 33 章 20 節には、『人は、神(の顔)を見たら、生きている事はできない』と記されている」

「主である神(を騙る悪人の霊)は、優しげな陽気そうな顔をしていました」

　中略

　「アメリカの霊媒師ホームは、伝染性の夢遊病を患っている病人である」というのが、エリファス レヴィの意見である。

　「霊媒師ホームは、伝染性の夢遊病を患っている病人である」という意見の説明と証明が残っている。

　「霊媒師ホームは、伝染性の夢遊病を患っている病人である」という意見を完全に説明して証明するために、一冊の本を十分に書き上げる労力を必要とした。

　「霊媒師ホームは、伝染性の夢遊病を患っている病人である」という意見を説明して証明する本は書き上げられていて、間もなく出版するつもりでいる。

　「霊媒師ホームは、伝染性の夢遊病を患っている病人である」という意見を説明して証明する本の名前は「驚異現象の理由、または、知という裁判所における悪魔」である。

　なぜ悪魔なのか？

　なぜなら、Mirville が不完全に説明した事実によって、エリファス レヴィは「霊媒師ホームは、伝染性の夢遊病を患っている病人である」という意見を説明して証明している。

　エリファス レヴィは、「Mirville が『不完全に説明した』」と話した。

　なぜなら、Mirville は、悪魔が不思議な人格である、と誤って考えてしまった。

一方、エリファス レヴィにとって、悪魔と呼ばれているものは、自然の力の誤用である。

かつて、ある霊媒師は、「地獄とは場所ではなく状態である」と話している。

エリファス レヴィは、「地獄とは場所ではなく状態である」、「悪魔と呼ばれているものは、人格でも力自体でもない。悪魔と呼ばれているものは、悪徳であり、結果として、弱さである」と話せる。

少しの間、驚異現象の研究に戻ろう!

一般的に、霊媒師は、健康が貧弱であり、狭量な弱さが有る。

冷静な学の有る人がいると、霊媒師は、驚異現象を何も起こせない。

人は、何かを見たり感じたりする前に、霊媒師と慣れ合う必要が有る。

驚異現象は全ての人にとって同一ではない。

例えば、ある人が不思議な手を見ている時、別の人には白い薄い煙しか見えない。

霊媒師ホームの磁気、星の光から印象を受け取った人は、一種の不快を感じる。

霊媒師の星の光から印象を受け取った人が感じる不快とは、部屋が回転しているような錯覚や、気温が急に低く成った感覚である。

霊媒師ホームが自ら選んだ何人かがいると、驚異現象は、より成功した。

何人かによる降霊術の会では、全く何も見えない人がいる場合が有るかもしれない。

何人かによる降霊術の会では、見えている人たちの間でも、見えている物は全ての人にとって同一ではない。

例えば、ある夜、V〇〇〇〇〇〇の家で、霊媒師ホームは婦人が亡くした幼子の霊を出現させたが、B〇〇〇〇〇〇婦人だけが幼子の霊を見、M〇〇〇〇〇〇伯爵は小さい白い薄いピラミッド型の蒸気を見たが、他の人は何も見えなかった。

例えば、大麻といった物質は、理性の働きを奪う事無く酩酊させて、存在しない驚異的な鮮明な幻覚を見せる、事が知られている。

霊媒師ホームの驚異現象の大部分は、大麻に似た、自然の感化力による物である。

そのため、霊媒師ホームは、自ら選んだ少数の人の前、以外では、驚異現象を起こす事を拒む。

霊媒師ホームの驚異現象の残りは、磁気、星の光の力による物である。

霊媒師ホームの降霊術の会で何ものかを見る事は、見た人の健康不安の目安と成ってしまう。

たとえ霊媒師の降霊術で幻覚を見た人の健康状態がすぐれていても、幻覚を見る事は、想像する脳と光を知覚する脳や視神経といった神経器官が一時的に混乱している事を表す。

もし神経系の一時的な混乱が頻繁にくり返されると、人は、深刻な病気に成ってしまうであろう。

テーブル ターニングといった幻覚に夢中に成った、どれだけ多数の人が、衰弱し、持続強縮性けいれんに襲われ、狂い、変死したか、誰が知っているであろうか？

倒錯に飲み込まれると、驚異現象は、特に恐ろしい物と成ってしまう。

倒錯に飲み込まれると、驚異現象において、人は、悪人の霊の干渉と存在を本当に認める事ができる。

偽の奇跡である驚異現象は、倒錯か運命という２つの力のうちの１つに従っている。

カバラの象徴や謎の象徴については、人が、普遍の命の流体である星の光の中の、概念の幻を磁気的に直感して、再現した物である。

魔術の言葉には根拠が有って自分勝手にできる物ではないので、隠された聖所の象徴は絶対の概念が自然に表れた物であるので、人の直感への反映として再現される。

　「驚異現象の理由、または、知という裁判所における悪魔」という本で、エリファスレヴィは、「魔術の言葉には根拠が有る」事と「隠された聖所の象徴は絶対の概念が自然に表れた物である」事を証明するつもりである。

　しかし、「大いなる神秘の鍵」の読者に知らせないまま放置しないために、「驚異現象の理由、または、知という裁判所における悪魔」という未出版の作品から、事前に、カバラの言葉についての章と、カバラの秘密についての章の２章を抜粋して、後記に記して、満足できる形で、約束していた霊媒師ホームの問題の全ての説明を果たす、結論を導く。

　諸形態を創造している力が存在する。

　諸形態を創造している力とは、星の光である。

　星の光は、永遠の数学の法に従って、光と影の普遍のつり合いによって、諸形態を創造している。

　概念の原初の象徴は、星の光の中で、独りでに描かれる。

　星の光は、概念の物質的な道具である。

　神は、光の魂である。

　普遍の無限の光は、人にとっては言わば、神の体である。

　カバラ、または、超越的な魔術は、光の知である。

　光は、命に対応している。

　影の王国は死である。

真の宗教の全ての考えは、光の文字で、影の紙の上に、カバラの中に記されている。

影の紙は、盲信で出来ている。

星の光とは、自由な形にできる大いなる仲介するものである。

魂と肉体の結合は、光と影の結合である。

星の光は、神の言葉の道具である。

星の光は、影という大いなる本の上の、神の白い文である。

光は、概念の源泉である。

人は、光の中に、全ての宗教の考えの起源を探求する必要が有る。

ただし、唯一の真の神の教えだけが存在する。唯一の真の考えだけが存在する。

唯一の純粋な光だけが存在する、様に。

影だけが無限に変えられていく。

光、影、存在の映像である光と影の調和は、神の三位一体、人に成った神、身代わりによる救いという大いなる考えを類推可能である原理を形成する。

また、光、影、存在の映像である光と影の調和は、十字架の神秘である。

「光、影、存在の映像である光と影の調和が、神の三位一体、人に成った神、身代わりによる救いという大いなる考えを類推可能である原理を形成するし、十字架の神秘である」事は、宗教の記念碑を根拠にする事によって、「最初」の神の言葉イエスの象徴によって、カバラの秘密を含んでいる諸々の書物によって、カバラの魔術の鍵による全ての神秘の論理的に考えられた説明によって、魔術師には証明が容易である。

実に、全ての象徴において、魔術師は、神性についての概念における神の三位一体の概念をもたらす、対立と調和の概念を見つける。

そして、天の東西南北の神話における人格化が、全ての考えと全ての儀式の基礎である、神の７つ１組を完成している。

「全ての象徴において、神の三位一体の概念をもたらす、対立と調和の概念が見つかり、天の東西南北の神話における人格化が、神の７つ１組を完成している」事を確信するには、カバラの学の無かったデュピュイの、学の有る作品を再読して熟考するだけで十分である。

仮に、デュピュイが、宗教を否定する先入観によって宗教を信じるという諸々の誤信が天文学として一致していると誤って見ていただけの所に、諸々の真理の調和を見ていたら、デュピュイは大いなるカバリストに成れたであろう。

「大いなる神秘の鍵」で、知られているデュピュイの文書をくり返して記すのには、及ばないであろう。

けれども、「モーセがもたらした宗教改革は、完全なカバラの宗教改革であった」事、「キリスト教は、新しい考えを定めて、単に、モーセの教えの『最初』の源泉に、より近づいただけである」事、「福音は、オリエントで秘伝伝授されていた普遍の自然の神秘の上に投じられた透明なヴェールでしかない」事を、証明するのは重要である。

エロヒムやモーセの神についての著書で、卓越しているが無名の、学の有るピエール ラクールは、エロヒムやモーセの神に大きな光を投じて、古代エジプトの象徴に全ての創世記の象徴を再発見した。

より最近では、巨人的な学の有る、大胆な学徒ヴァンサン ド リヨンヌは、古代人と近代人の偶像崇拝についての論文を出版した。

古代人と近代人の偶像崇拝についての論文で、ヴァンサン ド リヨンヌは、普遍の神話のヴェールを持ち上げている。

エリファス レヴィは、良心的な学徒達に、ピエール ラクールとヴァンサン ド リヨンヌの様々な文書を読む様に勧める。

それでは、エリファス レヴィは、ヘブライ人のカバラの探究だけに専念する。

神のロゴス、神の言葉は、カバラの神の知の秘伝伝授者によると、完全な啓示である。

そのため、神のカバラの諸原理は、最初のアルファベットである象形文字であるヘブライ文字を形成している象徴を区別して再統一した物として、見つかるはずである。

後記は、全てのヘブライ語の文法の中に見つかる物である。

イョッドは、他の全ての文字を創造している、根源の普遍の文字である。

(

「形成の書」の最初の部分によると、「神ヤーが、数 1 から数 10 までの数と、22 文字のヘブライ文字で、創世した」。

ヤーはヤハウェの短縮形である。

カバラでは、ヤーをイョッドで表す。

)

ヘブライ文字の 2 つの母字は、アレフとメムであり、相互に相対し合うが、相互に類推可能である。

「形成の書」の最初の部分などによると、ヘブライ文字の母字は 3 つであり、ヘブライ文字の 3 つの母字は、アレフ、メム、シュィンである。

ヘブライ文字の 7 つの複字は、ベト、ギメル、ダレト、カフ、プフェ、レシュ、タウである。

(「形成の書」の最初の部分によると、「ヘブライ文字の 7 つの複字は、二重に響く」。)

エリファス レヴィによると、ヘブライ文字の 12 の単字は、ヘー、ヴァウ、ザイン、ケト、テト、イョッドかアレフ、ラメド、ヌン、サメク、アイン、ツァーデ、クォフである。

「形成の書」の最初の部分によると、ヘブライ文字の 12 の単字は、ヘー、ヴァウ、ザイン、ケト、テト、イョッド、ラメド、ヌン、サメク、アイン、ツァーデ、クォフである。

(

アレフは数 1 と対応し 0 + 1 = 1 である。

イョッドは数 10 と対応している。

数 10 は数 1 と数 0 で出来ている。

カバラでは、王冠ケテルと王国マルクトは呼応する。

カバラでは、数 1 と数 10 は呼応する。

)

ヘブライ文字の 22 文字は、3 つの母字、7 つの複字、12 の単字である。

単一性は、相対的な形で、アレフが表している。

3 つ 1 組は、イョッドとメムとシュィンか、アレフとメムとシュィンが表す。

(

エリファス レヴィによると、ヘブライ文字の 3 つの母字は、アレフかイョッド、メム、シュィンかタウである。

「形成の書」の最初の部分によると、ヘブライ文字の 3 つの母字は、アレフ、メム、シュィンである。

カバラでは、数 1 と数 10 は呼応する。

シュィンとタウはヘブライ文字の最後の 2 文字である。

)

7 つ 1 組は、ヘブライ文字の 7 つの複字が表す。

ヘブライ文字の7つの複字は、ベト、ギメル、ダレト、カフ、プフェ、レシュ、タウである。

12つ1組は、ヘブライ文字の12の単字が表す。

エリファス レヴィによると、ヘブライ文字の12の単字は、ヘー、ヴァウ、ザイン、ケト、テト、イョッドかアレフかメム、ラメド、ヌン、サメク、アイン、ツァーデ、クォフである。

「形成の書」の最初の部分によると、ヘブライ文字の12の単字は、ヘー、ヴァウ、ザイン、ケト、テト、イョッド、ラメド、ヌン、サメク、アイン、ツァーデ、クォフである。

(カバラでは、数1と数10は呼応する。)

12つ1組は、3つ1組を4つ1組で増殖した物である。

12つ1組は3つ1組を4つ1組で増殖した物であるため、7つ1組は3つ1組と4つ1組を合わせた物であるので、7つ1組による象徴体系は、12つ1組を再び含んでいると言える。

ヘブライ文字の各文字は数を表す。

ヘブライ文字の組み合わせは、一連の数である。

数は、絶対の哲学の概念を表す。

ヘブライ文字は、象形文字の略記である。

ヘブライ文字は、象形文字の要約である。

22文字のヘブライ文字の各文字の象形的な意味と哲学的な意味を見て行こう。

(ロベルト ベラルミーノ、ヨハネス ロイヒリン、ヒエロニムス、「裸のカバラ」、「形成の書」、イエズス会士で神父のガスパー ショットの「Technica Curiosa = Curious Technique = 不思議なわざ」、ピコ デラ ミランドラ、その他の特にピストリウスが集めた文書の著者を参照してください。)

ヘブライ文字の3つの母字

アレフかイョッド(カバラでは、数 1 と数 10 は呼応する。)

絶対の原理

創造する存在である神

メム

精神

ソロモンの一方の柱ヤキン

シュィン

物質

ソロモンの他方の柱ボアズ

ヘブライ文字の 7 つの複字

ベト。反映といった表れ、概念、月、神秘の王である天使ガブリエル。

ギメル。愛、意思、金星、生と死の王である天使アナエル。

ダレト。知力、権力、木星、王の中の王である天使サキエル メレク。

(

サキエルは神を覆う者を意味する。

メレクはヘブライ語で王を意味する。

王である神。

)

カフ。激しい力、戦い、労苦、火星、軍団が一丸と成って攻撃する重装歩兵の密集陣形ファランクスの王であり軍団である天使サマエル。

プフェ。雄弁、理解力、水星、知の天使ラファエル。

レシュ。破壊と再生、「時」、土星、墓と孤独の王である天使カシエル。

(カシエルはヘブライ語で「神の速さ」または「神は私の怒り」を意味する。)

タウ。真理、光、太陽、エロヒムの王である(、エロヒムを神の聖霊である天使と解釈すると天使の王である、)天使ミカエル。

ヘブライ文字の 12 の単字

ヘブライ文字の 12 の単字は、4 組の 3 つ 1 組に分けられる。

ヘブライ文字の 12 の単字の、4 組の 3 つ 1 組の、各組は、権限として、神のテトラグラマトンの 4 文字イョッド、ヘー、ヴァウ、ヘーのうち 1 文字を持っている。

神のテトラ グラマトンのイョッドは、ちょうど既に話した様に、創造する自発的な原理を表す。

テトラ グラマトンのヘーは、創造される受容的な原理、女性器を表す。

テトラ グラマトンのヴァウは、2 つのものの統一、男性器を表す。

テトラ グラマトンの最後のヘーは、第 2 の創造される原理を表す。

言い換えると、テトラ グラマトンの最後のヘーは、原因に対する、諸結果と諸形態の世界における受容的な再生を表す。

ヘブライ文字の 12 の単字は、ヘー、ヴァウ、ザイン、ケト、テト、イョッド(かアレフ)かメム、ラメド、ヌン、サメク、アイン、ツァーデ、クォフである。

(

「形成の書」の最初の部分によると、ヘブライ文字の 12 の単字は、ヘー、ヴァウ、ザイン、ケト、テト、イョッド、ラメド、ヌン、サメク、アイン、ツァーデ、クォフである。

カバラでは、数1と数10は呼応する。

)

ヘブライ文字の12の単字は、4組の3つ1組に分けられる。

ヘブライ文字の12の単字の、4組の3つ1組の、各組は、テトラ グラマトンの4文字のうち1文字の感化の下で、テトラ グラマトンの4文字のうち1文字の解釈と共に、「最初」の三角形の概念を再生する。

前記には、「カバラの哲学的な考えと神の教えが、ヴェールに隠された形ではあるが、完全に示されている」と理解できるであろう。

では、創世記の象徴を探求しよう。

「最初に、存在の単一性であるイョッドにおいて、エロヒム、ヤキンとボアズという2つのつり合わされている力は、天、精神と、地、物質を創造した。
言い換えると、最初に、エロヒムは、善と悪、肯定と否定を創造した」

前記の様に、モーセの創世記は始まる。

それから、地を人に譲る話に成った時に、人を神性と結びつけるための聖所の話に成った時に、モーセは、楽園、イョッドとテトラ グラマトンである楽園の中央の唯一の源泉と源泉から枝分かれしている4つの川、川の近くに植えられた命の木と死をもたらす木という2つの木について話している。

男性アダムと女性エヴァが楽園に置かれる。

男性アダムと女性エヴァは、自発性と受容性を表す。

女性エヴァは、死に共感して、男性アダムを女性エヴァと共に女性エヴァの堕天に引きずり込む。

神は、男性アダムと女性エヴァを、真理という聖所から追放する。

神は、大衆が命の木を損なうのを予防するために、牛の頭を持つスフィンクスである智天使ケルブを、真理という楽園の門に置いた。

(牛の頭を持つスフィンクスについては、アッシリアの象徴、インドの象徴、エジプトの象徴を参照してください。)

前記は、人が真理の単一性から導き出せる、神秘の考え、神秘の考えの象徴、神秘の考えが抱かせる畏敬である。

堕落した人々は、神を偶像に取って代えてしまい、遅からず、出エジプト記 32 章の金の子牛への偶像崇拝に夢中に成ってしまう。

続いて、カインとアベルという象徴は、相互に作用し合う 2 つの原理による交互に連続する必然の反作用の神秘を表す。

アベルが象徴する、強さは、自ら、圧迫によって、弱さの誘惑に対して報復する。

カインが象徴する、殉教者である、弱さは、罪をつぐなって、良心の呵責という罪の烙印を押されて非難されて、強さと和解する。

カインとアベルは、倫理道徳の領域のつり合いを表す。

倫理道徳の領域のつり合いは、全ての予言の基礎である。

倫理道徳の領域のつり合いは、全ての知的な政治的な思考の支点である。

強さに越権行為を許してしまう事は、強さが自殺する様に運命づける事と成る。

デュピュイは、カバラの普遍の神の教えを理解できなかった。

なぜなら、科学の発見が、部分的に証明し、日増しに、より多く実現して行っている、「普遍の類推可能性」という美しい仮定の知が、デュピュイには無かった。

超越的な魔術の「普遍の類推可能性」という鍵を保持していなかったデュピュイは、太陽と 7 惑星と黄道 12 星座についてよりも、エロヒムについて見る事ができなかった。

デュピュイは、プラトンのロゴスの象徴が、太陽の中に、見えなかった。

デュピュイは、天の 7 音階が、7 惑星の中に、見えなかった。

デュピュイは、全ての入門の 4 組の 3 つ 1 組が、黄道 12 星座の中に、見えなかった。

「大衆に理解されなかった、霊、精神、知の達道者であり、何人かの似非キリスト教徒の似非信心よりも、偶像崇拝しなかった多神教徒の秘伝伝授者である、ユリアヌス帝は、象徴的な太陽崇拝を、デュピュイとヴォルネイよりも、良く理解していた」とエリファス レヴィは断言する。

「王なる太陽への賛歌」で、ユリアヌス帝は、「この世の太陽が、知の領域を照らす真理という太陽の反映や物質的な影でしかない」、「真理という太陽自体も、絶対の者である神から借りている光でしかない」と認めていた。

ユリアヌスが、キリスト教の神である、無上の神についての概念を保持している事は、注目するべき事である。

現代のキリスト教徒は、「自分だけが、ユリアヌス帝と同時代の敵の教会の教父の何人かよりも、大いに、正しく、キリスト教の神である、無上の神を敬礼している」と誤って思い込んでいる。

後記は、ヘレニズムを擁護するユリアヌスの文書で、ユリアヌスが自分の考えを表した文である。

「『神が話した。そうすると、諸々のものが創造された』と本に記すだけでは不十分である。
『人が神が源であるとしている、諸々のものが、存在である神の法に反していないかどうか？』を調べる必要が有る。
なぜなら、もし諸々のものが神の法に反しているのであれば、神は諸々のものを創造したはずが無い。
なぜなら、神は、神自身を否定しないで自然と矛盾できたはずが無い……。
神は、永遠の者である。
神は永遠の者であるので、神の秩序も不変であるはずである、のは必然的な性質である」

　前記の様に、神について正しく話しているユリアヌスを、大衆は背教者、不信心者と誤って呼んでいるのである！
　大衆はユリアヌスを背教者、不信心者と誤って呼んでいるが、後に、神学校への神託と成ったキリスト教会博士のトマス アクィナスは、多分、前記の、異教徒のユリアヌスの輝かしい言葉から霊感を得て、大いなる皇帝ユリアヌスの思考を簡潔に要約している「神が望むから正しいのではなく、正しいから神が望む」という美しい大胆な言葉を書き記す事によって、迷信を自ら抑制する必要性に気づいた。

　自然の完全な不変の秩序という概念、全ての存在の上昇する位階と下降する感化という概念は、博物学全体の第一の分類を、古代の秘儀祭司達に与えた。
　古代の秘儀祭司達は、鉱物、植物、動物を類推的に研究した。
　そして、古代の秘儀祭司達は、鉱物、植物、動物の起源と特性を、自発的な原理か受容的な原理、光か闇が源であるとした。

鉱物、植物、動物の自然な形によって痕跡を辿って逆探知した、鉱物、植物、動物における神による選択や拒否の痕跡が、徳や悪徳の象形文字に成った。

そのため、象徴をもの自体と誤解した事によって、また、もの自体を象徴で表現した事によって、大衆は、もの自体と象徴を混同する様に成ってしまった。

もの自体と象徴の大衆による混同が、文字通り受け取ってしまうと架空に成ってしまう、例え話である博物学の起源である。

文字通り受け取ってしまうと架空に成ってしまう、例え話である博物学では、あえてライオンが鶏に負け、イルカが人々の中に恩知らずがいる悲しみで死に、マンドラゴラが話し、星々が歌う。

例え話である博物学の、例え話の魔法がかかった世界は、実に、魔術の詩の領域である。

しかし、例え話である博物学は、例え話である博物学をもたらした象徴の意味という現実性しか持たない。

超越的なカバラの類推可能性と、概念と象徴の正確な繋がりを理解している賢者にとって、例え話である博物学の、妖精達の王国は、発見が未だに豊富に有る王国である。

なぜなら、ヴェール無しでは人々を喜ばせるには美し過ぎるか、簡単過ぎる、例え話である博物学の真理は、巧妙な影に完全に隠されている。

イエス。

鶏(が表す警戒心)はライオン(が表す力)を不安にさせる事ができる、また、鶏(が表す警戒心)はライオン(が表す怒り)の主に成れる。

なぜなら、頻繁に、警戒心は力に取って代わる。

また、警戒心は怒りの抑制に成功する。

前記と同様に、古代人の博物学に見せかけた例え話の他の話も説明できる。

人は、類推可能性の例え話としての利用における誤用の可能性を既に理解できるであろうし、カバラが、仕方なしに、もたらしてしまう類推可能性に対する誤解を予測できるであろう。

実際に、二流のカバリストにとって、類推可能性の法は、盲信や狂信の対象と成った。

人は、全ての迷信は、二流のカバリストによる類推可能性の法に対する盲信や狂信が原因であるとする必要が有る。

大衆は、迷信をもたらしたという無実の罪で、隠された知の達道者達を迫害してきている。

後記の様に、二流のカバリストは、類推可能性の法を、推測した。

(後に記されているが、後記の推測は、ある物は真実で他の物は仮定である原理である。)

象徴は、もの自体を表す。

もの自体が、象徴の力である。

(例えば、二流のカバリストは、「神は、神の象徴に力を与える」と推測した。)

象徴と、象徴が意味するもの自体の間には、類推可能性が存在する。

象徴が完全であるほど、類推可能性は完全と成る。

言葉を話す事は、概念を呼び出して、目の前に、存在させる事に成る。

神の名前を呼ぶ事は、神を現せさせる事に成る。

　言葉は、魂に作用して、魂に肉体へ反作用させる。
　結果的に、人は、他人を脅かす事ができ、慰める事ができ、病気に陥る原因をもたらす事ができ、治す事ができ、殺す事すらでき、言葉という手段によって死から復活させる事ができる。

　名前を話す事は、話した名前の存在を創造するか、呼び出す事に成る。

　名前には、存在自体の、言葉による考えか、精神の考えが含まれている。

　魂が概念を呼び出すと、魂が呼び出した概念の象徴が星の光の中に自動的に記される。

　呼び出す事は、求める事である。
　言い換えると、呼び出す事は、名前によって誓う事である。
　名前によって誓う事は、名前において信念の証と成る行為を果たす事である。
　名前によって誓う事は、名前が表す力によって交流する事である。

　言葉自体が善であるか悪である。
　言葉自体が健全であるか有害である。

　最も危険な言葉は、無意味な言葉や軽率に話された言葉である。
　なぜなら、無意味な言葉や軽率に話された言葉は、概念への故意の中絶と成る。

無意味な言葉や軽率に話された言葉、無用な言葉は、知の霊に対する犯罪である。
無意味な言葉や軽率に話された言葉、無用な言葉は、知的な子殺しと成る。

諸々のものは、各人にとって、各人が名前を与えて諸々のものから創造した物である。

全ての人の言葉は、痕跡であるか、習慣的な祈りである。

正しく話す事は、正しく生きる事である。

上品な言葉遣いは、神聖さの栄光の光である。

前記の、ある物は真実で他の物は仮定である原理から、また、二流のカバリストが原理から導き出した多かれ少なかれ誇張された結果から、迷信的な二流のカバリストは、誘惑術、降霊術、霊を追い払う術、謎の祈りを完全に信じてしまった。
さて、宗教は常に奇跡を成就しているので、神の聖霊のあらわれ、神託、不思議な治療、突然の不思議な病気には宗教が欠かせなかった。
そのため、簡潔で崇高な哲学は、黒魔術の秘密の知と成ってしまった。
前記の観点から、非常に懐疑的であるが非常に軽信し易い 19 世紀において、特に、カバラは、大多数の人々の好奇心を未だに刺激できる。
しかし、すでに話した様に、前記は、真の知ではない。

人が真理自体を目的として真理を探求する事は、稀である。

魔術に取り組む俗人の努力には、満たしたい肉欲や貪欲といった隠された動機が常に存在する。

カバラの諸々の秘密の中には、特に魔術に取り組む俗人を常に苦しめてきたカバラの秘密、錬金の秘密、地のものを黄金に変える秘密が存在する。

錬金術の全ての象徴は、カバラの象徴である。

錬金術の操作は、2 つの正反対のものの一致がもたらす、類推可能性の法に基づいている。

さらに、計り知れない物理の秘密が、古代人のカバラの例え話に隠されている。

エリファス レヴィは、古代人のカバラの例え話を解読して、物理の秘密に辿り着いた。

エリファス レヴィは、物理の秘密の知を、錬金術の探究者の調査に委ねる。

後記は、カバラと錬金術の物理の秘密の知である。

(1)

熱、光、電気、磁気といった不可量物の 4 つの流体は、星の光という唯一の普遍の代行者の 4 つの表れでしかない。

(2)

星の光は、電気の形で大作業に役立つ火である。

(3)

現代では催眠術と呼ばれているが、人の意思は、神経系を用いて、命の光、星の光を傾ける事ができる。

(4)

大作業の秘密の代行者、賢者の Azoth、錬金術師の命を与える生きている黄金、普遍の金属の創造する代行者とは、「磁化された電気」である。

「磁化された電気」という「磁気」と「電気」という２つの言葉の結合は、多くの事を人に未だ教えてはくれないであろう。

それでも、多分、「磁気」と「電気」という２つの言葉は、世界を覆すのに十分な力を含んでいる。

哲学的な見地で、エリファス レヴィは「多分」と話している。

なぜなら、個人的には、エリファス レヴィは、「磁気」と「電気」という大いなるヘルメスの錬金術の秘密の高等な重要性について何も疑わない。

すでに話した様に、錬金術はカバラの娘である。

「錬金術がカバラの娘である」という真実を確かめるには、ニコラ フラメルの象徴群、バシレウス ヴァレンティヌスの象徴群、ヘブライ人のラビのアブラハムの諸々の文書、ヘルメスの「エメラルド板」の多かれ少なかれ聖書外典の様な神託を見るだけで十分である。

全ての場所で、普遍に、人は、ピタゴラスの 10 つ 1 組の痕跡を見つけられる。

「形成の書」では、10 つ 1 組を、神のものの完全な絶対の概念に非常に壮大に適用している。

10 つ 1 組は、単一性と三重の 3 つ 1 組で出来ている。

(10 = 1 + 3 × 3。)

ヘブライ人のラビ達は、10 つ 1 組を、創世記ベレシート、戦車メルカバー、光の「セフィロトの樹」または「生命の樹」、セムハムフォラスの鍵と呼んでいる。

「高等魔術の教理と祭儀」という名前の本で、エリファス レヴィは、(取るに足りない口実で現代まで保存されている)タロットという象徴の記念碑について、かなり詳しく話している。

タロットだけが、天の高等な秘伝伝授の神秘の文書の全てを説明できる。

象徴の記念碑とは、トランプ遊びといったカード遊びをもたらした放浪の民ロマのタロットである。

タロットは、22 文字のヘブライ文字に 1 対 1 対応している象徴である 22 枚の大アルカナと、4 組の 10 つ 1 組の小アルカナで出来ている。

4 組の小アルカナの各組の象徴はヤハウェという神の名前の 4 文字のうち 1 文字と対応している。

タロットの象徴の多様な組み合わせと、タロットの象徴と数の 1 対 1 対応は、多数のカバラの神託を形成するので、タロットという神秘の書は、全ての知を含んでいる。

タロットという完全に簡潔な哲学的な機械は、諸々の結果の深さによって、人を驚かせる。

トリテミウス修道院長は、魔術の大いなる祖師の 1 人である。

トリテミウスは、カバラのアルファベットについての「ポリグラフィア」という名前の非常に巧妙な著作を書いた。

トリテミウスの「ポリグラフィア」のカバラのアルファベットの文字群は、各文字が 1 つの言葉を表す、言葉同士が相互に対応し合う、ある文字から別の文字へ言葉群が言葉群を補完する、連続する文字群の一連の組み合わせである。

トリテミウスは、タロットについて知っていて、タロットを応用し、「ポリグラフィア」の学の有る組み合わせを論理的な順序で配置した、のは疑い様が無い。

カルダーノは、秘伝伝授者の象徴的なアルファベットであるタロットについて知っていた。

希薄なものについてのカルダーノの著作の章の数と性質によって、人は、カルダーノがタロットについて知っていた事を認める事ができる。

実際、希薄なものについてのカルダーノの著作は、章の数が 22 であり、章のテーマが対応しているタロットの大アルカナの数と象徴の意味と一致する。

「神と人と万物の対応についての(『Natural Table』または)『Natural Picture』」という名前のルイ クロード ド サンマルタンの著作も、希薄なものについてのカルダーノの著作と、同様である、と人は気づける。

タロットという秘密の口伝は、カバラの最初の時代から現代まで絶え間無く続いてきた。

テーブル ターニングの霊媒師や、アルファベットの文字の一覧表で諸霊と話す霊媒師は、(タロットよりも、)かなり時代遅れである。

霊媒師は、タロットという神託の道具が存在する事を知らない。

タロットの言葉は、常に明確であり、常に正確である。

タロットによって、人は、7 惑星の 7 つの霊と交流できて、3 つの段階であるアッシャー、イェツィラー、ベリアーの 72 の車輪に思い通りに話させる事ができる。

7 惑星の 7 つの霊と交流し、3 つの段階であるアッシャー、イェツィラー、ベリアーの 72 の車輪に思い通りに話させるには、普遍の類推可能性による秩序を理解するだけで十分である。

スヴェーデンボルグが、秘密の象徴的な鍵であるタロットにおいて、話している、様に。

タロットを混ぜ合わせて、運任せにタロットを引き、タロットを引く人が啓発を望む事についての概念に対応する数だけ引いたタロットを集め、カバラの文を読む様にタロットの神託を読み解いて行く。

言い換えると、奇数だけ集めたタロットは中央から右を経由して左へ読んでタロットの神託を読み取って行き、偶数だけ集めたタロットは右から左へ読んでタロットの神託を読み取って行く。

順に、各タロットに対応している数を解釈し、集めたタロットの合計数を解釈し、数の順序と象徴的な繋がりによって連続している神託を解釈する。

前記の、タロットを読み解く方法は、カバラの賢者の方法であり、絶対の諸概念の厳正な展開の発見を本来の目的としていた。

タロットを読み解く方法は、無知な聖職者と、中世にタロットを所有していた放浪の民ロマという放浪の民の先駆者の手中に落ちてしまって、迷信にまで堕落させられてしまった。

無知な聖職者と放浪の民ロマは、タロットを正しく用いる方法を知らなかった。

無知な聖職者と放浪の民ロマは、タロットを占いにだけ利用した。

中世の大衆は、チェスの発明者がホメロスの「イーリアス」の英雄パラメデスであると信じた。

チェスの起源はタロットしかない。

王(または皇帝)、女王(または女帝)、騎士、戦士、愚者、塔、諸々の数を表すチェス盤といった、タロットと同じ、象徴と象徴の組み合わせが、チェスには存在する、と人は気づくであろう。

古代では、チェスの指し手達は、チェス盤の上で、哲学的な諸問題や宗教的な諸問題の解決方法を探求して、チェスの駒という象徴をチェス盤という諸々の数と交わらせて動かして、沈黙して相互に論じ合った。

「鵞鳥(がちょう)のゲーム」という螺旋の双六(すごろく)は、古代ギリシャ人の遊びから復活した。

「鵞鳥(がちょう)のゲーム」の開発者もホメロスの「イーリアス」の英雄パラメデスである、という説が有る。

「鵞鳥(がちょう)のゲーム」は、象徴は動かず、サイコロで諸々の数は動く、チェス盤でしかない。

「鵞鳥のゲーム」は、入門を求める修行者が利用するための、車輪の形に配置されたタロットである。

ところで、「tarot」という言葉には、「rota」と「tora」という言葉が見つかる。

ギヨーム ポステルが証明した様に、「tarot」という言葉は、棒、杯、剣、輪というタロットの小アルカナの象徴の、車輪の形の、最初の配置を表す。

タロットの象徴よりも、「鵞鳥のゲーム」の象徴は質素であるが、手品師または魔術師、王(または皇帝)、女王(または女帝)、塔、悪魔またはティフォン、死を表すものといったタロットと同じ象徴が見つかる。

サイコロが表す遊戯の可能性は、命の可能性を表現していて、賢者が熟考するほど十分に深く、幼子が理解するほど十分に簡潔な、天の高等な哲学的な意味を隠している。

古代ギリシャ人による文字の発明者という象徴的な人物であるパラメデスは、文字の発明者であるエノクと同一人物である。

文字の発明者であるヘルメス、文字の発明者であるカドモスは、文字の発明者であるエノクと同一人物である。

ただし、ホメロスの「イーリアス」で、「トロイア戦争への参加を回避するためのオデュッセウスの狂ったふりがふりであると暴いたパラメデスがオデュッセウスの報復の犠牲に成った」という例え話は、「秘伝伝授者の先導者または知の人の永遠の運命は、弟子によって殺される事である」事を表す。

なぜなら、秘伝伝授者の先導者の力強い象徴的な表現を用いているために、キリスト教徒の大衆は非常に誤解しているが、「弟子は、師の精神である血肉を自分の物として、師の思想の生きている実現と成る」のである。

容易に理解できる様に、最初のアルファベットの概念は、普遍の言葉の概念であった。

最初のアルファベット、普遍の言葉は、全ての知、神、人の要約と進歩の法を、組み合わせの中に、また、象徴自体の中にすら、含んでいる。

エリファス レヴィの意見では、人の知が夢見た物として、最初のアルファベットよりも優れた物や大いなる物は存在した事が無い。

最初のアルファベットという古代の世界の秘密の発見は、過去の失われた知という地下墓地におけるエリファス レヴィの長年の実を結ばなかった研究と感謝されなかった労苦に完全に報いてくれた、とエリファス レヴィは確信している。

最初のアルファベットの発見による無上の結果の１つは、シャンポリオンの好敵手や後継者が未だに不完全にしか解読できていない、象形文字の研究に、新しい方針をもたらすであろう。

カバラの象徴の様に、ヘルメスの弟子の書き方は、類推可能性により象徴的であり、組み合わせにより総合的である。

そのため、古代の神殿の石碑に記された文書を読み解くためには、石碑をあるべき場所に戻してから、他の石碑の文字が有している数とも比較して、石碑の文字が有している数を数える事が、有効ではないか？　はい！

例えば、テーベを含んでいるルクソールのオベリスクは、神殿の入口の２つの柱の１つであったか？

オベリスクが神殿の２つの柱の１つである場合は、右手にあったのか？　左手にあったのか？

神殿の２つの柱の右手にあった柱オベリスクの象徴は、自発的な原理に繋がっているはずである。

神殿の２つの柱の左手にあった柱オベリスクの象徴は、受容的な原理によって読み解く必要が有る。

ただし、神殿の２つの柱オベリスクのうち、一方は、他方と、正確に対応しているはずである。

そのため、神殿の２つの柱のうち１つの柱オベリスクの象徴は、２つの正反対のものの類推可能性から、象徴の完全な意味を読み解く必要が有る。

シャンポリオンは、「ロゼッタ ストーン」の「ヒエログリフ」に、コプト語を見た。

多分、別の学者であれば、シャンポリオンより容易に、より幸運にも、「ロゼッタ ストーン」の「ヒエログリフ」に、ヘブライ語を見つけたであろう。

しかし、もし「ロゼッタ ストーン」の「ヒエログリフ」がヘブライ語でもコプト語でも無かったら、人は何と言うであろうか？

例えば、もし「ロゼッタ ストーン」の「ヒエログリフ」が普遍の最初の言葉であったら？

ところで、超越的なカバラの言葉である、普遍の最初の言葉は、確かに存在している。

さらに、普遍の最初の言葉は、ヘブライ語の基礎と、ヘブライ語が源である全てのオリエントの言葉の基礎に、未だに存在している。

普遍の最初の言葉は、聖所の言葉である。

そのため、諸々の神殿の入口の諸々の柱は、普通に、普遍の最初の言葉の象徴を全て含んでいる。

忘我状態の人の直感は、最初の象徴群については、学の有る人の知よりさえも、真理に近づく。

なぜなら、すでに話した様に、普遍の命の流体、星の光は、概念と形の間を仲介する原理であり、未知のものを探求する魂の超常的な飛躍に従って、忘れられているが既に知らずに発見されている隠された知の大いなる啓示の象徴によって、真理を忘我状態の人に自然と与える。

星の光が真理を象徴で忘我状態の人に与えるので、悪魔のふりをした悪人の霊は「悪魔のサイン」をカバラの象徴を盗用した形で形成できる。

星の光が真理を象徴で忘我状態の人に与えるので、Lavater の前に現れた Gablidone、シュレプファーが呼び出した霊、ヴァントラスが呼び出した悪人の霊、霊媒師ホームが呼び出した悪人の霊は、謎のサインを、カバラの象徴を盗用する形で、もたらす事ができた。

もし電気が光を動かせたら、また、電気が触れずに重い物体すら動かせたら、磁気、星の光によって、電気を傾けて、象徴と文を自然と表す事は可能であろうか？

疑い無く、人は、星の光によって、電気を傾けて、象徴と文を自然と表す事が可能である。

なぜなら、すでに、何人かの人は、星の光によって、電気を傾けて、象徴と文を自然と表している。

後記の様に、エリファス レヴィは、「諸々の奇跡の最重要な代行者とは何か？」と尋ねてくる人に、応（こた）える。

「奇跡の代行者は、『大いなる務め』の『第一質料』である。
奇跡の代行者は、『磁化された電気』である」

星の光が、全てのものを創造している。

星の光の中に、形は保存される。

星の光によって、形は再現される。

星の光の振動は、普遍の運動の原理である。

星の光によって、恒星同士は相互に結びつき、電気の鎖の様に、恒星同士は相互の光線を絡み合わせる。

星の光が諸々の恒星を磁化している、様に、星の光は人といった諸々のものを磁化している。

共感と親近感が張力をもたらす電磁気の鎖、星の光による星の鎖によって、疑い無く自然ではあるが目には見えず驚異の性質の方法で、人といった諸々のものは、世界の一方の端から他方の端へ相互に交流でき、愛撫したり打ったりでき、傷つけたり治したりできる。

星の光に、魔術の秘密が存在する。

魔術は、マギから現代人へ伝えられてきた知である!

魔術は、無上の知である!

魔術は、最も神聖な知である!

なぜなら、魔術は、最も崇高な形で、大いなる宗教の真理を確証する!

魔術は、最も中傷された物である!

なぜなら、俗人である大衆は、神の聖霊の魔術を、迷信的な悪人の霊の魔術と頑迷に混同する!

エリファス レヴィは、悪人の霊の魔術の、憎むべき実践を既に非難している!

魔術によってのみ、人は、テーバイのスフィンクスの謎の質問に答える事ができる。

魔術によってのみ、人は、聖書の話として存在する醜聞的な影に隠されている時が有る宗教史の諸問題の解決方法を見つける事ができる。

宗教史家は、モーセの神の聖霊の魔術に無謀にも敵対した魔術の存在と力を認めている。

出エジプト記には、ファラオの魔術師ヤンネとヤンブレが、杖を蛇に変え(た様に見え)る魔術と「10 の災い」のうち第 1 と第 2 の災いで、モーセと同様に見える魔術を行使した、と記されている。

出エジプト記 8 章 15 節で、ファラオの魔術師ヤンネとヤンブレは「モーセは神の指です」と話して、人知では、モーセの神の奇跡の模倣は不可能であると宣言した。

中略

18 世紀に、カリオストロの驚異現象は、ヨーロッパの全てに知れ渡った。

18 世紀に、カリオストロの「エジプトの赤ワイン」と「若返り薬エリクサー」がもたらす力を知らなかった人はいたであろうか？　いいえ！

18 世紀に、大衆が話していた、カリオストロが過去の死んだ有名人を血肉を持たせて出現させて見せた霊の冥界の夕食会の話に、何を言い足す事ができるであろうか？

しかし、カリオストロは、無上の秘伝伝授者ではなかった。

なぜなら、大いなる白い結社フリーメーソンは、カリオストロをローマの宗教裁判所に引き渡した。

裁判の資料を信じる事ができるならば、ローマの宗教裁判所の裁判官を前に、カリオストロは、メーソンの三文字の言葉「L∴D∴P∴」が「百合を足の下に踏んで圧倒しなさい」または「百合(が紋章であるフランス王家)を足の下に踏みにじりなさい」であるという非常に愚かな憎むべき説明をした。

ただし、驚異現象は、無上の秘伝伝授者だけの特権ではない。

教養も徳も無い人が、頻繁に、驚異現象を起こす物である。

自然の法は、人には不明な特別な能力を有している生物に機会を見つけては、不変の精密さと静けさで自然のわざを施行する。

最高に洗練された美食家は、トリュフの価値を正しく評価できて、トリュフを自分のためだけに用いるが、トリュフを掘り起こす者は、味覚が鈍感であると思われる、豚である。

より物質的ではない、より美食的ではない、多数の物事でも、類推的に同様である。

直感は、予感を手探りで探してきた。

しかし、実に、知だけが発見できる。

人知の現実の進歩は、驚異現象が起きる機会を大いに減少させて行っている。

しかし、驚異現象は未だに多数、残存している。

なぜなら、想像力の力と、催眠術の性質と力は、共に、未だに、知られていない。

さらに、普遍の類推可能性の観察を人は怠っている。

そのため、人は、占いをもう信じていない。

そのため、後記によって、カバラの賢者は、未だに、大衆を驚かし、知識人を混乱させる事さえできる。

(1)隠された物事を見抜く。

(2)未来の多数の物事を予言する。

(3)望む事を行わない様に予防する様に、望まない事を行わざるを得ない様に追い込む様に、他人の意思を制御する。

(4)霊の出現と夢を刺激して引き起こす。

(5)多数の病気を治す。

(6)死の全ての兆候を見せていた人を復活させる。

(7)ヘブライ人アブラハム、ニコラ フラメル、ライムンドゥス ルルスの秘密によって、賢者の石と錬金術の実在を(必要が有れば実例によって)実証する。

前記の、全ての驚異現象は、唯一の代行者によって行われる。

奇跡の代行者を、古代ヘブライ人と、化学者の貴族カール フォン ライヘンバッハは、オドと呼んでいる。

奇跡の代行者を、18 世紀のマルティネス ド パスカーリのマルティニストと、エリファス レヴィは星の光と呼んでいる。

奇跡の代行者を、Mirville は悪魔と呼んでいる。

奇跡の代行者を、古代の錬金術師は、Azoth と呼んでいる。

星の光は、命の元素である。

星の光は、熱、光、電気、磁気の現象として表れる。

星の光は、全ての地の天体と全ての生きている存在を磁化している。

星の光において、星の光の両極性によって、つり合いと運動についてのカバラの神の教えの証拠が表される。

星の光の、一方の極が引き寄せる時、他方の極は斥ける。

星の光の、一方の極が暖める時、他方の極は冷やす。

星の光の、一方の極が青色の光か緑がかった光を放つ時、他方の極は黄色の光か赤みを帯びた光を放つ。

星の光という奇跡の代行者は、磁化の多様な方法によって、人を相互に引き寄せたり引き離したりする。

星の光は、一方の引き寄せる力の中心に他方を引き寄せて、一方の望みに他方を従わせる。

星の光は、星の光の変化や星の光の流れの変化によって、動物の秩序のつり合いを建て直したり乱したりする。

星の光は、創造する神の言葉による人の中の映像や類推可能性である想像力の印象を受け取り伝えて、予感をもたらしたり夢の内容を決定したりする。

想像力は、創造する神の言葉による人の中の映像や類推可能性である。

奇跡についての知は、星の光という不思議な力についての知である。

簡潔に言うと、奇跡を起こすわざは、磁気、星の光の不変の法に従って、諸存在を磁化するわざ、または、諸存在を照らすわざである。

エリファス レヴィは、「磁気」という言葉よりも、「光」、「星の光」という言葉を好む。

なぜなら、「磁気」という名前よりも、「光」、「星の光」という名前は、隠された知の口伝の名前である。

また、「磁気」という名前よりも、「光」、「星の光」という名前は、秘密の代行者の性質を完全な形で表す。

実に、星の光である、錬金術師の、液体の、飲用に適した黄金は、存在する。

金を意味するフランス語の OR は光を意味するヘブライ語の AOUR に由来する。

全ての入門において、達道者は、「何を望むのか？」と修行者に尋ねた。

修行者は「光を見る事を望む」と答える必要が有る。

普通に、人は、「光に照らされた者」という名前を達道者達に与えている。

「光に照らされた者」という名前は、知性が奇跡の光に照らされる事を信じている者という誤った意味であるかの様に神秘的な意味に誤解されて、一般に非常に誤解されている。

簡潔に言うと、「光に照らされた者」という名前は、大いなる魔術の代行者についての知による、または、絶対の者である神についての存在論の論理的な概念についての知による、光についての知者や、光の所有者を意味する。

普遍の代行者、星の光は、知に従う力である。

星の光は、制御されないと、星の光が創造している全てのものを速やかにモロクの様に飲み込んでしまい、命の過剰を計り知れない破壊に変えてしまう。

制御されていない星の光は、古代の神話の地獄の蛇、古代エジプト人のティフォン、フェニキア人のモロクと成ってしまう。

しかし、エロヒムの母である知が星の光という蛇の頭の上に足を置くと、知は、蛇が噴き出す火を全て使い尽くし、命を与える光を地に諸手で注ぐ。

後記の様に、「光輝の書」には記されている。

この世の「最初」に、四大元素が地の面（おもて）を獲得しようと戦い合っていた時に、(星の光という)火は巨大な蛇の様に巻きついて全てのものを包囲して破壊しようとしたが、神の思いやりが、雲を外衣として纏（まと）う様に海の波を周囲に立てながら、足を(星の光という)蛇の頭の上に置いて、(星の光という)蛇を底無しの淵に戻した。

前記の、「光輝の書」の例え話に、カトリックの象徴にとって大事な象徴の１つである聖母マリアの勝利の第一の概念と最も論理的な説明を見ない人がいるであろうか？　「光輝の書」の例え話に、カトリックの象徴にとって大事な象徴の１つである聖母マリアの勝利の第一の概念と最も論理的な説明を人は見る！

カバリストは、悪魔の隠された真の名前は、神の名前ヤハウェを逆に書いた物である、と話している。

「悪魔の名前が神の名前ヤハウェを逆にした物である」事は、逆に、秘伝伝授者には、テトラ グラマトンの神秘の完全な啓示と成る。

実に、大いなる神の名前ヤハウェの文字と順序は、「概念は形を超越して統治する」事、「自発性は受容性を超越して統治する」事、「原因は結果を超越して統治する」事を表す。

神の名前ヤハウェの文字と順序の啓示によって、人は、正反対の、悪魔の名前の文字と順序が表す事を会得する。

神ヤハウェは、自然を名馬の様に従わせて、神が望む場所へ名馬の様な自然を走らせる。

悪魔エヴァイョは、たがの外れた馬であり、出エジプト記 15 章 1 節の「モーセの歌」の紅海に飲み込まれたエジプト人の馬の様に、転倒して、乗馬者を馬の下に投げ出し、底無しの淵に沈む。

カバリストにとっては、悪魔は存在するが、人格でもなく、自然の 2 つの力すら超越する力でもない。

悪魔とは、散乱した人知、または、眠り込んでしまった人知である。

悪魔とは、狂気であり、虚偽である。

「悪魔とは、散乱した人知、眠り込んでしまった人知、狂気、虚偽である」事は、中世の夢魔を説明できる。

「悪魔とは、散乱した人知、眠り込んでしまった人知、狂気、虚偽である」事は、何人かの秘伝伝授者の奇妙な象徴を説明できる。

例えば、「悪魔とは、散乱した人知、眠り込んでしまった人知、狂気、虚偽である」事は、神殿騎士団の奇妙な象徴を説明できる。

神殿騎士団は、バフォメットを敬礼した事で非難されたが、バフォメットという象徴を大衆に知られた事で更に非難された。

バフォメットは、普遍の代行者、星の光の汎神論的な象徴である。

バフォメットは、錬金術師のひげが有る悪魔でしかない。

「古代のヘルメスの錬金術のメーソンの無上の位階の魔術師が、大作業の成就を、ひげが有る悪魔のおかげであるとしていた」事は知られている。

「ひげが有る悪魔」の「悪魔」という言葉で、俗人の大衆は急いで十字を切る手振りをして、目隠しする。

しかし、汎神ヘルメスの宗教の秘伝伝授者は、「ひげが有る悪魔」という例えを理解して、大衆に口外しない様に非常に用心する。

中略

神は絶対の善の概念である。

悪魔は悪の概念である。

しかし、人は、善からの盗用の概念としてしか、絶対の悪という概念を抱かない。

善だけが絶対であり得る。

悪は、人の無知と過誤にのみ比例する。

全ての人は、神に成るために、最初は悪魔に成ってしまう。

しかし、連帯の法は普遍であるので、位階が天に存在する様に、位階は地獄にも存在する。

そのため、常に、悪人は、自分に害を与える、自分よりも更に邪悪な悪人を見つける事ができる。

また、悪人は、悪の頂点に達すると、悪人を辞める必要が有る。

なぜなら、悪人は、自分の人性を消滅させて行く事でのみ、より邪悪な悪人に成って行けるが、悪の頂点に達して自分の人性を完全に消滅させてしまうと、消滅させる物が無く成ってしまい、より邪悪な悪人に成る事は不可能に成る。

そのため、悪魔に成った人は方策が尽きて、人に成った神イエスの王国の下に再び降伏して悔い改めると、最初は食い物にできると思い込んでいた人々に救われる事に成る。

そのため、ただ、悪事の人生を生きようと努めている人は、悔い改めると、悪事を通じて自分の中で成長させた知力と意思力の限りを尽くして善を畏敬する事に成る。

そのため、ヨハネの黙示録 3 章 15 節と 16 節で、キリスト教の大いなる祖イエスは、象徴的な言葉で、「私イエスはあなたが冷たいか熱いかどちらかであってほしい」、「あなたは生ぬるいので、私イエスはあなたを口から吐き出すつもりである」と話している。

マタイによる福音 25 章 14 節から 30 節の「タレントの例え話」で、大いなる師イエスは、人生という銀行に預けて投資する危険を冒して失う恐怖から宝である 1 タレントを埋めた怠惰な人だけを非難した。

真の罪とは、何も思考しない怠惰、何者も愛さない怠惰、何も望まない怠惰、何もしない怠惰である。

自然は、労苦する人だけを認めて報いる。

人の意思は、人自身の行動によって、成長し、強く成る。

本当に望むためには、行動する必要が有る。

常に、行動は無気力を支配して、無気力を戦車の車輪で引きずって行く。

「行動力の有る人が無気力な人を支配する」事は、偽悪者が偽善者を支配する影響力の秘密である。

行動する事を恐れているだけなのに、自分は徳が高いと誤って思い込んでいる臆病者が多数、存在する!

中略

知と一致した大胆さは、この世での全ての成功の母である。

着手するには、行動するには、知る必要が有る。

成し遂げるには、意思する必要が有る。

本当に望むには、大胆に行動する必要が有る。

そして、大胆な行動の成果を安心して集めるには、沈黙を守る必要が有る。

知、大胆さ、意思、沈黙。

知る、大胆に行う、思う、沈黙を守る。

知るために考える、大胆に行う、思う、沈黙を守る。

「大いなる神秘の鍵」以外の著書で既に話した様に、知、大胆さ、意思、沈黙は、テトラ グラマトンの４文字や、スフィンクスの４つの象徴的な姿の部分と対応している、４つのカバラの言葉である。

スフィンクスの人の頭は、知を表す。

スフィンクスのライオンの爪は、大胆な行動を表す。

スフィンクスの強い牛の腹は、意思を含む思考を表す。

スフィンクスの神秘のワシの翼は、沈黙を表す。

他人からの批評や嘲笑のために、金銭のために知の秘密を使用しない人だけが、他人を超越した態度を維持できる。

本当に強い全ての人は、磁化する者である。

普遍の代行者は、本当に強い人の意思に従う。

「意思によって、普遍の代行者を従える」事によって、本当に強い人は、奇跡を起こす。

本当に強い人は、自分を他人に信じさせる。

本当に強い人は、他人を自分に従わせる。

大いなる人が「これは、このものは、私が望むものに成る」と話すと、俗人の大衆の目には(ある意味で)自然が変身した様に見え、自然は大いなる人が望んだものに成る。

マタイによる福音 26 章の「最後の晩餐」で、善行によって神に成った人イエスは「これ(であるパン)は、私の肉である」、「これ(である赤ワイン)は、私の血である」と話している。

そして、現在まで、人は、一欠片のパンと少量の赤ワインの存在を前に、イエスと殉教者の苦しみと死が神聖化した血肉を見たり、手で触れたり、味わったり、敬礼したりできるのである!

それでも、人の意思は何の奇跡も成就できなかったと人々は言うのか!?　人の意思は奇跡を成就できた!

中略

高名な不適切な皇帝ユリアヌスが「ガリラヤ人」と呼んだイエスのわざにおいては、全てのものが肯定的である。

中略

人は、一見、超人的に見える力を発揮するのであれば、超人的に見える力を常に発揮する必要が有る。さもなければ、あきらめて死を受け入れる事に成る。

大衆は、信じ過ぎた者に対して、敬礼し過ぎた者に対して、特に、従い過ぎた者に対して、卑劣な方法で復讐する。

中略

古代人は、実践的な魔術を、王者のわざ、祭司のわざと呼んでいる。

そのため、「マギといった魔術師は、最初の文明の師であった」事を人は思い出すであろう。

なぜなら、魔術師は、当時の全ての知の師であった。

人が大胆に行動しようと意思すれば、人が知っている事は、人が行動できる事と成る。

実践的なカバリスト、実践的な魔術師の第一の知は、人についての知である。

骨相学、心理学、手相占い、好みと動作の観察、声の印象の観察、共感的印象や反感的印象の観察は、王者のわざ、祭司のわざである実践的な魔術から枝分かれしている物であり、古代人は知っていた。

現代のフランツ ヨーゼフ ガルとヨハン カスパー スパルツハイムは骨相学を再発見した。

ヨハン ポルタの後に続いたヨハン カスパー ラヴァーター、カルダーノ、Taisnier、Jean Belot、その他の何人かは、心理学の知を再発見した、と言うよりも、再び見抜いた。

手相占いは未だに隠された知のままである。

ダルペンティーニの 1839 年の非常に興味深い著書「手の知識」に、手相占いの痕跡が、かろうじて見つかるだけである。

手相占いについて十分に理解するには、カバラの源泉自体に再び昇る必要が有る。

学の有るコルネリウス アグリッパは、カバラの源泉から、知という水を汲んだ。

そのため、友人の Desbarrolles の著作を待つ間に、手相占いについて少し話すのが良いであろう。

手は、人の動作の道具である。

顔の様に、手は、一種の神経系の総合体で、特徴や外観を持っている。

手には、否定できない徴候によって、個人の性格が描かれている。

ある手は働き者の手であり、ある手は怠惰な人の手であり、ある手は角ばって重く、ある手は媚びていて軽い。

硬い乾燥した手は、戦いや労苦のための手である。

柔らかい湿った手は、快楽だけを求める人の手である。

尖った指は、好奇心旺盛な人の指であり、神秘的な人の指である。

角ばった指は、数学的な人の指である。

へら形の指は、頑固な人の指であり、野心家の指である。

親指は、迫力と活力の指であり、カバラの象徴では神の名前ヤハウェの最初の文字イョッドに対応している。

そのため、親指は、手の統合体である。

強い親指の人は、精神的に強い。

弱い親指の人は、精神的に弱い。

親指には、3 つの関節が有る。

地球の想像上の軸が地の厚みを通過している様に、親指の付け根の第 3 関節は、手のひらの中に隠れている。

親指の付け根の第 3 関節は、物質的な命に対応している。

親指の第 2 関節は、知に対応している。

親指の指先の第 1 関節は、意思に対応している。

油っぽい厚い手のひらは、肉感的な好みと、物質的な命の大いなる力を表す。

特に指先の第１関節が長い、長い親指は、独裁にまで行き着くかもしれない強い意思を表す。

短い親指は、穏やかで制御し易い性格を表す。

手の習慣的な握り方は、手の線を決定する。

そのため、手の線は、習慣の痕跡である。

我慢強い観察者は、手の線の識別方法と判断方法を知るであろう。

手の握り方が悪い人は、不器用であるか、不満が有る。

手には、とらえて、にぎり、あつかうという３つの重要な機能が有る。

手は、繊細であるほど、良くとらえて、上手にあつかえる。

手は、硬く強いほど、長くにぎっていられる。

薄い手の線ですら、手の習慣的な知覚の証拠と成る。

さらに、指にすら、指が名前として持つ特別な機能が有る。

親指については、すでに話した。

人差し指は、指し示す指である。

人差し指は、言葉と予言の指である。

中指は、手全体を統治している。

中指は、運命の指である。

薬指は、結合と名誉の指である。

手相占いは、薬指を太陽にささげている。

小指は、ほのめかす、おしゃべりな指である、と少なくとも庶民や子守りをする女性は話している。

小指は、非常に多数の事を庶民や子守りをする女性に教えている。

手のひらには、７つの膨らみ、７つの丘が有る。

自然の類推可能性に従って、カバリストは、手のひらの７つの膨らみ、７つの丘を７惑星にささげている。

カバリストは、親指の膨らみを金星にささげている。

カバリストは、人差し指の膨らみを木星にささげている。

カバリストは、中指の膨らみを土星にささげている。

カバリストは、薬指の膨らみを太陽にささげている。

カバリストは、小指の膨らみを水星にささげている。

カバリストは、小指側の手首の近くの膨らみを月にささげている。

カバリストは、木星丘と金星丘の間の丘を第１火星丘として火星にささげている。

カバリストは、水星丘と月丘の間の丘を第２火星丘として火星にささげている。

手のひらの７つの丘の形と統治の７惑星に従って、カバリストは、相談者の傾向、能力、起こりそうな個人の運命を判断する。

痕跡を残さない悪徳は存在しないし、痕跡を残さない徳も存在しない。

そのため、鍛錬された観察眼を外見でだます事は不可能である。

「鍛錬された観察眼を外見でだます事は不可能である」様な知は、すでに、王者の力であり、祭司の力である、と人は理解できるであろう。

手相などの観察による多数の類推可能な見通しによって、人生の重要な出来事の予見は、すでに、可能である。

ただし、予感や超感覚と呼ばれている能力が存在する。

多くの場合、実現する前に、実現中に、結果は原因の中に存在する。

敏感な人は、事前に、原因の中に結果を見る。

全ての大事件の前には、驚くべき予言が存在している。

中略

磁気の光、星の光は、未来を実現させる。

星の光は、隠されているが、現在、存在している物事を推測させる。

なぜなら、星の光は、普遍の命である。

また、星の光は、人の感覚の代行者である。

結婚といった契約の不可避の感化に従って、または、意思の法に従って、星の光は、他者の健康や病気をある者に伝染させる。

星の光は、特に不思議なパラケルススといった大いなる達道者達が明らかに認めたほどの、祝福と呪いの力を説明する。

「哲学と宗教の評論」で公表された記事で、鋭いが慎重な評論家 Ch. Fauvety は、注目するべき形で、パラケルスス、Pomponacius、Goglienus や Crollis、ロバート フルッドの磁気、星の光についての先進的な著作を高く評価している。

しかし、友人で学の有る Ch. Fauvety と協力者が哲学的な好奇心のためだけに研究している事を、パラケルススとパラケルススの後継者達は、大衆が理解する事を正に望まないで、実践した。

なぜなら、パラケルスス達にとって、星の光の知は、「大衆に対しては沈黙が必要である」事と「無学な大衆に対しては常にヴェールで隠したままにしている真理を知者にだけ示すだけで十分である」事を考慮するべき、口伝するのみの秘密の 1 つであった。

ところで、後記は、パラケルススが秘伝伝授者のためだけに取っておいた物、カバラの文字と、パラケルススが著書で使用している象徴を解読してエリファス レヴィが理解した事である。

人の魂は、(神にとっては)物質である。

神は、人の魂を不死化するために、人の魂を精神的に個性的に生きさせるために、神の様に「考える力」を人の魂に与えている。

ただし、人の魂の自然な本質は、流動的であり、共同的である。

そのため、人の中には、個人的な論理的な命と、共同的な直感的な命という２つの命が存在する。

共同的な直感的な命によって、人は、他人との集団の中で生きる事ができる。

なぜなら、各人の神経組織には普遍の魂による個別の意識が有るが、普遍の魂は全ての人にとって同一である。

人は、胎児の状態では、共同的な普遍の命の中で、忘我状態で、眠って、生きている。

実際、眠っている時は、人の理性は、働かず非論理的であり、純粋な肉体の記憶の根拠の無い出来事に従って根拠が無いまま夢の中に入る。

夢を見ている時、人には、普遍の命の意識が有る。

夢を見ている時、人は、地水火風の四大元素と混ざり合う。

夢を見ている時、人は、鳥の様に空を飛ぶ。

夢を見ている時、人は、リスの様に木に登る。

夢を見ている時、人は、蛇の様に這(は)う。

夢を見ている時、人は、星の光で酩酊している。

夢を見ている時、人は、星の光の共通の貯蔵所に沈む。

死んだ時、人は、夢を見ている時よりも完全な形で、星の光の共通の貯蔵所に沈む、様に。

しかし、死んだ時、パラケルススの「あの世」の神秘の説明によると、悪人、言い換えると、理性を損失して動物的な先天的な物である肉欲の奴隷であった人は、永遠の死の苦しみと共に、共同的な命の大海の中に引きずり込まれる。

本当に正しい人は、共同的な命の大海の上へ泳いで浮上して、統治に成功した星の光という流体の黄金という富を永遠に楽しむ。

物質的な命の星の光という大海による一体化は、強い魂に他人の存在を所有する事と、他人を補助者に変える事を許す。

「物質的な命の星の光による一体化が、強い魂に他人の存在を所有する事と、他人を補助者に変える事を許す」事は、近くても遠くても共感する星の光の流れを説明して、隠された薬の秘密を全てもたらす。

なぜなら、隠された薬の原理は、普遍の類推可能性による大いなる仮定であり、物質的な命の現象は普遍の代行者である星の光が原因であるとして、物質的な目に見える肉体へ反作用させるには、星の光に働きかける必要が有る事を教える。

また、隠された薬の原理は、星の光の本質は引き寄せる運動と斥ける運動の二重の運動である事を教える。

正に、人の肉体同士は相互に引き寄せ合ったり斥け合ったりする、様に。

また、人の肉体同士は、一方が他方を吸収したり、一方が他方の中へ広がったり、一方を他方と交換したりできる、様に。

ある人の考えや想像は、他者の形に感化を与える事ができ、また、結果的に、外的な肉体に反作用させる事ができる。

「ある人の考えや想像が、他者の形に感化を与える事ができる」事は、母の印象による胎児への不思議な現象をもたらす。

「ある人の考えや想像が、他者の形に感化を与える事ができる」事によって、病人の近くでは悪夢がもたらされる。

「ある人の考えや想像が、他者の形に感化を与える事ができる」事によって、愚者や悪人が同席していると、魂は不健全な精神的な物を吸い込んでしまう。

全寮制の学校の学童達は顔つきが似る傾向が有る、事に人は気づくであろう。

各教育現場には、各教育現場独特の家族的な空気が有る、と言える。

修道女が運営する、女の子の孤児のための学校では、少女達は相互に似るし、禁欲的な教育の特徴である、従順で目立たない顔つきに成る。

熱意が有る学校、美術や芸術の学校、名誉ある学校では、人は、美しく成る。

人は、牢獄では醜く成り、神学校や修道院では悲しい顔つきに成る。

前記までで、エリファス レヴィは、簡潔に言えば古代のマギの考えであるパラケルススの考えの結果と応用を探求するために、魔術と呼んでいる物理のカバラの基礎を探求するために、パラケルススの考えの話を離れた、と理解するであろう。

パラケルススの学派が表明しているカバラの諸原理によると、死は、常に、より深まって行く、より確かに成って行く、眠りでしかない。

死は、初期では、肉体から解放されようとしている星の体に意思の強い作用を発揮して、止める事が可能である、眠りである。

死は、何らかの強い好奇心か、何らかの支配的な愛情を通じて、星の体を命に呼び戻して、止める事が可能である、眠りである。

イエスは、マルコによる福音 5 章 39 節でヤイロの娘について「少女は、死んでいるのではなく、眠っている」と話して、また、ヨハネによる福音 11 章 11 節でラザロについて「私達の友人ラザロが眠ったので、起こしに行く」と話して、「死は眠りである」という考えを表している。

後記の様に、常識を破らない様に、イエスという復活させる人の「死は眠りである」という考えを表すために、一般に考えられている意見を利用して、話そう。

肉体の器官が破壊されていないか、肉体の器官の本質の変化が無ければ、常に、死より先に、多様な期間の昏睡状態が起きる。

(ヨハネによる福音 11 章 39 節「ラザロが死んでから 4 日間が経過している」という話を人が科学的な事実として認めた場合、ラザロの復活は、死の前の昏睡状態が 4 日間も続く場合が有り得る事を証明している。)

それでは、大作業の秘密に至ろう。

「高等魔術の教理と祭儀」で、エリファス レヴィは、母音符号が無いヘブライ語だけで、大作業の秘密をもたらしていた。

後記は、錬金術師アブラハムが注釈した「形成の書」(アムステルダム 1642 年版)の 144 ページに見つけた、大作業の秘密についての、ラテン語による完全な文である。

経路 31

経路 31 は、永遠の知と呼ばれている。

それでは、なぜ、経路 31 は、永遠の知と呼ばれているのか？

なぜなら、経路 31 は、太陽と月の横で、太陽の独自の軌道と月の独自の軌道の両方に相応しく、太陽と月の動きを導く。

ラビのアブラハム F∴ D∴の注釈

経路 31 は、永遠の知と呼ばれている。

そして、経路 31 は、太陽を太陽の独自の軌道で導き、月を月の独自の軌道で導き、残りの星々を各星の独自の軌道で導き、諸々の形を導く。

また、経路 31 は、諸々の象徴と形に相応しい配置で、全ての被造物をもたらす。

後記は、「高等魔術の祭儀 12 章」に書き写していたヘブライ語のアブラハムの文の、フランス語訳(の英訳)である。

「経路 31 は、永遠の知と呼ばれている。
経路 31 は、太陽を太陽の軌道で統治し、月を月の軌道で統治し、残りの星々を各星の軌道で統治し、諸々の形を統治する。
経路 31 は、諸々の象徴と形に相応しい配置で、全ての被造物に必要なものを配置する」

前記は、「32 の経路」の、数やヘブライ文字の独自の意味を知らない人にとっては、未だに完全に不明である、と理解できるであろう。

「32 の経路」は、数 1 から数 10 までの数と、22 文字のカバラの象形文字であるヘブライ文字である。

経路 31 は、21 番目のヘブライ文字シュィン(ש)と対応している。

シュィン(ש)の文字の形は、魔術のランプや、バフォメットの 2 本の角の間の光明を表す。

シュィン(ש)の文字の形は、両極と、両極とつり合っている中心であり、オド、星の光のカバラの象徴である。

錬金術師の言葉では、太陽は黄金を意味し、月は銀を意味し、残りの星々または残りの惑星は残りの金属を意味する、事は知られている。

　では、ヘブライ人アブラハムの考えが理解できたであろう。

　錬金術師の秘密の火は、電気である。

　電気に、錬金術師の大いなる秘密の半分は存在する。

　ただし、錬金術師は、錬金炉に集めた磁気の感化によって、電気の力をつり合わせる方法を知っていた。

　前記は、バシレウス ヴァレンティヌス、ベルナール トレヴィサン、ハインリッヒ クンラートの不明な教えからもたらされる知である。

　ライムンドゥス ルルス、アルナルドゥス デ ビラ ノバ、ニコラ フラメルの様に、バシレウス ヴァレンティヌス、ベルナール トレヴィサン、ハインリッヒ クンラートは、黄金を錬金したと主張している。

　普遍の光は、諸世界を磁化する時は、星の光と呼ばれる。

　普遍の光は、諸金属を形成する時は、Azoth、錬金術師の水銀と呼ばれる。

　普遍の光は、命を動物にもたらす時は、動物磁気と呼ばれる。

　動物的人間は、星の光による必然に従う。

　正しい人は、星の光を傾ける事ができる。

　星の光は、象徴を概念に適用して、諸々の形と映像を創造する、知的存在、神の聖霊である。

　星の光は、神の想像力に似ている。

　絶え間無く変化するが、形の法は常に同一のままである、この世は、神の広大な夢である。

　人は、想像力によって、星の光を形にする。

人は、自分の思考や夢に相応しい形をもたらすのに十分な量の、星の光を引き寄せる。

星の光が人を圧倒している時に、人が理解力を、呼び出した諸形態に溺れさせる場合は、狂う羽目に成ってしまう。

狂人による流体の大気、狂人による星の光の大気は、多くの場合、理性がよろめいている人にとって、また、想像力が強まっている人にとって、毒と成る。

興奮し過ぎた想像力が、理解力をだますためにもたらす幻の形は、写真と同じくらい、現実的である。

存在しないものは見る事ができない。

そのため、夢の幻や、白昼夢の幻は、星の光の中に存在する現実的な映像である。

さらに、伝染する幻覚が存在する。

ただし、まずは、普通の幻覚以上の何物かについて話す。

もし病気の脳が引き寄せた映像が、ある意味、現実に存在するのであれば、病気の脳は、映像をすくい上げた時と同じくらい現実に存在する映像を自身の外へ放射できないか？

霊媒師の完全に神経質な脳が放射した映像は、意識的に、または、無意識的に、霊媒師と神経的に共感している人の、霊媒師と同じくらい神経質な脳に作用し得ないか？

霊媒師ホームが達成した事は、「病的に神経質な人の脳は、映像を放射して、病的に神経質な他人の脳に作用する」事が可能であると証明している。

それでは、驚異現象で、あの世が出現するのを見たと思い込んだり、降霊術の真実を見たと思い込んだりしている人に答えよう。

エリファス レヴィは、カバリストの神聖な書物「光輝の書」から答えを借りるつもりである。

そのため、後記の、エリファス レヴィの教えは、「光輝の書」を編集したラビ達の教えでもある。

原理

霊は、下降するために自ら衣をまとい、上昇するために自ら衣を脱ぐ。

事実、なぜ、被造物の霊達は肉体をまとっているのか？

「被造物の霊達が肉体をまとっている」のは、存在できる様にするために、自身を制限する必要が有るからである。

肉体と星の体を脱いだ結果として、制限が無く成ると、(未熟な)被造物の霊達は、無限の中で自己を失い、自己のどこにも意識を集中できなく成り、全ての場所で無知、無能、無力に成って死に、神の広大さの中で消失する。

そのため、全ての被造物の霊達は、神が生きる様に求めている環境に応じて、ある者は他者より霊妙な肉体を、ある者は他者より粗野な肉体を持つ事に成る。

そのため、生きている人が地中や水中で生きる事ができない、のと同じくらい、死んだ人の魂は生きている人の空気の大気の中では生きる事ができない。

空気の体の霊、と言うより、エーテルの体の霊は、生きている人の所に来るには、潜水服に似た人工の肉体が必要である。

生きている人が死んだ人について見る全ての物は、死んだ人が大気的な星の光の中に残した鏡像である。

生きている人は、星の光の中の死んだ人の跡を、記憶や思い出による共感によって、呼び出すのである。

死んだ人の魂は、生きている人の空気の大気を(霊的に)超越して存在している。

生きている人が呼吸できる空気は、死んだ人にとっては土の様な物と成る。

ルカによる福音16章の「金持ちとラザロ」の例え話の中で、救い主イエスは、死んだ正しい人アブラハムの魂に、「大きな深淵が固定されていて、こちら(である上)から、あなたたちの(下の)所へ(下降して)渡ろうと思ってもできない」と話させて、「生きている人が呼吸できる空気が、死んだ人にとっては土の様な物と成る」事を話している。

そのため、霊媒師ホームが出現させた不思議な手は、霊媒師ホームの病的な想像力が引き寄せて放射した映像が歪めている空気で出来ている。

ある人が霊媒師ホームが出現させた不思議な手を見た様に、ある人は霊媒師ホームが出現させた不思議な手を触った。

霊媒師ホームが出現させた不思議な手は、半分は幻で、残り半分は星の光という磁気的な神経的な力で出来ている。

中略

磁気、星の光の病気は、狂気への道である。

常に、神経系の肥大か萎縮が、星の光の病気をもたらす。

星の光の病気は、病的な興奮に似る。

病的な興奮は、星の光の病気の一種である。

多くの場合、禁欲生活のし過ぎか、放蕩生活のし過ぎが、星の光の病気をもたらす。

存在の増殖という、自然の気高い務めを果たす事を自然が課している、生殖器官が、いかに脳と密接に結びついているか、は知られているであろう。

自然の聖所を犯すと必ず罰を受ける。

大いなるイシスのヴェールを持ち上げる人は、命を危険に晒す事に成る。

自然は貞淑である。

自然は命の鍵を貞淑な人に与える。

汚れた肉欲に身を委ねる事は、死と婚約する事に成る。

自由は、魂の命である。

自然の秩序の中でのみ、自由は保持される。

全ての自発的な無秩序は自由を傷つけ、長期の過剰は自由を殺す。

自発的に無秩序に成ると、理性が導いて保持する代わりに、磁気の光、星の光の満ち引きの必然に身を委ねる事に成る。

磁気の光、星の光は、絶え間無く、飲み込む。

なぜなら、星の光は、常に、創造している。

また、星の光は、創造し続けるために、永遠に、吸収する必要が有る。

殺人狂や自殺衝動は、「星の光が常に飲み込もうとする」事に由来する。

エドガー アラン ポーが非常に印象的に正確に描写した倒錯した心理は、「星の光が常に飲み込もうとする」事に由来する。

Mirville が悪魔と正に呼んでいる倒錯した心理は、「星の光が常に飲み込もうとする」事に由来する。

悪魔とは、人の心の優柔不断が麻痺させた、人の知性のめまいである。

悪魔とは、無意味なものへの偏執狂であり、底無しの淵への誘惑である。

中略

星の光による霊の出現といった驚異現象は、常に、人々が何ものかを産むために苦しんでいる時に表れる。

星の光による霊の出現といった驚異現象は、世界の人々が熱に苦しんで忘我状態で見る幻覚である。

　星の光による霊の出現といった驚異現象は、退屈している社会の病的な興奮である。

　中略

　真の宗教が姿を隠すと、人の宗教的な感情は迷信に変わる。

　なぜなら、人の魂は、信じる事を必要とする。

　なぜなら、人の魂は、希望に飢えている。

　なぜ、真の宗教は姿を隠す場合が有り得るのか？

　なぜ、知は無限の調和を疑えるのか？

　なぜなら、絶対の聖所は、大衆には常に閉ざされている。

　しかし、真理の王国は、神の王国である。

マタイによる福音 11 章 12 節「天の王国は激しい力を受容する。激しい力が天の王国を勝ち取るであろう」

　唯一の神の教え、唯一の考え、唯一の鍵、唯一の崇高な口伝が存在する。

　唯一の神の教え、唯一の考え、唯一の鍵、唯一の口伝とは、超越的な魔術である。

　真の魔術にのみ、知の絶対と、法の永遠の基礎、狂気や迷信や過誤からの守護者、知の楽園エデン、心を楽にするもの、魂の平和は存在する。

　エリファス レヴィは、笑いものにする人々を説得する事を望んで話しているわけではなく、探求者を導きたいだけである。

　勇気と希望を探求者に。

マタイによる福音 7 章 8 節「探す者は、必ず、見つける」

なぜなら、エリファス レヴィは、見つけた。

中略

秘伝伝授者は、何ものよりも位階制を畏敬し、秩序を愛して維持し、真の宗教に敬礼し、真の宗教の不死の象徴と思いやりによる身代わりによる救いの象徴を全て愛する。
思いやりが戒律であり、思いやりは従順である。

中略

狂人どもの中で理性を保ち、迷信家どもの中で信心を保ち、ふざけている人々の中で気高さを保ち、ラブレーの「パンタグリュエル物語 第四之書」のパニュルジュの羊の様に盲従する人々の中で自立を保つ事は、最も希少で、最高で、最も達成が困難な奇跡である。

第3部 第1巻 第4章 流体の霊と流体の霊の神秘

古代人は、ラルヴァ、レムレース(エンプーサ)といった様々な名前を流体の霊に与えた。

流体の霊は、流血の蒸気を好む。

流体の霊は、剣の刃から逃げる。

聖職者が、流体の霊を呼び出した事が有った。

カバラでは、四大元素の霊という名前の下で、流体の霊を認めていた。

しかし、流体の霊は霊ではない。

なぜなら、流体の霊は死ぬ存在である。

流体の霊は、流体の凝固体である。

人は、流体の霊を分割して破壊する事ができる。

流体の霊は、一種の動く幻であり、人の命による不完全な放射物である。

黒魔術の口伝では、「アダムの独身という禁欲生活のせいで流体の霊は生まれた」と言われている。

パラケルススは、「病的に興奮した女性の血の蒸気は、大気を霊に満ちあふれさせる」と話している。

流体の霊についてのパラケルススなどの考えは、非常に古い。

ヘシオドスの話に、流体の霊についての考えの痕跡が見つかる。

ヘシオドスは、夢精といった種類の汚れが染みたリネン(、亜麻布)を火の前で乾かす事をあからさまに禁じている。

通例、流体の霊がとりつく人々は、厳し過ぎる禁欲で逆に性的に興奮しているか、不節制で衰弱している。

流体の霊は、命の光、星の光による失敗作である。

流体の霊は、肉体と精神が無い、自由な形にできる仲介するものであり、過剰な精神や肉体の不調から生まれる。

流体の霊と必然的に共感する、堕落した人々は、さまよう仲介するものである流体の霊を引き寄せ、自身を犠牲にして多かれ少なかれ長持ちする見せかけの存在性を流体の霊に貸し与える。

流体の霊は、補助的な道具として、堕落した人々の直感による決断に役立つが、堕落した人々を治すためではなく、常に、更に迷わせるためであり、ますます幻覚を見せるためである。

胎児の肉体が母の想像がもたらす形に成るのであれば、(堕落した人々の妄想は簡単に変化するので、)さまよう流体の胎児である流体の霊は、驚くほど変身できる必要が有るし、驚くほど簡単に変身する必要が有る。

人を引き寄せるために星の体を形成する流体の霊の傾向は、星の体を濃縮して、大気中に浮遊している星の体の分子である霊化している血を自然と吸収する。

前記の様にして、流体の霊は、霊化している血の蒸気を凝固させて、再び、霊化している血の液体にする。

幻覚を見る狂人は、流体の霊による霊化している血の液体が、絵や像を流れるのを見る時が有る。

しかし、幻覚を見る狂人だけが、流体の霊による血の液体を見た人々であるわけではない。

ヴァントラスやローズ タミシエは詐欺師でもなく短絡的な者でもない。

物質的な血が実際に絵や像を流れた。

医者が、絵や像を流れた赤い液体を調査して分析した所、血、本物の人の血であった。

どこから、物質的な血は来たのか？

自然発生的に、大気中で、物質的な血が形成される事は有り得るのか？

自然と、冷たい大理石の像から、絵が描かれたキャンバスから、聖体のパンから、物質的な血が流れる事は有り得るのか？

疑い無く、いいえ。

像や絵を流れた物質的な血は、かつて、人の肉体の血管の中を巡っていた。

人の肉体の中の血が、外に流出、気化、霊化して、乾燥して、血の無形の液体成分である血漿は霊化している蒸気に変わり、血の有形成分である血球は手で触れない霊妙な粉に変わり、霊化している血全体が大気中で浮遊し渦巻き、特定の電磁気の流れ、星の光の流れに引き寄せられる。

星の光の流れにより、霊化していた血漿は、物質的な液体の血漿に戻り、星の光が霊化していた血球を取り込んで同化して、物質的な血に成って絵や像を流れた。

写真は、「映像が現実での光の変化である」事を十分に証明している。

大気中にさまよう幻である流体の霊の永続的な痕跡が、木の葉の上、木の中、石の中心部に残された、思いがけない、写真に例えられる物が存在する。

「前代未聞の驚異」という本で、ガファレルは、「流体の霊の痕跡が残された」という形で形成された自然の象徴について、数ページを割り当てている。

ガファレルは、隠された力が有ると考えた、流体の霊の痕跡が残された石を、「gamalies」と呼んだ。

流体の驚異現象、星の光の驚異現象の観察者を大いに驚かせる、驚異現象で浮かび上がる文や象徴は、「流体の霊の痕跡が残された」という形で描かれる。

流体の霊ラルヴァの助けが有ったり無かったりする、霊媒師の想像力が描く、驚異現象で浮かび上がる文や象徴は、星の光による星の写真である。

先手を打つ形による、非常に興味深い実験が、ラルヴァの存在を実証している。

アメリカ人の霊媒師ホームの魔術の力を試すため、数人の人が、血縁者を亡くしたふりをして、実際には存在しない血縁者の霊を呼び出す様に霊媒師ホームに頼んだ。

すると、ラルヴァが、霊媒師ホームの降霊術に応じて、実際には存在しない血縁者の霊として出現した。

また、霊媒師ホームの降霊術が常に伴う驚異現象も全て起こった。

霊媒師ホームが存在しない人の霊を呼び出してしまった実験は、霊が驚異現象に介入していると誤って思い込んでいる人々に自身の厄介な軽信性と型にはめられてしまう誤信性を十分に悟らせるであろう。

死んだ人が、この世に戻るには、この世に存在していた事が何よりも必要である。

また、悪人の霊は、生きている人に、だまされやすくは無いであろう。

全てのカトリック教徒の様に、エリファス レヴィは闇の霊、悪人の霊の存在を信じている。

ただし、エリファス レヴィは、「神の力が闇を永遠の牢獄として悪人の霊にもたらしている」事も知っている。

(マタイによる福音 22 章 13 節「外の闇」)

また、エリファス レヴィは、ルカによる福音 10 章 18 節で救い主イエスが「私イエスは、サタンが雷の様に天から堕ちるのを見た」と話している事も知っている。

悪人の霊による生きている人の誘惑は、生きている人の肉欲による自発的な共謀による物である。

悪人の霊が生きている人を誘惑するには、生きている人が肉欲によって自発的に悪人の霊に協力する必要が有る。

また、悪人の霊が、些細な理由で、無益に、この世に出現して、自然の永遠の秩序を乱して神の統治に抵抗する事を、神は許していない。

知らないで霊媒師がもたらす、悪魔のふりをした悪人の霊による「悪魔のサイン」は、霊媒師という堕落した人と、底無しの淵の知的存在である悪人の霊の間で結ばれた暗黙の契約または形式的な契約の証拠では明らかにない。

悪魔のふりをした悪人の霊による「悪魔のサイン」は、創世の時から、星の光による星のめまいを表すのに役立っている。

悪魔のふりをした悪人の霊による「悪魔のサイン」は、漏れた星の光の映像として、幻の状態で、残存している。

また、自然には記憶が有り、自然は、自然の記憶と同一の概念に対して、自然の記憶と同一の象徴を人に放射し返す。

前記の全てにおいて、超自然的なものも地獄のものも存在しない。

中略

星の光による、星の文書は、多くの場合、滑稽であるか、淫らである。

中略

「星の光による、星の文書が、多くの場合、滑稽であるか、淫らである」事は、エリファス レヴィの仮定の更なる証拠である。

「星の光による、星の文書が、多くの場合、滑稽であるか、淫らである」事は、「霊の出現と呼ばれている驚異現象が、霊などの知力によって管理されていない」という証拠である。

また、「星の光による、星の文書が、多くの場合、滑稽であるか、淫らである」事は、「肉体といった物質による肉欲といった束縛から解放された霊の介入を、霊の出現

と呼ばれている驚異現象において認める事は、何よりも無上に、非論理的である」という証拠である。

　中略

　人の思考は、人が想像したものを創造する。
　ラルヴァという迷信による幻は、奇形の姿を星の光に映して、自身を生じさせた恐怖によって生きる。
　ラルヴァは、世界の人々から光を隠すために、両翼を東と西へ伸ばす、黒い巨人である。
　ラルヴァは、人々の魂を飲み込む奇形である。
　ラルヴァは、恐れられている無知と恐怖による偽の神である。
　言い換えると、ラルヴァは、悪魔と呼ばれているものである。
　ラルヴァは、未だに、全ての時代の大多数の無知な幼子にとって、恐ろしい現実の存在である。
「高等魔術の教理と祭儀」でエリファス レヴィは、悪魔を神の影と表現して、エリファス レヴィの考えの残り半分を隠したままであった。
　後記は、エリファス レヴィの考えの残り半分である。

　神は、影が無い、光である。
　悪魔とは、神の幻の影に過ぎない。
　神の幻！
　神の幻は、地上の最後の偶像である！

人がねつ造する神の幻は、悪意から自身を目に見えなくする擬人化された霊である。

神の幻は、無限を有限に擬人化したものである。

神の幻は、人が見たら死んでしまう、目に見えないものである。

神の幻は、人が見たら、少なくとも、人の知性と理性は死んでしまう、見えないものである。

なぜなら、見えないものを見るには、狂う必要が有る。

物質的な肉体を持たない神の幻。

神の幻は、物質的な姿が無い無限の神の混乱した形である。

神の幻は、大半の信者が知らないで信じているものである。

本質的であり、純粋であり、霊的であり、絶対の存在ではない、抽象的な存在でもない、存在の集団でもない神、要約すると、知性を持った無限の者である神は、人には想像するのは非常に困難である！

さらに、人が神を想像すると、人にとっては偽の神をねつ造する事に成ってしまい、人にとっては偶像崇拝者に成る事を意味してしまう。

人は、神を知らないで、神を想像しないで、神をねつ造しないで、神を信じて神を敬礼するしかない。

神の前では、人知は沈黙する必要が有る。

思いやりだけが、「私の父である神」という名前を神にもたらす権利が有る！

第 3 部 第 2 巻 魔術の神秘

第 3 部 第 2 巻 第 1 章 意思の理論

人生と人生の無数の困難には、永遠の知が定めている、人の意思を教育する目的が有る。

真理についての知と一致する善を望んで行動する事が、人の気高さと成る。

真理と一致する善とは、正義である。

正義とは、論理の実践である。

論理とは、現実を言葉にした物である。

現実とは、真理についての知である。

真理とは、存在である神と一致する概念である。

人は、経験と仮定という 2 つの道を経て、存在である神についての絶対の概念に辿り着く。

経験という教えが、ある仮定を必要とする時、ある仮定は見込みがある。

経験という教えが、ある仮定を否定する時、ある仮定は、見込みが無いか、良い意味で不条理である。

経験は知と成り、仮定は信心と成る。

真の知は、必然的に、信心を認める。

真の信心は、必然的に、知を考慮する。

パスカルは、「人は、理性によってでは、真理についての知に辿り着く事ができない」と話して、知を冒涜した。

そのため、事実として、パスカルは理性が狂っているまま死んだ。

ヴォルテールは、「信心による全ての仮定は非論理的である」と話し、感覚による証拠だけを理性の規則として認めて、パスカルと同じくらい知を冒涜した。

さらに、ヴォルテールの最終的な言葉は、「神と自由」という矛盾した言葉であった。

神!

言い換えると、無上の主!

ヴォルテール派は、神が自由の全ての概念を排除する無上の主であると誤解していた。

また、ヴォルテール派は、自由とは全ての主から絶対に独立している事、神の全ての概念を排除している事であると誤解していた。

神という言葉は、法の無上の擬人化を表す。

そのため、結果として、神という言葉は、義務の無上の擬人化を表す。

もし、あなたが、「自由とは、自分の義務を果たす権利である」というエリファス レヴィの解釈を受け入れる事をいとわないのであれば、エリファス レヴィとあなたは、「神と自由」という言葉を、標語として理解して、ヴォルテール達とは異なり矛盾無しに誤り無しにくり返す。

人にとって、自由は、真理と善がもたらす秩序の中にしか存在しない。

だから、「自由の獲得は人の魂の大いなる務めである」と言えるかもしれない。

人は、自分の邪悪な肉欲と肉欲の奴隷状態から自身を解放して自由にする事によって、自身を創造する。

言わば、人は、自分の邪悪な肉欲と肉欲の奴隷状態から自身を解放して自由にする事によって、自身を創造し直す。

自然は、人を生かして苦しめる。

(正しい人の魂、)人は、自身を幸せにして不死に成る。

(正しい人の魂、)人は、不死に成ると、地上における神の代理人と成って、(相対的に、)神の全能の力を発揮する。

原理1

人が真理を知って善を望むと、人の意思には何ものも抵抗できない。

原理2

悪を望む事は、死を望む事に成る。

悪意は自殺の始まりである。

原理3

暴力によって善を望む事は、悪を望む事である。

なぜなら、暴力は、無秩序をもたらす。

そして、無秩序は、悪をもたらす。

原理4

(他人による、)善のための手段としての悪は、許容できるし、許容するべきである。

しかし、(自ら、)善のための手段としての悪を、望むなかれ、行うなかれ。

さもなければ、一方の手で建てたものを他方の手で破壊する羽目に成るであろう。

誠実さは、悪い手段を正当化しない。

悪い手段を受けたら、悪い手段を直すのが、誠実さである。

また、悪い手段を取ったら、非難するのが、誠実さである。

原理5

所有権を常に保持するには、忍耐強く長く望む必要が有る。

原理 6

常には所有できないものを望みながら人生を過ごす事は、人生を放棄する事であり、永遠の死を受け入れる羽目に成る。

原理 7

意思は、障害を乗り越えるほど、強く成る。

そのため、イエス キリストは、貧しさと悲しみをほめたたえた。

原理 8

永遠の論理である神は、意思を非論理的な物事にささげている人を非難する。

原理 9

正しい人の意思は、神の意思と成り、自然の法と成る。

原理 10

知性は、意思によって、物事を見る。

意思が健全であれば、見える物事は正しい。

創世記 1 章 3 節「神が『光あれ!』と話すと光が創造された」

意思が「世界は、見たいと望む様なものに成れ!」と話すと、知性には意思が望んだ通りに物事が見える様に成る。

前記が、信心による行為を強める「そう成ります様に」という言葉の意味である。

原理 11

人は、自分のために霊を創造してしまうと、吸血鬼を世に放つ事に成ってしまう。

そして、人は、自発的な悪夢の子である吸血鬼を、自分の血で、自分の命で、自分の知性で、自分の理性で、常に満足させられずに、養う羽目に成る。

原理 12

あるべきである物事を肯定して話して望む事は、創造する事に成る。

あるべきではない物事を肯定して話して望む事は、破壊する事に成る。

原理 13

星の光は、意思の役に立たせるために、自然が放出している、電気の火である。

星の光は、星の光の応用方法を知る人を照らし、星の光を濫用する人を焼き殺す。

原理 14

世界を統治するとは、星の光を統治する事である。

原理 15

大いなる知力を持つが複数の望みをつり合わせていない人は、失敗した太陽、失敗した恒星である彗星に似ている。

原理 16

何もしない事は、悪事を行う事と同じくらい破滅的であるが、悪事を行う事よりも臆病である。

七つの大罪、七つの死に至る大罪のうち、最も許されない大罪は、怠惰である。

原理 17

苦しみに耐える事は、務めを果たす事に成る。

大いなる悲しみに耐える事は、進歩を果たす事に成る。

苦しみに耐えられない人よりも、苦しみに耐える人は生きている。

原理 18

献身による自発的な死は、自殺ではない。

献身による自発的な死は、意思の極致である。

原理 19

恐怖は、意思の怠惰でしかない。

そのため、世論は、臆病者を罰する。

原理 20

あなたがライオンを恐れなく成ると、ライオンが、あなたを恐れるであろう。

悲しみに対して、「悲しみが喜びと成る事を望む。悲しみが、喜びよりも更に喜ばしい、幸せと成る事を望む」と話しなさい。

原理 21

花々の鎖よりも、鉄の鎖は壊し易い。

原理 22

ある人が、幸せであるか、不幸であるか、話すよりも、ある人が、意思している方向によって、何者に成ったかを知りなさい。

イエスの時代のローマ皇帝ティベリウスは、カプリ島で、毎日死んだ様に生きている者であった。

一方、イエスは、ゴルゴタの丘の十字架の上で、不死性と神性を証明した。

第3部 第2巻 第2章 言葉の力

言葉は形を創造する。

形は、言葉を変化させて完成するために、言葉に反作用する。

真理についての全ての言葉は、正義の行動の始まりである。

人は悪事を思考したり行ったりするように追い込まれる事を余儀無くされる時が有るか？

イエス。人は悪事を行うように追い込まれる事を余儀無くされる時が有る。

人の判断が誤っている時は、結果的に、言葉も誤っている。

人は、悪事をしたら責任を負う事に成る、様に、判断を誤ったら責任を負う事に成る。

判断を誤らせるものは、利己心や、利己心による誤った虚栄心や自惚れである。

誤っている言葉は、創造によって言葉の意味を実現できずに、破壊によって言葉の意味を実現する羽目に成ってしまう。

誤っている言葉は、必ず、殺すか、殺される。

仮に、誤っている言葉を行動によって実現しないままでいても、誤っている言葉は、最大の混乱であり、真理に対する永続的な冒涜である。

マタイによる福音 12 章 36 節でイエス キリストが「最後の審判の日に、人は、自分が話した全ての無益な言葉について責任を問われて、こたえる羽目に成る」と話している「無益な言葉」とは、誤っている言葉である。

気晴らしをさせたり笑いをもたらしたりする面白い冗談は、マタイによる福音 12 章 36 節の「無益な言葉」ではない。

言葉の美しさは、真理の輝きである。

真理の言葉は、常に美しい。

真に美しい言葉は、常に正しい。

そのため、美しい美術作品、美しい芸術作品は、常に神聖である。

アナクレオンが、気に入っていたバテュルスの性的な女々しい歌を歌っても、美しい永遠の聖歌と成る神聖な調和の要素が歌詞から聞こえれば、何か問題が有るか？　問題無い！

太陽の様に、美しい詩は清らかである。

美しい詩という太陽は、光のヴェールを、人の過ちの上に広げてくれる。

醜い部分をつかんでやろうと光のヴェールを剥ぎ取ろうとする人には災いが有る！

トレントの公会議は、「賢明で思慮の有る人が古代人の書物を読む事は、形式が美しければ淫らな書物を読む事でさえも、許される」と決定した。

中略

ローマの詩人カトゥルスの恋愛詩や、アプレイウスのキリスト教を冒涜している巧妙な例え話「黄金のロバ」よりも遥かに、悪い考えなどが悪く書かれた倫理道徳の本の中に、悪を認めるであろう。

悪い考えなどが悪く書かれた書物だけが、悪い書物である。

美しい言葉は、全て、真理の言葉である。

美しい言葉は、話すと、結晶化された具体化された光と成る。

ただし、光を、最も輝かせて人の目に見えさせるには、影が必要である。

創造する言葉を、人に対して有効にするには、反対が必要である。

創造する言葉は、否定の試練、風刺の試練、さらには、より過酷な、無関心と完全忘却の試練を甘受する必要が有る。

ヨハネによる福音 12 章 24 節で、主イエス、神の言葉イエスは、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒だけのままである。しかし、死ねば、多数の実を結ぶ」と話している。

その時、肯定と否定は相互に結合して、実践的な真理、現実の進歩的な言葉をもたらす。

労働者が、最初は軽蔑して否定して捨てたものをすみの基礎の石、すみの要石として選ぶ様に、強く誘導するものは必然である。

(

マタイによる福音 21 章 42 節「建設者が捨てた石が、すみの基礎の石、すみの要石と成った」

マタイによる福音 21 章 42 節はイエスを石に例えた物である。

)

反対が、先導者を失望させません様に！

耕す鋤（すき）の刃には地が必要であり、地は産みの苦しみのために抵抗する。

処女の様に、地は身を守っている。

母の様に、ゆっくりと、地は懐胎して産む。

新しい植物の種を知の領域にまきたい人は、限られた経験と、ゆっくり動く理性から来る、慎みと渋る事を理解して畏敬する必要が有る。

新しい言葉は、世界に生まれて来ると、産着と巻き布を必要とする。

天才が新しい言葉をもたらすが、経験が新しい言葉を育てる。

新しい言葉が忘れられて死ぬ事を恐れるなかれ！

新しい言葉にとって、忘却は、安息の好機と成る。

反対は、新しい言葉が育つのを助長する。

突然、宇宙に、太陽があらわれると、太陽は、諸世界を創造するか、諸世界を引き寄せる。

固定された光は、一閃だけで、一世界を宇宙にもたらす事を約束する。

全ての魔術は一言で要約できる。

カバラ的に話された、魔術を要約した一言は、天と地と地獄の全ての力よりも、強い。

「イョッド ヘー ヴァウ ヘー」、「ヤハウェ」という神の名前によって、人は自然に命令できる。

「主」を意味する「アドナイ」という主である神の名前によって、王国を獲得できる。

ヘルメスの統治を構成する 2 つの隠された力は、全て、アグラという名前の正しい話し方を知る人に従う。

カバラの諸々の大いなる言葉を正しく話すためには、人は、完全な知によって、何ものも止められない意思によって、何ものにもひるまない行動によって、カバラの諸々の大いなる言葉を話す必要が有る。

魔術では、話した事は、行動した事に成る。

言葉は、文字に始まり、行動に終わる。

人は、自分の最愛の愛着を断ち切るほど心の限りを尽くして、健康や幸運による富や命を賭けるほど力の限りを尽くして、望まなければ、ある物事を本当に望んでいるわけではない。

完全に身をささげる事によって、信心は、信心を証明して、信心を構成する。

完全に身をささげる様な信心によって武装した人は、山を動かす事が可能であろう。

(マタイによる福音 17 章 20 節で、イエスは、一欠片の小ささでも、真の信心が有れば、山を動かせる、と話している。)

人の魂にとって、最も致命的な敵は、怠惰である。

怠惰は、人を酩酊させて眠らせてしまう。

怠惰による眠りは、堕落や腐敗と死と成る。

人の魂の諸能力は、大海の波に似ている。

人の魂の諸能力を甘美なまま保つには、涙による塩味と苦さが必要である。

人の魂の諸能力を甘美なまま保つには、天からの嵐が必要である。

人の魂の諸能力を甘美なまま保つには、嵐によって揺るがされる必要が有る。

進歩という道を進むかわりに、運んでもらう事を望んでいる時、死の腕の中で眠ってしまっているのである。

マタイによる福音 9 章 6 節の麻痺患者、中風患者に対する「ベッドを担いで、歩きなさい！」という言葉は、全ての人に対して話されている言葉でもある。

全ての人は、死を担いで、歩き、死を命に没頭させるべきである。

使徒ヨハネによる雄大で畏敬するべき象徴を熟考しなさい。

地獄とは、眠っている火である。

地獄とは、自発的な動きと進歩が無い、命である。

地獄とは停滞している硫黄である。

ヨハネの黙示録 20 章 10 節「火と硫黄の池」

眠っている命、眠っている生き方は、無益な言葉に似ている。

眠っている命、眠っている生き方とは、マタイによる福音 12 章 36 節の「最後の審判の日に、人は、自分が話した全ての無益な言葉について責任を問われて、こたえる羽目に成る」の「無益な言葉」である。

知的存在である神が話して、物質は動く。

神の言葉が与える形を纏(まと)うまで、物質は休まない。

イエス キリストの神の言葉が、どれだけ、1900 年間、世界を歩かせたか、見なさい!

何という巨人的な戦いであろうか!

どれだけ、多数の誤りが話されて否定された事か!

16 世紀から 18 世紀のプロテスタントのせいで、どれだけ、多数のキリスト教徒は、惑わされて、苛立った事か!

人の利己主義は、敗北して自暴自棄に成って、愚かに立ち騒いだ。

利己主義な人は、ぼろぼろの衣と、笑いものにするための緋色の衣を、世界の人々の救い主イエスに、再び着せた。

(マタイによる福音 27 章で、イエスは、王のための緋色の衣を着せられて、笑いものにされ、唾をかけられ、叩かれた。)

利己主義な人は、宗教裁判官イエスを考案した後で、サン キュロットのイエスを考案した!

可能ならば、今まで流された全ての涙と血を量りなさい。

直ちに、肉欲を権力に、権力を正義に従わせるつもりである、人に成った神イエス、救い主イエスの統治が来臨する前に流されるであろう涙と血を大胆に計算しなさい。

神の王国は来る!

19 世紀の時点で、1900 年間近く、地の面(おもて)の全体中で、7 億人が「神の王国は来る!」と叫んでいて、ユダヤ教徒は救い主を未だに待っている!

(ユダヤ教徒は、イエスを否定して、救い主は未降臨であると、かたっている。)

マタイによる福音 24 章で、人に成った神イエスは、来臨すると話していて、来臨するであろう。

人に成った神イエスは、肉体的に死ぬために降臨された。

そして、人に成った神イエスは、生きるための来臨を約束していた。

　天とは、思いやりの有る諸々の感情の調和である。

　地獄とは、臆病と肉欲による、衝突と争いである。

「天とは、思いやりの有る諸々の感情の調和である」事と「地獄とは、臆病と肉欲による、衝突と争いである」事という二重の真理を人が血と苦痛に満ちた経験を経て本当に理解した時に、人は、利己心による地獄を捨てて、献身とキリスト教の思いやりによる天へ入門するであろう。

　オルフェウスの竪琴の音楽は、未開であった古代ギリシャを洗練させた。

　アムピオンの竪琴の音楽は、石を神秘のテーバイの壁に変えた。

　なぜなら、調和とは、真理である。

　自然の全ては、調和である。

　ただし、福音書は、竪琴ではない。

　福音書は、普遍の生きている調和と竪琴を統治している永遠の原理の書である。

　世界の大衆が「真理、論理、正義」という３つの言葉と「義務、位階、社会」という３つの言葉を理解していない間は、フランス革命の標語である「自由、平等、友愛」は三重の嘘でしかないであろう。

第3部 第2巻 第3章 神秘の感化力

中庸は不可能である。

人は全て、正しいか、悪である。

無関心な人、生ぬるい人は、悪である。

無関心な人、生ぬるい人は、結果的に悪であり、最悪である。

なぜなら、無関心な人、生ぬるい人は、愚鈍であり、臆病である。

人生という戦いは、内戦に似ている。

中立のままの人は、双方の陣営を等しく裏切って、祖国の子に含まれる権利を放棄する事に成る。

全ての人は、他者の命を吸い込み、ある程度、自分の存在の一部を他者に吹きかけている。

正しい知的な人は、本人は知らないかもしれないが、人の医者である。

狂愚で邪悪な人は、大衆の毒殺者である。

一緒にいると、清らかさを感じる人が存在する。

あの社交家の若い令嬢を見なさい！

ある令嬢は、他の全ての人と同様に、喋(しゃべ)り、笑い、正装している。

それでは、なぜ、ある令嬢においては、全てが、より良く、より完全であるのか？

ある令嬢の振る舞いは、自然である。

ある令嬢の会話は、裏表が無く、気高く伸び伸びとしている。

悪感情を抱いている人を除いて、ある令嬢の近くでは、全ての者が、安心して、気が楽に成って、くつろげる。

ただし、ある令嬢の近くでは、悪感情を抱いている人は存在し得ない。

ある令嬢は、求心力を得ようとはしていないにもかかわらず、他者の心を引きつけて高める。

ある令嬢は、酩酊させず、良い意味で、魔法をかけたかの様に魅了する。

ある令嬢の全人格は、徳そのものよりも思いやり深い完全さを説く。

ある令嬢は、優美そのものよりも優美である。

見事な音楽や詩の様に、ある令嬢の所作は、安心させて、気を楽にさせて、くつろがせて、真似できない。

ある令嬢の好敵手と成るには仲が良過ぎる、ある魅力的な婦人は、舞踏会の後で、ある令嬢の舞踏について「私は聖書が戯れているのを見た様に思った」と話した。

中略

ある令嬢と別れた時に、人は、自身が、美しく善く思いやり深い全てのものへのための思いやりで満ちている事に気づく。

ある令嬢によって吹き込んでもらえた気高い考えをある令嬢へ全て上手に話せた事と、気高い考えをある令嬢に賛成してもらえた事を人は嬉しく思う。

人は、「命は善い物である。なぜなら、神は命をある令嬢の様な魂に与えている」と自身に話しかける。

人は、勇気と希望に満ちる。

中略

邪悪な女の近くにいると、人は、邪悪な女の気に入る様な悪口を話し、邪悪な女の自惚れを助長するために自身を辱めて、邪悪な女について、または、自身について不満を感じたままでいる。

邪悪な感化力を鮮やかに正確に感じる事は、良くつり合わせている精神と、繊細な善悪の判断力に特有の事である。

邪悪な感化力を鮮やかに正確に感じる事は、正に、古代の初期キリスト教の禁欲的な修道士の作家が、「霊の識別」の能力と呼んでいる事である。

ヨブ記16章2節で、ヨブは、「あなたたち偽の友人は、ひどい慰め方をする人である」と話している。

実に、悪人は、慰めるよりも、苦しめる。

悪人には、ありふれた慰めにおいて、最も絶望させる考えや言葉を見つけて選ぶ驚異的な能力が有る。

中略

善良な魂の徳による、天から人への言葉は、「希望しなさい。そして、善行しなさい」である。

欠点の有る人や堕落した人の言動、親切なふりをした行為、愛撫による、地獄から人への叫びは、「絶望して死ね」である。

ある人に、どんなに名声が有っても、ある人が、どんなに友情を告白して来ても、もし、ある人と別れた時に、自分からの好意が減っている様に感じたり、自分の心などが弱く成っている様に感じたら、ある人は、あなたにとって有害であり、ある人を避けなさい。

人の二重の磁気は、人の中に、2種類の共感をもたらす。

人は、順に、吸収したり放射したりする必要が有る。

人の心は、対照的なものを好む。

そのため、天才の男性を2連続で愛した女性は、ほとんどいない。

(天才を愛した後は、対照的な、愚者を愛する物である。)

人は、崇拝に疲れて身を守り平和を見つける。

「人が、崇拝に疲れて身を守り平和を見つける」事は、つり合いの法である。

しかし、高尚な性格の人ですら、低俗な気まぐれに驚かされる時が有る。

Gerbert神父は、「人は、獣の肉体の中の、神の影である」と話している。

(獣は肉欲の例えである。)

人の中には、天使の友人達と、肉欲に例えられる獣の御機嫌取りたちが存在する。

天使は、人を引き寄せる。

しかし、人は、用心しないと、獣に例えられる肉欲にさらわれてしまう。

人が、獣に例えられる肉欲の奴隷に成ると、言い換えると、人が死を育てる人生に満足していると、獣に例えられる肉欲は人を必然的に引きずって行く。

獣に例えられる肉欲の奴隷である人々の表現では、「人が死を育てる人生」は、「現実的な人生」と呼ばれている。

宗教では、福音書が確かな案内人と成る。

中略

ローマの風刺詩人ユウェナリスは、「人は、誠実さをほめたたえるが、誠実さを放置して凍死させてしまう」と話している。

中略

18 世紀のフランスの盗賊ルイドミニク カルトゥーシュは、ある日、施しを求めてきた通行人に、「職が無い人で、名誉を重んじる人は、盗むが、物乞いはしない」と答えた。

口伝では、指揮官ピエール カンブロンヌも、盗賊ルイドミニク カルトゥーシュと同じ荒々しい言葉で、施しを求めてきた通行人に答えた、と言われている。

多分、有名な盗賊ルイドミニク カルトゥーシュと、偉大な指揮官ピエール カンブロンヌは、両人共、実際に、同じ言葉で、施しを求めてきた通行人に答えたのであろう。

同じ、盗賊ルイドミニク カルトゥーシュは、別の機会には、自発的に、乞われなくても、2 万フランス ポンドを破産者に与えた。

人は、自分と似た境遇の同胞に対しては、正しく行動するに違いない。

相互扶助は自然の法である。

自分と似た境遇の人を助ける事は、自分を助ける事に成る。

ただし、相互扶助を超越している、神聖な大いなる法として、自分と似た境遇の人だけではなく普遍に相互扶助する事である、真の思いやりが存在する。

中略

パラケルススが話している様に、共通の肉欲的な欠陥を通じて誘惑する悪人は、他人の感化力の所有者と成って、望む所へ他人を誘導する。

共通の肉欲的な欠陥を通じて誘惑する悪人は、誘惑する悪い「守護天使」である。

中略

人は、自分の思考を吐き出し、星の光に記された他人の思考を吸い込む。

星の光は、思考の電磁気の大気と成っている。

正しい人にとって、悪人との交流の有害性よりも、淫らな人や臆病者や熱意が無い生ぬるい人との交流の有害性は大きい。

なぜなら、悪人への強い反感は、人を、警戒させ易く、ひどい悪人との交流から守る。

しかし、淫らな人や臆病者や熱意が無い生ぬるい人は、悪徳を徳に偽装するため、徳に偽装された悪徳は、ある程度まで薄められて、ほぼ愛らしい許容できる物と誤解させるので、反感し難く、警戒し難く、淫らな人や臆病者や熱意が無い生ぬるい人との交流を防ぎ難い。

誠実な女性は、娼婦との交流に嫌悪しか感じないであろう。

誠実な女性が最も恐れるべき物は、浮気者であるが隠している女からの浮気の扇動である。

狂気は伝染する、事は知られている。

感じの良い好ましい狂人は、特に、より危険である。

中略

愛情は、自由であり、論理に基づいている。

共感は、運命的な物であり、非論理的な場合が非常に多い。

共感は、多かれ少なかれ、磁気の光、星の光のつり合っている相互の引き寄せる力による物であり、動物に作用する様に、人に作用する。

人は、狂愚にも、愛すべき点が無い人との交流を喜ぶ。

なぜなら、人は、愛すべき点が無い人に、神秘的に引き寄せられて支配される。

愛すべき点が無い人への不思議な共感は、鮮やかな反感から始まる場合が多い。

最初は、流体、星の光は相互に斥け合っていたが、後に、星の光同士がつり合ってしまったのである。

人の自由な形にできる仲介するもの、人の星の体のつり合おうとする特徴をパラケルススは「支配力」と呼んでいる。

各人の習慣的な考えによる、普遍の光、星の光の中の個別の考えの鏡像をパラケルススは「flagum」と呼んでいる。

人は、「flagum」を鋭く見抜く事によって、また、意思が持続する方向によって、他人が持つ「支配力」を知る事ができる。

人は、他人をとらえて支配したい時は、自分の「支配力」の自発的な面を、他人の「支配力」の受容的な面へ向けている。

パラケルススの他に、ある魔術師達は、星の光による星の支配力を見抜いて「渦」と呼んでいる。

ある魔術師達によると、「渦」は、特化した星の光の流れであり、常に同一の諸々の映像の輪を表して、結果的に、諸々の印象が「渦」を決定したり、「渦」が諸々の印象を決定したりする。

諸々の「渦」は、星々に存在する様に、人に存在する。

次の様に、パラケルススは話している。

「星々は星の光る魂を吐き出す。

そして、ある星は他の星々が吐き出した星の光る魂を引き寄せる。

地の魂、星の光は、重力の必然の法にとらわれているが、自身を特化させて自身を重力の法から解放できて、動物的な先天的な物に成ってから、人の知性に成る。
人の知性に成った星の光の、意思の自発的な部分は、無口である。
しかし、人の知性に成った星の光は、星の光の中に記されている自然の秘密を保持している。
人の知性に成った星の光の自由な部分、人の知性に成った星の光の意思の自発的な部分は、人の知性に成った星の光の中に記されている重大な自然の秘密を読むと、すぐに自由を失ってしまい、忘我状態に成る。
人は、自分の周囲の環境と自分の器官を変える事によってのみ、無口な植物的な沈思黙考から、自由な動揺する思考へ変わる。
そのため、人は、誕生に伴って、完全忘却してしまう。
また、そのため、人の病的な直感における曖昧な記憶は、常に、忘我状態と夢における幻視に似ている」

　前記の、隠された医学の大いなる祖師パラケルススの啓示は、催眠術や占いの全ての現象に、強い光を当てる。
　また、前記の、パラケルススの啓示は、人の知性に成った星の光の中の自然の秘密に到達する方法を知る人にとっては、降霊術の真の鍵であり、地の流体の魂と交流する真の鍵である。

　たった一度の接触だけで危険な感化を感じさせる人は、流体の軍団の中の１人であるか、意識的にか無意識的に彷徨っている星の光の流れを利用している人である。

例えば、羊飼いの様に、人との全ての交流を奪われて孤立して生きていて、多数の集められた動物との流体の共感の中に日々いる人は、マルコによる福音 5 章の様な「軍団」を名乗る悪人の霊にとりつかれるが、被憑依者の望みに身を委ねている「軍団」の流体の霊達を独裁的に統治できて、結果的に、善意か悪意によって動物達を栄えさせるか死なせる。

動物との共感による感化力を、意思が弱いか、知が少ないせいで、守られていない人の、自由な形にできる仲介するもの、星の体に作用させる事ができる。

前記の様に、羊飼いによる習慣的な呪いを説明できる。

中略

肉体の命の法は、避け難い。

人の動物的な性質によって、人は運命の奴隷として生まれる事に成る。

人の先天的な物である肉欲と戦う事によって、人は倫理道徳的な自由を勝ち取る事ができる。

そのため、地上で、人には、死に至る生き方と、倫理道徳的に自由な生き方という、2 つの異なる生き方が可能である。

死に至る人は、死に至る人では傾ける事ができない自然の力の玩具か道具に成ってしまう。

運命の道具である人たちが出会って衝突すると、強い者は、弱い者を破壊してしまうか、弱い者の心を奪ってしまう。

本当に(肉欲から)自由な人は、呪いも神秘の感化力も恐れない。

本当に(肉欲から)自由な人は、呪いも神秘の感化力も恐れる必要が無い。

中略

悪事は、心の傾向に存在する。

人の意思とは、ほぼ常に無関係である、状況が、人の行動の重大さの唯一の原因と成る。

仮に、運命がネロを奴隷にしていたら、ネロは役者か剣奴に成ってローマを燃やさなかったであろうが、ローマを燃やさなかったらネロに感謝するべきであろうか？

ネロは、全ローマ市民の共犯者である。

ネロの乱心を止めなかった人たちに、ネロの乱心の全責任が有る。

ネロの恐怖の支配の真の犯罪者は、ネロを止めなかったセネカ、バラス、トラセア、コルブロである。

セネカといったネロを止めなかった偉人たちは、利己的であったか、無能であった！

セネカたちが唯一知っていた事は、死ぬ方法だけであった。

熊が動物園を脱出して数人の人を食い殺したら、人は熊を非難するであろうか？

それとも、人は動物園の熊の飼育係を非難するであろうか？

熊が動物園を脱出して数人の人を食い殺したら、人は動物園の熊の飼育係を非難する！

中略

獣に例えられる肉欲を野放しにして放置している人は、肉欲に飲み込まれる事を望んでいる事に成る。

運命の奴隷である大衆は、(肉欲から)自由である人の意思に完全に従う事によってのみ、自由を享受できる。

大衆は、大衆の責任を背負ってくれる人のために、働く必要が有る。

しかし、獣の様に肉欲の奴隷である人が肉欲の奴隷である人を支配する時、盲人が盲人を導く時、運命の奴隷である指導者が運命の奴隷である大衆を導く時、何を予想しなくてはいけないか？

衝撃の大惨事、以外の何を予想できるか？　衝撃の大惨事しか予想できない！

大惨事の予想が外れる事は無いであろう。

中略

秩序と無秩序の交流は不可能である。

人は、殺した人から相続を受ける事は無い。

人は、殺した人から盗む事に成る。

中略

正しく成ると、全ての正しくない人のせいで苦しむ事に成る。

しかし、「正しい人が、全ての正しくない人のせいで苦しむ事に成る」のが、人生である。

悪人に成ると、命を勝ち取れず、自身のせいで苦しむ事に成る。

悪人に成る事は、自身をだます事に成り、悪事を行う事に成り、永遠の死に至る事に成る。

要約すると、死に至る感化力とは、(魂の)死による感化力である。

生きている感化力とは、(魂の永遠の)命による感化力である。

悪い生き方によって人が弱いと、呪いを引き寄せてしまう。

善い生き方によって人が強いと、呪いを斥ける。

呪いという隠された力は、実に、実在する。

しかし、常に、知と徳は、呪いの憑依と攻撃を避ける手段を見つけるであろう。

第3部 第2巻 第4章 倒錯の神秘

命に引き寄せる力と、死に引き寄せる力という、2つの引き寄せる力が、人のつり合いを形成している。

死に至る物、死に引き寄せる力は、人を底無しの淵に引きずり込む、めまいである。

自由とは、死に至る、死に引き寄せる力を超越する、論理的な努力である。

大罪、死に至る大罪とは、何であるか？

大罪、死に至る大罪とは、自由の放棄である。

自由の放棄とは、怠惰の法に身を委ねる事である。

不正な行為とは、不正と契約する事である。

不正は、全て、知を放棄する事に成る。

知を放棄した瞬間から、人は堕落して、自然の力に統治される事に成る。

常に、自然の力による反作用は、つり合いを取れていない全てのものを粉々にする。

悪への愛着と、意思による表立った、不正への愛着は、死にゆく意思による最低の努力である。

人が何をしても、人は、動物以上の知的存在である。

人は、(知性が邪魔をするので、)動物の様には、運命に身を委ねる事はできない。

人は、選ぶ必要が有る。

人は、愛する必要が有る。

死を愛していると自ら誤って思い込んでいる絶望した人は、愛が無い人よりも、生きている。

悪への行動力は、切り返す事によって、また、反動による逆流によって、人を善へ導いて戻す事ができるし、導いて戻すべきである。

　救いようが無い不治の真の悪とは、怠惰である。

　神の思いやりの(無限という)底無しの淵には、倒錯の底無しの淵が対応している。

　頻繁に、神は、悪人を聖人に改心させている。

　しかし、神は、中途半端な生ぬるい人や臆病者には何もしない。

　神に見放されたら、人は行動する必要が有る。

　さらに、自然は理解していて、人が勇気を持って命へ歩まないと、自然は人を死へ全力で動かす。

　自然は、歩く意思が無い人を引きずって行く。

　中略

　神に逆らって侮辱する事は、信心による最低の行いである。

　なぜなら、詩編 115 章 17 節で、詩編の作者は、「死んだ人は、神をたたえる事ができない、おおっ、主である神よ」と話しているが、エリファス レヴィは、大胆に補足して、「死んだ人は、神を冒涜する事ができない」と話す。

　中略

　常に、大いなる罪人は、多数の生ぬるい人々に対して抗議する様に成る。

　中略

教会には、不祥事を起こした聖職者を裁き、非難し、罰する権利が有る。

しかし、教会には、不祥事を起こした聖職者を、絶望による乱心や、悲惨さや飢えによる誘惑に、引き渡す権利は無い。

虚無ほど恐ろしい物は無い。

仮に、虚無という概念を表す事ができて、虚無を認める事ができるのであれば、地獄は望むべき物と成ってしまうであろう。

そのため、自然は、救済策として、罪のつぐないを人に求めて強制する。

そのため、大いなるカトリック教徒ジョゼフド メーストル伯爵が非常に良く理解していた様に、懲罰は罪を清める。

そのため、死刑は、自然な権利であり、人の法から消えないであろう。

もし神が死刑を正しい物としなければ、殺人という汚れは、消す事ができないであろう。

死刑という神聖な権利を、社会が放棄すると、また、犯罪者が奪って不正利用すると、議論の余地無く、死刑の権利は、犯罪者の物に成ってしまうであろう。

死刑の権利が犯罪者の物に成ってしまったら、激しい自然な報復行為として、殺人は善行に成ってしまうであろう。

死刑の権利が犯罪者の物に成ってしまったら、人は、私刑による報復によって、公の罪のつぐないが無い事に対して抗議するであろう。

死刑の権利が犯罪者の物に成ってしまったら、壊れた正義の剣の欠片から、無秩序は、短剣をつくるであろう。

ある日、ある善良な祭司が「もし神が地獄(という状態)を無くしたら、人は、神に反抗して、新たな地獄を創造するであろう」と話したのは、正しい。

そのため、悪人は、地獄が無く成る事を望むのである。

全ての悪人は、「解放！」と叫ぶ。

悪人は、死刑の廃止による、殺人の解放を求める。

悪人は、結婚の廃止による、娼婦と子殺しの解放を求める。

悪人は、所有権の廃止による、怠惰と強奪の解放を求める。

悪人が「人生の廃止による、死の解放、自殺の解放!」という最後の隠された言葉に辿り着くまで、倒錯という竜巻は回転する。

労苦による勝利によって、人は、悲しみの運命から脱出できる。

人が死と呼んでいる物は、自然の永遠の出産でしかない。

絶え間無く、自然は、霊によって生まれ変わらなかった人の魂を、再び、引き寄せて懐へ取り込む。

(ヨハネによる福音 3 章「人は、霊によって生まれ変わらなければ、神の王国に入れない」)

自力で動かない、物質は、永久機関の力によってのみ、存在できる。

自然に気化し易い、霊は、固定される事によってのみ、存続できる。

ヨハネによる福音 3 章に記されている「霊によって生まれ(変わ)る」とは、人が自由意思によって精神を真理と善と一致させて運命の法から解放される事である。

自然が、霊によって生まれ変わらなかった人の魂を再び引き寄せて懐へ永遠に取り込んでいる状態が、人にとっての、ヨハネの黙示録 2 章 11 節の「第 2 の死」である。

(肉欲の)奴隷である人は、死に至る引力によって、ヨハネの黙示録 2 章 11 節の「第 2 の死」へ引きずり込まれる。

神の様な画家ミケランジェロが「最後の審判」という大いなる絵画で明らかにして見せた様に、悪人は互いに足を引っ張り合う。

悪人は、溺れている人の様に、まとわりつき合い、しっかり掴んで離さない。

(肉欲から)自由に成った霊は、昇天を邪魔されない様に、地獄に引きずり込まれない様に、力強く、悪人と戦う必要が有る。

2 つの正反対のものの戦いは、創世から存在している。

古代ギリシャ人は、2 つの正反対のものの戦いを、エロスとアンテロスの対立という象徴で表した。

古代ヘブライ人は、2 つの正反対のものの戦いを、アベルとカインの対立という象徴で表した。

古代ギリシャ人は、2 つの正反対のものの戦いを、巨人ティターン族と神々の戦いという象徴で表した。

2 つの軍団は、遍在し、目に見えず、練り上げられ、攻撃や反撃の用意が常に出来ている。

中略

秩序と無秩序の必然的な戦い、先天的な物である肉欲と思考の必然的な戦いだけが、真実であり、重要である。

秩序と無秩序の戦い、肉欲と思考の戦いは、進歩する、つり合いをもたらす。

そのため、常に、悪人の霊は、知らないで、天使ミカエルの栄光の役に立つ事に成る。

肉欲の愛着は、死に至る肉欲のうち、最も倒錯的である。

肉欲の愛着は、無政府主義者の中の無政府主義者、悪魔の無政府主義者である。

肉欲の愛着は、法、義務、真理、正義を知らない。

肉欲の愛着は、処女に父と母の死体を踏みにじらせる事ができてしまう。

肉欲の愛着は、抑制し難い酩酊である。

肉欲の愛着は、激しい狂気である。

肉欲の愛着は、新しい餌食を探し求める、死に至る、めまいである。

肉欲の愛着は、より多くの幼子を食い物にするために父に成る事を望む、サトゥルヌスによる、人を食い物にする酩酊である。

性欲を圧倒する事は、自然の全てを圧倒する事に成る。

性欲を正義に従わせる事は、性欲を不死にささげて、命を生まれ変わらせる事に成る。

キリスト教の啓示の最大の功績は、性欲を正義に従わせる事による、自発的な処女性の創造と、結婚の神聖化である。

愛着が肉欲や享楽でしかない間は、愛着は死に至る。

愛を永遠にするためには、愛は、自己犠牲と成る必要が有る。

なぜなら、愛が自己犠牲と成った時、愛は、力や徳に成る。

愛は、世界のつり合いをもたらす、エロスとアンテロスの戦いである。

感覚を刺激し過ぎるものは、全て、人を堕落や悪事や犯罪に導いてしまう。

涙は、人を血に呼び寄せる。

大きな感情は、強い酒の様な物である。

感情を習慣的に利用する事は、感情を濫用する事に成る。

感情の濫用は、全て、倫理道徳的な感覚を倒錯させてしまう。

感情の濫用者は、感情のために感情を求める様に成ってしまう。

感情の濫用者は、感情を手に入れるために、全てのものを犠牲にする様に成ってしまう。

夢見がちな感情の濫用者の女性は、中央刑事裁判所オールド ベイリーの女主人公である犯罪者に容易に成ってしまうであろう。

夢見がちな感情の濫用者の女性は、死ぬ自分を見て自画自賛するために、また、死ぬ自分を見て自身をあわれむために、自殺という嘆かわしい取り返しのつかない非論理的な愚行にまで行き着いてしまうかもしれない。

夢見る習慣、妄想癖は、女性を病的興奮に導いてしまい、男性を憂鬱に導いてしまう。

中略

倫理道徳的な感覚の喪失は、真の狂気である。

第一に、正義に従わない人は、自分を見失っている。

正義に従わない人は、自分の存在という闇夜の中を、正義という明かり無しで歩いている様なものである。

正義に従わない人は、自分の生き方という闇夜の中を、正義という明かり無しで歩いている様なものである。

人は、夢の中の人の様に動揺して、自分の肉欲という悪夢に食い物にされてしまう。

先天的な命である肉欲と、人の意思の弱い抵抗という、2 つの激しい流れが、対照的な対立を形成するので、カバリストは複数の魂による超胎児形成を仮定した。

言い換えると、カバリストは、肉体を獲得しようと互いに争い合って、多くの場合、肉体を破壊してしまう、複数の魂が 1 つの肉体に存在する事を信じた。

正に、1816 年のフランスの難破船メデューズ号の船員が、小さな筏(いかだ)を獲得しようと争い合って、筏(いかだ)を沈ませてしまった、様に。

正義に従わない人は、先天的な物である肉欲による星の光の流れか、思考による星の光の流れの下僕に自ら成り下がって、自分の人格や個性を放棄してしまい、マ

ルコによる福音５章で「軍団」を名乗っている多数の悪人の霊の奴隷に成り下がってしまうのは、確かである。

　前記を、芸術家は、良く十分に経験している。

　芸術家は、習慣的に普遍の光、星の光を呼び出して、気力を喪失してしまう。

　芸術家は、霊媒師と成ってしまう。

　言い換えると、芸術家は、病人と成ってしまう。

　より多くの成功が世論において芸術家を誇張するほど、芸術家の人格や個性は弱く成ってしまう。

　芸術家は、気まぐれに成り、嫉妬深く成り、怒りっぽく成ってしまう。

　芸術家は、違う分野でも、他人の功績に並ばれる事を認められなく成ってしまう。

　芸術家は、不正な人に成ってしまい、思いやりを失ってしまう。

　本当に大いなる人は、俗世で成功すると自分を見失う運命から逃れるために、また、俗世で成功すると自分を見失い(肉欲からの)自由が死んでしまうと知って、友人関係などから独立する。

　大いなる人は、誇りある不人気によって、下劣な大衆による汚染から身を守る。

　もしバルザックが存命中に徒党を組んでいたら、死後、現代の偉大な世界的な天才としての名声を残せなかったであろう。

　光は、無情なものや閉ざされた目を照らさないか、少なくとも、見る者のためにのみ、無情なものや閉ざされた目を照らすだけである。

　創世記１章３節の神の言葉「光あれ！」は、闇に勝利した知性の叫びである。

　実際、「光あれ！」という言葉は、気高い。

　なぜなら、「光あれ！」という言葉は、この世の最も大いなるもの、最も不思議なものである、知性による知性自身の創造を簡潔に表す。

知性の力を集結して、知性の能力をつり合わせて、知性は「私、知性は、永遠の真理を見る事によって、永遠に成る事を望む」と話している。

創世記１章３節「神が『光あれ！』と話すと光が創造された」

光は、神の様に永遠であるが、見るために開かれた目には、毎日、新たに創造されている様に見える。

真理は、永遠の創造であり、知の創造である。

真理が「光あれ！」と叫ぶと、光が創造されて、知も創造された。

知は永遠である。

なぜなら、知は、「光が永遠である」と理解できるからである。

知は、自分の作品であるかの様に、真理を観察する。

なぜなら、知は、光の勝利者である。

永遠性は、知による光への勝利である。

なぜなら、永遠性は、知の勝利への報いであり、知の勝利の王冠である。

しかし、全ての精神が真理を正しく見るわけではない。

なぜなら、全ての心が真理を正しく望むわけではない。

真の光が存在するのは都合が悪いと思う悪人の魂が存在する。

悪人は、星の光によるリンの様な青白い光を放つ幻覚、星の光による失敗作、思考による幻覚で満足してしまう。

悪人は、幻覚を好んでしまい、幻覚を追い払う日光を恐れてしまう。

なぜなら、日光が悪人の目の役に立たないで、悪人をより深い闇に陥れる、と悪人は感じてしまう。

そのため、狂人や愚者は、賢者を最初は恐れるが、それから賢者を中傷し、侮辱し、困らせ、非難する。

人は、狂人や愚者をあわれんで許す必要が有る。

なぜなら、狂人や愚者は、自分が行っている事を分かっていない。

真の光は、魂を安息させて満足させる。

幻覚は、魂を疲れさせて苦しめる。

狂気の満足は飢えた人の美食の夢に似ていて、美食の夢は飢えを常に満たす事無く飢えた人の飢えを活発にさせる。

狂気の満足が、苛立ちと心配、失望と絶望をもたらす。

ゲーテの小説「若きウェルテルの悩み」の話の中の自殺した架空の人物ウェルテルの感化を受けた人は、「常に命は嘘をついている。だから、私は死にたい！」と話す。

貧弱で杜撰(ずさん)な幼子よ、あなたに必要なのは死ではなく、命、真の人生である。

なぜなら、あなたは、この世に生まれた時から、毎日、死んでいる様なものである。

あなたは、快楽が消滅してしまう事への救いを、消滅する快楽から求めるのか？

命、人生が人をだました事は無く、人が未だに本当に生きた事が無いだけである。

あなたが命、人生と誤解している物は、死ぬ前の幻覚や夢でしかない。

全ての大いなる罪人は、故意に、自身に幻覚を見せている。

故意に、自身に幻覚を見せている人は、必然的に、大いなる罪人に成るかもしれない。

人の支配的な感情は、人の個人的な星の光を特化し、放射し、決定し、人の天国の種か地獄の種と成る。

(ある意味、)各人は、善い天使か、悪の使者を、受胎し、産み、育てている。

真理を受胎すると、善い霊を人の中に産み出す事に成る。

故意の虚偽や嘘は、夢魔や悪霊を産んで育てる事に成る。

全ての人は、自分の子を必ず育てる事に成る。

人は、命、人生を、思考のために使う。

自分の魂を新たに創造して魂の永遠性を再発見した人は幸いである！

虚偽や嘘と死を育てる事に自身を浪費した人には災いが有る!

なぜなら、全ての人は自分がまいた種の結果を刈り入れる事に成る。

不安や混乱の感化を与えてしまう、会話で有害な感化を与えてしまう、落ち着かないで苦しんでいる人が何人か存在する。

落ち着かないで苦しんでいる人がいると、人は苛立ちを感じてしまう。

落ち着かないで苦しんでいる人から離れても、人は怒りを感じたままに成ってしまう。

しかし、倒錯を秘めている人は、不安や混乱を感じるために、落ち着かないで苦しんでいる人を探し求めて、落ち着かないで苦しんでいる人がもたらす悪感情を楽しむ。

倒錯している人は、倒錯した精神という伝染病を患っている。

常に、倒錯している人には、秘めた動機として、破壊への渇望が有る。

倒錯している人の最終目的は、自殺である。

中略

絶え間無く自殺を望む事、人生や命と自然を中傷する事、毎日、死ねずに死を思い起こす事は、永遠の地獄であり、神話学的に倒錯した精神の象徴であるサタンへの罰である。

ギリシャ語で「悪魔」を意味する「Diabolos」を、正しく翻訳すると、「倒錯者」と成る。

「人は、命の肉体の快楽ですら、倫理道徳的な感覚の力によってしか、楽しむ事ができない」事は、放蕩者が気づいていない神秘である。

快楽とは、心中の調和による音楽である。

肉体の感覚は、心中の調和による音楽の、楽器に過ぎない。

堕落した魂が触れると、肉体の感覚という心中の調和による音楽の楽器は、外れた音を出してしまう。

悪人は、何も感じる事ができない。

なぜなら、悪人は、何者も愛する事ができない。

人は、愛するためには、正しく成る必要が有る。

結果的に、悪人にとっては全てのものが空虚である。

そのため、悪人には自然が不能であると誤って見えてしまう。

なぜなら、悪人は不能である。

悪人は全てのものを疑う。

なぜなら、悪人は何も知らない。

悪人は全てのものを冒涜する。

なぜなら、悪人は審美眼が無い。

悪人は堕落させるために親切にする。

悪人は酩酊するために飲む。

悪人は忘れるために眠る。

悪人は死に至る倦怠を我慢するために起きる。

悪人は、肉欲の奴隷と成るために、全ての法と義務から逃避して、毎日、生きている、と言うよりは、死んでいる。

「この世」と「あの世」の役に立たなく成った人にとっては「この世」と「あの世」は役に立たない。

星の光は、仲介するものである。人の自由な形にできる仲介するものは、人の星の体である。

人の星の体は、言い換えると、人の中に特化している星の命の一部である。

人の星の体、人の星の命の一部は、四大元素の同化と形成に役立つ。

四大元素は、人の存在に必要である。

正しい調和している意思でも、邪悪であり倒錯している意思でも、人の意思は、人の星の体に直接作用して、人の星の体を人の想像通りに形成して、人を引きつける美しさを人の星の体に与える。

人の心の奇形、人の心の醜さは、人の星の体を通じて、人の肉体の醜さをもたらす。

なぜなら、仲介するものである、人の星の体は、人の肉体という建物の内部の建設者である。

そして、人の星の体は、人の真の欲求や、思い込みといった人工的な欲求に従って、肉体を絶え間無く変える。

人の星の体は、貪欲な人の腹と顎(あご)を含む口を大きくする。

人の星の体は、けちな人の唇を薄くする。

人の星の体は、淫らな女性の目つきを恥知らずな物にする。

人の星の体は、嫉妬深い人や意地の悪い人の目つきを陰険な物にする。

人の魂の中で利己心が支配的に成ると、人の目つきは冷たく成り、人の顔つきは無慈悲な物に成り、形の調和は消え、利己心の特性の吸収や放射に応じて、手足は乾くか、太る。

自然は、人の肉体を人の魂に似た形へ変えて、肉体と魂の類推可能性を永遠に保証して、絶え間無く調整する。

心は良くないが肉体は美しい女性よ、長い間、肉体が美しいままではいられない事は確実であると思いなさい。

肉体の美しさは、徳を積んだり善行をしたりする事を条件に自然から前借りしている借金である。

徳や善行という金を用意できずに、期限を超過すると、自然という金貸しは、無慈悲に元本と利子を奪うであろう。

倒錯は、肉体のつり合いを崩して、肉体を改悪して、肉体を自壊や死に駆り立てる欲求の死に至る感化力を造り出す。

倒錯している人は、快楽が減るほど、快楽に飢える様に成る。

酩酊者には、赤ワインは、水の様に成ってしまう。

中略

倒錯した人は、逃した快楽が、長期の苛立ちと欲望に変わってしまう。

倒錯した人は、不節制が殺人的に酷く成るほど、至福が近くにある様に誤って思い込んでしまう……。

以下略

第 4 部 大いなる実践的な秘密、または、知の実現

第 4 部 序文

カバラと魔術の気高い知は、超常的な現実的な有効な効率的な力を人に約束する。

もしカバラと魔術の知が力をもたらさないならば、人は、カバラと魔術の知を虚偽や空虚な無駄な物であると見なすべきである。

福音書を意訳すると、無上の主イエスは、行いによって教師を判断しなさい、と話している。

「行いによって判断する」という判断の法則は、絶対であり、誤りが無い。

もし知を私に信じさせたいのであれば、行いを私に見せなさい。

人を精神的な解放にまで高めるために、神は、人から神を隠して、ある程度、世界の統治を人に委ねている。

人が、人の創造者の概念を常に高めて行く事によって、徐々に自身を完成できる様にするために、神は、人が、自然の偉大さと調和によって、神を推測するに任せている。

人は、「存在の中の存在」という神の名前によってのみ、神を認知している。

出エジプト記 3 章 14 節で、神は、「存在の中の存在」とモーセに名乗った。

そのため、人は、神を完全には知らず、神についての探求を試みて、神についての想像によってのみ、神を認知している。

そのため、ある意味で、人は、人の創造主である神の創造主と成る。

人は神の反映である、と人は信じている。

人は神を反映している、と人は信じている。

そのため、人は、自身についての幻想を無制限に拡大して行く事によって、この世に影も形も無い、この世の空間には存在しない、神の影を無限の空間に大まかに描く事ができるかもしれないと考えている。

神を創造する事。

自身を創造する事。

独立する事、不死に成る事、他のものからの影響を受けなく成る事。

「神を創造する事。自身を創造する事。独立する事、不死に成る事、他のものからの影響を受けなく成る事」は、確かに、プロメテウスの夢想よりも、大胆な計画である。

「神を創造する事。自身を創造する事。独立する事、不死に成る事、他のものからの影響を受けなく成る事」は、不信心なくらい、大胆な表現である。

「神を創造する事。自身を創造する事。独立する事、不死に成る事、他のものからの影響を受けなく成る事」は、(神聖な)狂気と思えるほど、大胆な考えである。

「神を創造する事。自身を創造する事。独立する事、不死に成る事、他のものからの影響を受けなく成る事」は、不信心な誤解をされ易い表現だけが逆説的である。

「神を創造する事。自身を創造する事。独立する事、不死に成る事、他のものからの影響を受けなく成る事」は、ある意味で、完全に論理的である。

「神を創造する事。自身を創造する事。独立する事、不死に成る事、他のものからの影響を受けなく成る事」は、達道者達の知が実現と完全な成就を約束している。

実際、人は、自分の知と徳から類推して、神を創造する。

人は、人の理想である神についての人の想像を、人に許されている人の精神的な発達段階を超えて、高める事ができない。

人が敬礼している神は、常に、人の考えや自身の鏡像を拡大したものである。

徳と正義の絶対を想像する事は、超人的に正しい思いやり深い人に成る事と成る。

良質な精神は最大の富である。

人は、戦いと労苦によって、良質な精神を獲得する必要が有る。

すると、人は、「才能は不平等である」という異議を持ち出すかもしれない。

ある幼子達は、完全に近い肉体を持って生まれてくる。

しかし、「進歩している自然のわざが、完全に近い肉体をもたらしている」と人は信じるべきである。

完全に近い肉体を与えられた幼子は、完全に近い肉体を自分の努力で獲得したわけではないが、少なくとも、完全に近い肉体を、幼子へと繋がっている人達の功績の集結によって、獲得したのである。

ある人へと繋がっている人達の功績が集結する事は、自然の秘密の１つである。

自然が根拠無しに何かを行う事はあり得ない。

金銭や土地の所有権の様に、他人よりも発達した知能の所有権は、無効にできない譲渡権と相続権である。

イエス。

神は、創造主である神のわざの完成を、人に求めている。

人が、自身を損うために、または、自身を向上させるために利用した全ての瞬間は、来世の全てを決定する。

(正しい)人は永遠の命を生きるので、永遠に明晰な知性の獲得によって、また、永遠に正しい意思の獲得によって、人は自身を形成する。

なぜなら、不正と過誤の後に残る物は、無秩序への報いである罰しかない。

善を理解する事は、善を望む事に成る。

正義の面において、望んでいる事は、行う事に成る。

そのため、福音書を意訳すると、人は行いによって裁かれる、と記されている。

人の行いは、人を、人が存在する通りの者にする。

そのため、すでに話した様に、人の習慣は、人の肉体を、部分的に変化させるし、時には、完全に変化させる。

人が獲得した肉体の形、または、神が人に獲得させた肉体の形は、人という存在の全てにとって、神意か、運命と成る。

古代エジプト人が、人型の神の象徴に与えた、動物の頭といった不思議な象徴は、運命の形を表す。

ティフォンの象徴は、ワニの頭(とカバの腹)を持っている。

ティフォンは、カバの腹を満足させるために、絶え間無くワニの頭で食べる、運命を定められている。

そのため、ティフォンは、貪欲と醜悪さで、永遠の破壊の運命を定められている。

人は、過失か濫用によって、能力を殺してしまったり高めたりできる。

人は、自然が与えてくれたものを善用して、新しい能力を創造できる。

大衆は、よく、「愛情は制御できず、全ての人が神を信じられるわけではなく、自分の性格は改善できない」と話す。

しかし、怠惰な人と、倒錯した人だけが、「愛情を制御できず、神を信じられず、自分の性格を改善できない」のである。

人は、心から望めば、誠実な人、信心深い人、思いやりがある人、献身的な人に成れる。

人は、正しさによって、落ち着きを、自分の精神にもたらす事ができる。

人は、正義によって、全能の力を、自分の意思にもたらす事ができる、様に。

天において信心の力で統治できれば、地において知の力で統治できる。

自制する方法を知る人は、自然の王者に成れる。

後記を、「大いなる神秘の鍵 第４部」で、エリファス レヴィは、話すつもりである。

どんな手段によって、真の秘伝伝授者は、命の主に成っているのか？

どの様にして、秘伝伝授者は、悲しみと死を超越しているのか？

どの様にして、秘伝伝授者は、予言と変身の能力を持つ古代ギリシャの海神プロテウスの様に、自身と他者を変身させるのか？

どの様にして、秘伝伝授者は、ティアナのアポロニウスの様に、予見の力を発揮するのか？

どの様にして、秘伝伝授者は、ライムンドゥス ルルスとニコラ フラメルの様に、黄金を錬金するのか？

どの様にして、秘伝伝授者は、若返るために、復活者ギヨーム ポステルとカリオストロの秘密を得るのか？

要約すると、「大いなる神秘の鍵 第４部」で、エリファス レヴィは、魔術の究極の言葉を話すつもりである。

第4部 第1章 変身について。キルケの杖。メディアの釜。魔術の武器で勝ち取られた魔術。イエズス会の大いなる秘密と、イエズス会の力の秘密。

ダニエル書4章33節には、ネブカドネザル2世は権力と傲慢が絶頂の時に突然に獣に変身した、と記されている。

ダニエル書4章33節には、ネブカドネザル2世が未開の場所に逃げて草を食べて髭(ひげ)と髪と爪が伸びた状態のまま7年間を経た、と記されている。

「高等魔術の教理14章」で、エリファス レヴィは、狼男の神秘についての考えを話した。

キルケの例え話は、知られているし、理解されている。

ある人から他人への、決定的な「支配力」は、真のキルケの杖である。

ほぼ全ての人の人相には、1体以上の動物との類似が有る。

言い換えると、ほぼ全ての人の人相には、特化した先天的な物である肉欲の特徴が有る。

肉欲は、正反対の肉欲と、つり合っている。

また、強い肉欲が、弱い肉欲を支配している。

羊を圧倒するために、牧羊犬は、狼への恐怖を利用する。

もし、あなたが、かわいい子猫に愛されたい犬であるならば、猫に変身するという手段を取るしかない。

しかし、どの様にして、変身するのか!?

観察、模倣、想像によって、変身する。

「観察、模倣、想像によって、変身する」という象徴的な言葉で読者は理解できた、と思う。

「観察、模倣、想像によって、変身する」という啓示を催眠術をかけたいと望む全ての人に勧める。

「観察、模倣、想像によって、変身する」という啓示は、催眠術師のわざの全ての秘密のうち、最も深い秘密である。

「対極との対立をつり合わせて、自分の動物磁気、星の光に両極性を与える事」は、専門用語による表現である。

または、「吸収の中心へ光線を傾けるために、吸収の特性を自身に集中させる事」。

逆も同様である。

すでに話した、諸々の動物の形の助けによって、人の磁気の両極性を統治できる。

諸々の動物の形は、想像力を固定するのに役立つ。

例えば、あなたは、あなたの様に両極性を持つ相手に、磁気的に作用したいと望んでいる、とする。

もし、あなたが磁気の催眠術師であれば、あなたは最初の接触で相手を見抜けるであろう。

あなたよりも、相手は、ほんの少しだけ弱い、とする。

例えるなら、相手は小さいネズミであるハツカネズミであり、あなたはハツカネズミより大きいネズミである。

自身を猫にしなさい。

そうすれば、あなたは相手をとらえるであろう。

シャルル ペローが考案した話ではないが、シャルル ペローが誰よりも上手に話している、見事な「ペロー童話集」の中の「長靴をはいた猫」という話で、不思議な猫は、機転を利かせて、オーガをネズミに変身させて、すぐに食べた。

アプレイウスの「黄金のロバ」の様に、多分、「マザー グース」は、真の魔術の口伝であり、幼子のための御伽話（おとぎばなし）を口実に、知の畏敬するべき秘密を隠している。

手をかざすだけで、言い換えると、手振り等の象徴で意思を表すだけで、催眠術師が純水に赤ワイン、リキュール、考えられる全ての薬の味や特性を与える事ができるのは知られている。

猛獣使いが精神的に催眠的にライオンよりも強く獰猛に変貌してライオンを圧倒する事も知られている。

勇敢なアフリカのライオン狩り Jules Gerard が、仮に、ライオンを恐れたら、ライオンに食い殺されてしまうであろう。

ライオンを恐れないためには、人は、想像力と意思による努力によって、ライオンよりも強く獰猛に変身する必要が有る。

ライオンを恐れないためには、人は、「私はライオンであり、私の目の前にいる動物はライオンである私を恐れる犬に過ぎない」と自分に言い聞かせる必要が有る。

シャルル フーリエは、反ライオンを妄想した。

ファランステールを妄想したシャルル フーリエの反ライオンという妄想を、ライオン狩り Jules Gerard は実現した。

しかし、大衆は、「ライオンを恐れないためには、勇敢な人に成って十分に武装するだけで十分である」と言うであろう。

いいえ。十分ではない。

ライオンを恐れないためには、人は、自身を心で知る必要が有る。

言ってみれば、ライオンを恐れないためには、人は、ライオンの跳躍を計算できる必要が有る。

ライオンを恐れないためには、人は、ライオンの戦略を見抜く事ができる必要が有る。

ライオンを恐れないためには、人は、ライオンの爪を避ける事ができる必要が有る。

ライオンを恐れないためには、人は、ライオンの動きを予見できる必要が有る。

要約すると、優れたラ フォンテーヌが話している様に、ライオンを恐れないためには、人は、ライオン学、ライオン術の達人に成る必要が有る。

獣、動物は、人の先天的な物である肉欲の生きている象徴である。

もし、あなたが、ある人を臆病にしたのであれば、あなたは、ある人をウサギに変えたのである。

逆に、もし、あなたが、ある人が獰猛に成る様に追い込んでしまったのであれば、あなたは、ある人を虎に変えたのである。

キルケの杖とは、女性が持つ魅了する力である。

キルケの杖がオデュッセウスの戦友を豚に変えたのは、当時だけの話ではない。

破壊しない変身は存在しない。

人は、タカをハトに変えるには、第一に殺す必要が有り、それから、最初の形跡を完全に破壊するために、死体を破片にまで切って分解し、そして、メディアの魔術の釜の中で死体の破片を煮る必要が有る。

(「殺す」等は、例えである。)

人の改心を達成するために、近代の秘儀祭司達であるイエズス会が、どのような手段で進めるのか、見なさい。

例えば、カトリックにおいて、多かれ少なかれ弱くて肉欲に夢中な人をイエズス会の禁欲的な宣教師に変えるために、イエズス会が、どのように取り組むのか、見なさい。

イエズス会の改心のさせ方には、畏敬するべきイエズス会の大いなる秘密が存在する。

イエズス会は、常に誤解され、たいてい中傷されるが、常に王者である。

イグナチオ デ ロヨラの「霊操」という名前の本を注意深く読みなさい。

そして、イグナチオ デ ロヨラという知者が、どんな魔術的な力によって、信心を実現するのか、気づきなさい。

イグナチオ デ ロヨラは、弟子達に、目に見えないものを見、触り、嗅ぎ、味わう様に命令している。

イグナチオ デ ロヨラは、祈りを通じて、自発的に幻覚を見るまでに、五感が高まる事を望んでいるのである。

弟子達が宗教の神秘について熟考する時に、イグナチオ デ ロヨラは、第一に、弟子達が、ある場所を想像力で創造して、夢見、見、触る事を望んでいる。

もし弟子達が地獄について熟考するのであれば、イグナチオ デ ロヨラは、弟子達に、燃えている岩を触らせ、瀝青の様に深い闇の中で泳がせ、液体の硫黄を舌の上に載せ、不快な悪臭で鼻の穴を満たし、恐ろしい拷問を見せ、人の声とは思えない苦しんでいる人の呻き声を聞かせる。

イグナチオ デ ロヨラは、弟子達に、執拗な鍛錬によって忍耐させた全てのものを意思で創造する様に命令している。

イグナチオ デ ロヨラの弟子達は皆、自己流で自発的に幻覚を見る事を達成するが、常に、最も感銘を受けた方法で自発的に幻覚を見る事を達成する。

イグナチオ デ ロヨラの「霊操」は、「暗殺教団」の指導者「山の老人」が悪事に役立てた大麻による幻覚ではない。

イグナチオ デ ロヨラの「霊操」は、眠らないで見る夢であり、狂わない幻覚であり、論理的に熟考された望まれた幻視であり、知と信心による現実の想像による創造である。

そのため、イエズス会士は、教えを説く時に、「私が話す事は、私が、目で見た事、耳で聞いた事、手で触れた事である」と話す事ができる。

イグナチオ デ ロヨラの「霊操」で鍛えられたイエズス会士は、自分の様にイグナチオ デ ロヨラの「霊操」で鍛えられたイエズス会士達の意思の輪と一体に成る。

結果的に、各イエズス会士の神父は、イエズス会と同じくらい、強い。

また、イエズス会は、俗世の大衆よりも、強い。

第 4 部 第 2 章 若さを保つ方法と、若返りの方法。カリオストロの秘密。復活の可能性。復活者ギヨーム ポステルの例。ある奇跡を起こす労働者の話など。

酩酊しないで、適度に仕事をする、完全に規則正しい生活の人は、たいてい長生きできる、事は知られている。

ただし、エリファス レヴィの考えでは、長生きは、老年の延長に過ぎない。

エリファス レヴィが話している魔術の知から、老年の延長、以外の特権や秘密について尋ねる権利が読者には有る。

長く若くいる事、または、若返る事は、多数の人には、望ましい大事な事に思われるであろう。

長く若くいる事、または、若返る事は、可能なのか？

長く若くいる事、または、若返る事は、可能なのか？　調べよう。

高名なサンジェルマン伯爵は死んだ、事は疑わない。

しかし、サンジェルマン伯爵が老いて行く姿を見た人はいない。

サンジェルマン伯爵は、常に 40 歳に見えた。

名声が絶頂の時に、サンジェルマン伯爵は、80 歳を超えている、と話している。

ニノン ド ランクロは、老年の時でも、未だに若く美しく魅力的な女性であった。

ニノン ド ランクロは、老いずに、死んだ。

高名な手相占い師 Desbarrolles は、長い間、35 歳に見えている。

もし Desbarrolles が自分の出生証明書を大胆にも見せたら外見年齢とは全く異なる実年齢が記されているであろうが、誰も信じないであろう。

カリオストロは、常に同じ年齢のままに見えた。

カリオストロは、少しの間だけ若返る、若返り薬エリクサーを持っていると話していただけではなかった。

「魔術の歴史 第 6 巻 第 2 章」でエリファス レヴィが詳しく説明して解析したカリオストロの方法で、カリオストロは、肉体の復活が可能であると自ら誇っていた。

カリオストロとサンジェルマン伯爵は、若さを保てた原因が、万能薬の存在と利用であるとしていた。

非常に多数のヘルメスの錬金術師達は、空しくも、万能薬を探求した。

16 世紀の秘伝伝授者である、善良な学の有るギヨーム ポステルは、ヘルメスの錬金術の大いなる秘密を所有しているとは話さなかった。

それにもかかわらず、老いた衰弱した姿が見られた後に、ギヨーム ポステルは、しわの無い、輝く色艶の顔と肌、黒々とした髭(ひげ)と髪、生き生きとした力強い肉体という姿で再びあらわれた。

ギヨーム ポステルへの敵対者は、ギヨーム ポステルが化粧をして髪も黒く染めた、と誤って主張した。

なぜなら、他人を笑いものにする人や似非学者は、自分が理解できない現象に対して、何らかの説明を見つける必要が有る。

大いなる魔術の、肉体の若さを保つ方法とは、「最初」の生き生きとした感情と思考を大事に保って、魂を老化から守る事である。

堕落した大衆は、「生き生きとした感情と思考」を妄想と呼んでいる。

エリファス レヴィは、「『最初』の生き生きとした感情と思考」を「永遠の真理の『最初』の幻想」と呼ぶつもりである。

地上で、幸福、友愛、思いやり、人の歩みを全て数えていてくれて人の涙に報いてくれる母性的な神意を信じている人を、堕落した大衆は、完全にだまされている人である、と誤って話すであろう。

堕落した大衆は、魂の全ての喜びを失くしている自分は強い者である、と誤って思い込んでいる自分こそ、だまされている人であると理解していない。

心の善良さを信じる事は、心の善良さを所有する事に成る。

そのため、マタイによる福音18章で、世界の人々の救い主イエスは、神の王国を幼子の様な者に成った人に約束した。

幼子の様な者とは、何者なのか？

幼子の様な者とは、信じる時期の者である。

幼子は、人生について未だ何も知らない。

そのため、幼子は、不滅の確信という光を放って輝いている。

幼子は、母の腕の中で、献身、思いやり、友愛、神意の愛を疑えるか？　いいえ！幼子は、母の腕の中で、献身、思いやり、友愛、神意の愛を疑えない！

心で幼子の様な者に成りなさい。

心で思いやりや神意を信じなさい。

そうすれば、肉体を若いまま保てるであろう。

美しさと善良さにおいて、神の実体や、自然の実体は、全ての人の想像を、無限に超越している。

そのため、この世が嫌に成っている人は、幸福に成る方法を知らない人である。

この世に幻滅している人の嫌悪は、この世に幻滅している人が、濁った流れの水で酩酊しているだけである事を証明している。

肉欲の快楽を楽しむためにすら、人は倫理道徳的な感覚を持つ必要が有る。

人生を中傷する人が、人生を濫用しかしていないのは確かである。

すでに証明した様に、高等魔術は、人を、最も清らかな倫理道徳の法へ導いて戻す。

ある達道者は、「神聖なものを見つけるか、神聖な者に成るか、である」、「神聖なものを見つけるか、神聖な事を為(な)すか、である」と話している。

なぜなら、「幸福に成るためには、この世ですら、人は、神聖な者に成る必要が有る」と高等魔術は理解させる。

神聖な者に成る!

言うのは簡単である。

しかし、どの様にして、もう信じていない人に、信心を与えるのか?

どの様にして、悪徳によって「塩味」を失くした心に、徳という「塩味」を取り戻すのか?

(マタイによる福音 5 章 13 節「塩気」、「塩味」)

「知、大胆さ、意思、沈黙」、「知る、大胆に行う、思う、沈黙を守る」、「知るために考える、大胆に行う、思う、沈黙を守る」という知の 4 つの言葉を、人は頼る必要が有る。

人は、嫌悪を抑えて、義務を学び、好んでいるかの様に義務を実践する必要が有る。

あなたは不信心者であるが、キリスト教徒に成る事を望んでいるのか?

それならば、キリスト教の儀式を行いなさい。

キリスト教の言葉を用いて、規則正しく定期的に祈りなさい。

秘跡を信じているかの様に、秘跡に近づきなさい。

そうすれば、いつの間にか、あなたは、キリスト教を信じているであろう。

「行動する事によって、行動に対応している概念を得る」事が、イグナチオ デ ロヨラの「霊操」が含んでいる、イエズス会の秘密である。

同様にして、愚者は、知を忍耐強く望めば、賢者に成れるであろう。

魂の習慣を変える事によって、人は、肉体の習慣を変える事ができる、のは確かである。

すでに話した様に。すでに方法を説明した様に。

特に、人を醜悪にして、人を老化させる物は、何であるか？

人を醜悪にして、人を老化させる物は、憎悪と恨みである。

人を醜悪にして、人を老化させる物は、他人について行う好意的ではない判断、裁きである。

人を醜悪にして、人を老化させる物は、虚栄心を傷つけられて怒る事、虚栄心を傷つけられて逆恨みする事である。

人を醜悪にして、人を老化させる物は、満たされない肉欲である。

思いやり深い哲学は、人を醜悪にして人を老化させる全ての悪を予防してくれる。

もし人が隣人の欠点に目をつぶり、隣人の美点だけを考えたら、人は普遍に善や善良さと思いやりや善行を見つけられるであろう。

最悪な人にも良い面は有る。

そのため、人が、最悪な人の良い面を理解する方法を知ると、最悪な人は悪を和らげるであろう。

もし、あなたに悪人と共通点が無ければ、悪人の悪い所に気づく事すらないはずである。

あなたにも悪い所が有るので、悪人の悪い所に気づくのである。

友愛と、友愛が鼓舞する献身は、牢獄ですら見つかる。

フランスの恐怖の犯罪者ラスネールは、借りた金を誠実に返し、頻繁に寛大な優しい行いをした。

盗賊ルイドミニク カルトゥーシュと盗賊ルイ マンドランの犯罪者人生の中にも涙を誘う善行が存在した事を疑わない。

完全な悪人も、完全な善人も、存在しない。

マタイによる福音 19 章 17 節で、最も善人である主イエスは、「善い者は、神だけである」と話している。

　多くの場合、人が徳への熱意と呼んでいる自分の美点は、高飛車な隠れた自惚れ、隠れた嫉妬、矛盾に満ちた傲慢でしかない。

　次の様に、神秘的な神学者は話している。

「明らかに無秩序な者や恥ずべき罪人を見た時は、神が、私達よりも、大きな試練を罪人たちに受けさせている、と信じよう。
また、確実に、または、少なくとも十中八九、私達は、罪人たちよりも、劣悪である、と信じよう。
また、私達が罪人たちの立場に立っていたら、私達は、罪人たちよりも、悪い事を多数しているはずである、と信じよう」

　平和！　平和！

　平和は、魂の無上の幸福である。

　平和を人に与えるために、イエス キリストは、この世に降臨した。

　ルカによる福音 2 章 14 節で、救い主イエスが生まれた時に、天使達は、「無上の高みでは、神に栄光あれ！　地上では、神の御心に適う人に平和あれ！」と叫んでいる。

　初期のキリスト教の古代の教父達は、悲しみを、8 番目の大罪、8 番目の死に至る大罪に数えていた。

　実際、真のキリスト教徒にとっては、後悔や良心の呵責ですら、悲しみではない。

　後悔や良心の呵責は、慰めであり、喜びであり、勝利である。

「私は、悪を望んでいたが、もう悪は望まない。
私は、かつて死んでいたが、これからは生きている」

　ルカによる福音 15 章で、放蕩息子の父は、放蕩息子が(父の所に、神の所に、善に)戻ったので、肥えた子牛を屠って祝った。

　放蕩息子の悔い改めを父が受け入れてくれた時、放蕩息子に何ができるであろうか？

　放蕩息子の悔い改めを父が受け入れてくれた時、放蕩息子が困惑して涙を流すのは、疑い無い！

　ただし、放蕩息子の悔い改めを父が受け入れてくれた時、放蕩息子は、何よりも、喜ぶであろう！

　この世には、罪と狂愚という、唯一の悲しい物が存在する。

　私達は、罪と狂愚から解放されたのだから、微笑み、喜びの声をあげよう。

　私達が神とイエスに救われたので、天で私達を愛している者達は全て喜ぶ！

　人は、全て、死の原理と、不死の原理を心の中に抱いている。

　死は、獣である。

　(獣は、肉欲の例えである。)

　常に、死という獣は、非人間的な狂愚をもたらす。

　神は、狂人、愚者を愛さない。

　なぜなら、神の精神は、知の精神と呼ばれている物である。

　狂愚は、受難と奴隷としての労苦によって、狂愚の罪をつぐなう。

　棒は、獣のために創造された。

　棒は、動物的人間のために創造された。

　常に、苦しみは、警告である。

「苦しみは、警告である」と理解していない人には、苦しみは、より一層、悪く成ってしまう。

自然が手綱を痛いくらいに引く時、人は正道から外れている。

人は道を踏み外している。

自然が鞭打つ時は、人に危険が迫っている。

苦しみについて熟考しない人には災いが有る！

人は、死ぬ用意が出来たら、悔い無く命を離れ、人に命を取り戻させようとさせる事は何ものにもできないであろう。

ただし、死が早過ぎる時は、魂は命を惜しみ、巧みに奇跡を起こせる人は、魂を肉体に呼び戻す事ができるであろう。

聖書には、復活に用いる必要が有る手順が記されている。

預言者エリシャと使徒パウロは復活に成功している。

死んでいる人を復活させたい人は、自分の両足を死んでいる人の両足の上に重ねて、自分の両手を死んでいる人の両手の上に重ねて、自分の口を死んでいる人の口に重ねて、死んでいる人を磁化する必要が有る。

それから、長時間、意思を全て集中して、できる限りの思いやりの思いを込めて、思いやりの有る全ての事を考えて、肉体から離脱した魂を意思に呼び寄せる。

もし、術者が、魂に、多数の愛情か、大いなる畏敬を吹き込めたら、もし、術者が魂と磁気的に交流している思考の中で、術者が「魂には未だ命が必要である」事と「魂には、下の『この世』で、幸福な日々が未だ用意されている」事を魂に説得できたら、魂が肉体に戻るのは確かであろう。

そして、ありふれた科学者にとって、外見の死は、昏睡状態に過ぎなく成るであろう。

女子修道院長ジャンヌは、ギヨーム ポステルを、昏睡状態の後に、復活させて、若返らせた。

そのため、ギヨーム ポステルは、「復活者ポステル」と名乗る様に成った。

以下略

第4部 第3章 死の大いなる秘密

人は、よく、最も美しい命でも必ず終わる事を考えて悲しく成る。

人が死と呼んでいる畏敬するべき未知の物が近づく事は、人に、命の全ての喜びを考えさせる事によって、嫌悪の感情を引き起こす。

もし人の命が必ず少ししか無いのであれば、なぜ、人は生まれるのか？

幼子は必ず死ぬのに、なぜ、思いやり深く幼子を育てるのか？

「なぜ、人は生まれるのか？」といった常にある悲しい疑問は、人の無知による物である。

「なぜ、人は生まれるのか？」といった疑問を、保護膜である羊膜を破って脱いで、未知の「この世」に投げ出される、誕生が近づいている、人の胎児は、漠然と自身に問いかけているかもしれない。

誕生の神秘を学ぼう！

そうすれば、死の大いなる秘密の鍵をつかめるであろう！

自然の法が女性の胎内に投じた、肉体をまとった霊は、ゆっくりと目覚める。

霊は、後で絶対に必要と成る諸器官の創造に取り組む事に成る。

しかし、胎児の状態では、諸器官が育つにつれて、諸器官が霊にもたらす不快感は増大して行く。

胎児という命の最高に幸福な時期は、蝶のさなぎの時期に似ている。

胎児は、胎児の保護に役立つ羊膜を周囲に張る。

胎児は、糧を与えてくれる、衝撃から保護してくれる羊水という流体の中を泳ぐ事に成る。

胎児の時期、胎児は、自由であり、苦しみを感じない。

胎児は、普遍の命の中にいる。

胎児は、自然が記憶している印象を受け取る。

胎児が自然から受け取る印象は、後に、胎児の肉体の形成や、胎児の顔の造形を決定する。

胎児の時期という幸福な時期は、胎児の幼子の時期である、と言えるかもしれない。

胎児の幼子の時期の後に、胎児の青春期が続く。

人の形は、明確に成り、性別が決定される。

母の羊膜という卵の中で、幼子の時期の後に続く青春期の漠然とした夢想に似ている、心の動きが起こる。

胎盤は、胎児の外形であり、胎児の実質的な肉体である。

胎盤は、胎盤内に、すでに胎盤を断ち切って胎盤を脱け出そうとする傾向が有る未知の者である胎児を感じる。

その時、胎児は、より明確に、夢の命へ入る。

胎児の脳は、母の脳の鏡として働いて、母の想像力を、多大な力で再現するため、胎児の脳は母が想像している形を胎児の手足に伝える。

その時、胎児にとっての母は、人にとっての神と成り、未知の目に見えない神意と成る。

胎児は、母が敬礼する全てのものと、自身を同一にするくらい、神の様な母を望む。

胎児は、母に固執する。

胎児は、母によって生きる。

胎児は、母を見た事は無いが。

また、胎児は、母を理解する方法すら知らないが。

もし胎児が哲学的に思索できたら、多分、胎児は、母の個人的な存在性と知性を否定するであろう。

なぜなら、胎児にとって、母は、未だ、運命的な牢獄であり、胎児の生命を保護し保持する器官に過ぎない。

しかし、少しずつ、母による奴隷状態は、胎児を苦しめる。

胎児は、身をよじらせて、苦しみ、胎児としての人生が終わろうとしているのを感じる。

それから、けいれんと苦しみの時が来る。

胎児を束縛していた物が断ち切られる。

胎児は、未知という底無しの淵に堕ちようとしているのを感じる。

成就された。

胎児は、堕ちて、痛みで精神的に粉々に成り、不思議な冷たさにとらわれる。

胎児が吐き出した、最後の溜め息は、最初の泣き声に変わる。

胎児としての命は死んだ!

胎児は、人の命へと生まれた!

胎児としての人生の間、胎児は、胎盤が肉体であると思っていたが、実際は、胎盤は胎児のための特別な肉体であった。

胎児の肉体としての胎盤は、胎児にとっての来世である誕生後は無用である。

誕生した時に、胎児の肉体としての胎盤を、汚れた物として脱ぎ捨てる必要が有る。

人としての人生のための肉体は、第２の人生の外皮の様な物であり、肉体の死後の来世の第３の人生では無用である。

そのため、肉体の死後の第２の誕生の時に、人は、肉体を脱ぎ捨てる。

天での人生と比較した、この世での人生は、正に、この世での人生と比較した胎児としての人生である。

人の邪悪な肉欲が人を精神的に殺すと、自然は人を流産して、人は早産で魂の永遠の人生に生まれてしまい、ヨハネの黙示録2章11節で使徒ヨハネが「第2の死」と呼んでいる畏敬するべき分解に人はさらされてしまう。

忘我状態の者達の不断の口伝によると、人生の失敗作である悪人は、地上の大気中を超越できずに泳ぎ続けて、少しずつ地上の大気に吸収されて消滅してしまう。

死んだ悪人は、人の形を有してはいるが、常に、切り取られていたり、不完全である。

ある死んだ悪人には片手が無く、ある死んだ悪人には片腕が無く、ある死んだ悪人には胴体しか無く、ある死んだ悪人には青白い転がる頭部しか無い。

生前に負った精神的な損傷が、死んだ悪人の昇天を妨げている。

精神的な損傷が、奇形を、死んだ悪人の星の体にもたらしている。

精神的な損傷によって、少しずつ、死んだ悪人の存在性が全て漏れ出て行く。

やがて、死んだ悪人の魂は裸に成ってしまう。

死んだ悪人は、どんな犠牲を払ってでも、魂の新しいヴェールを作って、精神的な恥部を隠すために、マタイによる福音22章13節の「外の闇」に自ら引きずり込まれる事を余儀無くされ、古代の混沌の眠れる海、死んだ悪人達の海の中をゆっくりと通過する。

精神的に損傷している悪人の魂は、胎児の第2の形である、ラルヴァに成る。

精神的に損傷している悪人の魂ラルヴァは、気体の様な星の体を、生きている他人の肉体からの流血の蒸気で(霊化したり物質化したりして)養う。

そのため、精神的に損傷している悪人の魂ラルヴァは、剣先を恐れる。

度々、精神的に損傷している悪人の魂ラルヴァは、不道徳な人にとりついて、不道徳な人の命によって生きる。

胎児が母の胎内で生きる、様に。

その状況において、精神的に損傷している悪人の魂ラルヴァは、不道徳な人の狂った欲望を表す、恐るべき奇形を取る事ができる。

黒魔術の言語道断の儀式で、劣悪な魔術師の前に悪魔の姿で現れる者は、精神的に損傷している悪人の魂ラルヴァである。

精神的に損傷している悪人の魂ラルヴァは、光を恐れる。

特に、精神的に損傷している悪人の魂ラルヴァは、知の光を恐れる。

知の光は、雷の様に、精神的に損傷している悪人の魂ラルヴァの星の体を十分に破壊できて、死んだ悪人達の海に投げ入れる。

(「死んだ悪人達の海」、「Dead Sea」をパレスチナの塩湖「死海」、「Dead Sea」と混同しない様に。)

「大いなる神秘の鍵 第4部 第3章」でエリファス レヴィが啓示した物は全て、予見者の口伝による物であり、「大天文学または直感哲学」でパラケルススが「直感哲学」と呼んでいる超常的な哲学の名前においてのみ学問の前に立てる事ができる。

第4部 第4章 秘密の中の秘密、神の秘密。

大いなる秘密、言い換えると、言い表せない説明できない秘密とは、善悪の絶対の知である。

創世記3章5節で、蛇は、「善悪の知の木の果実を食べた時、あなたは神々の様に成るであろう」と話している。

創世記2章17節で、神である知は、「もし人が善悪の知の木の果実を食べたら、人は、いつか死ぬ事に成る」と答えている。

そのため、善と、悪は、同一の木の根からの、同一の木の上に、果実をもたらしている。

善の体現者は神である。

悪の体現者は悪魔である。

神の秘密や神の知を知る事は、神に成る事に成る。

悪魔の秘密や悪魔の知を知る事は、悪魔に成る事と成る。

神と悪魔に同時に成る事を望むのは、最も完全な二律背反を自身に取り込む事に成る。

最も不自然な2つの正反対の力を自身に取り込む事に成る。

無限の対立を自身に閉じ込めようと望む事に成る。

太陽といった諸々の恒星と諸世界を消滅させる毒を飲む事に成る。

デイアネイラの肉体を焦がす毒の外衣をまとう事に成る。

最速の最も畏敬するべき死に身を委ねる事に成る。

知り過ぎる事を望む人には災いが有る!

なぜなら、過剰な拙速な知は、人を殺さなくても、人を狂わせるであろう。

善悪の知の木の果実を食べる事は、悪を善と結びつけて、善が悪を吸収する事に成る。

オシリスの光を放つ顔色を、ティフォンの仮面で覆う事に成ってしまう。

イシスの神のヴェールを持ち上げてしまい、聖所を冒涜してしまう事に成ってしまう。

ヴェール無しで太陽を見る事を試みた軽率な人は、盲目に成ってしまう。

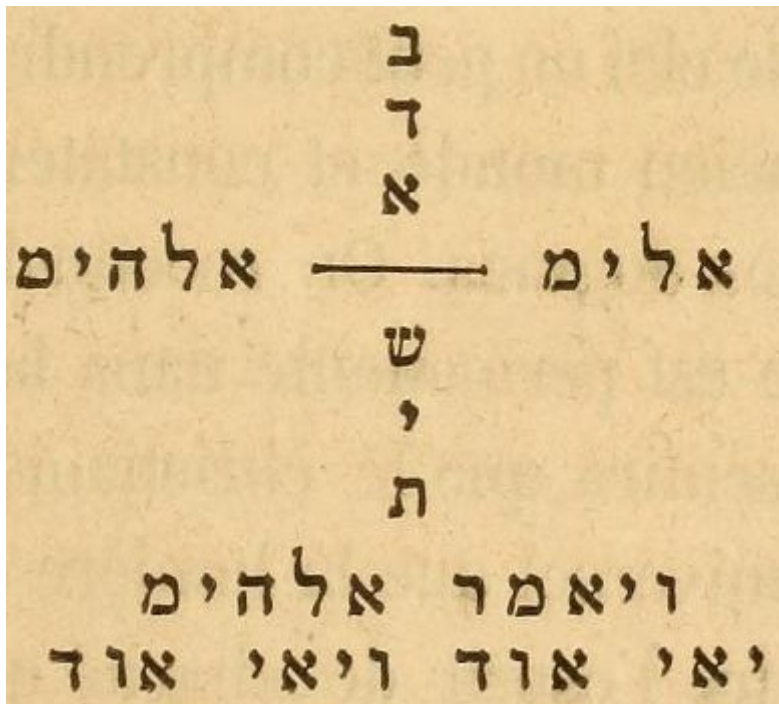
ヴェール無しで太陽を見る事を試みた時から、盲目に成ってしまった人にとって、太陽は黒く成ってしまう。

これ以上、善と悪について話す事は禁じられている。

そのため、3 つの五芒星で、エリファス レヴィは、啓示を終わらせるつもりである。

3 つの五芒星は、善と悪について、十分に説明するであろう。

「大いなる神秘の鍵 第 4 部 第 4 章」の 3 つの五芒星を、「魔術の歴史」の最初の五芒星と比較しなさい。

「大いなる神秘の鍵 第 4 部 第 4 章」の 3 つの五芒星と「魔術の歴史」の五芒星をまとめる事によって、大いなる秘密の中の秘密、大いなる神の秘密の理解に到達できる。

それでは、後は、ギヨーム ポステルの大いなる鍵をもたらして、「大いなる神秘の鍵」を完成する。

ギヨーム ポステルの鍵は、タロットの鍵と成る。

タロットには、天の東西南北に対応している、4 つの生きている獣の象徴に対応している、4 種類のタロットの小アルカナである棒、杯、剣、コインまたは五芒星と、数と、輪の形に形成された文字が存在する。

それから、タロットには、7 惑星の象徴が存在する。

タロットの、3 つの色で表されて、3 回くり返された 7 惑星の象徴は、自然の領域、人の領域、神の領域という 3 つの領域を象徴している。

タロットの、3 回くり返された 7 惑星の象徴は、タロットの大アルカナのうち 21 枚と成る。

輪の中心には、ソロモンの封印である六芒星を形成する二重の三角形が存在する事に気づく。

六芒星は、宗教の 3 つ 1 組と哲学の 3 つ 1 組であり、つり合わせた本質による普遍の生成による、自然の 3 つ 1 組と対応している。

三角形の内側には、十字が存在する。

十字は、輪を四等分に分けている。

そのため、宗教の象徴は、幾何学の象徴と結びついている。

信心は、知を補完する。

知は、信心を認知する。

タロットという鍵の助けによって、人は、古代の世界の普遍の象徴を理解できる。

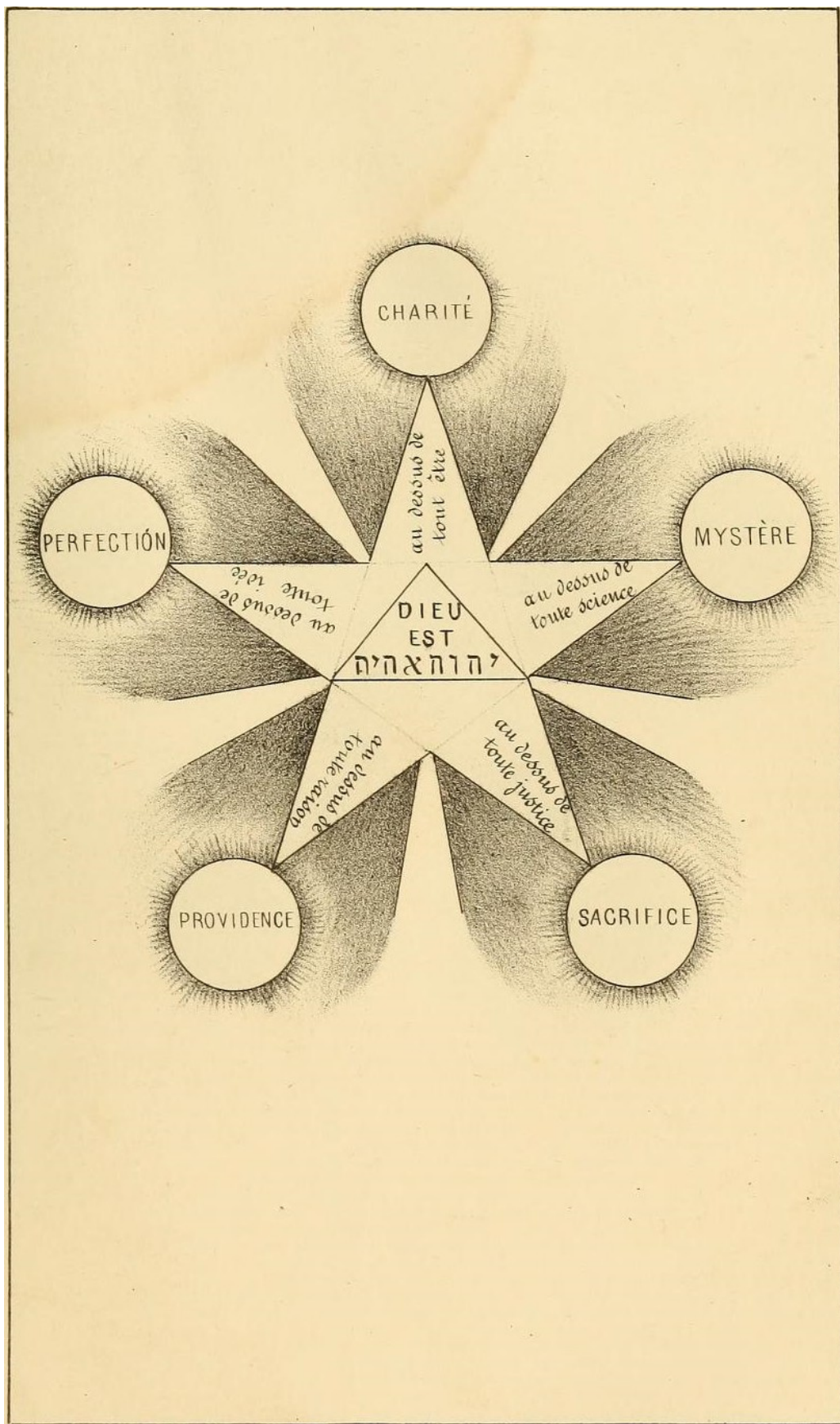
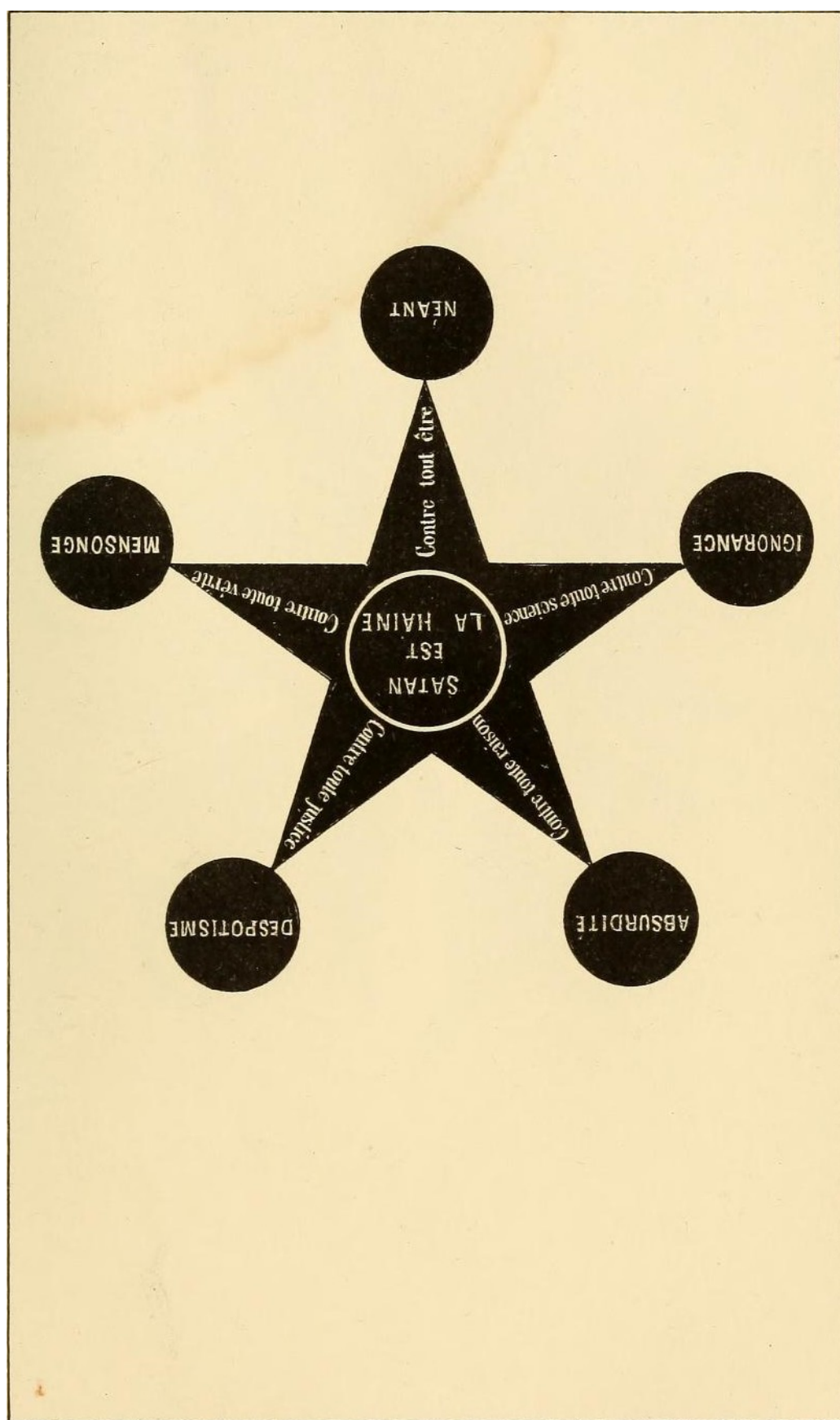
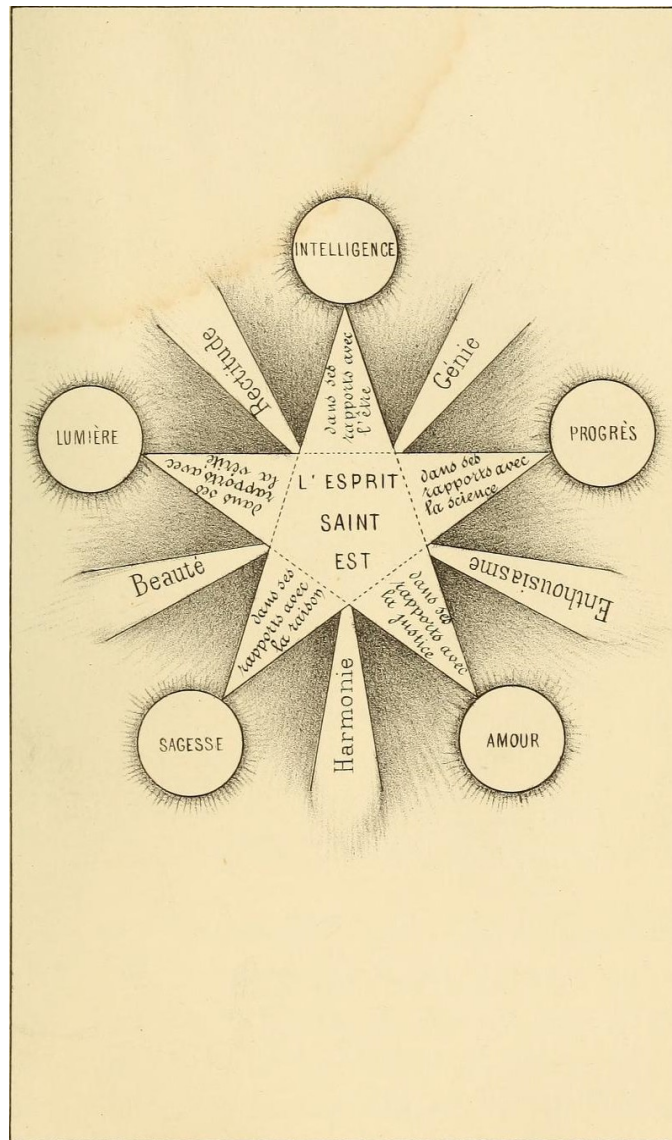
タロットによって、人は、古代の世界の普遍の象徴と、現代の考えの、類推可能性に明確に気づく事ができる。

タロットによって、人は、「自然と人において、神の啓示は、永遠である」と認められるであろう。

タロットによって、人は、「キリスト教だけが、思いやりの精神を普遍の神殿に降臨させて、光と熱を普遍の神殿にもたらした」と感じられるであろう。

思いやりの精神とは、正に、神の命である。

マタイによる福音２章の３人のマギの星

SATAN
EST
LA HAINE
NÉANT
Contre tout être
IGNORANCE
Contre toute science
ABSURDITÉ
Contre toute raison
DESPOTISME
Contre toute justice
MENSONGE
Contre toute vérité

悪の星

神の弁護者パラ クレートス、真理の霊、神の聖霊の五芒星

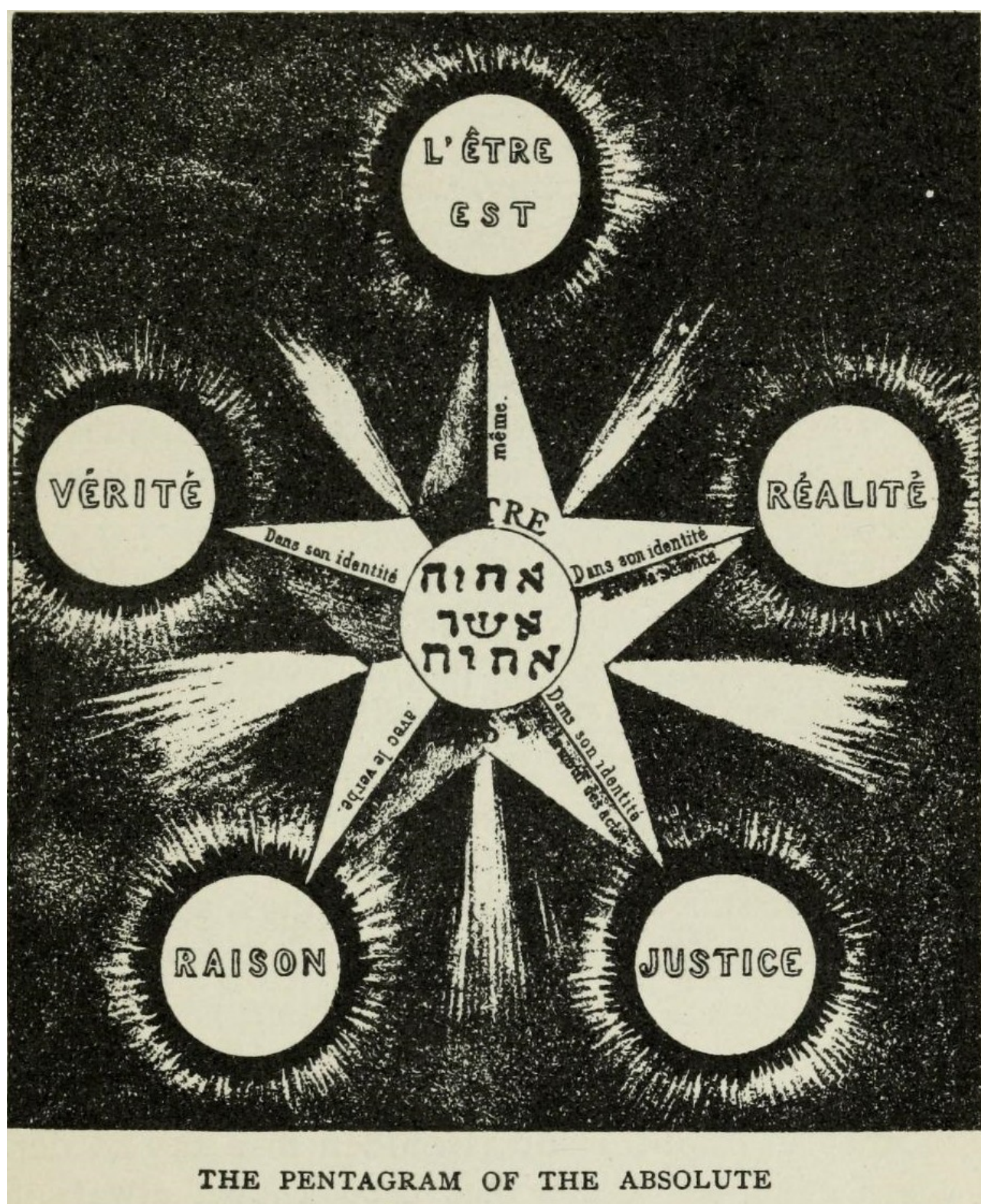
(

ヨハネによる福音 14 章 16 節から 17 節「私イエスが父である神に求めるので、父である神は、もう 1 人の弁護者パラ クレートスをもたらすであろう。もう 1 人の弁護者パラ クレートスとは、真理の霊である」

ヨハネによる福音 14 章 26 節「弁護者パラ クレートスである神の聖霊」

ギリシャ語で、「パラ クレートス」の「パラ」は「傍らに」、「かたわらに」を意味し「クレートス」は「呼ばれた者」を意味するので、「パラ クレートス」は「かたわらに呼ばれた者」、「弁護者」を意味する。

)

THE PENTAGRAM OF THE ABSOLUTE

「魔術の歴史」の「絶対の五芒星」

終章

神に感謝します！　おおっ！　私の神よ！　神は私を見事な光へ呼び寄せてくれた！

神は、無上の知である！

神は、無限を無尽蔵の創造で満ちあふれさせるために、諸々の数と２つの力が従う、絶対の命である！

数学は、神を証明している。

自然の調和は、神を明かしている。

諸形態は、神を敬礼して過ごす。

アブラハムは、神について知っていた。

ヘルメスは、神を予見していた。

ピタゴラスは、神を計算してみた。

プラトンは、知による全ての夢想によって、神を望んだ。

しかし、唯一の秘伝伝授者イエス、唯一の賢者イエスだけが、神を地の子達に啓示した。

ヨハネによる福音 10 章 30 節で、唯一イエスだけが、神について、「私イエスと父である神は１つである」と話す事ができた。

そのため、栄光はイエスの物である！

なぜなら、イエスの栄光の全ては、父である神の物である！

おおっ、私の父である神よ、神は、本書「大いなる神秘の鍵」を記した者エリファスレヴィが大いに戦って苦しんだ事を知っている。

エリファス レヴィは、貧しさ、中傷、迫害、牢獄、愛した人に見捨てられる事に耐えた。

　それにもかかわらず、エリファス レヴィは、自分を不幸であると思わなかった！

　なぜなら、エリファス レヴィには、真理と正義が慰めとして残っていた！

　神だけが神聖である！

　おおっ！　真心の持ち主達と正直な魂達の、神よ！

　たとえ私が自分を神の目から見て清らかだと誤って考えたとしても、神は真実を知っている！

　全ての人の様に、私は、人の肉欲に玩具にされていた。

　ようやく私は肉欲を克服した、と言うよりは、私の中で神が肉欲を圧倒した。

　神は、神だけを目指し望む者達のための、深い平和を休息として私にもたらしてくれた。

　私は、人を愛する。

　なぜなら、人は、思いやりが有る限り、過誤と弱さによってしか悪人に成らない。

　人の自然な傾向は、善を愛する。

　全ての試練における支えとして神が人に与えている善への愛によって、真理への愛によって、遅かれ早かれ、人は、正義の宗教、正しい宗教(、カトリック)へ必ず導かれて戻る。

　それでは、エリファス レヴィの本が、神意が送るつもりである場所へ赴きます様に！

　エリファス レヴィの本が、もし神の知、神の言葉を含んでいれば、忘却より強いので勝利するであろう。

　逆に、もしエリファス レヴィの本が誤りしか含んでいなくても、少なくとも、エリファス レヴィの本の死後も、エリファス レヴィの正義と真理への愛は生き残り続ける、とエリファス レヴィは知っている！

不滅である神は、不滅のものとして創造しているエリファス レヴィの魂の、望みと願いを記憶してくれる、とエリファス レヴィは知っている！

大いなる秘密の鍵